

新書太閤記

第二分冊

吉川英治

青空文庫

寧子ねねの胸むね

「こひ！」

浅野あさの又右衛門またえもんは、

家に帰ると、すぐ大きな声で、妻の名をどな

つた。

於おこひは、あわただしく、出迎えて、

「お帰りなさいませ」

「酒の支度せい」

いきなりいつて――

「お客を拾うて来たぞ」

「それはそれは。どなた様でいらつしやいますか」

「娘の友達だ」

「ま……」

と、後からはいつて来た藤吉郎とうきちろうの姿を見て、

「木下様でございますか」

「こひ」

「はい……」

「武家の妻として、不埒ふらちであろうぞ。——今日までわしに黙つておるなぞ。木下殿と娘とは、夙とくからお交際つきあいをして戴いておるそうではないか。存じておりながら、なぜわしに黙つていたか」

「お叱りうけまして、恐れ入りました」

「恐れ入るではすまない。とんだ親馬鹿を知られてしもうたわ」

「けれどお手紙などいただいても、寧子ねねは、私に隠していたことはございませぬ」

「当りまえじゃ」

「それに、寧子は、聡明そうめいでございます。決してまちがいはないと、母のわたくしが、信じておりますゆえ、世間の男たちから、ままつまらぬ文など送られても、左様なこと、いちいち貴方様までの、お耳みみを煩わづらわすまでもないことと存じまして」

「その通り、そちまでが、わが娘を買いかぶっている。——わからぬぞ、この頃の娘も、若い者も」

と、立ち塞ふさがれて、上がり口に立ち淀ふんでいる藤吉郎を振り顧かえ

つて、

「はははは」

と、笑った。

藤吉郎は、ここでも、頭ばかり掻いていた。しかし、恋人の家へ、恋人の父に誘われて来たのは、何か大へんな恩遇おんぐうに恵まれたような気がして、動悸どうきを覚えた。

「さ。——お通り」

と、又右衛門は、先に立って、客間へ彼を誘いざなった。

客間といつても、わずか十畳の一室が、この邸やしきの、最上の部屋だった。

ゆみのしゅう弓之衆ばかりが住んでいるこのお長屋も、きょう彼が見て来

た自分の屋敷と、似たり寄つたりの、小さな貧しい家だった。

もつとも、織田家の一藩のすべてが——老職から足輕まで、その差別のない程度の、質素ではあったが、何しても、武具のほか、客間にもさして目につく家財もなかった。

「寧^ね子はどこへ行つた。寧子のすがたが見えぬではないか」

「自分の部屋におりまする」

と、彼の妻は、客へ、白湯^{さゆ}など汲^くんですすめながらいう。

「なぜお客へ、改めてごあいさつをしに来ぬか。わしがいれば、逃げまわつておる」

「そういうわけではごさいませぬが、外着をかえて、髪など梳^すいているのでございましょう」

「いらざるごと。はやく手伝わせて、酒の支度して来い。まずい手料理など、藤吉郎どのに、お目にかけてみるがよい」

「いや、もう」

と、藤吉郎は、体を固くして、恐縮した。

城内の柴田、林などの、手強^{てごわ}い重臣たちからは、ひどく押し太い、厚顔な男と睨まれている彼も、ここでは甚だ羞^{はにかみ}恥がちな、一箇の好青年でしかなかった。

寧^ね子^ねは、薄化粧して、やがて挨拶に出て来た。

「なんのおかまいも出来ませぬが、父は、この通りはなし好き、どうぞごゆるり遊ばして」

それから、手料理の膳部^{ぜんぶ}と、銚子^{ちょうし}など、楚々^{そそ}と、運んで来た。

「はあ。……はい」

藤吉郎は、又右衛門のはなしには、まるでうつつに答えながら、寧子の身ごなしや、寧子のうしろ姿に見とれていた。

……横顔もいい。

などと思った。

何よりも気に入ったのは、少しも悪^{わる}びれたふうのない、木綿の生地^{きじ}みたいなの、ありのままのところだった。

いやに羞^{はにか}恥^かんだり、取り澄ましたり——ありがちな女性の媚^{びたい}態^{たい}がない。

では、ふくよかな女らしさに欠けているかというのと、包まれて
いる中に、薄^{うすづきよ}月^{つき}夜の野の花みたいに香^{にお}うものがある。ほんのり

と、楚々とある。

敏感な藤吉郎の眼や嗅きゆう覚かくがしきりとそれに触れるのであつた。彼は、恍惚こうこつたるお客様であつた。

「どうじやな、もうお一杯ひとつ」

「はあ」

「酒はおすきといわれたが」

「さればで」

「どうしたもの。一向に、お過しにならぬではないか」

「だんだんと、頂戴いたしますれば……」

と、席のすそに、蔘まきえ絵の銚ちようし子を前において、白々と、灯にまたたかせている寧ね子の顔ねを、穴のあくほど見入っていた。

寧子の眼が、ふと自分のほうへ動く、彼はあわてて、

「いや、だいぶ今宵は」

などと、赤い顔を、撫でまわしたりした。

自分のほうが、寧子よりも、よほど取り澄ましているのを感じて、よけい顔が火照^{ほて}ったり、意気地なく思った。

また、心のうちで。

いずれ自分も、然るべき時機には、妻も持たねばならない。持つならば、かかる佳人^{かじん}を持ちたいものだ。

この女性なら、きつと、どんな貧困にも耐えるだろう。艱苦^{かんく}にも闘えるだろう。よい子どもも生むだろう。

現在の彼は、何よりも、家庭を持った後の、艱難^{かんなん}と貧窮を考

えるのだ。——由来、金銭には意をとめられない自分だし、将来はなおなお、山のような艱難が待っているような気のする自分だからである。

また、良人^{おっと}としての、彼が女性にのぞむものは、もちろん淑徳や容姿もあるが、大要は、

——無智無学にひとしい、百姓をしている自分の慈母を、自分以上、大切に思ってくれる女性。

と、それから、

——陰にあって、表に立つ良人の働きを、いつも機げんよく、励ましてくれる女性。

と、こう二つの望みのほかは、前にいった貧乏を共に楽しむく

らしい気概のある女性——であつた。

(これなら！ ……)と、頻りに、彼は思った。

もつとも、そう狙い出したのは、今夜に始まつたことではなく、
 とうから、

(浅野の娘は佳よい)

という世間の評などよりも先に目をつけて、ひそかに、贈り物
 などもしてみていたのであるが、こう間近く、沁しみ々と、その信
 念を強めたのは、今宵が初めてだつたのである。

「寧ね子ね」

「はい」

「ちよつと、木下殿に、おはなしがあるから、そちは失礼して、

暫時、退つていやい」

又右衛門が、そういい出した。

さてはと、もうむこどの智殿になつたつもりで、いろいろな空想にひたつていた彼は、急に、顔がまた、かあつと熱くなつた。

又右衛門は、すこし改まつて、

「……時に、木下殿」

「はあ」

「折入つての、打ちあけばなしじやが」

「はい」

「お氣がるで、また、裏表ない其そこもと許と見こんで、おはなしするのじやが」

「何でも、仰せられませ」

藤吉郎は、寧子ねねの父親が、こうして自分に親しみを示してくれ
ることが、ひどく欣うれしかった。胸のうちで、期待しているような
はなしでなくても、損得なしに、どんなことでも——と誠意を見
せて、彼も膝を改めた。

「ほかでもないが、あれもすでに年頃なので」

「……いい、いかにも」

喉のどが、ひからびて、妙に声がつまった。黙って、うなずいてい
てもよいのに、何か、相づちを打たなければすまない気がして、
時々、いわずもがなのことをいった。

「で——実は、諸所からも、家がらに過ぎた縁談なども持ちこま

れ、親としても、取捨しゆしやに迷うておるわけでござがるが」

「いや、大きに、左様でござりませうとも」

「ところがな」

「はい。はい」

「親が、よかろうと見る者は、あれの氣にそまぬ節ふしもあつたりして」

「それは、分りますな。女の一生は、ただひとつ、幸も不幸も、のばすその手にきまることですから」

「君公のお側にいつもいる——お小姓こしやうしゆう衆しゆうのひとりじやが——
前田まえだ犬千代いぬちよという青年を、其許そこもとも、ご存じであらうが」

「は？ ……前田殿で」

と、藤吉郎は、目をしばたいた。又右衛門の云い出し方が、余りに、唐突だったからである。いや、又右衛門としては、充分、順序を追つてはなしているつもりなのだが、藤吉郎の期待とは、余りに話題が離れて来たのだった。

「——そうじゃ。あの前田犬千代どの、家がらもよい出だが、頻りと、人を介して、寧子ねねを妻にと、求めて来られるのじゃ」

「……ははあ」

返辞というより、嘆息ためいきに似た声を洩らした。忽然こつぜんと、強敵のあらわれた感じである。何よりも先に、犬千代のすぐれた背丈せたくが、気もちの上に、のしかかつて来た。また、秀麗しゅうれいな眉目びもくや、明晰めいせいな言語や、お小姓組に育つて、行儀の上品なすがたが、そ

の敵対感の中に、往来しだした。猿、猿、と人がよぶのを、自分でもやむを得ざるごとと、認めて来たほど、彼は自身の容貌には、元より自信がない。——だから彼にとつて、美男ということば程、きらいなものではなかつた。前田犬千代は、その美男なのである。

「寧子^{ねね}どのを、おやりなされるつもりなのですか」

思わず、話の先を越して、こう訊いてしまつてから、彼も、ちよつと面目^{かえり}を顧みた。

「いや、何」

又右衛門は、そこでかぶりを振つて、胸をのぼすと、急に思いついたように、冷えた杯を唇へ当てて、

「親としては、あの温厚で沈着な犬千代どのなら、よい聾^{むこぎみ}君と、

実はよろこんで——約束までしてしもうたわけでござるが、なんとよ、近ごろの娘は、親の眼がねにも、そのことばかりはと、素直には、うなず頷かぬのじゃ」

「ほ！　では寧子どのには、その縁談を、嫌だと、仰つしやるので？」

「嫌とも、親に対して、よういわぬが、よいとは決して申さぬのだ。……まあ、嫌なのだろうな」

「うむ。なるほど、なるほど」

「——ところで、困っているのは、その縁談の儀でな」

又右衛門の眉には、話しているうち、かなり心痛らしいものが見えて来た。

つまり問題は、武士の一言——ということなのである。

又右衛門は、平常から、前田犬千代には傾倒していた。将来ある青年と見ていた。その犬千代から、

(——寧子^{ねね}どのを妻に)

と、求められたので、彼は一も二もなく、娘よりは自分が先に、^{よろこ}喜んでしまったのである。

手がらでもしたような気で、

(——どうじゃな。またとない聳^{むこ}だろうが)

と、寧子に告げると、彼女の顔いろは、案に相違して、少しも
楽しまないふうだった。むしろ愁^{うれ}いの色すら濃い。血は同じでも、
人生の伴^{はなりよ}侶を選ぶについては、父娘^{おやこ}でも見解の相違のぜひない

ことが、とたんにはつきり分つた。

だが、ここにおいて。

又右衛門の立場はない。

親としても、武士としても、犬千代に対して、合わせる顔はない。

犬千代のほうでは、

(近いうちに、浅野殿の寧子^{ねね}を妻に娶う^{もら})

と、人にも語り、人も介して、何かと、具体的に進めてくる。

約束の期も迫って来ている。

(——どうも、娘の母が、近頃すこし体がすぐれぬので)とか。

（——今年は、年まわりが悪いとか、女どもが申しおるので）

とか、みな女どものせいにして、一時のがれをいつて来たが、もうその口こうじつ実も尽き果てて、弱りぬいている次第だが——と、又右衛門は、苦衷くちゆうをもらして、

「……どうじゃな。其許そこもとは、奇才縦横とよく人がいうが、何とか、よい思案はあるまいか」

杯からの空をすすつて下へ置いた。

酔うにも酔えない顔なのである。

藤吉郎も、ここまでは、独り空想に楽しんでいたが、彼の憂いを聞いてみると、共に憂えずにいられなかつた。

（相手がわるい）

と彼は思った。何も、悪人というような意味ではないが、相手が前田犬千代とあつては、話は簡単にすもうとは考えられない。

犬千代は藤吉郎の嫌いな、美男ではあるが、いわゆる美男型の美男ではない。多分に、戦国の粗あらい土質から育つて出た豪毅な気性や、型にはまらない不屈と放ほうじゆう縦つらな面だましいを持っている。まだ年少十四の時、初めて信長の軍に従ついて行つて、とにかく、侍さむらい首くびの一つも提さげて帰つて来たほどの男である。

また、先頃は。

信長の弟信行のぶゆきの臣が、叛乱を起した折も、信長の先手衆さきてしゆうに交まじつて行き、刃やいばも折れるような奮戦をした。また、宮中勘兵衛みやなかかんべといふ者が、犬千代の右の眼へ、一矢射いっしたところ、犬千代は、

矢も抜かずに、騎うまから跳び降りて、勘兵衛を首にし、信長に、首を献じたという男でもある。

とにかく、勇猛な美男なのだ。しかも白はく皙せき端たん麗れいな面おもてに、一本の針を置いたように右の眼が細く一文字につぶれている。——
どうも、信長でも、少々手に余したお小姓に思われた。

「さあ。あの犬千代では」

と、共に憂いを憂えてみたものの、さし当って、藤吉郎にも、よい考えもなかった。

「——いやなに、御心配なされますな。その儀、藤吉郎がひきうけました。何とかありませんよう」

彼は、そういつてしまった。その夜は城内へ帰って寝た。結局

彼自身は、何も得るところはなかった。又右衛門の憂いを、半分背負つて帰つただけであつた。

——だが、考えようでは。

好きな女性の父親から、心の憂いを打ち明けられたということ
は、たとえそれが荷になる憂いでも、光榮に思う心理は青年にあ
る。

父親の信頼——そのものよりも、それほどに、藤吉郎は、眞実、
寧ねね子ねが好きだつた。

(これが、恋というものか)

自分でも、ふと心づいて、この頃のあやしき心を顧みてみたが、
恋つふやとつ呖くと、何かふと、嫌な気もした。彼は、人がよく口にする、

恋ということばが、嫌いだった。

なぜならば、彼は年少から、およそ恋ということばには、深い諦めあきらを持っていた。

境遇も、容貌も、風采も、彼が持つて世と闘つて来たものは、世の美しい女性などから、あらゆる蔑さげすみと、嘲侮あざけりとを、浴びせられて来た。

年少、彼にも、花を悲しんだり、月を傷いたむ気もちは、多分にあつた。

多感な血へ、そうしてうけつつ忍んで来た堪忍は、軽薄な美人や貴公子たちの想像も及ばないほど深刻な、忘れ難いものだった。それにしても、彼も人間である。人と生れ、その嘲ちやうべつ蔑を、

受けてのみいて、思い知らしてやることを、諦め切つてあきらいる者では決してない。

(いつかは)

と思ひ、

(今に。今に)

と、密ひそかには、独りで誓つてゐるのである。

容貌ぶおとこのまじい醜男にも、世の美姫びきたちが、いかに媚こび、いかにひざまずいて、愛を求め争うかを、示してやる。——と思つて、むしろそれは、自分を励むちます鞭として、いつも心に帯びてゐるのだ。

そういう気もちは、知らぬまに、彼にも彼の女性観や恋愛観を

培つちかつていた。恋という文字が、ぴったり来ないのも、それに起因してしよう。女性の美へ崇拜的にひざまずく男を彼は蔑視べっしする。恋愛を人生の第一義的に夢想したり神秘視して、甘い涙に遊戯する男どもを、彼は軽侮けいぶして虫酔むしずの走るような眼で見る。そういう風に嫌いなのだった。

(……だが、寧子ねねになら、ゆるしてもいいな。おれが、恋をしたといつても——)

好悪こうおは人間の勝手である。彼も自分のことになれば、そんなふうに妥協した。寝つく前に、寧子の横顔を描きながら眠った。

翌日も、彼は非番。城内に、勤めはなかつた。ほんとなら、きのう見ておいた桐畑の自分の屋敷を、さっそく手入れたり、家

具の備え付けをしたりするわけだったが、犬千代と出会う折うかがを窺うため、城内にぶらぶらしていた。

犬千代はいつも、信長の側わきに、行儀よく控えている。藤吉郎とは深く口をきいたこともない。いつも上段からじろつと、信長の臣下を見ている眼は、信長以上に、不遜ふそんであつた。

藤吉郎なども、時折、信長の前へ出て、何か献けんげん言でもしていると、側にいて聞いている犬千代が、にやりと、口端くちばたへ笑えくぼを作る。

(猿がまた……)

と、いわないばかりに。何となく、人を見透みすかしているような眼で。——藤吉郎には、小癩こしやくに思えて、余り交わりをしなかつた。

「藤殿、御非番か」

なかもん
中門の番士と、藤吉郎が今、立話していると、こう声をかけて、通り過ぎた者がある。

何気なく、振り向くと、前田犬千代。——今も今、門番から、きようは何処かへお使いに出て、御城内にはいない筈——と聞かされていた犬千代であった。

「やあ。……しばらく」

追いつがって、

「犬千代どの。ちよつと、折入つて、お話し申したいことがあるが」

藤吉郎が云いかけた。

すると、犬千代は、例の眼まなざしで、そしてまた、藤吉郎よりも、
 ずっと優すぐれている上背丈うわぜいから見下して、

「公用か。私用か」

「折入つてというからには、私用でござるが」

「然らば、今はならぬ。君公のお使いを帯かえびての歸みちり途。私語しごは

憚はばかる。後ににいたせ」

膠にべもない。

つつつと、行つてしまった。

「嫌なやつだ。しかし案外、いいところもあるやつだ」

藤吉郎は、取り残されて、ぽかんとした顔したが、やがて、首
 を一つ振ると、自分も大股に立ち去つた。

城下へ出た。

桐畑きりばたけのわが新居へ来てみたのだ。すると、門を洗っている

者があるし、荷物を担かつぎ込んでいる者もある。

「おや、門かどちが違ちがいしたか？」

見廻してみると、

「おいおい、木下」

と、台所の方から、男の声がする。

「おう、貴公か」

「貴公かもないものだ、何処へ行つておられたのだ。自分の持った新屋敷を、人に掃除させたり、家事万端までやらせておいて」

それは、藤吉郎が炭薪すみまき奉行を勤めていた頃の、お蔵くらしゅう衆しゅうや、

台所方の同僚たちだった。

「おやおや。いつの間にか、結構住めるようになってるじゃないか」

ひとの家みたいなことを云いながら、藤吉郎は、中へはいった。どこからか酒が来ている。

新しい塗ぬり筆筒だんすもある。茶棚もすわっていた。

それは皆、日頃いつのまにか、彼を慕い、彼を徳としていた者が、彼の栄転を伝え聞いて、持ち込んで来た祝いわいであった。

そういう友達や彼の知己は、祝の品を持っては来たが、暢のんき気な主あるじが見えないので、勝手に掃除をし始め、ついでにと、家具を据すえたり、門まで洗ってしまったところだった。

「やあ、どうも、どうも」

藤吉郎は、頭を搔いて、早速、自分で出来ることを手伝った。彼の出来ることというのは、精々、酒を銚ちようし子へ移して、膳へのせることぐらいなものだった。

「まあ、御主人は」

と、薪たきぎ山やま以来、恩義に思っている商人たちは、肴さかなの仕度も、買物も、何もかも小まめに働いて尽してくれた。

台所をのぞいてみると、まるく肥こえた下婢かひが、水仕事をしていた。

「さしずめ、手前どもの村から、連れて来た下女。ご不自由でしようから、当座でも、お使いなすつてみて下さい」

と、いう。

藤吉郎は、図にのつて、

「ついでに、ちゆうげん中間と、用人がわりの、老人一名雇やといたいが、
いいのがあつたら、世話してくれ」

そんなことを云いながら、車座になつて、新宅開きの宴が始まつた。

(きようはここへ来てみて、いいことをした。もし主人のわしが
見えなかつたら)

と、藤吉郎も、密ひそかに恐縮していた。自分は暢のんき気とは思つていないが、どこかに多少は、そんな点もあるかなと思つた。

無礼講。

飲むとなれば、これはいうまでもない。ふだんが、礼儀がたいだけに、酒の折は、ひどく素裸すだかな人間性を互いに見せ合う。

これは、この国だけの、地侍じざむらいの風儀ではない。公卿くげもそう。
むろまち室町の公方くぼうの武家たちもそう。総じてその頃の酒席の風だった。
 隠し芸が出たり、猿楽舞ざるがくまいのまねして、箸はしで器物を叩いたりしていた。

すると、近所に住んでいる同役の妻女が、門口へ歡びを述べに
 来て、帰って行った。

「おい木下殿。御当家の主人」

「なんだ」

「何だじゃない。貴公、近所の屋敷へは、ひと通り挨拶に廻った

のだらうな」

「いや、まだ……」

「何だ、まだか。——先様から挨拶に来るまで、舞ったり歌ったりしておるやつがあるか。さあ、羽織を着直して、一ひとまわり先へすまして来るがよい。近所へ引つ越しして来たことと、厩うまやしゅう衆へ勤めることに相成りましたからよろしくと——そう二つの挨拶をかねて、一軒に一つずつお辞儀して廻るのだ」

四、五日すると、世話する者があつて、下婢かひと同じ村の者という男が、中間奉公を望んで来た。また、一人の若党わかとうも、べつな方から召し抱えた。

まが曲りなりにも、小屋敷一つ持ち、奉公人も抱えて、これで藤吉

郎は小扶持こぶちにせよ、一戸の主あるじとはなつた。

家を出る折は、下婢や若党に、

「行つていらつしやいまし」

と、送られて出る身となり、例の古着店で買った、青木綿あおもめんに
大きな桐の紋のついているひらひらな陣羽織に、太刀を佩はいて、

「行つて来るぞ——」

は、悪くない気持であつた。

この上に、あの寧子ねねが、宿やどの妻つまとなつていたら、申し分ないが

——と思つたりしながら、今朝も、清洲城きよすじょうの外濠そとぼりを歩いて来
た。

すると、彼方かなたからにやにや笑いながら来る者があつた。藤吉郎

は濠を覗きながら歩いていたので気づかなかつた。寧子ほりのことを考えているかと思うと、彼の頭のうちには、戦時の攻城や籠城が考えられていた。

(——濠とは名ばかり、底は浅いし、十日も降らぬとすぐ底が見えてくる。戦時となれば、土つち俵たわらの千も投げこめば、攻め口ができてしまう。城内の飲み水も乏しい。このお城の欠点は、水利の悪いことだな。攻めるによく守るには足りない……)

などと独りつぶや呟つぶやいていると、近づいた背の高い男は、藤吉郎の肩を打って、

「猿殿。今、出仕か」

「……やあ」

藤吉郎は、相手の顔を見あげながら、咄嗟とつさに、先頃からの宿題について、一つの成案せいあんと確信を持った。

「これは、よいところで」

と、彼はいった。

偽らない言葉だった。

なぜならそれは前田犬千代だったからである。あれ以来、話す折もなかったところを、折よく、城外で出会ったのは、この問題の幸先がよい。

彼が、それについて、云い出さないうちに、犬千代から口を切った。

「猿殿。いつぞや、何か折入って、わしへ話があるとか、御城内

でいわれたが、きようは公務の途中でないゆえ、聞いてもよいが」

「さ、そのことで」

と、藤吉郎は見まわして、濠端ほりばたの石の塵ちりを払い、

「立話もならぬ。まあおかけ下さい」

「一体、何事かな」

「寧子ねねどのの身についてで」

「寧子のことです？」

「されば」

「寧子とお身と、何の関かかわりがあるのか」

「仔細あって、かたい約束を取り交わしておるような間がらでし

て」

「……?」

真面目でいうのか、冗談でもいつているのかと、犬千代は、彼の顔を見澄ましていたが、余りにも、藤吉郎の大真面目な顔つきに、突如として笑い出した。

「ふーむ、そうか。寧子と約束を……。はははは、それは至極よ
かろう」

犬千代は問題としなかった。恋こいがたき敵たきとするには余りに相手が

不足すぎる。うぬ惚ぼれでなく、どう公平くわいに較くらべても、自分を見代えて、この猿殿と約束を交わす物好きな女性はよもあるまい。――町の雑魚女ざごめや足軽の娘程度なら知らぬことである。弓之衆ゆみのしゅうの

浅野又右衛門の家庭は、典型的な武家の家だし、あの息女には、

ひと通りな教養もある。

「そこで……？」

と、犬千代は相手の言葉を、むしろ愛すべき稚氣ちぎ——と恕ゆるしているような寛度で、後を促うながした。

率直に、彼は云い出した。けれどここ生涯の大事とばかり、懸命は顔にあらわれていた。

「犬千代どの」

「なにか」

「あなたは、寧子ねねが好きですか」

「寧子？」

「浅野又右衛門どののお娘」

「ああ。あの女か」

「好きでしょう」

「好きであつたら、なんだと申すのか」

「ご注意申しあげたいので。——あなたは何もご存じなく、人を介して、彼女の父親へ婚約を申し込まれたらしいが」

「いけないか」

「いけませんな」

「なぜ」

「でも、寧子ねねと私とは、実は、年久しく想い合っている仲ですか」

「……?」

犬千代はそういう藤吉郎の顔を穴のあくほど見つめていたが、突然、肩をゆすぶって笑った。

相手が、まるで自分を、相手に取らない容子ようすを見ると、藤吉郎は、なおさら、真面目づくって、

「いや、笑い事ではございますまい。寧子は、どんなことがあるうとも、私を裏切って他の男へ縁づくような女ではございませぬし——」

「はははは。左様か」

「固い約束も交わしてあるので」

「それなら、それで宜しかろうが」

「ところが、宜しくない者が一名できてしまいました。寧子の父、

浅野又右衛門です。あなたが、婚約の儀を、お取り消し下さらぬ限り、又右衛門どのは、板ばさみとなつて、切腹せねばなりません」

「切腹？」

「寧子と私の親しい間がらを、又右衛門どには、少しもご存じなかつたため、あなたのお申し出^{もう}で^いに對し、娘を嫁^やろうとつい仰つしやつたものと見えますが——今も申した通りの次第で、寧子は断じてあなたの妻にはなりません」

「然らば、誰の妻に？」

と、相手がなじると、藤吉郎は、自分の顔を指でさして、
「かく申す私で」

と、いった。

犬千代は、再び笑ったが、前のような哄こうしやう笑しやうではなかった。

「冗談も程にいたせ。猿殿、おぬしは鏡というものを見たことがあるか」

「——では、嘘じやと仰つしやるのでござるか」

「寧ね子ねが、おぬしなどと、約束するわけではない」

「真実であつたら如何いかなされますか」

「真まであつたらめでたいわ」

「寧子と私が婚儀をいたしても、その折には、ご異存はございませぬな」

「猿殿」

「は」

「人が嗤わらうぞ」

「嗤わらわれても何でも、相思そうしのふたりが仲は、どうすることもできません」

「真面目か、いったい」

「かくの如くで」

「女子おなごというものはな、云い寄られた男が、ぞつとする程きらいでも、柳のように、程そよう逸そらしているものぞ。それをば後になつて、自分の愚かと思わず、騙だまされたなどと恨まぬがよいぞ」

「とにかく、それでは、寧ね子ねと私とが、婚儀ねねを挙げる場合になつても、又右衛門どのへ、お恨みはありますまいな。——それもあ

あなたの不明ということになりますので」

「勝手にせい。——先頃からわしへ用事があるといっていたのはそのことか」

「いや、ありがたいお言葉。ただ今の約束、お忘れないように願います」

藤吉郎は、辞儀をしたが、頭を上げてみると、もう犬千代は、彼の前にはいなかった。

幾日か後だった。

藤吉郎は、ゆみのしゆう弓之衆の長屋に、浅野又右衛門を訪れて、

「先日の儀で」

と、きょうは改まった物云いで、申し入れていた。

「その後、犬千代どのに会つて、篤とくとご苦衷くちゆうのところを、伝え
ておきました。犬千代どのにも、御息女が自分へ嫁とつぐ意志もなし、
また、私との間に、約束まであつたことなら、ぜひもないゆえ、
諦あきらめるほかはなからうとのことでした」

又右衛門は、彼のはなしが、ひどく独りのみ込みなので、解げせ
ぬ顔かおして聞いていたが、藤吉郎は、云い続けた。

「——とは申せ、犬千代どのにも、もとより未練は多分にござる
ので、これが、他の男へ縁づくことなら承知できぬが、貴公では
仕方がない。貴公と寧ね子ねとが、以前から約束があつて婚いたす
ものなら、残念だが諦あきらめもし、いつそ男らしく大いに祝福もする
が——万一、又右衛門どのが寧ね子ねを他の男へ嫁よめがすようなことで

あつたら——これは承知できん。断じて許されぬ。——とも申し
ておりました」

「あ。きのしたうじ木下氏。ちよつと待つてもらいたい。……何か、そこもと其許
のはなしを聞いておると、寧子を其許にくれるのはよいが、他の
男へ遣わすことは堪忍ならぬ——と犬千代どのがいつているよう
だが」

「左様でござる」

「げ解せぬことを。——一体、誰がいつ其許へ寧子ねねを遣わすなどと
いったか」

「面目もございませぬ」

「何をとぼけ召さるか。そんな偽りを構えて、犬千代どのをだま騙し

てくれとは、この又右衛門も頼んだ覚えはおざらぬぞ」

「その通りです」

「然るに何で、でたらめなことを犬千代どのへ伝えたか。まして、寧子と約束があるなどは、戯れも程こそあれ。もつてのほかだ
ツ」

温厚な又右衛門も、やや気色けしきばんで、

「申す者が、お身のような男だから、聞く方も、冗談とは思うだろうが、かりそめにも嫁入り前のむすめ、迷惑至極じや。——困こじ果てておる纏もつれ話を、お身は、よけいに纏もつれさせて、興きようがろうとでもいう肚か」

「滅相もない」

と、藤吉郎は首を垂れて、

「かかることのできたのも、私の過あやまちと、共に心痛しております」

「要いらざるごと」

と、苦にがりきつて、

「よけいな心痛は、もうして貰あうまい。もすこし、常識のある男かと、打ち明けたのがわしの過あやまりだ」

「……実に、どうも」

「さ、帰りなさい。何をもじもじしておられる。そういう放言をして歩くからには、以後は断じて、宅へ出入りはお断りする」

「はい。もう祝言すると、披露に及ぶ日までは、慎んでいることにいたしまする」

「ば、ばかなッ」

と、又右衛門も、遂に、温和な面おもてを破つて、呶鳴りつけた。

「いつになろうと、誰が、お身などへ寧子ねねをくれるものか。たとえ、嫁ゆけというても、寧子が承知するものでもない」

「ぎ。そここのところですよ」

「何が、そこだ」

「恋ほどあやしきものはございませぬ。寧子どのは、私のほかに、良人おととは持たぬと、胸に秘めておいででしょう。失礼ながら、又右衛門殿には、自分が嫁にゆくような勘ちがいをしておられるのは、ございませぬか。——私が、妻にと望んでいるのは、寧子どのであつて、あなたでございませぬが」

押し太い男もあればあるもの——と、又右衛門は呆れ顔に、黙つてしまった。

今に帰るだろう。

いくら厚顔こうがんな男でも、こういうまずい顔を示していれば——。

又右衛門は、そう考えて、いつまでも渋面じゅうめんと無言を守つて

いた。けれど藤吉郎は、帰るふうもなく坐つていた。

それのみか、恬てんとして、

「藤吉郎、嘘を申すのではありません。いちど寧子どのお胸を、あなた様から聞いて戴きたいものです」

と、いった。

忪こらえに忪えていた又右衛門は、もう勘弁がならないといったよ

うに、後ろを向いて、

「こひ。こひ！」

妻を呼びたてた。

滅多に、大声など出さない良人が、さつきから激げきしている様子
に、彼の妻は、襖ふすま近くにいたらしかつた。

そこを開けて、

「寧子と呼べツ。……呼んで来いツ」

「はい」

しかし、彼女は、心配そうに、良人の顔を仰いでばかりいて、
起たなかつた。

「なぜ呼ばん」

「でも……」

彼女が宥めかけると、又右衛門は妻の手をついている頭ごしに、

「寧子ねねツ。寧子ねねツ」

と、呼び立てた。

寧子は、何事かと驚いたらしく、そこへ来て、母の陰に手をついた。

「はいれ！」

又右衛門は、厳格にいつて、すぐ問とい糺ただした。

「そなたは、これにおける木下殿と、まさか、親のゆるさぬ約束事など致しはすまいな」

「……………」

寧子には、唐突だったにちがいない。父の気色と、その前に、首を垂れている藤吉郎の姿とを、つぶらな眼で見くらべていた。

「どうなのだ寧子。家名にもかかわる。また、これから嫁ぐ身の潔白のためにもだ。はつきりといっておくのがよい。——よもや左様なことはあるまいな」

「……………」

寧子は、しばらく黙っていたが、やがて、つつましい容子のうちにもきつぱりした言葉でいった。

「——ごさいませぬ」

「ム。ないな！」

それみろ、といわぬばかりに——また、何処かでホツとした態てい

で又右衛門は胸を伸ばした。

「……けれど、お父様」

「何か」

「ちようど、お母さまもいらつしやるところですから申しあげますが」

「ふム。いうてみい」

「寧子ねねからも、お願いいたします。わたくしのようなふつつか者でも、木下様が妻にお望み下さるならば、どうぞ、木下様へおつかわし下さいませ」

「な、なに？」

又右衛門は、舌ももつれるほどな狼狽につつまれた。

「これ、寧子」

「はい」

「そなた、正気でいうのか」

「女子おなごの生涯の大事、かりそめには申されませぬ。自分の口から申すのは、いかにお父様にでも、母様にでも、恥かしゆうてなりませぬが、わたくしの大事は、御両親様にも大事と、おもておか面を冒して申しあげました」

「ふ……ウむ」

呻うめいたきり又右衛門は、わが娘の姿に眼をすえていた。

——偉いッ。

藤吉郎は、心のうちで、寧子の立派な云い方を褒ほめていた。ま

た、体じゆうがぞくぞくするような欣よろこびに襲やわれてもいた。——
 しかしそれ以上に、このさり気ない質しつぽく朴な武家娘が、どうして
 自分を見込んだかと——ふと恐ろしいような心地もしていた。

乱らん雲うん

たそがれ頃。

彼は、茫然と歩いていた。

弓之衆の浅野又右衛門の家から出て、桐畑のわが家のほうへ。

（——御両親様がおゆるしくださるならば、木下様へ嫁とつぎとうございます）

寧子^{ねね}のいったことばが、その声が、姿が、彼の頭から消えなかつた。

こう歩いていても、人ごこちのない程、彼は、正直な^{よろこ}歡びに今つつまれていた。けれど、寧子が余りにはつきりいったので、すこし不安な疑いも起つた。

(ほんとに、彼女はおれが好きなのかなあ。それ程好きなら、前からもつと、おれに好意を見せていそうなものだが?)

以前から、手紙をやったり、内緒で贈り物を届けたりしていたのに、それに対しては、まだ一度も——俗にいう色よい返辞などはくれたこともない寧子であつた。

その反響がない点からも、彼は当然、寧子が自分へ、好意を持

つていないものと思つていた。

犬千代へ向つて。また、父の又右衛門へ向つて。——あんなことを云い張つたのも、実は、藤吉郎の強引ごういんに過ぎなかつたのである。いちかばちか、とにかく自分の希望を主張して、寧子の心の如何を問わず、娶もらいうけてしまおう——妻にしなければおかない——という彼らしい押しを試みてみたまでのことだつた。

ところが。

(——木下様へなら)

と、寧子のことばだ。

しかも、父母の前で。

自分もいる前で。

何という勇氣だろうか。親の又右衛門の驚きよりも、実は、藤吉郎自身が、胆きもをぬかれたくらい、茫然、歎びと疑いのなかに包まれて、歸つて来たのだつた。

歸り際まで、親の又右衛門は、あの呆れ顔と、苦虫をかみつぶしたままで、

(では、木下殿へ嫁とつげ)

とは、許さなかつた。

(ぜひもないことだ)

と、娘の云い条に、是ぜにん認も与えなかつた。

むしろ嘆息ためいきの態ていで、

(——世のなかには物好きな者もあればあるものよ)

と、わが娘この心理に、当惑とあわれみと、それに、蔑さげすみさえ持
つて、黙りきつているままだつた。

藤吉郎も居いづ辛らくなり、

(いずれ、後日改めて、お願いに出るといたして)

と、帰りかけると、又右衛門は口重げに、初めて、こういつた。

(ムム……。ま……。考えておくとしよう。考えておく)

寧ね子ねへも、藤吉郎へも。

二人へ向つて、そういった宣言であつた。多分に、不賛成であ
る語氣が、その中にこもっていたことはいうまでもない。

——考えておく。

しかしこの言葉は、藤吉郎にとれば、多分なる希望をかけて考

えることもできる。少なくとも、今までは、寧子の胸がさつぱり明らかでなかったが、寧子の胸さえすわつていれば、又右衛門の意志は、どうにも翻^{ひる}してみせる自信がある。

——考えておく。

は、断りではない。この先の宿題なのだ。藤吉郎は、もう寧^ね子^ねを妻にしたような気がしていた。

「お帰りなさいませ」

わが家へはいつて、座敷へ坐つても、まだ考えていた。——その宿題についての、自信やら、寧子の胸やら。また、娶^{めと}るとしたら、時期の問題やらを。

「中村からお便りが来ておりまする」

と、彼の召使は、彼が坐るとさつそく、一袋の黍きびの粉こと、一通のてがみを前へ持つて来た。

手紙は、中村の母からで、ひと眼見ても、懐かしさに、すぐ知れた。

そもじ様、かわりのう、いつもながら御奉公とのこと、何よりも、まずはうれしゅうぞんじそろ。先ごろは、米まんじゅうたくさんに、また於おつみにも、衣しようなど、まいどの贈りもの、礼のことばもおろか、ただ涙そろに候。さてまた、

——と、母の文は、細々とこう書き出してあるのである。

実は先頃、彼から母へ、再三手紙を出してある。

その返辞であつた。

藤吉郎からいつてやったことというのは、自身が小屋敷の一つも持つ身になつたことを報じて、同時に、ぜひ母上にも、中村を引き払つて、自分の家へ移つてもらいたいという希望であつた。

まだ三十貫の小身なので、と申しても、大した御孝養はできませぬが、もう衣食の御不自由はおかけいたしません。

奉公人も、ふたり三人はいるので、永い間、土に荒れたお手で、再び、貧乏屋敷の水仕事をおさせするようないつもりです。

姉の於おつみにも、ふさわしい婿むこでもさがしてやりましょう。酒飲みの養父ちちにも、少しはうまい酒も飲ませて上げられるでしょう。

私も近頃は、少しは飲ける口でもあり、一家そろって、以前の貧苦を語り草に、晩の御膳でもいただいたら、どんなに愉快かわかりません。

ぜひ、そういうことに、おきめ下さいまし。

——と、そんなふうに、先頃便りしておいたのであつた。

ところが、今来た母のてがみには、

清洲へ移れとの、お許もとのことば、なんぼう欣うれしくぞんぜられ候も、稗粟ひっあわに困らぬほどの、こん日の暮しも、お許もとのはたらしき、また殿さまの御恩ぞかし。

せつかく、御奉公人の端にたたれ、お上さまの御用、ようやくおん大事の身となりつる折へ、わが身や夫や、たくさんの

同胞^{はらから}たち、お許^{もと}の身にかかり候ては、朝夕は樂しかるびよ

うとも、何ぞにつけ、御奉公の足でまといにこそ候わめ。

さむらいの御奉公とは、あしたに死に、ゆうべに死し、まい
日が覚悟のお勤めとこそ母もうけたまわれ、わたくしの樂し
み事など思うは、まだまだ早き慾とこそ、もつたいのうぞん
ぜられ候。時折のお許が助けにて、母は、着るにもたべるに
も、なんの不自由も今はなき身に候。ひやく姓の仕ごとも、
子をそだつるお役も、母のあたりまえなるつとめにこそあれ。
むかしおもえば今の身すら、神さま、仏さま、御領主さまの
御恩、朝夕手をあわせ暮しおり候。

ゆめ、わが身のことなど、心にかけてたまわず、いよいよ御奉

公大事に、おいそしみ給われ。母のよろこびも、それに過ぐるものはあらし。そもじが、霜の夜の門べに云いのこしたるを、今もなお、母はわすれ侍らず、折にふれ思いで居りそろ……

召使が、前にいるのも知らぬように、藤吉郎は母の文へ、ぼろぼろと涙をこぼして、二度も三度も読みかえしていた。

主人という者は、自分の召使っている奉公人へ、泣き顔などは見せないものである。また、人にも涙などは見せるものでないように、侍は躡けられている。

だが、藤吉郎はそうでない。

余り泣いているので、前にいた彼の召使のほうが、間が悪くな

つて、もじもじしていた。

「ああ、過あやまっていた。……ごもつともな仰せだ。やはりわしの母上はお偉いな。……そうだ。まだまだ、一身一家の小さい欲望を考える場合ではない」

母の手紙を巻きながら、彼は独り言に、大きく呟つぶやいた。

涙がとまらない。……

その眼を、子どものように、肱ひじを曲げてこすりながら、

「そうだ！ ……。ここ少しのあいだは、戦争もなかったが、いっつ御城下に、兵火が揚あげられぬとも限らぬ。中村におられた方が、母上や姉きょうだい弟いたちにも、無事でもあるなあ。……いやいや、そういう身勝手な考え方がそもそもいけないと仰つしやるのだ。あく

まで、御奉公第一に」

巻いた手紙を、額ひたいにあてて拝みながら、母がそこにいるように、
 「——いや、おことば、よくわかりました。仰せのこと、きつと
 守ります。あの男なら、お奉公も大丈夫と、殿も許し、人も許
 すほどになったら、改めて、藤吉郎がお迎えに参りますから、そ
 の時は、藤吉郎の住居へ、ぜひにもお移り下さるよう——」

黍粉きびこの袋も、次に押し戴いて、召使の若党へ手渡した。

「台所へ持ってゆけ」

「はい」

「何をわしの顔を見るか。泣くべき時に泣くのに何のふしぎがあ
 る。……これは、母上が、御自分の手で、夜業よなべに挽ひいて下された

黍粉だ。勝手元の下婢おんなにあずけて、粗末にせぬよう、団子だんごになとして、時折わしに喰わせてくれ。……幼い時からわしはそれが好きでなあ。母上には、それを覚えておいでなさったのだろう」

彼は、寧子ねねのことをすっかり忘れていた。独り喰う夜食の間にも、

「母上には、どんな物を召し上がっていらつしやるだろうか。わしから時折、かねをお送りしても、相変らず、うまい物は子に喰わせ、良人には酒を買い、御自分は塩や粗菜ばかり喰べておられるのではないか。母上には、長生きをして戴かぬと、大きな張合いがなくなってしまうが……」

眠りについてから、また、

「そうだ。……母さえお迎え申さぬに、妻のことなど……ちと早いぞ。まだ早い」

彼は、反省した。

しかし反省は、諦めあきらではない。寧子を娶めとることは、もつと先のほうがよいと考えたまでのことである。

いつか眠っていた。

夏かつ。夏。夏……

馬蹄の音が、すぐ戸外おもてを駈けて行つた。一、二騎すぎた後から、また二、三騎駈けつづいて行つた。

藤吉郎は、匆はね起きて、

「ごんぞ。ごんぞ」

と呶鳴どなった。

「ごんぞというのは、彼のただ一人の若党の権ごんぞう三のことである。木股きまたむら村の出なので木股きまた権三と名乗れといっておきながら、藤吉郎が称よぶのは常にごんぞであつた。

「あツ、何ですか」

「ごんぞは、いつも主人のすぐ隣に寝ていた。召使の者の部屋といてもべつにないからであつた。

「物見ものみして来いッ。——何やら火急らしい駒が、お城のほうへ駈けて行つた。時刻も時刻」

「はいッ」

「ごんぞは、寝衣ねまきに太刀を持った身なりで、すぐ戸外そとへ出て行つ

た。

「ごんぞは、直ぐ戻つて来た。」

主人の藤吉郎が、雨戸を開けて、縁先から夜空を仰いでいたので、ごんぞは、庭へ廻つて両手をついた。

「見て参りました」

「何の早馬だ」

「美濃境みのざかいから次々の急使と見えました。何事が起りましたやら

「美濃路から？」

と、彼はまた、夜更けの空へ眼をやつて、

「御被官ごひかんの使いか。または、美濃の齋藤家さいとうけの使いか」

「美濃衆の早馬も見え、御当家の被官衆ひかんしゆうの使いも行ったように
思われます」

「そうか」

うなず

頷くと、彼はすぐ、寝衣ねまきの帯を解いていた。

「ごんぞ。——具足櫃ぐそくびつを。具足櫃を」

「はッ」

ごんぞは、跳び上がって、主人の前へ、すぐそれを抱えて来た。
彼は間もなく、供も連れず、深夜の道を、お城の方へ駈けてい
た。

貧しい一領の具足をまとい、太刀を横たえ、革たびに草鞋わらじばき
で、宙を飛んで行った。

美濃みのの
——

と、聞いただけで、

「さては」

と、彼には直ぐ思いあたることがあつた。ここ数年来、危険な状態をもちつづけている美濃の斎藤家に、内乱が勃発したのではあるまいかということだつた。

（——何日いっかは必ず）

と、藤吉郎は、むしろその遅いのを不審とするほど、やがて来るべきものを、信じていたのだつた。

——それだ！

彼は疑わなかつた。

来て見ると果たして、清洲城の大手には、はや人馬の影がうごいていた。門を固めていた兵は、彼のすがたが、日頃の恰好とはちがうので、いきなり素槍すやりを向けて来て、

「誰だツ。待て。通ることはならん」

と、叱つたが、藤吉郎が大音を張つて、

「これは、お厩うまやしゅう衆しゆうの一人、木下藤吉郎にてござる。深夜、お城近くへ、頻ひんぴん々と馬蹄の音の相継いで行くのに眼ざめ、何事やらんと、役目から馳せつけて参つた者——」と、いうと、

「やあ、木下殿か」

「おはよいこと」

「ご大儀でござる」

兵は、槍囲いを解いて、彼の颯爽たる姿に、通路を与えた。

武者溜りの前を通ると、赤い火がいぶつていた。その中で、

寝起きの武者たちは、籠手の紐をむすんだり、草鞋の緒をかためたり、弓や鉄砲を調べたり——物々しい騒めきを描いていた。

わき見もせず、彼はお厩のほうへ急いで行つた。——すると自分より一步先に、お厩の内から、主君信長の愛馬を曳き出してゆく者があつた。

厩番の侍たちは、その若武者に頤で使われて、ただ彼の命じるままに動いていた。見れば、お厩方の者とも見えないので、藤吉郎は追いつがって、

「やあ、そのお駒は、てまえにお渡し給わりたい。厩衆の木下藤

吉郎でござる。主君のお馬の口取はこの方の役目でもござれば――

と、いった。

若い武者は、振り向いた。

そしてニコと笑いながら、

「猿殿か。――おお、殿にはすでに、お表までお出ましになつておられる。はやく曳いて行かれい」

素直に、口輪を渡してくれた。

それは前田犬千代だった。しかし犬千代も藤吉郎も、寧子ねねの問

題などは忘れ果てて、主君の愛馬を取りかこみながら、鏘そうそう々と、

金属的なひびきを立てながら、大玄関のほうへ駈けて行つた。

その夜、矢つぎ早に、清洲城へ届いた国境からの通^{つうちよう} 諜^はは、果たして、美濃の大乱を告げて来たものだつた。

それよりも前の年に、稲^{いな}葉^は山^{やま}の齋^{さい}藤^{とう}義^{よし}龍^{りゆう}は養父^{ちち}の道^{どう}三^{さん}やましろのかみ山城^{やましろのかみ}守^{まも}りが、自分を廃^{はい}嫡^{いちやく}して、二男の孫^{まご}四郎^{しろう}か、三男の喜^き平^{へい}次^じをもり立てようとしているのを察^{さつ}して、仮^け病^{びよう}を構^{かま}えて、そのふたりを呼びよせ、これを殺してしまつた。

道三の怒りは、いうまでもない。

腐^すえたる国の自^じ壊^{かい}が始^はま^りつたのである。年を越えて、ことし弘治二年の四月、浅^あましき父子の合^あ戦^{せん}は、岐^ぎ阜^ふの里^り、長^{なが}良^{らが}川^{かわ}の畔^{ほとり}を、業^{ごう}火^かの炎^{えん}と、血^ちみどろの巷^{ちまた}にして闘^あい合^あつた。

国境に駐在している織田家の被官や、道三方の早馬は、

(はや、山城入道様の軍は、合戦にお負けなされ、鷲山さぎやまの城へも、火がかけられました)

と、急を告げ、

(一刻もはやく、舅しゅうとご御様の軍勢へ、御加勢のお出ましあるよ
うに)

と、催促して来た。

信長の妻は、道三の息女であるから、いうまでもなく道三山城守は、彼の舅しゅうとたる人だった。

信長はすぐ、

「舅殿に御加勢を」

と、いって、寢所から陣令を発し、城内の将兵が、物の具をい

でたつ間に、彼はすでに、大玄関まで出ていた。

藤吉郎と犬千代が、駒の口輪に添って、彼の前に鞍をすすめると、信長はいつものように、それへ乗ると、すぐ、つき従う者を後に連れ、用意の遅れている者たちは置き残して、城外へ駆け出していた。

「舅御の仇かたきぞ。美濃へ斬り入りなば、余の者には眼もくれず、極悪無道の癩らい殿どの（義龍のこと）の首を眼めがけよ。——ただ癩殿の首を眼がけよ。よいか者ども」

馬上から旗本たちへ、何度も振り向いては云った。

行く程に、人数がふえて、大軍になった。

信長のまわりには、二段三段と、大将をかこむ陣形ができて、

やがて、国境の木曾川きそがわの東岸まで進んで来た。

その行軍中。

犬千代と藤吉郎とは、旗本のなかに交まじつて、幾たびか、後になり先になった。

「猿ツ——」

と、呼び捨てに、犬千代は彼を顧みて、

「小がらに似あわず、思いのほか、足は達者だな」

「足ばかりか、戦いくさとなれば、おぬしなどに負けはせぬ」

藤吉郎も、氣負つていう。

「おぬし、何にでも、氣がつよいなあ。戦いくさばかりか、恋にかけても。——はははは。愛嬌があつていい」

「武士だ。負けるのは、何事にも嫌いでござる」

「然らば、稲葉山へ攻めかかったら、犬千代と、いずれが先に、
城しろのり乗のりいたすか、競きそつてみるか。わしより先へ、城乗の名のりを
揚げたら、寧ね子ねはくれてやってもよい」

すると、藤吉郎は、行軍中なのに、立ちどまって、大口を開い
て哄笑した。

「あははは。あははは」

「何を笑う。猿」

「犬千代。おぬしは、稲葉山へ攻めのぼるつもりかよ」

「もとよりのこと。人におくれはとらぬつもり」

「戦いくさは、眼をあいて、なさるものぞよ。——どうしてこのまます

ぐ、殿が美濃へ斬り入ろう。美濃の御合戦は、まだ何年か後のこと
にちがいない。——まず今度は、木曾川までか」

藤吉郎は、予言した。

何をばかな——と、犬千代は耳にもかけなかったが、やがて、
木曾川の岸まで来ると、信長は、

「やすめ」

と、陣へ令を下して、次の戦況が来るのを、そこで小半日も待
っていた。

美濃の空は、どんより煙っていた。日が暮れると、乱雲は赤々
と平原や山岳の上をながれて行くが、木曾川の西岸にある信長の
軍は動かなかった。

宵の頃だった。

木曾川を泳ぎ渡つて来た男がある。捕えてみると、道三方の落武者だった。信長の前に引つ立てられて来ると、落武者はこう告げた。

「山城守様には、鷲山さぎやまのお城を出られて、長柄中瀬ながえなかせのほとりに

義龍よしたつの軍を迎え、おとといからの激戦にござりましたが、遂に、

義龍の部下、小牧道家こまきみちいえのために、お首しるしを搔かれ、義龍はそのお

首しるしを見ると、乃翁だいおうよ、われを恨むな。これも、乃翁がみず

から選んだ運命なれば——と、お首を、長良川へ投げ棄てられま
した。あろうことか、あるまいことか、かりにも子たる義龍が、

親と名のある入道様のお首を……」

語るにも、浅ましくて、身がふるえるように、武者はそういつて、道三山城守の最期を訴えた。

信長は、暗然と、彼のことは聞いていたが、

「さては早、舅しゅうとご御の入道様には、敢あえなき御最期をとげられてか。……尾州表びしゅうおもてへの注進の遅かりしたために、信長、ここま

で馳せつけながら御最期の一戦に間にあわなかったのは何とも残念至極」

つぶやきながら、床しやうぎ几を立ててしばらく、夜空の赤い乱雲を仰いでいた。落涙でも抑えているように、あたりの人々には思われた。

が——信長は、屹きつと、こんどは幕下の人々へ、誓うように、大

きな声でいった。

「——遅かったツ。この上は今騒いでもぜひないことだ。ひとま
ず国元へ引き返して、他日誓って、癩らいどの殿の首を討ち取り、亡き
入道どのの御無念をはらそうず」

すぐ陣を払って、引き揚げにかかるよう、貝をふかせた。

犬千代は、意外に思った。

いや、彼ばかりでなく、戦いくさに老巧な重臣たちも、信長の命令に、
一時は呆然とした。

けれど、木曾川を退ひいて、尾張のほうへ、暗夜を何里となく歩
いてくるまに、

(なるほど、美濃へ討ち入るには、今は時機でない。機会は、今

が絶好のようだが、必勝を期して、大策を展のべるには——)

と、心ある将士には、自然、信長の肚が解けていた。

犬千代は、信長の深謀よりも、それを行きがけに疾とく予言していた藤吉郎という人間に、より以上、考えさせられていた。

「猿、猿と、人も小馬鹿にあしらい、自分もよいほどに視みていたが、あの男は……？」

と、彼は彼を見直して、自分の認識を糺ただしながら、黙々と、行軍のなかに、足を運んでいた。

藤吉郎も、側にいた。

夜の白む頃、お互いに、顔を見合った。けれど、彼は犬千代に對して、そのことについては何もいわなかった。

「犬千代。おぬしはどう思う。斎藤道三殿は主を殺し、子の義龍は親を殺した。放ほつておいても、人道のない美濃は亡ぶにきまつているが、それが何い日っ来るかだ？——。こんどは、義龍のぼんだが、その時期は？」

などと話しかけた。

犬千代はもう彼の前では、めつたなことはいえないような気負けを覚えていた。そして、この時から、いつのまにか、藤吉郎が自分と呼ぶのに、以前は犬千代殿といていたのを呼び捨てにしていたが、それもつい、咎とがめられなくなっていた。

あけちお
明智落ち

北は恵那^{えな}、西は飛騨^{ひだ}や、美濃^{みの}の山々に囲まれていた。

可児郷^{かにごう}の明智城^{あけちじょう}は、明智ノ庄^{しやう}の山間にあつた。前時代の旧式な型をもつた山城であつた。

土岐源氏^{ときげんじ}以来の長い家系と、時流の外にあつて、山間の平和を保つてきたその城も、きのうから煙を吐いて、きよしの明け方からは、熾^{さか}んに火の手をあげて、燃えていた。

外曲輪^{そとぐるわ}も、内^{うち}砦^{とりで}とよぶ本丸の建物も、もう焼け落ちようとしていた。

寄手^{よせて}は、稲葉山の齋藤義龍^{さいとうよしだつ}の兵だつた。道三^{どうさん}秀龍^{ひでたつ}の居城^{さぎやま}鷺山^{おと}を陥して、道三の首を長良川へ斬つて捨てた余勢の軍が、

ここへ殺到したものである。

明智光安みつやすにゆうどう入道は、元より道三秀龍に属していたので、乱が起ると共に、甥のじゆうべえみつひで十兵衛光秀や、子の光春と共に、稲葉山の兵に当って戦ったが、各所で敗れ、主の道三も討たれたので、故郷の明智ノ庄へ馳せ帰って、この小城一つを死地として、おとといから寄手の猛襲に防ぎ戦っていたのだった。

「裏切だツ——」

「裏切者があるツ」

炎の中に、味方のそんな声を聞きながら、光安入道も、

「今は……」

と、最後の運命を覚さとつた。

とりで
砦の内を見まわすと、火の揚つてない所は、裏山の森林しかなかつた。その穀倉と、「水の手」とよんでいる貯水池だけは、まだ焼けてなかつた。

「十兵衛はどこにおる。十兵衛をさがし求めて来い」

光安入道は、味方の死屍ししのあいだを駈けながら、なお、生き残つて防いでいる兵や将を見るたびにいった。

子のやへいじみつはる弥平治光春は？

とは一度も叫ばなかつた。

「父上。父上」

と、その光春は父の身を案じながら、彼のすがたを、乱軍のなかに見出して、駈け寄つて来た。すると、光安入道は、その子へ

対しても、すぐいった。

「十兵衛じゅうべえは……十兵衛はいかがいたしたか」

「乾いぬいぐち口の門で、敵と斬りむすんでおります。何といつても、お退ひきになりませぬ」

「しッ、死なすなッ……」

光安入道は、しやがれ声で、子を叱しつた叱しながら、乾口の坂道を、駈けて行つた。

「あッ、父上ッ。——てまえがいきます。雑兵ぞうひようばら輩の中へ、御

自身、お踏みこみなされいでも」

光春は、追いすがつて、強たつて父を後方へ引つ返させた。そして、

「——お父上、お父上。裏山の穀倉こくそうか、水の手には、まだ焰ほのおはかかりません。あれに、しばらく」

「はやく行けッ。——十兵衛を死なしては」

光安入道は、なお、そう云いながら、裏山の森林へよじ登って行つた。

光春はわが子である。ここで死なしてもいいと彼は自身の身と共に覚悟していた。

けれど十兵衛光秀みつひでは、兄の子である。兄の下野守しもつけのかみ光綱が、自分に託して世を去つた明智家の遺孤いこなのだ。——死なしては、亡き兄にすまない、と彼は、刻々に迫る城の運命と共に、それをのみさつきから胸に思いつめていたのだつた。

「……おお」

光安は、うめいて、茫然と立っていた。

水の手の水番小屋をのぞいてみると、城内の女たちや若い者たちが刺し交えて、嵐のあとの花野のように惨たらしくもみななげに、朱のなかに俯伏していた。

従兄弟の弥平治光春は、

「たのむ！ ……。十兵衛どの、頼むから、一先ずここは退いてくれ」

と、彼の籠手をつかみ、身をもって、彼の行くてに立ちふさがって、ここで稲葉山の寄手をうけて、斬り死しようとするまなじりをあて、戦っていた十兵衛を、無理無体に、焦土から引きもどして来た。

「ばかなッ。ここを退ひいて、どうするかッ」

十兵衛は、絶叫し続けた。

平常の寡言むくちで沈重な彼とは——まったく別人のように、知性をかなぐり捨てた修羅武者になっていた。

「水の手まで。……ともかく水の手まで」

なだ宥めると、振り切つて、

「水の手へなど行つてどうするかッ。もう敵は、そとぐるわ外曲輪を破り、本丸の味方からも、裏切が出ている今——」

「父が。……父があれば、待っています」

「叔父御が」

「お探しして、連れて来いと、さつきからお身を案じながら」

「わしのことなど、なぜお案じなるのか、光秀一箇の生命などは、なにものでもない。たとえ敗るるまでも、稲葉山の逆兵どもを……」

十兵衛は、齒がみをして、動かないのであった。

彼は、自分の敗滅よりも、もっと大きなものに、怒っていた。

それは、人倫じんりんの敵に対する、人間の憤りいきどおだった。

十兵衛光秀は、文武の士をもつて自分でも任じていた。勿論、武道の上でも、人に後おくれはとるまいとして来たが、士のうちでは、誰よりも劣らないほど書を読んだ。

彼の思想も信念も、聖賢の道によつて養われて来た。今、自分の城を、火でつつんでいる敵は、単に、自分の敵というばかりで

はなかつた。

親と名のある道三殿を攻め滅ぼした癩らいど殿どの（義龍）の部下である。

人道の敵だ。

聖賢の道の敵である。

光秀の怒りはそのために、自分の一命も滅亡も考えなかつた。正義に殉じて、大逆の狂兵ばらを、ひとりでもよけいに斬りまくって死のうとするばかりだった。

「犬死なされて、どうしますかッ。——雑兵などを相手に」

「犬死？ 弥平治ッ。何が犬死だ。もし、大逆の義龍が、このまま、やすやすと世に栄えたら、それこそ、この世は闇だ、地獄だ。

人間は餓鬼だ、鳥獣にも劣る」

「わかつていますッ。……それは分つていますが」

「一光秀が、いくら戦つても、大勢はもうどうする術すべもないし、

敵手にお果てなされた山城やましろうのかみ守様が、生きかえるわけもないが、

ただ——こういう証あかしにはなるぞ。——餓鬼道のような美濃衆の内

乱のうちにも、真まことの人間は、幾人かはいたということだ。そのた

めに、わしは死ぬのだ。わしは死んで悔いない。正義がこれを知

つてくれる。おぬしはそれを、犬死というか」

「分つていますッ。けれど……御最期のその前に、ともあれ一応、

父の光安に会つて下さい。それからでも、思いどおりの決戦はで

きましよう。死ぬなら、あなたばかりを死なせはしません」

「よしッ……」

と、呼吸いきも荒く、

「叔父御は、どこだ。どこにおられるのだ。死ぬ前に、一目会おうッ」

従兄弟いとこの駈ける後に続いて、彼も遂に、裏山の水の手へ、駈け上がって行つた。

叔父の光安入道は、水番小屋の前に突つ立って、わが子と、甥おいの来るのを、待ちぬいていた。

「おッ。光春か。……十兵衛にも無事であつたか」

「残念ですッ」

二人の若者は、この辺りの森と水の静寂しじまへ避けて、お互い肉親

同士の姿を見合うと、さすがに氣崩れに襲われて、光安入道の足もとへよろめき仆れた。

「はや、迫りました。無念ながら、祖先以来のこの居城の運命も」
「ムム、迫った！ ……」

「……がしかし」

と、十兵衛光秀は、力をこめて云った。

遠い^{ほのお}焰の音や、矢さけびの方へ、^{まなじり}睨から^{ひとみ}眸をきつと向けながら云った。

「われわれ一族、主君山城守様に^{じゆん}殉じて、ここに討死して果てましようとも、土岐^{とぎ}源氏このかた、数百年、われわれに至るまで、不義不道の賊子は一族から遂に出しませんでした。誇りですツ。

武門として、これは、亡びた者ではありません。人道の命脈を完まっうし、栄光の裡うちに、武門の旗を焼くだけのことです」

「そうだッ」

光春もいった。光安入道もうなずいた。

「叔父上。欣びましょう。欣んでわれわれは、暴悪な狂兵と戦いつくして、最後の旗を焼きましょう。腕のかぎり、敵を斬って、各 死地を選びましょう。……お別れです。今こん生じょうのこと、お礼も何も、申している違いとまはございません。死出の山で——」

手をついていうと、十兵衛はもう再び、起ちかけていた。

「待て。十兵衛」

「……はッ」

「死のうとするか。飽くまでそちは此処ここで」

「もとよりのことです。何でお訊ね遊ばしますか」

「わしは……」

光安入道は、立ち昇る空の黒煙を見……また眼を落して、まだ二十五歳の弱冠おひの甥と、それよりも年下な、わが子の光春とをじつと見くらべた。

「……わしは、死なしたくないのだ。おぬしらは、若いッ。逃げろ！」

「えッ？」

「落ちて行けッ。——光春、十兵衛」

「な、なにを、仰ごつしやりますか——この期ごになつて」

「眼前の有様を見て、世の終りと見るのは誤りだぞ。若い生命いのちには、先の世がある。城一つ、落ちたとて焼けたとて、大きな時の移りから見れば——」

「解げせぬおことば。叔父上にはわれわれ二人へ、恥を知らぬ士さむらいになれと仰おほつしやりますか」

「いわるるもよい。おぬしら長い先の生命をもつて、やがて、土岐源氏の末に人在りと、いわるる程な者になつて、家名をもり返して世に示すならば」

「そんなこと、考えられません。今は、暴逆の義龍の軍に対して、最後の最後まで、戦うことがあるのみです。……武門の正義が、われらの陣です。砦とりでです。ここを落ちて生を日蔭にぬすんでは、

武士道はありません。正義は廃すたれまする」

「いや、そうでない」

「叔父上。あなたは、この期ごになつて、さては怯おくれに襲われまし
たな」

「十兵衛。いうたな」

光安入道は、一言、激越げきえつに叱ると、子と甥おいが見ている前で、
短刀で自分の喉を横に掻き切つて仆たおれた。

その時、春雷の鳴つたような轟とどろきが、大地を揺ゆりあげた。水の手
の貯水池にはさざ波が立ち、空には黒煙がいちめんに濃みなぎく漲たかつた。

「おう、火薬庫も」

十兵衛は駈けて、木の間から城のほうを偵察していた。その顔

も、木々の幹も、不意に赤く照り映えた。城は一瞬に火の海と化し、この山の生木までバリバリと燃えて来たのである。

こんな僻地の小城に似げなく、搦手曲輪の一棟には、たくさんな火薬が貯えられてあつた。

鉄砲という新武器に目をつけたのは、美濃では、誰よりも十兵衛が早かつた。彼はそのために、九州や堺へも何度か行つた。そして逸はやく岐阜の里に鉄砲鍛冶を養成し、自分の居城には、ひそかに火薬も貯えたりしていた。

十兵衛の頭脳は、時代の先見に、明敏であつた。鉄砲の構造のようには、科学的でもあつた。

だが、彼の緻密な推算でも、自分をうごかす運命の率は割り

切れなかった。

自分が研究し、自分が指導してつくらせた鉄砲で、彼は今、自分も家臣も攻め立てられているのだった。

また、遠い将来に、この城から討つて出て、
 中ちゆうげん原とぎに土岐源
 氏の旗をひるがえす考えで貯蔵しておいた火薬が、今は、祖先か
 らの城を、一片の焦土に化して、悪鬼あつきのように、人の屍かばねも、山の
 木々も、焼き立てているのだった。

「……………」

無念とも何とも云いようがなかった。十兵衛光秀は、木蔭から
 その焰を見下ろしているうちに、

「そうだ！ 叔父御のことばに従って、落ちのびよう。生き長ら

えよう。——生きておらねばこの無念を！……」

ふと、彼の考えは、一変していたのだった。

するとまた、かなた彼方で、

「十兵衛どの！ 父が、父が……何やら申しています。苦しげな息の下で。——十兵衛どの！ 聞いてやって下さい。最期です。

……もう、こときれかけています」

悲痛な声で、いとこ従兄弟の光春が、呼び立てていた。

さつきから十兵衛は、その従兄弟の声にも、自害した叔父の光安入道の姿にも、振り向きもせず——自分は自分で、再び焰のなかへ駈け入って斬り死を！——と思いつめていたのであったが、

「おッ。叔父上」

駈けもどつて、従兄弟と共に、俯伏うつぶしている光安入道のからだを抱き起した。

「光春。……いるか」

入道の眸ひとみは、もう見えないらしかった。

「おります。父上ツ。光春はお側に——」

「十兵衛は」

「叔父上。十兵衛も、これにおりまする」

「ふ……ふたりとも……討死は相ならぬぞ。わしを犬死さすな。

御主君に殉じ、この城と運命を共にするのは、わしだけでいい。

武門の名は立つ。……早う落ちて行け。わしにかま関わらず、おぬしら

は」

「……はい」

「十兵衛。……光春をたのむ。光春をたのむぞよ」

喉のどを掻き切つて、なお、手から離さずにいた短刀で、光安入道は、云い終るなり、鎧よろいの胴よこのすきまから脾腹ひばらへそれを突き立てて果てた。

「光春。お首しるしを」

「あッ……」

光春は、暗然と、眼をくもらせたまま、為なす術すべを知らなかった。入道かばねの屍かばねの背せには、見ているまに、火や灰が降つて来た。十兵衛は、従いとこ兄弟いとこの意気地いない様子を齒はがゆく思つたか、

「ごめん！」

入道の首を掻き落して自分の袖に抱え、

「光春ツ。早く来いッ」

と、先に立って駈け出した。

昼はかくれ、夜になると、獣けもののように、ふたりは歩いた。

可児郷かにごうのうちには、領土内なので、地理もわかつているし、土民

の家を叩いても、匿かくまってくれたが、飛驒街道ひだかいどうまで来ると、もう敵

の柵さくや、敵の影ばかり眼について、

「進退きわまつたか」

と何度も、観念しかけた。

飛驒川原で、落人おちゆうどがり狩の敵に発見されて、追われた時は、

「もうだめだ！ ……。十兵衛どの、刺さし交ちがえて死のう」

と、年下の光春は——まだ埋める場所もなく手に抱き歩いてい
た父の首級くびを——そこへおいて云った。

光秀は、首を振った。

「ばかなッ。……ここで刺し交ちがえて死ぬくらいなら祖先の地で死
ぬ。こうなつたからには、草の根を喰つても生きるのだ」

彼の置いた首級くびを、今度は、光秀がかかえて走った。

まったく、道もない山を、一夜中西へ西へよじ歩いた。

暁あけがた方、一つの道へ出た。

美濃から越前へ出る大日越だいにちごえの嶮路けんろであつた。

ここは旅人の往来も稀だし、斎藤一族の勢力にも遠かつた。小
鳥を落して、羽をむしって生肉を喰くらい、山芹やませりや芋いもの根ねも、生なま

のまま噛んで歩いた。

こーん。こーん……。と、斧おのの木魂こだまが檜ひのき林はやしの奥から静かにひびいていた。光秀は、従兄弟の手に、旗でくるんだ叔父の首級くびをあげて、

「ここで待つておれ」

と、何処へか立ち去った。

しばらくすると、光秀は、手に一挺ちようくわの鋏と、それから雑ぞう人の着る着物や山やま袴ばかまなど、一抱えもかかえて、檜林の奥からもどつて来た。

「案のじよう、この先に、木挽こびきどもの寝小屋があつたので、申しうけて来た」

彼は、光春の手へ、鍬を渡しながら云った。光春は、黙つて、それを持つと、

「何処に……」

と、地相を選ぶように、辺りを見まわしていた。

「なるべく、小道からも、遠い所がよい」

光秀は、林の中へはいつて、仄ほのくら暗い木蔭の大地を指さした。

光春は、鍬を振つて、その土をぼくぼく掘つた。

「もつと。……もつと」

光秀は、彼の掘る穴へ、そういつた。光春は、首級くびのみ埋いける大きさに掘つていたが、光秀は、人間のはいるような穴になるまで、うなが促していた。

やがて、光安入道の首級くびは、土中へ深く——そつと置かれた。

光秀は、身にまもつてゐる具足をすつかり解いて、

「光春。おぬしのも、脱ぎすてて埋いけてしまえ」

と、命じた。

太刀たちのみ残して、二人は鎧よろいや持物のすべてを、光安入道の墳墓ふんぼのうちへ共に埋いけた。

そして、雑人の着物を着、山袴やまばかまを穿はいたが、余りに、立派な太刀が目立つので、鞆さやは布で巻き、柄つかがしら頭の金具は取り捨て、野武士か何そのように、わざと無頼ぶらいな恰好に、それを腰へ横たえた。

「水はないか」

「水は流れておりますが、汲む器がございませぬ」

「いや、ある」

光秀は、林の外へ歩いて行つた。どこかで、戛んツ——と、青竹を伐り伏した響きがしたと思うと、間もなく、一節の切竹を持って帰つて来た。

切竹の節に、清水を掬い、光安入道の首級を埋けた大地へ手向けて、二人は、いつまでも合掌していた。

チチ、チ、

ピ、ピ、ピツ……

種々な小禽ことりの声こゑが、檜ひのきの密林みぎに啼なきぬいていた。二人の頭脳かぶは冷たく澄あみ、明智あけちノ庄しやうを落おちて来てから初めて真まことの吾われにかえつて

いた。

「……………」

弥平治光春は、やへいじ 肱ひじで涙を拭いていた。

父が死んだのは戦場であり、その首級は、二日二夜も抱き歩いていたのであるが、涙がこぼれて来たのは、その時が初めてであった。

「光春」

「はい」

「泣くな。おぬしが悲しむと、わしは居ても立ってもいられなくなる。——叔父御は、わしのために、御最期になられたといつてもよいのだから」

「そんなことはありません。武将として」

「……だが。……だが叔父御には、わしの父しもつけのかみみつな下野守光綱が臨終いまわの折に、幼いわしを、どうぞ頼むぞと、叔父御へお託たくしになった——その責任感が、いっばいにあつたのだ。お忘れになれなかつたのだ」

「それは常に、父の光安も云い暮していたことでした」

「落城が迫つた焔ほのおの中でも、そればかりを案じていてくださった。

——そしてわし達を落して見事自刃されてしもうた。……勿もつたい体たいない」

光秀は、もいちど、大地に両手をついて、大地を拝んだ。

「光春！ ……ここで二人は誓おう！」

「はい」

「生き残された光秀の生命いのちは、自身のものであつて自身のものではない。わしに代つて死んだも同様な叔父御の生命もかかっている。また土岐源氏とぎの御先祖方の遺命もかかっている。——この先、光秀はなおさら、徒らいたずに無為な日を暮してはいられない」

「私とても、同じ心もちでござります」

「そうだろう。そうなくては相すまぬ。——きつと、大志を抱いて、お互いに、家名を興そうぞ。——なあ、光春ッ」

「やります！ ……。城地や家臣もみな失つて、裸の身一つになつたのは、むしろ天の恩恵かもしれませぬ。この二人をして、苦難の中に、研みがいてみろという神のお示しかも分りませぬ」

「その心で、おぬしもやれよ。光秀もまた、もつともつと修行する。自分を文武の両道に徹しきるまで励んでみせよう」

「ああ、何か——」

光春は、胸を上げて、禽とりの啼き澄む梢を仰いだ。

「胸が、潤かつぜん然と、開けたここちがします。十兵衛どの。亡父ちちの靈へよい手向たむけをしました」

「うム。わすれまい。——お互いに！」

ふたりは誓った。

だいにちこえ

大日越だいにちこえの難所をこえ、ようやく他郷へはいつた二人は、しばらく越前の穴馬あなまぎい在ひそに潜んでいたが、美濃みのの乱も四隣の形勢も、ほぼ見通しがついたので、やがて越前の敦賀つるがへ出、舟で北郡みの三

くに
津へ上陸あがつた。

三国の津の長崎称念寺ながさきしょうねんじには、かねて知合しりあいの園阿上人えんあしやうにんがいた。その人を頼つて行つたのである。

それから幾年かの間。

寺の門前町に、一軒借りて、二人は寺小屋などしていた。けれど光秀が手習子てならいこに教えている時は、光春が旅に出、光春がいる時は、光秀が旅に出て留守だった。

旅は勿論、風雲の下の旅だった。自分を磨きながら、あわせて、諸国の軍備や文化を視察して歩く——それを、武者修行と、時の人々はいつた。

風かぜの中なかの城しろ

信長は、戦わなかつた。

機を見るに敏な彼が、なぜ木曾川まで進軍したのに、引き揚げ
てしまつたか。

国境木曾川のすぐ向うには、内乱の火が幾日もいぶつていた。

攻め入るには絶好な機会だつた。山城守道三の密使が、好条件の
誘いをも齎もたらして来ていたのである。

が、彼は川を越えなかつた。

「いつもの殿にも似げないこと」

と、家かちゆう中の多くは不審がつた。むしろ齒がゆく思つた。

「ははあ、さては信のぶひろ広様の内応事件に、お懲こりなされているのだな」

と、いう者もあつた。

信広とは、信長の兄信広のことである。

先には、弟の信のぶゆき行が、林はやしきど佐渡や美みまさか作と謀むほん叛を計つて、信長を困らせたが、その後また、今度は兄の信広が、美濃の斎藤と内応して、清洲城を乗っ取ろうとした事件がある。

その時の、信広の計略では、

「信長めは、生来、軽けいきよ拳たちな質だから、美濃勢が国くにざかい境を衝つけば、すぐ城を空からにして出てゆくにちがいない。——その留守に事をなせば何の造作もない」

そういう見通しで、美濃と内通の計画をすすめていた。

そして昨年来、二、三度国境の方面で、無意味な敵の侵略行為が繰り返された。

けれど信長は、その手に乗らなかつた。怪しいと感づいて、兄の信広を責め糺ただした。信広は、参つて、

「勘弁せい。もう致さん。これからお前の股肱ここうになつて働くから」と誓つて、平ひらあやま謝りに弟へ謝つて、事件は落着したものだつた。

戦わずに木曾川から帰つた信長の心を、家臣は、それと結んで考えてみたりしたのである。

独り藤吉郎だけは、そんな噂に耳を藉かしたこともない。相変ら

ず、大きな桐紋きりもんのついている木綿の陣羽織に、扇子づかいをして、この夏は、せつせと、城勤めに専念していた。

たまたま、犬千代と顔をあわせることはあるが、

「やあ」

と、こちらからいうと、

「やあ」

と、向うからも応じるだけで、寧子ねねのねの字も、どっちからも口に出したことはなかった。しかしこの二人は、恋愛戦や木曾川出陣などを重ねて来てから、暗黙のうちに、お互いの認識を次第に深めて来たようなのである。

同じ、やあ、というにも、以前よりは親密の度が濃くなってい

た。

それと共に、

(あいつ、一すじ縄ではいかん男だぞ)

一方が思うと、一方も。

(下手には見^{へた}下^{みくだ}せぬやつだ。気軽なように底が知れぬし、大^{おおざつ}雑
把^ばなように、眸^{ひとみ}づかいは鋭くて細かい)

知り合うほど一面では、こういうふうには、警戒し合っていると
ころもあつた。

だが、この二人のみは、なぜ先頃、信長が戦わずに美濃境から
帰つて来てしまったか? ——などという愚かな暇つぶしの臆^{おくそ}
測^くばなしなどはしなかつた。犬千代には分つていた。もとより

藤吉郎の胸には、もつと早くからうなずく領けていた。

信長は、戦わない！

そして以来ひたすら自重しているふうだった。

兵馬を練り、食糧を蓄え、この夏の暴風雨で、城壁の石垣や堀が大破すると、すぐ命じて、修繕にかからせた。

二十十日、二十日はつか前後の暴風雨は、毎年のものであった。しかし、

尾張を繞めぐつて、より以上不気味なそよ風は、べつに吹いていた。

西は美濃みのから、南は三河の松まつ平だいらから。そして東は、駿河の今

川義元あたりの動きから——諜報は明け暮れ清洲の孤立化を告げていた。

この頃の暴風雨で、外曲輪そとぐるわの城壁が、百間以上も崩れ落ちた。

その工事で、大工、左官、土工、石工いしくなどが、大勢、城内へは
いつていた。

からはし唐橋から材木や石を曳き込んだり、所々に工事材料を積んで
おいたりするので、城内の通路も濠ほりばたも、混雑を極めていた。

「足の踏み場もない」

「早く出来上らぬと、そのうちまた、暴風雨あらしが来ると、今度は石
垣が危ないぞ」

毎日、そこを通る者は、不便を啣かこったが、工事縄張の立札には、

御修築しゅうちく地内

無断不可入いるべからず

奉行

山淵右近やまぶちうこん

と見え、工事奉行以下の部下は皆、準戦時体制の服装や職権の下に、物々しく働いているので、誰もそこを通るには、通さしてもらおうような気兼ねきがねをもつて、いちいち挨拶して行つた。

工事は、二十日近くはつかにもなっているが、まだ少しも捗はかどっていないなかつた。不便は不便だが、誰も、そこでは声を放つて苦情をいう者はないのである。

それに、城壁百間の改修は、大工事でもあるから、長くかかるのは、誰も当り前に思っていた。

「これ。今彼方むこうへ参つたのは、何役の誰だ」

工事を督とくしていた奉行の山淵右近が、下役の者へ訊ねていた。

下役は、振り返つて、

「お厩うまやしゆう衆しゆうの木下藤吉郎殿かと思ひますが」

と、奉行の指さす後ろ姿を見まもりながら答えた。

「何、木下？ ……。ああそうか、よく猿々と噂にいわれる男だの」

「そうです」

「少々、それがしに所存があるから、こんど通つたら呼び止めろ」
右近は、命じておいた。

何が奉行の癩かんに障さわつたか、下役には分つていた。毎日、出仕のたびに、藤吉郎はここを通るが、いつも挨拶をしたことがないのである。それに材木など積んであると、踏み越えて通つたりする。

勿論、通路に置かれてある場合などは仕方がないにしても、城しろぶ普請しんの御用材である以上、一応は普請方の者へ向つて、許しを乞うた上、踏むべきであつた。

「知らぬのだ、礼儀を」

と、下役たちは、後でいった。

「——何せい、御小人おこびとから士分に取り立てられ、ようやくこの頃、御城下に宅地をいただいて、ああやって出仕する身分になつたばかりの男だ。無理もないで」

「いや、成上がり者の小威張りほど、眼ざわりなものはない。得て、思いあがっているやつだ。いちど鼻ばしらを折つてやるのも、当人の身のためだぞ」

右近の部下は、手ぐすねを引いて、待つていた。

夕方の退出時。やがて彼のすがたが見えた。

春も夏も秋もない、例の青木綿あおもめんの陣羽織である。厩衆うまやしゅうは

ほとんど外勤めなので、それで役目も間にあうことは間にあうが、もう身なりなども、飾れば飾れない身ではない。それなのに、相変らず藤吉郎は、自分の身なりなどに費つかう金は少しも持たないらしかつた。

「来たぞ」

普請奉行ふしんの下役たちは、眼くばせしていた。

藤吉郎は、木綿陣羽織の——大きな桐紋を背中に見せて、悠々と、通りかかった。

「待て」

「木下氏^{うじ}。待て」

呼び止められて、

「わしか」

藤吉郎は、けろりと振り向いた。

「——いかにも」

「何か御用か」

「されば」

と、下役は、彼の足を止めておいて、奉行の床几^{しょうぎ}へ、何か告げに行つた。

薄暮の工事場から、職方や人夫たちは、役人の点呼をうけて、

ぞろぞろ帰りかけていた。

奉行の山淵やまぶちうこん右近は、左官棟梁さかんとうりようや大工棟梁などを、自身の

床几場へ集めて、あしたの作事について、何か評議中だったが、聞くと、

「猿か——」

と、床几から立つて、

「呼び止めたか。では、ここへ連れて来い。ここへ。——説諭せつゆしておかぬと癖になる」

と、いった。

藤吉郎はすぐ彼の前へ来た。

やあ——

ともいわなかつた。

頭も下げなかつた。

城内では、友人の間でも、如才じよさいないといわれている彼としては、珍しく不愛想で、胸を反そらしたまま、

(呼び止めて、何用か)

と、いった顔していた。

それが先ず、山淵右近を、いつそう怒らせた。

身分からいえば、彼と右近とでは、比較にならないほど、懸かけへ

隔だてがある。

右近は、清洲城の一いち聯れんである鳴海なるみの出城を預けられている山

淵まぶちさまのすけよしとお左馬介義遠の子だ。織田諸将のうちでも、重臣の者の子で

ある。——青木綿の陣羽織一着で、春も秋も越している彼とは、格がちがう。

(不遜ふそんな奴だ)

と、右近の顔は、それからしてまず穏やかでなかつた。

「——猿」

「……………」

「おい。猿ッ」

呼んだが、藤吉郎は、返辞をしなかつた。

これも、彼としては、いつもと違っていた。藤吉郎のそう呼ばれることは、上は信長から下は友人達まで、口癖のようなもので、彼自身、少しも気になどしていないことだったが、きようは、常

の調子でなかつた。

「耳はないのか。猿」

「ばかッ」

「何」

「ひとを呼び止めておいて、たわ言も程にいたせ。猿とはなんだ」
「そちのことを、誰も皆、そう呼ぶゆえにわしも呼んだまでだ。

わしは、鳴海城のほうに多くいるから、そちの姓名などよく知らん。それゆえ、人がよく呼ぶように呼んだのが、悪いか」

「悪いッ。——何と呼ぼうと宥ゆるしていい人間と、宥ゆるされぬ人間とがある」

「然らば、わしは宥ゆるされんというのか」

「そうだ」

「ひかえろ。許されんのは、そちの不遜だ。毎朝、出仕の折、何で普請ふしんの御用材を、踏み跨またいで通るか。われわれに会釈せんか」

「それを咎とがめるのか」

「礼わきまを弁えんやつだ。侍になりたてのそちゆえ、いうて遣つかわすが、礼儀は武士の重んじるものだ。……それにだ！ よく貴様は、ここを通行の際、工事の体ていを、したり顔して眺めていたり、口のうちでぶつぶつ申ししたりしておる様子だが、すべて、城の工事と申すものは、戦場と同じ御規則の下にいたしておるのだぞ。不届きな奴め。——以後再びそのようなことがあると、ただはおかぬから左様心得ろ！」

呶鳴りつけて——

「いや、草履ぞうり取などから、士分に成上がったたりなどとすると、すぐこうなるから始末がわるいよ。はははは」

と、右近は、周りにいる棟梁まわや下役たちを顧かえりみて、自分の大きなところも見せるつもりか、笑い捨てて、藤吉郎へ後ろを向けた。

大工棟梁や左官棟梁は、それで事はすんだものと思い、奉行の床しょうぎ几を囲んで、再び工事の絵図面などをひろげていた。

「……………」

だが、藤吉郎は、動かないのであった。右近の背を睨ねめつけたまま、去ろうともしないのだ。

奉行の下役達が、

「木下氏。もうよい」

「お叱りは、それだけだ。以後、気をつけさえすればいい」

「さ。帰れ」

宥^{なだ}めたり、連れ去ろうとしたが、藤吉郎は耳もかさない顔して、

奉行の背中と、棟梁どもの評議とを、睨むように見ていた。

「……………」

そうしている間に、彼の若い気性と、その若い血のなかに持っている理性とが、頭のなかで、彼の^{こうしよう}哄笑^{よく}を抑しきれない泡つ

ぶでも立てたように、突然、藤吉郎は、ばかばかしく大きな声で笑いだした。

評議中の棟梁や、下役人たちは、びっくりして凶面から顔を上げた。

床しょうぎ几よに倚よつていた奉行の山淵やまぶち右近も、きつと、後ろを見て、「何を笑う！」

と怒った。

藤吉郎は、なお笑って、

「おかしいから笑うのだ」

いうと、

「無礼なことを——」

右近は、憤然と、床几を蹴つて立ち上がった。

「とるに足らぬ軽輩と、わしが許しておけば、よい気になりおつ

て、不！ 不埒ふらちな奴だツ。——作事場には、陣中同様な軍律があるのだぞ。うぬ、斬り捨ててくれるから、それへ直れ」

太刀へ手をかけた。

それでも、相手の顔いろも、棒をのんでいるような体も、びくとも動かないので、右近は、なお躍起に、

「捕えろツ。処置いたすから、逃がさぬように引つ捕えろ」
と、どなった。

右近の家来は、すぐ藤吉郎のそばへ寄った。藤吉郎は、黙って、寄り付こうとする者たちを、嗅かぐように見廻した。——妙な男だとさつきからその心理を疑っていたので、何か不気味で、側へは寄って、彼を囲む構えは作ったが、ひとりも手出しはしなかった。

「右近殿。おぬし、大言は上手だが、することは下手へただのう」

「な、なんじやと」

「お城の工事は、軍律も同様な御制度ですという理わけは、何のためにある規則か。それも口では云いながら、分っておらんのじゃないかな。——心ぼそいお奉行よ。おかしくなつて笑つたが悪いか」

「聞捨てならぬ暴言。うぬ、奉行たるわしに向つて」

「聞けよ、まず！」

藤吉郎は、胸を張つて、あたりの顔を見まわしながら演舌した。 「今は、泰平の世か、乱世か。これの分らぬ奴は馬鹿である。しかも当、清洲のお城は、四隣みな敵のなかに在る。東に今川義元。

武田信玄。北に朝倉義景よしかげ、齋藤義龍よしたつ、西に佐々木、浅井。南に三河の松平と——。山ひとえ、川一すじの隣はすべて敵ばかりだ」

氣をのまれた形である。彼の声が自信に充みち、また、一個人の感情をいつているのでないから、その大声に氣を奪われて、みな思わず聞いていた。

「——そういう状態の中にあつてだ。暴風雨あらしがふけば、すぐ壊れるような土塀を、お城の鉄壁たのとも恃んで、御家中はみな、非常の心構えを弛ゆるめずに、四隣を睥睨へいげいしておるのだ。……然るに、これぱしの工事に、二十日はつかもかかつて、まだのめのめと、悠長な日を費やしておるとは、もつてのほかな怠慢。もしこの間隙かんげきに乗

じて、一夜に襲せて来る敵があつたらどうするか」

雄弁は彼の特徴である。ただその持前を余り出しすぎると、饒に舌家ようぜつかといわれたり、法螺ほらふきと思われたり、またか、と人に厭いとわれたりするるので、平常は慎んで、なるべく寡黙かもくを守っているのであつた。

けれどまた、いう時にはいわなければいけない、とも信じられるので、彼は今、その得意な舌の限り弁じ立てて、周まわりの者を、聴ちようじゆう従ちゆうじゆうさせずに措おかなかつた。

「およそ、お城普請ぶしんには、三つの法がある。第一が秘速ひそく。秘密裡りに迅速ということである。第二には堅粗けんそ、堅固にして粗なるもよしということである。裝飾や美観は泰平になつてからやれば宜し

い。第三には、常備間防じょうびかんぼうということだ。——常備間防とは、御普請中だからといって、工事混雑し、平常の備えが欠け、或いは、乱れたりしてはならんと誡いましめたものである。工事中、いちばん怖ろしいことは、その間隙かんげきの生じることだ。たとえば一間の土塀つゐといえども、その間隙から、一国の壊えが来ないとは申されぬ」雄弁は圧倒する。

奉行の山淵右近は、その間に、二、三度、何か発言しようとしたが、藤吉郎の演舌に抑えられて、ただ唇をふるわせたに過ぎなかった。

左官、大工などの棟梁とうりょうたちも、組下の者も、最初は啞然あぜんとして、藤吉郎の声にのまれていたが、彼のいう道理が耳にはいる

と、暴言や暴力もさし挿^{はさ}めなかつた。

いったい誰が奉行なのか、分らなくなつてしまつた。藤吉郎は、^{まわ}周りの人間たちの頭に、自分のいう意味が届いたと思うと、さらに、立てつづけて云つた。

「——然るに、失礼ながら、山淵殿の御工事ぶりは、いったい何事であろうか。どこに迅速があるか、常時の備えがあるか。二十日近くもかかつて、まだ一間の堀すら立つていないではないか。土堀下の石崩れの修築が手間どるとお云いだろうが、そんなことで、城^{しろ}普^{ふしん}請は陣中の軍律も同様だなどと、広言を吐くのは、身の程を知らなすぎる。——この藤吉郎が敵国の間者なら、虚をついて、この口から討つて入るでござろう。左様なことが突発せぬ

から、悠々と、隱居の茶席普請のようなことをやっておられるが、危うい限りである。御城内へ出仕するわれわれにとつても、毎日、足もとが悪くて迷惑至極だ。その通行を咎めるよりも、よく御評議あつて、工事の進しんちよく捗とくを早速になされよ。——よろしいか、お奉行のみでなく、組下の与力衆も、また棟梁どもにおいても」
説論である。

まるで一場の訓示だ。

云い終ると、彼は、

「いやどうも」

と、朗らかに笑つた。

「——どうもつい、思う通りなことをいってしまつて、失礼いた

した。これも朝夕、御奉公大事と思う、お互い様のことだな。：
 いや、お邪魔いたした。いつのまにか、暗くなりましたぞ。も
 はやお引揚げであろう。お先に失礼いたします」

奉行以下一同が、あつけにとられているまに、藤吉郎は、さつ
 さと、城外へ帰ってしまった。

翌日。

彼はうまやしゅう厩衆たまりの溜にいた。

厩方に勤めてからは、そのほうでも、彼の精勤ぶりは、誰にも
 劣らなかつた。

(あんなに、馬の好きなやつはないな)

と、同僚からもあき呆れられる程、彼は自身の受け持っている厩廻

りの仕事と、また、飼馬に手をつくして、馬と共に起臥おきふししていた。

「木下。お召しだぞ」

厩うまやの前に、組頭が来て告げた。藤吉郎は、信長の愛馬山月さんげつの腹の下から、

「——誰がで？」

と、訊ねた。

山月の脚に、腫物はれものができたので藤吉郎は、馬盥ばだらうの湯で、馬の脛すねを洗ってやっていたのである。

「お召し——といえは、御主君にきまつておる。殿のお召しだ。はやく行け」

組頭は、そういつて、

「おい、誰か、木下に代つて、山月をお厩へ入れろ」

と、侍たちのいる溜たまりを振り返つて云つた。

「いえいえ。やつて行きます」

藤吉郎は、馬の腹の下から出なかつた。山月の脚を洗い終ると、薬を塗つて、布でしばつてやり、そして馬の首や毛なみを撫でながら、自分で厩のうちへくくりつけた。

「殿様には、どちらにおいでになりますか」

「お庭先だ。はやく行かぬとごきげんを損そこねようぞ」

「はい」

彼は、溜たまりの内へはいつて、壁に懸けてある例の青木綿のいっちょよ一張

羅うらを引っかけた。

信長は、庭へ出ていた。

柴田しばたごんろく権六と、小姓の犬千代など、四、五名をつれていた。

お鷹たかしゆう衆の者が、何か、その足もとから、身を起して退さがつて

行つた。

そこへ、入れ代りに、青木綿の陣羽織の彼が、駈け寄つた。——と、いつても、十間も遠く離れた所で止まって、すぐ手をつかえていたのである。

「お。——猿か」

「はッ」

「寄れ」

信長は、後ろを見た。

すぐ、犬千代が、床しょうぎ几を置く。

「もっと寄れ」

「はあッ」

「猿。ゆうべかな？ ……。そちは外曲輪そとぐるわの普請場ふしんばで、だいぶ大言を吐いたというではないか」

「は。もうお耳に」

信長は、苦笑した。その大言を吐いた人間らしくもなく、藤吉郎が、自分の前ではひどく恐縮して、顔を赤めているからだった。

「以後、慎め」

信長は、きつく叱って、

「今朝ほどから、山淵右近が、そちが無礼のかどを挙げて、やか厳ま
しゆう訴えて来おる。——したが、他の者のはなしでは、そちの
大言にも、一理はあるらしいゆえ、なだ宥めつかわした」

「恐れ入ります」

「謝罪して来い」

「は？」

「普請場へ参つて、右近に謝つて来い」

「てまえがですか」

「当りまえなこと」

「おいつけなれば、謝つて参りますが、よろしいでしょうか」
「不服か」

「恐れながら、悪弊になるかと存じます。なぜならば、てまえの申し条は正しく、彼の仕方は、御奉公に忠実とは申されません。

あの程度の御修築に、二十日近くもかかつて、なおまだ——」

「猿、待て」

「は」

「わしにまで、そちは、大言を吐くか。そちの演舌は、他の者より聞いておる」

「当りまえなことを申したまでで——大言とは、いささかも思いませんが」

「然らば、そちはあの工事を、幾日で仕遂げてみせるか」

「左様で——」

と、彼もすこし慎重になつて考えていたが、即座に答えた。

「多少、手がついておりますから、後三日もあれば難なく竣しゅんこ

工う——と、存じますか」

「なに。三日」

信長は、声を放った。

柴田権六は、苦い顔して、真まにうけている主君をむしろ笑つていた。——ただ犬千代は疑わなない眼で、藤吉郎の睫毛まつげのうごきま
で、じつと見ていた。

みつかぶしん
三日普請

藤吉郎はその場で、主君から普請奉行の大役をいいつけられた。
山淵やまぶち右近に代つて、三日のうちに、城壁百間の修復をやつて
みろといわれたのである。

「かしこまりました」

彼は、おうけした。そしてすぐ退りさがそうにしたので、信長は、
「待て待て。汝、そのような安うけあいして、確かにやれるのか。
よいのか」

念を押した。そういった信長の気持には、この男に、つめ腹を
切らすような失態をさせたくないとする——思いやりがあつたの
である。藤吉郎は、坐り直して、

「必ず致しまする」

と、云いきつた。それでも、信長はまだ、

「猿。——禍わざわいは口からというぞよ。つまらぬ行きがかりの上な

ら、今のうちにそのような意地は捨てたがよい」

と、なお考慮の余地を与えて諭さとしたが、藤吉郎は、

「いずれ、三日後に、御検分を仰ぎ奉りまする」

とのみいつて、主君の前を退さがつてしまった。

すぐ彼は、厩うまやしゅう衆たまりの溜へもどつて来て、

「組頭。てまえは、主命によりまして、三日ほど、外曲輪そとぐるわの御

普請ふしんのほうへ、全力でかかることになりました。その間、どうか

よろしく——」

と、挨拶して、その日は、やや早目に、わが屋敷へ帰つて来た。

「ござんぞ。ござんぞ」

主人の声に、若党の権三が、奥をのぞいてみると、藤吉郎は、衣服を脱いで、そう立派でもない肉体をまる裸にして見せて、ちよこなんと胡坐あぐらをくんでいた。

「なんぞ御用にござりまするか」

「用だ！」

と、元氣よく、

「金はあるかな。手元に」

「お金で？」

「さればよ」

「さあ……」

「いつか少々、その方に家事の雑費としてあずけておいた金はどうだ！」

「もう、疾とくにございませぬ」

「では、勝手元の金子きんすは」

「お台所のほうも、ずっと前から少しも御用意がございません。で、その由を、先々月か、お耳へ入れましたところ、そうか、よいようにしておけ、と仰っしやるだけなので、ぜひなく、やりくり算段をしてお暮しを弁じておるような始末で——」

「ふう……む。では金子きんすはないのか」

「あるはずはございませぬ」

「はてなあ？」

「いかがなされました」

「俄にわかに、人を招いて、振舞ふるまいいたしたいのだが」

「酒さかな、お肴のことぐらいなら、走りまわって、ござが、町人たちから借り立てて参りまするが」

「そのことよ」

膝を叩いて、

「ござ、頼むぞ」

藤吉郎は、洩団扇しふうちわを取りよせて、体のまわりを大きく煽あおいだ。

もう秋風も立ち、桐きりばたけ畑おびただの桐の葉も夥しく落ち出しているが、

やぶ蚊はなかなか多いのだった。

「して、お客様は」

「御普請の棟とうりよう梁りやうどもだ。やがて顔をそろえて参るだろう。お

れの屋敷へ集まれと、お城で云い渡しておいたからな」

ごんぞを、使いに出して、藤吉郎が裏庭で、行水の湯を浴びて
いると、表口に誰か客の声がした。下婢かひが出て行つた。

「どなた様でございますか」

客は、笠を脱とつて、

「御城内の前田犬千代」

といった。

行水から上がつて、縁側で浴衣ゆかたを着ていたこの小屋敷あるじの主は、

そこから表をのぞいて、

「やあ。やあ。——誰かと思つたら犬千代か」

無造作に、どなった。

「上がられい。さあ、奥へござれい」

と、自分で敷物など直した。

犬千代は、坐りこんで、

「突然に出向いた」

「めずらしいお越し。——何ぞ急用でも」

「いや、わしの用事ではない。おぬしのことだ」

「ほ……？」

「ひと事のような顔されるが、それどころではおざるまい。大変な確約を結ばれて、犬千代ですら、陰ながら憂いにたえない。おぬしのことゆえ、充分、せいさん成算はあつてのことだろうと思うが」

「あ。工事のことでござるか」

「いうまでもない。よしもないことを云い出され、御主君におかれてさえ、人ひとり、要いらざることで、腹など切らせとうない——といったようなお顔いろであつた」

「三日といつてもうたのでな……」

「成算は、あるのか」

「ない」

「ない？」

「もとより、お城の工事など、てまえは皆目、素人しろうとでござれば」

「で、どうするおつもりか」

「ただ、普請ふしんに働くものは人間だから、その人間を、完全に使え

ば、人力の及ぶところまでは出来得ると信じておる」

「さ。……そこがだ」

犬千代は、声をひそめた。

妙な恋こいがたき仇である。

ひとりの寧子ねねを、二人で想い合つてから、いつかこの二人は、

恋仇という相対的な関係から、反対に、親密の度を加えていた。

——というてべつだん、胸襟きょうきんをひらくとか、肝胆かんたん相照あいてらす

とか、ことばや形の上で、手を握つたわけでも何でもなく、不和

な仲に、彼を知り、此方こちらを知つて、自然、男と男との交際つきあいが始

まつて来たのであつた。

わけて、きよようの犬千代の訪れなどは、真実、藤吉郎の沙汰を、

心配して来たものらしく、その様子は、飾らない態度にも、ぞんざいな言葉のうちにも、汲み取れた。

「——そこがとは？」

「やまぶちうこん山淵右近の気もちになつて、きょうのことを、おぬし、考えてみたか」

「さだめし、無念がつて、この藤吉郎を、恨んでおることと、察しておる」

「——では、その山淵右近の、日常の行いや、また侍としての、彼の心事をも、み観ておらるるか」

「おるつもりだが」

「そうか……」

犬千代は、ことばを切つて、

「おぬしが、そこさえ、看破しておれば、わしも安心だが」

「……………」

じつと、藤吉郎は、彼のつぶやく顔を見ていた。

そして、何か領うなずいた。

「さすがは犬千代。貴公も、眼をつける所へ、よう眼をつけるの
う」

「いや、眼の早いのは、おぬしに敵かなわぬ。——山淵右近へ、それ
と眼をつけたのも鋭いが……………」

「あいや、待った」

藤吉郎が、口を抑えるまねをすると、犬千代も快活に、

「あはははは。いわぬが花か。いうては味ない。いうては味ない」
と、手をたたいて笑い合つた。勿論、いえば、寧子ねねの名が出る
ところであつた。

使いに出了た若党のごんぞはやがて帰つて来た。その後から酒が
届き、肴さかななども届いた。

犬千代が帰りかけると、

「ちようど、酒が届いた。一献こん召してお帰りやれ」

藤吉郎はひきとめた。

「せつかくなれば」

と、犬千代も腰をすえ直して、遠慮なく馳走になつていた。し
かし、この酒や肴を設けて待つた当夜の客は、一人も見えなかつ

た。

「はて。誰も来んなあ。……ごんぞ、どうしたものじやろう」

藤吉郎が、ごんぞを顧みて、こう噂すると、犬千代が側からいつた。

「木下。おぬしは、御普請ごふしんに關係しておる棟梁とうりようたちや、人夫の頭かしらどもを、今夜招いておったのか」

「さればよ。何かの打ち合わせもせねばならず、また、三日の間に、工事を仕終すには、大いに、士氣も鼓舞せねばならぬから——」

「はははは。買いかぶったわえ。わしはおぬしを」

「なぜ。なんでそれがしを、買いかぶったといわるるか」

「人いちばい、眼はしのきく男ぞと尊敬していたに、さりとは、お先の見えぬ」

「ふーむ」

藤吉郎は、笑う犬千代を、まじまじ眺めて、

「……そうかなあ？」

と、あいまいに^{つぶや}呟いた。

「考えても御覽^{ごらん}じ——」

と、犬千代は、いつて聞かせるような口調である。

「相手は小^{しょうじん}人。——小人の中でも小人型の山淵右近ではない

か。おぬしのために、首尾よう鼻をあかされることを、祈っておるはずはない」

「勿論だが……」

「というて、彼が、指をくわえて見ておろうか。——わしはそう考へんなあ」

「なるほど」

「極力、おぬしが、不成功に終るよう、邪魔を策しているにちがいない。……さすれば今宵、ここへ来いといわれた棟梁どもでも、来ないと考へたほうが正しかろう。職人、棟梁の輩はいは、おぬしよりも、山淵右近のほうが、ずんと偉い人と思つているしな」

「いや、分つた」

藤吉郎は、あつさり頭を下げた。そして一膝すすめると、

「——ならばいっそ、この酒は、飲めよと、二人へ授かつたよう

なもの。神の御意にまかせて、飲もうではないか」

「飲むのはよいが、おぬしには、明日から三日のうちに誓約があるぞ。よいか」

「よいとも。よいとも。明日はあしたの風というもの」

「お覚悟あるなら、腰すえて飲もう」

多くは飲まないが、話が尽きないのである。犬千代は談論風発であったから、藤吉郎のほうがどうしても聞き手になった。藤吉郎はまた誰とはなす時でも、聞き上手であった。

藤吉郎は、一定の学問をしていない。武家の子弟のように、学問や教養だけで過せばよい日などは、過去に一日もなかったのである。それを不幸とは少しも考えなかったが、世に立つ短所であ

ることはよく弁わきまえていたので、自分より教養のあるものと思えば、その者の知識を、座談のあいだにも、自分の物にしようとする心がけていた。——自然、人のはなしを忠実に聞き、また聞き上手な態度になるのだった。

「やあ、よい心地になった。木下、もう寝ろ、もう寝ろ。——明日は早かろう、しつかり頼むぞ」

犬千代は、やがて自分から杯をひかえ、そういうとすぐ帰ってしまった。

犬千代が帰ると、藤吉郎はすぐ横になり、手枕で眠ってしまった。

下婢かひが来て、枕をあてがったのも、知らないふうであった。

彼は毎夜よく大^{たい}睡^{すい}した。眠りつけない夜などは知らなかった。母の夢も見なかつた。亡^{ちち}父の夢も見なかつた。眠つたが最後、天地も彼もけじめのない、一個の生態でしかなかつた。

——だが。

起きると、途端に、彼は彼であつた。

「ごんぞ！ ごんぞ！」

「はあッ。……もうお目ざめでございますか」

「馬を出せ」

「へ……？」

「馬を曳け」

「お馬を？」

「さればよ。今朝からは早出仕はやしゅつしだ。いや、こん夜も明夜も帰宅すまい」

「生憎あいにくと、御当家にはまだ、馬も厩うまやもございませぬが」

「わからぬ奴、近所から借りて来い。遊山に乗るのではない、御奉公のため要いるのだ。遠慮なく申して曳ひいて来い」

「でも……夜明けとは申せ、まだ外は暗うございませぬが」

「寝ていたら、門を叩け。わが事と思うからそちは尻しつごみするの
だろう。御奉公のためだ、差しつかえはない」

「ごんぞは、あたふたと、衣服を纏まとうと、戸外そとへ飛んで行つた。

何処どこからか一頭の駒を曳ひいて彼はもどつて来た。門に出て、待ちかねていた無造作な主人は、何処どこから借りて来たかなどとも訊

きはしない。もうわが物のように、それへ乗って、夜明けの闇を駈けていた。

彼は、工事に携たずさわっている主なる職方の棟梁とうりょうの屋敷を、六、七軒駈けまわった。

大工や石工の棟梁とはいえ、みな扶持ふち取りで、織田家の工匠部たくみぶに属するものであるから、職方の支配役たる彼らの家は、みな贅ぜいたく沢いたくな居宅を構え、婢妾ひしやうを蓄えて、藤吉郎の今住んでいる桐畑の中の小屋敷などとは、比較にならないほど堂々としていた。

彼は、一軒一軒、門をたたいて、まだ眠っている外ふれから布令ふれて歩いた。

「集まれツ。集まれツ。御工事にたずさわる輩やから、一名のこらず、

今曉寅とらの下刻までに、御城内の普請場ふしんばに勢ぞろいせよ。万一、時遅れたる者は、一切放逐ほうちくするぞ。——すぐ職方へ申し触れて馳せつけよ。——君命であるツ。君命をもつて申しつけたぞ」

次々に、こう伝えて、やがて彼の駒が、汗に濡れた毛並から白い湯気をたてながら、清洲城の濠際ほりぎわへ来た頃には、ちようど東の空が明るくなりかけていた。

彼は、城門の外へ駒をつなぎ、一息つくくと、やがて唐橋からはしの口に立ちふさがっていた。手に太刀を抜き放ち、くわツと射るような眼をして、立っていた。

暗いうちに起された職方の棟梁たちは、何事が起ったかと、各したしよくの下職ひを牽いて、次々にやって来た。

藤吉郎は、それらの者へ、

「待て」

と、一応、唐橋の口で堰止めてから、名前、職場の位置、下職や人足の頭数など、いちいち点呼してから、

「通れ」

と、許し、そしてまた、

「静肅に、御普請場にて暫時待つておれ」

と、いい渡した。

彼の概算で、頭数は、ほとんど洩れなく集まった。職人どもは、仕事場に整列したが、不安と疑いに、ざわざわ囁き合っていた。

やがて藤吉郎は、一同の前に立った。唐橋からはしの口で引つ提げて

いた太刀を、ここでも鞘さやに入れず、引っさげていた。

「騒ざわめくなッ」

太刀を上げて、その切っ先で命じるようにいった。

「——列を正せ！」

号令である。

職人どもは、びくツとしたが、棟梁たちの顔には、せせら笑いが泛うかんだ。年齢からいっても、世俗的に見ても、彼らの眼からは、
(なんだこの青二才が——)

としか思えない。

その藤吉郎が、頭から自分らへ、胸を張って臨むなど、片腹痛いと思うのである。それとなお、太刀を抜いて、高圧的に出るな

ど、生意気な仕ぐさだ——とも反感を催したふうだった。

「一同の者へ云い渡す……」

藤吉郎は、まるで無頓着かのように、大声で云った。

「今日より不肖ふしょう木下藤吉郎、君命によつて、ここの御普請ごふしんを承
ることになった。きのうまでは山淵右近やまぶちうこんどの、奉行に就かれて
いたが、今日よりは木下藤吉郎が代つて奉行いたす。——ついて
は」

と、彼の顔は、職人どもの列を右端から左端までずっと見た。

「それがしは、つい先頃まで、御小人おこびとの末にあつた者で、君恩に

より台所御用役へ転じ、今では厩衆うまやしゅうの一員ではあるものの、

まだ御城内のお勤めだに、充分には参らず、ましてや工事向きの

ことなど、一切弁えんが、ただ御奉公の真心だけは、人におくれは取らぬつもりだ。——こういう奉行、こういうそれがしじやによつて、その方らのうちには、わしの下風については働けんと思える者があるやも知れぬ。工匠たくみには工匠の気質もあること。嫌なら遠慮なく嫌といえ。即座に、解雇してつかわすであろう」

誰も黙っていた。

せせら笑いはつつんでいたものの棟梁たちも、口を閉じていた。「——ないか、藤吉郎の奉行に不満の者はないか」

重ねて、糺ただすと、

「へーい」

一様に頭を下げた。

「然らば、直ちに、この方の指揮の下に仕事にかかれ。——その前にあらかじめ申しおくが、戦国多事の折、これぱしの改修に、二十日も費やしおることは断じて許されぬ。今日より三日のうち——三日目の夜明けまでには工事を終る予定である。その心得にて精出して致すよう、確乎と、申しつけたぞ」

棟梁たちは、顔見あわせて、薄笑いをうかべた。子飼からその道の飯をくって、生え際の禿げ上がりかけている彼らとしては、当然、そういう嘲笑にくすぐられるのも、むりはなかった。藤吉郎は、それに気がついていないではないが、全く無視していた。

「棟梁ども。——石工、大工、左官の頭ども、これへ進め」

「へい」

返辞はしたが——また前へは出て来たが、彼らの顎あごや、鼻の穴や、眼ざしは皆、冷侮れいぶをただよわせて、上を向いていた。

藤吉郎は、いきなりその中の端にいた左官頭がしらを、太刀のみねで、撲なぐりつけた。

「無礼者うでぐツ。腕拱うでぐみしたまま、奉行の前へ出るやつがあるかツ。退すされッ！」

斬られたと思つたのであろう、その左官頭は、ぎやツと、大げさに叫んで倒れた。

他の者も、色青あざぎめて、思わず脚をふるわせた。

「仕事の持場と、坪割つぼわりを申しわたす。それぞれの頭たる者は、

慥しかけたまわと承つて、違背ならぬぞ」

続いて、彼は、嚴格にいった。

もう誰も、迂うかつな顔や、鼻の先で聞いているような態度は改めた。

心服はしていないまでも、静肅にはなつた。肚では反抗しても、うわべは怖れた顔していた。

「御城壁百間を、五十に割付け、一組の持場を、二間当てとする。——組には、大工三名、左官二名、石工その他五名、合わせて十名をもつて組織する。職方の配置、頭数の振りあては、持場によつてちがうゆえ、それは各組の頭かしらと棟梁とうりようの按配あんぱいにまかせおく。——棟梁どもは、一人で約四組から五組の督励とくれいに当り、組

の仕事指揮し、職人たちに手すきなきよう、絶えず人数の配りに気をつけ——職方の余裕あるところの者は、すぐ手不足の部署に移し、寸分、息もつく間があつてはならぬ」

「へーい」

ともすれば、彼らは、不穏な色を示した。そういう講釈も癩しやくだし、坪割つぼわりのいいつけにも不平なのである。

「あ。——云い忘れた」

藤吉郎は、語気を昂あげて、

「今申した、二間一組の十名の割当てのほか、一組に対し、人夫八名、職人二名ずつ——これは遊軍として、附けおくであろう。今日までの仕事ぶりを見るに、左官その他の職人どもは、ともす

れば、足場を離れ、自分の仕事にあらぬ、材料の持ち運びやら、雑用などに日を暮しておるが、職人が職場に向うは、戦士が敵へ対した時と同じである。部署を離れてはならぬ。大工は大工の——左官は左官の——石工は石工の、道具を手から措おくな。戦場で、槍や太刀を、手より離すのと同じであるぞ」

それから、図面によつて、部署をきめ、人数を割り当てなどしてから、彼は、

「——かかれえツ！」

と、戦争を開始するような勢いでどなつた。

勿論。

彼の腹心ではないが、仕事の下役として、きのうまでの侍たち

も、与力していた。

その一人に、拍子木ひょうしぎと、太鼓番をいいつけた。

藤吉郎が、かかれというと、太鼓番は、太鼓をたたいた。一鼓いっこ六足を踏んで、敵陣へ迫ってゆくように太鼓は鳴った。

かち。かち。かち……

拍子木は、休息だった。

「休め！」

と、彼は石の上に突っ立って、号令していた。休まないでいる者がいると、休めツ、と叱った。

俄然、仕事場の空気は、きのうまでの惰気だきを一掃して、戦場のような眼つきと、汗の殺気がみなぎった。

だが、藤吉郎は、黙って見ていながら、

(まだ、まだ、こんなことでは——)

と、決して満足な顔いろではなかつた。

労働する者は長い労働の体験から教わっている狡ずるい体の使い方を知っている。よく働いているように見せかけながら、実は真実の汗はしぼっていないのだ。彼らの反抗は、服従していると見せて、その実、能率を上げないことで、いささか内心で慰めているのであつた。

藤吉郎の過去は汗の中の生活だつた。汗の真価を知っている。汗の美しさを知っている。労働は肉体のものだというのは嘘である。労働にも精神がこもっていなければ牛馬の汗と差別はない。

——彼は、真実の汗と真実の労力が、どうしたら人間から發揮されるか、口を結んで考えていた。

喰うために彼らは働いている。或いは、親とか妻とか子とかを喰わせるために働いている。いずれにしても、彼らの働く意思は、食のためとか、享きょうらく樂のためとか、それ以上に出ていなかった。

小さいのだ。卑屈なのだ。

もともと、その程度の望みしか持たない彼らなのである。

藤吉郎は、不愍ふびんを催した。

（かつては、自分もそうだった……）
と、思う。

小さい望みしかもたない人間に、大きな働きを求めても無理で

ある。大きな精神を把持はじさせなければ、大きな労力の効果と能率はあがる筈がない。

半日経った。

普請場ふしんばの一カ所に、黙然と、突つ立つたまま、半日はすぐ経った。

まる三日間のうちの半日は、六分の一の時間である。だが、全工事を見渡したところ、朝から少しも捗はかどった跡は見えなかった。

丸太足場の上や下で、わあわあと、掛け声や様子ばかりは、懸命にやっているようだが、実際は、偽装に過ぎなかった。むしろ彼らは、肚の中で、藤吉郎の完全なる惨敗を、三日の後に予期しながら、その目企もくろみの下に巧妙な怠け方をしていているといっても過言

でなかつた。

「午^{ひる}だ。——柝^きを打て」

藤吉郎は、下役へ命じた。

拍子木が鳴つて廻る。工事場の物音や喧騒が、いちどに休む。

藤吉郎は、職人たちが昼飯の弁当をひらき出したのを見ると、太刀^{さや}を鞘^{ひるす}におさめて、何処かへ立ち去つた。

午過ぎの半日も、工事場は、そんな空気で暮れかけた。

いや、午まえよりも、秩序がみだれ、惰^{だき}気が漂^{ただよ}つて、山淵右近が奉行していた昨日と、変りがなかつた。

それに職人や人足たちは、今夜からは不眠不休で、三日間は、城外へ出さないと云い渡されているので、よけいに労力を惜しん

で、横着に立ち廻る算段ばかりしていた。

「仕事止めい。仕事止めーい。一同手を洗つて、広場へ集まれー
ッ」

まだ明るいうちだったが、突然、拍子木を打ちながら、下役の一人が触れ廻った。

「何だろう？」

職人たちは怪しんだ。棟とうりよう梁りやうにきいてみても、棟梁にも分らなかつた。

ともかく一同は、材料置場になつてゐる広場へ行つてみた。するとそこには、野天ではあるが、酒さかなや肴さかなが山とばかり支度してあつた。蕙むしろの上や、石や材木を席にして、一同を腰かけさせた。そ

して藤吉郎は、職人たちの真ん中に腰をかけ、杯を挙げながら、「さて。何も無いが、これから三日間。——といつても、はや一日は過ぎたが、無理な仕事をしてもらわねばならんで、こんせき今夕だけ、一杯飲んで、存分、体を休めてくれい」

朝の彼とは、別人のように、まず自分から悠長に一杯飲んで、範を示した。

組々の者へ、酒の銚ちようし子や、肴さかななども配つて、

「さあ、心おきなく飲んでくれい。酒のきらいな者は、肴でも、甘い物でも」

と、すすめた。

職人たちは、単純に感激した。しかし、奉行の藤吉郎のほうが、

先にいい機嫌になってしまいそうなので、三日目の完成を、彼らが、かえって心配しだした。

けれど藤吉郎は、誰よりも、上機嫌で、

「酒は、充分にあるぞ。しかもお上の酒だ。いくら飲んでもお酒倉にあるほどは飲みきれまいが。——飲んだら、踊るもよし、唄うもよし、寝るもよしじや。懸り太鼓の鳴るまでは」

といった。

職人たちは、すぐ不平を宥められた。

労役から解かれた上、思いがけない酒肴に出合い、奉行自身も寛いで、自分たちの仲間にまじって、飲みもし、食いもし、話もするので、すっかり欣しくなってしまった。

「話せるな。この旦那は」

などと彼らも、少し酒がまわると、戯れたりした。

だがそれは、下職や人足たちのことで、頭立った棟梁とうりょうたちは、依然藤吉郎を白眼視していた。

(ふふん……。見え透みいた小才すを振りまわしやあがる)

むしろ、反感を募つらせていた。こんな所で、酒が飲めるか——
といった顔つきで、杯など手にも触れないのである。

「どうだな、棟梁ども」

藤吉郎は、杯を持って、彼らのその白眼視の中へ、自分から起つて腰をうつした。

「そち達は、いっこう飲まぬようではないか。棟梁は、一方の武

將、責任を思うて、酒も参らぬとみゆるが、まあまあ、案じるな。

——出来るものは出来る。出来ぬものは出来ぬ。まちごうて、三日のうちに出来なかつたら、わしが腹を切ればすむ……」

と、最も苦りきっている棟梁の一人へ、杯を取らせて、藤吉郎は自分で銚子から注いでやりながら、

「——まあ、心配といえばだなあ……この度の御普請の一事でもないし、もとより、この藤吉郎の一命などでもない。わしは、お前らの住んでおるこの国の運命が心配だ。何度もいうようだが、これしきの普請に、二十日もかかっているような状態では——そうした人心では——この国は亡びるな」

憂いをこめていった。

ふと。彼の声に、職人たちも、しんみりした。

藤吉郎は、嗟嘆さたんするもののように、宵の星を仰いで、

「興る国——亡びる国——おまえらもずいぶん見て来ただろう。国くにの亡びた民の惨めみじさも知ってるだろう。——どうも是非のないものだ。われわれ侍の端くれも、重臣も、御主君はもとより、夢む寐びの間も、一尺の国土たりと、守り防ぎは忘れぬが……国の興亡は、実はお城にあるわけじゃないからな。——では、どこにあるかといえばお前らの中にあるのだ。領民が石垣だ、堀だ、濠ほりだ。——おまえらはこのお城普請ふしんに働いて、他家よその壁を塗っていると心得ておるか知らんが、そいつは大間違いだ。おまえら自身の守りを築いているのだ。もし、このお城が、一朝にして、灰になっ

たらどうだ。お城だけが、そうなつてすむわけはないぞ。御城下は、兵火につつまれる。領内一円は、敵兵の蹂躪じゅうりんに委せてしまう。……阿鼻あびき叫喚しょうかんだ……。親にはぐれて泣く子、子をさがしてよろぼう老人としより。悲鳴をあげて逃げまどう若い娘。誰にも顧みられずに巷ちまたで焼け死ぬ病人。——ああ、国が亡んだらもう終りだ。おまえらにも、親もあろう子もあろう、妻もあろう病人もあろう。常日頃、よくよく心いたしておくがよいぞ」

「……………」

棟梁たちも、さすがに、冷笑をひそめて、真顔になった。彼らには、財があり、眷族けんぞくがあり、今が幸福だけに、痛切にひびいた。

「——それを、今日、みな安泰にいられるのは、何の力か。もとより、主君の御威光はいうまでもないが、おまえたち領民が、お城を中心に、慥乎しっかと、国土を護つていてくれるからだ。——われわれ武士ばかりが、いくら戦ったところで、おまえたち領民の心が弛ゆるんでいたら……」

藤吉郎は、涙ぐむばかりにいった。策や上手じょうずでいうのでは決してない。心から、彼はそう憂い、そう信じていたのであった。

一瞬いつとき、彼の真実なことばに打たれた者達は、酒の酔いもどこへやら、声をのんで、藤吉郎の面おもてを見まもり合っていた。

——と。

どこかで、涙はなをすすめるような嗚咽おえつが聞えた。

見るとそれは、棟梁とうりょう仲間なかまのうちでも、最も古手で幅利はばききな

——そしてきのうから変つた新奉行の藤吉郎に対しては、誰よりも露骨に、反抗を示していたあばた顔の大工の棟梁であつた。

「ああ。……おれは、おれは」

と、その男は、人前もなく、じゃんかづら面に、ぼろぼろと涙をこぼし、その涙を、掌てのひらで逆さに撫でて嗚咽していたが、人々が驚いて、

(何事か?)

と、自分を振り向いたと意識すると、彼はにわかにな、仲間の者を押しわけて、藤吉郎の前へすすみ、

「申し訳ございません。自分の馬鹿や浅慮あさはかがよく分りました。

どうか手前を、見せしめのため、お縄にかけて、一刻もはやく、お国のため、工事をおいそぎ下さいまし。……まったく悪うございました。手前の考え違いでございました」

大地へ、顔をうつ伏せたままじゃんかの棟梁とうりようは、身をふるわしていうのだった。

「……？」

藤吉郎は、初めのうち、ちよつと呆あつけにとられた顔をしていたが、ははアと何かうなずくと、凶ぼしを指すようにいった。

「うム。……山淵やまぶち右近みぎこんに云いふくめられたな。そうであろうが」

「木下様には、それをご存じでございましたか」

「知らないでどうするものか。——山淵右近は、おぬしへも、他の

者へも、わしの招きには行くなといったであらう」

「へい……」

「そしてまた、出来得るかぎり、御工事の場所では怠け、わざと仕事を遅滞させ、藤吉郎の命に反そむけといっただろう」

「は……。はい」

「それくらいなことは、あの男にはある筈の理わけがあるのだ。おぬしらも、ヘタをすれば、首の座に並ぶところじやったよ。……まあよい、大きななりをして泣くな。悪いと知って白状したからには許してつかわす」

「まだ申し残していることがございます。山淵様がいうには、御工事を、なるべく下手へたにやって、三日の先まで遅れさせたら、手

前どもに、それぞれ莫大な金をやろうと——それは極く内密のことでございますが、そう仰つしやいました。……けれど木下様のおはなしを聞いてみれば、そんな金に眼をくれたり、山淵様の口によつて、貴方様に楯突いたのは、まったく自分の身を亡ぼすように努めているようなものでございます。すつかり、眼がさめました。どうか、その謀叛組の先棒むほんぐみ さきぼうになつたわしを縛つて、御工事を、滞りなくおやり遂げくださいまし」

じゃんかは、さすがに、潔いさぎよくいった。一人で罪を負おうとした。藤吉郎は、にこと笑つた。この男が、この仲間では、いちばん力になることを、すぐ知つたのである。

強い抗敵こうてきほど、一転すれば、真実の味方になる。

彼は、じゃんかの手を後ろへまわして縛る代りに、杯を持たせていった。

「罪は、おぬしらにはない。そう覚さとつたら、同時に、おぬしらは、善良な領民だ。さあ飲んでくれ。そして一休みしたら仕事にかかってくれい」

じゃんかは、両手で杯を押しただくと、

「ありがとうございます」

心から頭を下げた。

しかし、酒は飲まなかった。

「おいッ、みんな！」

突然、じゃんかはそう呶鳴るようにいって突ツ立つと、杯を高

く挙げて、

「せっかくの思し召だ。これ一杯ずつ飲んだら、すぐ仕事にかかろうぜ。てめえ達も、聞いたろう。木下様のおことばを聞いちやあ、おれ達は、面目なくて、どうして天てんとう道様が、罰をあてなかつたか、ふしぎなくらいなものだ。今日まで、喰いつぶして来た米の手前にも、一世一代、働いてみる。ほんとの御奉公をやつてみせる。——おらあそう肚をきめた。てめえ達は、どうする!!」

じゃんかのことばが終ると同時に、他の棟梁も職人たちも、一せいに起ち上がって、

「やろう」

「やりましょう」

異口同音に答えた。

藤吉郎も、飛び上がって、

「やってくれるか！」

「やりますとも」

「かたじけない」

彼も、杯を挙げ――

「では、この酒は、三日の後まで、預かっておくぞ。首尾よく御工事がすんだら、その時こそは、心ゆくまで飲むとして」

「わかりました」

「また、山淵右近が、おぬし達にくれるといった金は、何ほどか知らんが、それも竣しゅんこう工こうの後は、藤吉郎が身になう程の褒美

はいたすぞ」

「そんな物は要りません」

じやんかを始め、職人側の一同は、杯のものだけ一口干すと、
「それッ」

と、ちやうど戦場の武者が先陣を争うように、元の仕事場へ向
つて、われがちに駈け出した。

その氣勢を見送ると、藤吉郎は初めて心から眉をひらいて、
「出来たッ」

と、思わず大きな声で、独り言を洩らした。

けれど、この機を外さず彼もまた、一職人となつて、泥仕事の
中に立ち交じり、これからまる三晩と二日のあいだの、死にもの

狂いな工事の中に、指揮もしたり働きもする決心だった。

——で。職人たちが皆、駈け去った後から、彼も彼方^{かなた}へ急ぎかける、

「猿。猿」

呼ぶ者がある。

呼びながら、登音は、彼のそばへ直ぐ駈け寄つて来た。宵なので、近づいて来たので初めて分つた。これはいつになく落着かない容子^{ようす}をした犬千代であつた。

「や。犬千代か」

「おわかれだ」

「えッ？」

「遽にわかに、わしは他国へ走ることになった」

「ほんとか」

「御殿で、人を斬った。そして御主君から叱られた。当分、牢ろうに人する」

「誰を斬ったのか」

「山淵右近をだ……。わしの気もちは、誰よりも、おぬしが知つてくれよう」

「あッ。逸はやまったことを」

「若わか気だ！ ……。斬った後ですぐそう思ったが、間にあわぬ。

性分というものは、抑えていても、無意識に出てしまう。——いや愚痴はよそう。おさらば」

「もう行くのか」

「猿、……寧ねね子をたのむよ。やはりわしには縁がなかった。……

可愛がつてやつてくれよ」

×

×

×

その頃——

清洲の城下から鳴海街道なるみのほうへ向つて、一頭の悍馬かんばが、闇を衝いて駆けていた。重傷を負つたまま、山淵右近は、その鞍の上にしがみついていた。

なるみへん
鳴海変

鳴海^{なるみ}まで、八、九里はあろう。右近を乗せた駒はよく駈けた。

夜なので、人目もなかったが、昼だったら、駒の駈けた後に、

滴^{てきてきて}々と血のこぼれを往来の人は見たであろう。

右近の傷口は、かなり深傷^{ふかで}であつた。ただ致命を外^それてはいた。

しかし彼は、

「鳴海城までは——」

と、駒の脚と、わが生命の終りと、どつちが早いかを、夢中に怖れ通しながら、鬣^{たてがみ}にしがみついていた。

清洲の城内で、前田犬千代にふいに斬りつけられた時、犬千代が、

——奸賊^{かんぞく}ツ！

と、呶鳴つて自分へ飛びかかつて来たように覺えている。その奸賊といわれた刹那の聲が、彼の頭のしんに、釘を打ちこまれたように消えなかつた。

ともすれば霞かすみかける意識と、駈ける駒の背の風の中で、

(さては発覚はつかくしたか?)

と、惑まどい、

(どうして犬千代が知つたろうか?)

などと思つた。

同時に、これは鳴海城の一大事でもあり、父や一族の浮沈にもかかわることと思われるので、彼の胸さわぎはよけいに昂たかまり、その狼狽からこぼれる出血の量もひどくなつた。

鳴海城は、清洲を繞る衛星の一つであつた。織田家の出城なのである。彼の父、山淵左馬介義遠は、信長の被官の一人で、その城を預かっている者だつた。

左馬介は、織田諸将の中では、旧臣のほうであつた。

けれど彼は余りに、世の中の眼先にばかり敏感で、大きな将来を見る眼がなかつた。

先君の信秀が死んで、信長が、十六、七歳の頃の——最も世間で信長の評判の悪かつた時分——また、信長の逆境であつた時代——これはいかんと早くも見限りをつけて、羽振りのよい今川義元のほうへ密かに媚態を送つて、軍事的な盟約をむすんでおいた。

——鳴海衆変心。

と、聞えたので、信長は、二度も攻めた。鳴海は落ちなかつた。落ちないはずである。大国今川家がうしろで援護しているのであつた。軍器、兵力、経済、いうまでもない。

攻めれば攻めるほど、信長の力は消耗される。自己の手足のために、自己の全体を衰弱させてしまう。

信長は、非を悟つて、抛ほつておいたのである。数年間というものの、鼻の先に、この叛はんぞく賊を生かしておいたのである。

で——今川家は、かえつて、山淵左馬介やまぶちさまのすけを疑惑しだした。鳴海は、相互から疑いの眼で見られていた。

大国から疑いの眼で視みられることは、それ自体、滅亡の予告である。左馬介はどう思ったか、清洲の信長の許もとへ行つて、多年の

不心得を詫び、復歸を願った。

（——それみい。元木にまさるうら木なし。わかったらよい。忠勤をはげめ）

信長は一言でゆるした。

それ以来、山淵父子の奉公ぶりには、感心してよいことこそ多かつたが、疑わしい行動は見えなかつた。

が——この見えないものを、見ていた者が二人あつた。

いつも信長の側に坐っている小姓の前田犬千代と、いつも信長の側にはいないが、城内の何処かにいる藤吉郎とであつた。

右近も、日頃から、その二人には何となく懸念を抱いていたが、折も折、普請奉行の役を藤吉郎に奪われた翌日、犬千代に斬りつ

ふしん

けられたので、

(ばれたか)

と、事の発覚を早合点し、身の深傷ふかでにも顛倒てんとうして、城内から逃げ出して来たのであった。

鳴海城の城門が見えた時、夜は明けていた。

右近は、それと共に、

「着いた」

と思ひながら、馬の背に俯うつ伏ぶしたまま、意識を失っていた。気がついた時は、城門の番卒たちに囲まれて、手当を受けている身だった。右近が息をふきかえして起つと、

「お気づきなされた」

「おお、この分なら——」

と、皆は愁眉しゆうびをひらいた。

すぐ城内の奥へ告げられていたとみえ、左馬介の近侍たちが、

二、三名、

「若殿はどこにおられる」

「どんな御様子？」

眼いろを変えて駈けて来た。

家臣らの驚きはいうまでもない。いや、より驚愕したのは彼の父左馬介であつた。番卒たちに足もとを援たすけられながら、やがて本丸の庭まで歩いて来た右近を見ると、

「深傷ふかでか。浅傷あさでか」

と、さすがに親心の声を制しきれず、庭に飛び降りて来た。

「父上」

と、父の姿を見ると、右近もそれへ坐つてしまった。そして、無念ですつといつたまま、また昏睡こんすいしかけた。

「はやく、奥へ奥へ」

と、いいつけながら、左馬介も一緒に室内へかくれた。その面おもてには、取り返しのつかぬものを悔いている色がいっぱいに漲みなぎっていた。

元々、右近を清洲城へ出仕させておいたことは、たえず心配なことではあった。——なぜならば、左馬介はまだ本心から織田家へ復帰もしていなければ、服従する心もないからであった。

その右近が、折よく、城壁の普請奉行を命じられたので、左馬介は、年来窺^{うかが}っていた時機到来とばかり、早速、駿府の今川家へ向つて先頃から密使を送つて、

(織田家を討つて、尾張一円を御司権^{ごしけん}の下へ収めるのは今こそでござる。奇兵五千ほどをもつて、東部の国境から一途に清洲へお攻めあらば、自分は鳴海^{なるみ}大高^{おおたか}の兵を挙げて熱田^{あつたぐち}口から攻め入りましょう。——同時に愚息右近は、清洲の城内にあつて、内部から攪乱^{こうらん}し、火の手をあげて、寄手に便宜を与えることに相成つておりますれば——)

という意味をもつて、今川義元の勇断^{うなが}を促したのである。

だが今川家では、彼の催促にもかかわらず、遽^{にわ}かにうごかなか

つた。山淵父子は何といつても織田家の古参である。策であるやも測り難い——と、多分に疑惑していたからであつた。

第一の密使も、第二の使いも、梨のつぶてなので、左馬介は、おとといも、追っかけに三度目の使いを駿府へやって、

(今を措いては)

と、急を促していた折も折なのである。

右近が斬られて唯ひとり逃げ帰つて来た。私闘で斬られたのではないという。こちらの陰謀はすべて清洲へ知れたらしいのだ。山淵左馬介は狼狽した。すぐ一族をあつめて評議にかかつた。評議は短時間で一決した。

「かくなる以上は、駿河の御協力があるとないにすんぷ関かかわらず、軍備を

かためて、織田の来襲に備えるしか方法はあるまい。——そのうちに、鳴海の変が伝わって、今川家が起てば、初志のとおり一挙に織田を揉み潰すことは、そう至難ではない」と、いうに あつた。

信長は、きのうから無口であつた。

その気持を察して近侍は、誰も犬千代のうわさをしなかつた。しかし、それも信長には物足らないらしく、

「陣中の同士討ちと、城内の刃傷沙汰は、理由にかかわらず、嚴罰のこと、固い掟おきてとさだめてある。——あれも惜しい男ではあるが、由来、短慮が困りものじゃ。家中を斬ることこれで二度目だ。

これ以上の寛大は、法のゆるさぬところ。また、彼のためにもならん……」

独り眩つぶやいたりした。また、夜になると、

「犬千代め。追放されて、何処へ身を寄せたか。牢ろうにん人も身のくすりじゃ。……これからちと世の苦勞をすることであろう」

などと、宿直とのいの老臣へ向つて洩はらしていた。一方。

藤吉郎がひきうけている城壁の普請ふしんの方は、その晩が三日目だった。夜明けまでに竣工していなければ、信長はどう惜しんでも、また一名の惜しい家来につめ腹を切らせなければならなかった。

（あれも困り者ではある。よしないことを人前で云い張つて——）
信長は、密ひそかに、臍ほぞを嚙かんでいたのである。犬千代とか藤吉郎

とかいう家来は、身分こそ軽いが、そしてまだ年こそ若いが、父信秀の代から仕えている重臣連のうちにも、少ない人材であることを彼はよく知っていた。——いやこの小さい織田の一家中ではなく、広い世間を見まわしてもざらにはない男どもであると、彼は自分の家臣を自惚うぬぼれていたくらいなのである。

「……大きな損失だ」

無口にもならないではいられなかったのだ。しかし、それ程な嘆息ためいきは、老臣にも若い近侍にも聞かせなかった。

その夜は、早めに、彼は紙帳しちようの裡うらへはいった。そして枕につきかけると、

「殿ッ」

寢所口に重臣の影がうづくまつていう。

「変事でござりまする。鳴海の山淵父子が、叛旗はんきをひるがえし、物々しい防備と——熱田口からの早馬にござりまする」

「鳴海が……?」

信長は、紙帳を出て、白絹の寢衣ねまきすがたのまま、次つぎの間まへ移つて坐つた。

「玄蕃げんばか」

「はッ」

「はいれ」

廻廊をまわつて、佐久間玄蕃さくまげんばは次の間の、すそへ来て平伏した。信長は、団扇うちわをつかっていた。もう夜は新秋の冷氣さえ感じる

のであつたが、木立のふかい城内には、まだやぶ蚊が多いのであつた。

「……めずらしくない！」

信長は嘔んで吐き出すように、やがていった。

「山淵父子の謀叛むほんなら、癒なおりかけた腫物はれものが、また少し膿うみ出したまでのことじゃ。自然にふつきれるまで抛ほうつておけ」

「御出馬は……？」

「無用じゃ」

「御軍勢も」

「膏葉こうやくにも及ぶまい。……はははは。防備はしても清洲へ襲よせて来るほどな勇気もないであろう。右近のことから、左馬介があ

わてたままでのことよ。しばし足搔あがきを遠見しているがよい」

間もなく、再び信長は寝たが、朝の眼ざめは、常よりも早かつた。

或いは、よく眠らずに、夜明けを待っていた程であつたかもしれない。彼にとっては、鳴海の異変よりも、一藤吉郎の生命のほううが遥かに心配であつたかも知らなかつた。起き出るとすぐ、近侍を従えて、信長は自身、工事場へ検分にやつて来た。

朝の太陽が昇りかけていた。ゆうべまで、戦場のようだつたそこには、材木も石も土も、木の屑一つ散らかつていなかつた。大地は箒ほうきめ目めさえ立つてきれいに掃いてあつた。工事場はもう今朝の夜明けと同時に、工事場ではなくなつていた。

信長は、案外だった。

滅多に意外を感じない——また少しぐらい感じて顔色に見せない彼も、三日の短時日に全工事を仕上げ、しかもその後、自分の検分を予想してか、残りの材木や石や塵芥ごみなど、すべて城外へ運び出させてしまい、きれいに掃き清めてまである行き届いた手際に、

「おお」

と、思わず機嫌のよい——そして、その上機嫌からこぼれる愕おどろきをも顔に現わして、

「やったのう。——これ見い、猿めが、やりおったことを！」

と、扈こしゆう従の者を振り向いて、あたかも自分の功名のようにい

つた。

そしてすぐ。

「彼は、どこに居るのか。余りにも今朝は、誰もここに見えぬではないか。藤吉郎を呼んで来い」

と、命じた。

近侍は、立ちかけたが、

「あれへ、木下殿が参るようにござります」

と、指さした。

大手の唐橋からはしはそこから眼の下に見えた。藤吉郎の姿は駈足で、その唐橋を渡ってくるのだった。

明け方、大手先まで運び出した足場丸太だの、残りの材木だの

石だの、また工具や蒔むしろのような物は、一先ず山のようほりばたに積んであつた。三日三晩、一睡もせず働き通した職人や人足たちは、掃き寄せられた芋虫いもむしのように、前後不覚にそこらに眠つていた。棟梁どもまでが、共に必死に働いたとみえ、縄なわ帯おびやら縄なわだすきわだすきをかけ、泥まみれの手足を大地へ抛ほうり出して、工事がすむと同時に、そこで寝ていた。

信長は、その光景を遠くから目撃した。同時に彼は、藤吉郎という男の才分に、今までであることを知らなかつた点を新たに発見していた。

(猿めは、よく人を使う)

と、密かに驚嘆したのであつた。そして、

(心なき日傭どもをさえ、死ぬほど懸命に働かせ得る器量があるところを見れば、訓練ある兵どもを使わせたなら、一かどの采配は取れるだろう。戦へ遣つて、百人や二百人は預けても、まず間違いはないな)

と、観たのである。

呉子の兵書にある一章を、信長はふと思ひ出していた。それは、
オヨソ戦ニ勝ツハ

ソノ極理

兵ヲシテ欣ンデ

死ナシムルニ有

と、いう語だった。

信長は胸の中でくり返してみたが、自分にはまだそれだけの器量があるかないか疑わしかった。——それは、戦略や戦術や権力ではないからである。

「お早いお眼ざめでござりまするな。御城壁、かように致し置きました」

——いう者があるので、信長が足下を見ると、藤吉郎がもうそこへ来て、両手をつかえていた。

「……猿か」

信長は、ふき出した。

藤吉郎の顔を見た途端にである——。なにしろ彼も三日三晩寝ないので、なまがわ生乾きの荒壁みたいな顔をしていたのである。眼は

真つ赤だし、胸も袴はかまも泥まみれだった。

つい笑ったが、信長はすまない気持がして、すぐ真面目になつていった。

「よく致した。——さぞ眠たかろう。存分に一日、眠るがよい」
「ありがとうございます」

藤吉郎は名誉に感じた。

この、国家一日も安息はできない時代に、

(存分に一日眠れ)

と、信長からいたわられたことは、最大なお賞ほめであると欣うれしく思われたので、寝不足のまぶた瞼に、思わず涙が沁みたのであった。

が、彼は、そんな満足を感じながらも、少しもじもじして、

「ええ……その……少々お願いがござりまするが」

と、云い難にくそうに頬を撫なでた。

「何じゃ？」

「——御褒美です」

藤吉郎はいった。

はつきりした言葉なので、近侍たちは驚いた。信長の折角な機嫌けんが変りはしまいか——と、藤吉郎のためにむしろ惜しんでいた。

「何が欲しい？」

「かねが戴たきとうございます」

「たくさんか」

「わずかでございます」

「そちの身に要いることか」

「いや」——と、藤吉郎は、城外の濠ほばたを指さして、

「御工事は、てまえが致したのではございませぬ。あれに、疲れ果てて、眠り休れておる職人どもへ、頒わけてつかわす程、なにがしか欲しいのでござります」

「そうか。金奉行へいうて、何ほどでも受けとれ。——だが、そちへも何か歡たのびをつかわそう。そちの禄ろくは今何ほどか」

「三十貫にござります」

「それしきであつたかの」

「勿体ない仰せです」

「加増してくるる。禄ろく百貫に取り立て、槍組へ移して、足輕三十

名を預ける」

「……………」

藤吉郎は、黙って大地へ辞儀ばかりしていた。

すみまき

炭薪奉行だの土木奉行だのは、役目だけからいえば、格の高い譜代ふだいの士が勤める地位のものであるが、彼の血は多分に若いのだ。やはり戦いくさの前線に立つ弓之衆とか、鉄砲組とか、現役に加わりたいことは、年来の望みであつたのである。

足軽三十名を預かるのは、部将の中では最下級の小队がしらであつた。けれど、厩うまやにいるより台所に勤めるより、遥かに彼は欣うれしかつた。

その欣しさに、つい前後わきまの弁えなく、藤吉郎は、お礼を述べた

口で、うっかりいつてしまった。

「この度の御普請中にも、また、常々にも、てまえ密かに思っている儀にござりますが、当清洲きよすのお城は、どう見ても、水利がよろしゅうございませぬ。籠城となれば、飲料水に乏しく、濠水ほりみずはややもすれば干上ひあがります。事ある場合は、討つて出るしかないお城でございます。——けれど野戦に勝目のない大軍の来襲をうけた場合は」

信長は、そら耳よそおを装つて、横を向いてしまった。——が、藤吉郎は、云い出したことを、途中で止めるわけにもゆかないので、
「……手前が常に愚考しますには、清洲よりは小牧山のほうが、水利の便も攻防の利も、遙かに勝っているかと存じます。清洲か

ら小牧へと、お移り遊ばすよう、切におすすめ申し上げます」
と、猷策けんさくした。

すると、信長は、

「猿、ひかえろ。図に乗って、よけいな差し出口。——はやく去いんで寝ておれ」

睨ねめつけて叱しつた。

「……はッ」

藤吉郎は首をすくめた。——教えられた、と彼は思った。失敗は順調の時にしやすい。叱言こしごとは先が機嫌がよい時にうっかり喰う。(……至らぬぞ、至らぬぞ。あのくらの働たしなきで有頂天になり、その図にのつて、一本窘たしなめられるなどは……われながら未熟至極)

その日の午過ぎひる——

職人その他一同へ、褒美の分配をすませた後、彼は寝もせず、独り首をふりながら、城下の町を歩いていた。——久しく会わな
い寧子ねねのすがたを胸に描きながら。

(この頃は、どうしているか)

と、寧子ねねを想うそばから、その寧子ねねの恋を、自分へ譲つて、国
外へ立ち退たいた純情一徹な友の身の上をも、彼はしきりと案じて
いた。

友とは、いうまでもない、犬千代のことである。織田家に仕え
て以来彼が心の友とゆるしているのは、前田犬千代一人しかなか
った。

（寧子の家へは立ち寄つたろう。牢人ろうにんして国外へ去れば、いつ再会の日があるやら知れぬ。——立ち寄つて一言ぐらひは、何か告げて行つたに違ひない）

そう考えられたのである。

実をいえば、彼は今、恋よりも食物よりも、眠くて堪らなかつた。三日三晩というものほとんど寝ていないのである。——が、犬千代の友誼ゆうぎと義氣と忠節を思えば、安閑と眠りを貪むさぼつてはいられなかつた。

（惜しい男だのに……）

男は男を知る。なぜ信長に、犬千代の真価が分つていないのか。山淵右近の逆意は、尠すくなくも、犬千代と自分には、とうから知れ

ていたことである。信長がそれを覚っていないというのが、彼には解げせなかつた。右近を斬つた犬千代をなぜ罰したか、不満に覺えた。

(いや、御折檻ごせつかんかも知れぬ。お心を割れば、追放なされたのは、かえつて大きな御主君の愛かも知れない。——あの君には、うつかりしたことを、小利口顔していうと頭からこつんと一つ頂戴する。ほかの家来たちもいる所で、清洲城の水利の不便を説き、小牧へ御移転のことなど献策したのは、われながらまずかつた)

そんなことを考えながら彼は町を歩いていた。元氣は変らないが、時々、地面が動くような氣がする。睡眠不足な眼に秋の陽がひどく眩まばゆい。

「……やッ」

浅野又右衛門の住居すまいが彼方に見えると、彼は眠気もさめたように遠方から笑いかけて足を早めた。そして、

「寧子ねねどの。寧子ねねどの」

と、大声で呼んだ。

この界隈かいわいは弓之衆の住宅地で、目立った腕木門うできもんや宏壮なやしきはないが、それぞれ小ぢんまりした柴垣の小屋敷や、前庭を抱いた侍の家が閑静に並んでいるのである。ふつうでも大声な性たちが、久しく会わない恋人の姿を思いがけなく、その家の門前に見かけたので、偽らない感情そのまま、手を振って急ぎ出したので、近所の屋敷一帯は、何事かと思つた程だった。

——あら？

と、驚いたように、寧子ねねの白い顔は、振り向いた。

恋は密かに——また誰でも、忍びやかにするものである。

近所の窓が明いたり、奥の父や母にまで聞えるような大声を出されては、処女おとめごころは、本意なくとも、居いた堪たまれるわけはなかつた。

寧子はさつきから門の前に立って、ぼんやり秋の空を見ていたが、藤吉郎の声を聞くと、顔を紅あからめて、門の内へあわてて隠れかけた。

すると藤吉郎は、また、

「やあ、寧子どの。わしだ。藤吉郎ですッ」

なお大きな声を揚げて、彼女のそばまで駈け寄った。

「ごぶさた致した。公務多端で……どうも」

寧子は、門の中へ、半分かくれかけたが、もう彼が挨拶している
るので、余儀なく、

「いつも、お健やかで、何よりでございます」

しとやかに頭を下げた。

「父上には、ご在宅か」

彼が訊くと、寧子ねねは、

「いいえ。留守でございます」

といって、はいれとはすすめずに、かえつてそつと、門の外へ
少し出て来た。

「又右衛門殿が、お留守では……」

と、藤吉郎はすぐ彼女の迷惑を察して、

「外で、失礼しましょう」

と、自分からいった。

寧子も、それが望みらしく、黙つてうなずいた。

「きよう参つたのは、他^{ほか}ではないのですが、今朝、犬千代が立ち
寄りませんでしたか」

「いいえ」

寧子は、顔を振つたが、ほの紅^{あか}く面^{おもて}に血がうごいた。

「来たでしょう」

「お見えにはなりません」

「……はてなあ」

あかとんぼ赤蜻蛉を見送りながら、藤吉郎はちよつと考えこんでいた。

「御当家へも、姿を見せませんでしたか？」

かさねて訊ねながら、ねね寧子の顔を見ると、寧子は、涙をためて、うつむ俯向いていた。

「——ごかんき御勘気をうけて、犬千代は立ち退のきましたぞ。お聞き及びか」

「……はい」

「お父上から聞かれたか」

「いいえ」

「では、誰に？ ……。いや、お隠しなさることはない。わしと

彼とは刎頸ふんけいの友、何を聞かして下すつても、差しつかえはないのです。……来たのでしよう、ここへ」

「いえ。たった今、知ったばかりでございます。——お手紙で」

「手紙で？」

「はい」

「使いでもよこしてか」

「いいえ。今し方、わたくしの部屋の庭先へ、誰か礫つぶてを投げた者があるのです、ふと下りてみると、結び文に小石をつつんだのが落ちていました。……見ると、犬千代様の」

云いかけて、声はおろおろ双ふたつの袂たもとにつつまれてしまった。しのび泣きして、背を向けているのである。

聰明なる才女——とのみ思っていたが、やはり処女おとめは処女であった。藤吉郎は、今まで見て来た彼女から、また一倍の美しさと、好める点を見出した。

「その手紙、見せてくれぬか。——それとも、人には見せられぬ手紙か」

いうと、寧子は、袂で顔をおおつたまま、黙つて襟えりの間からそれを出して、素直に彼の手へ渡した。

藤吉郎はいそいで披ひらいた。

まぎれもない犬千代の筆である。文意は簡単であつた。けれど、万言をつくしてある以上、藤吉郎には読めるのであつた。

わたくし事にはあらで、やむにやまれぬ儀そろの候で、さるものを

斬り捨て、きようをかぎり御恩土ごおんどを立ち退のき候なり。ひとたびは、身をもいのちをも、恋にはと思いさだめこそすれ、今はぜひなし、この身にまさる木下蔭かげこそ、そもじの末もよからめといさぎよう、男と男、云いかため、頼みまいらせて旅立ちもうし候

又右衛門どのへも、この文おしめし、くれぐれお心おさだめあれかし、又の会う日もありやなしや。ひと筆とりいそぎ候まにあらあらかしく

ねねどのへ

所々、文字は涙にぬれていた。——寧子の涙か、犬千代の涙か。——いや藤吉郎もそれを見ながらぼろぼろ泣いていたのであつた。

今か。今か。

鳴海は、なるみ戦備いくさぞなえして、清洲きよすのうごきを見ていたが、年は暮
れても、信長の攻めて来る気けはいはなかつた。

「はてな？」

疑心暗鬼は、城将の山淵父子を悩ませた。

彼らの悩みは、もう一つあつた。信長に離叛りはんして、しかもその
上、駿府の今川家からは、

(果たして、彼の内応は、根も葉もない偽りだった)

と、邪視されたことである。その後いかに釈明しても、不信が
取り戻せなくなつたことである。

当然、鳴海の城は、孤立になつてしまつた。

——折も折、

（笠寺かさでらの城主戸部新左とべしんざが、信長に内通して、近く背後から撃つてくる）

と、いう噂が伝わつた。

笠寺城かさでらじょうは、尾張の押えとして在る、今川の出城でしろの一つだ。

今川の命令としても、信長に内通したにしても、あり得ることだつた。

噂は、日が経つほど、濃くなつた。山淵父子を繞めぐる一族や家臣のあいだには、動揺の色がようやく見られて来た。

「不意を撃つて、笠寺を乗つ取れ。多寡たかの知れた出城一つ」

殼からに籠こもつて、大事をとつていた山淵父子も、遂に、機先を制したつもりで、真夜半まよなかから軍をうごかし、笠寺へ朝討ちをかけた。ところが。

笠寺の方にも、先頃から同じような流言が行われ、同じような動揺があつて、戦備おさおさ怠りなく、手具脛てぐすねひいていた頃だつた。

木戸へ火を放つ。町屋を焼き立てる。
火と火である。

疑心暗鬼と、疑心暗鬼との兵であつた。当然、血みどろな激戦となつた。

笠寺は崩れた。城将の戸部新左衛門とべしんざえもんは、駿府の援兵を待ちきれ

ずに、居城を焦土にして、火の中に奮戦して死んだ。

「勝った」

「凱歌がいかをあげろ」

焦土の城へ、なだれ込んだ鳴海勢は、負傷、戦死、夥おびただしかつたので、半数以下になつていたが、それでも余勢を駆つて、まだ煙のいぶつている焼け跡の城地にのぼり、太刀、槍、鉄砲など一斉に振つて、

——わあッ。

——わああッ。

高らかに勝鬨かちどきを合わせた。

そこへ鳴海から、惨めみじな騎馬武者や徒士かちの兵が、三々五々、逃

げくずれて来た。

「何事か」

驚いて、山淵左馬介が訊くと、

「さて、信長めの兵は迅はやい。どう知ったのか、手薄の留守城へ、一千余りの兵がふいに殺到して、遮しや二無む二攻めたてられましたので無念ながら！」

と、喘あえぎ喘あえぎの報告だった。

しかも、城地を占領されたのみではなく、まだ体の恢復しきれていない子息の山淵右近は、雑兵に捕えられて、首を刎はねられたともいうのである。

たった今、凱歌をあげていたばかりの山淵左馬介は、暗然と、

自失してしまった。自身の攻め取った笠寺の城地は、焼け跡の灰と、領民のいない城下でしかなかった。

「天命ツ」

と、叫びながら、彼はそこで自刃したということである。しかし、天命とわめいたのはおかしい。彼の末路は、彼自身の作った人命である。

信長は、一日で、鳴海と笠寺とを平定した。

清洲の城壁の御普請ごふしんをやつて間もなく、何処へ行つたか、久しく姿を見せなかつた藤吉郎も、鳴海、笠寺の二城が尾張のものになると、いつの間にか、帰つていた。

「貴公じゃないのか。両方へ流言を放つて、反間はんかんをやりに行つ

たのは」

問うものがあっても、彼は、

「おら知らん」

けろりと、首を横に、振るだけであつた。

大きな月

戦いくさが日常にちじょうだつた。日常にちじょうの生活せいかつが戦いくさだつた。

毎年まいねん。どんな年としでも。

お濠ほりの柳やなぎや梅うめに、鶯うぐいすが啼ないている日ひでも、

らには戦いくさがあつたのである。

国くに境かきのどこかし

青田をふく風の中に、平和な田植歌のながれている日でも、国主の兵は四隣の敵を防ぎつつ、日に幾十人となく戦死していたのである。

——が、清洲の城下は、一見どこに戦争があるかのように見え

た。

百姓も町人もこうしよう工匠も、流浪の心配なく自分の職業に精出せいだしていた。軍費といえこぞば挙つて税を出した。国主からいわれない先に、彼らは、日常の物を節して、お要いりよう用の時に備えていた。税を税とは思わなかつた。自分たちの安住楽業のためとして、一度の酒を我慢すれば、一尺の国境を守る矢弾やだまになることを、教えられずとも知っていた。

弘治三年から永禄元年、二年——と領内の治績はそういうふう
 うに良くなつて来た。事實は、城内の藩庫も、軍費に追われて枯
 渴し、家中の侍たちの生活も、信長自身の朝夕の代も、切詰めぬ
 いてもまだ窮乏を告げて、

(このままでは、戦いに勝つても、遂には御財政のほうで……)

と、勘定方や、金奉行の者たちが、ひそひそと額を寄せ合つて、
 憂えている状態であつたが、信長は、

「祭は、まだかの。——この月は城下の日吉祭であろうが」
 などといつていた。

「前の月には、西美濃の津島祭で堀田道空が館まで、祭見に
 参つて、儂も忍びすがたで、踊りぬいたが、踊りはよいもの、日

吉祭が待ち遠いのう」

いつも鹿爪らしい顔している柴田修理しばたしゆり（権六勝家）にもいうし、

生真面目なきまじめ森三左衛門もりさんざえもんや加藤図書かとうずしよなどの顔見た折もいった。

しかし、この人々には、余りに財政や国境の苦戦が分りすぎているので、その憂国心の余りに、

（——さればで）

とか。

（——御意で）

とか、極めてお座なりの、それも苦々しい返辞しか出なかつた。

ただ、池田勝三郎信輝いけだかつさぶろうのぶてるだけは、信長の言葉の下に、

「いや、踊りは自分も好きでござる。踊りは人間を天真爛漫てんしんらんまん

にさせるもので、自分なども、時折は、やしきで独り踊りますが
な」

と、いった。

先頃、幾月か前線へ出て、きのう戦場から帰って来た藤吉郎も、
末座のほうに居合わせていたが、勝三郎信輝のほうを見て、にや
りと笑った。

信長も、にことうなず頷いた。

何でこう三名が、各 微笑したのか、それ以外の者にはわから
なかつた。

日吉祭の日が来た。

それはちようど農家や町中の盆の行事にもかかるので、城下の

者は、一年の楽しみとしていた。

（祭りのあいだは、微罪の者があつても、徒らいたずらに縛しばるな。喧嘩があつたら宥なだめてやれ。盗人を追うよりも、盗み心を起さぬよう、和氣たつとを尊んで窮民には施しをせい。——祭日中無礼講ぶれいこうの札を建てよ。日頃、油を節約して、暗いに馴れているゆえ、辻々に万まんど燈とうを建てよ。踊りの群れに行き合うたら、そち達から馬を避け、踊り楽しむ領民どもに、怪我けがをさすな）

信長は、奉行を呼んで、そう云い渡した。

「畏まりました」

奉行は、退さがつた。

すぐ、配下を集めて、信長の命令を伝え、

「どうも、祭のお好きな殿ではある」

と、苦笑した。

ふれがき
布令書を見合つて、配下の役人たちは眉をひそめた。

「これでは、領民どもの遊惰ゆうだを、御奨励になるようになりはしま
すまいか。——いかに、年に一度の祭とはいえ」

この戦時下に——と、誰もがすぐに感じることを、誰もが苦々
しい顔つきなのだ。

遠く国境にあつて、戦っている将兵に対してもである。いや、
他人事ひとごとではない。自分らの息子、甥おい、兄弟たちもみな征いっている
のだ。

「本来なら祭など、むしろ御停止ごちようじが当然なのに」

と、いう論さえ出る。

誰もうなずいた。

内政上ばかりでなく、他国への聞えもある。今の織田家は、他国という他国は皆、敵国であるのだ。姻いんせき戚せき関係はあつても、齋藤家などは、最も危険な敵だし——駿河、三河、伊勢、甲州、頼む味方など一国もない。

洩れまいと隠しても、尾張織田家の財力の貧困は、先君信秀の代から天下に隠れなきものだ。

その有名な貧国でありながら、先代の信秀は、その頃、風雨もおしの凌ぎ難く荒れ果てた皇居の御修理料にと、四千貫文を献上したりしている。

それも。功成り名を遂げた信秀ならともかく、朝廷から御嘉賞ごかしよの勅使が、那古屋なごやへ下つてみると、信秀はその頃ちようど美濃攻めの激戦に大敗して、わずか数騎と、身をもつて遁れのが帰つて来たというような——惨憺たる悲境の際だったのである。

で、勅使は、折の悪いのを察して、

(ご混雑のご様子なれば)

と、対面を略して都へ帰ろうとしたところ、信秀は、

(綸旨りんじに畏れ多し)

と、常のとおり礼を正して迎えた上、草莽そうもうの臣下の微志に対して、叡慮えいりよのほど勿体ないと、感泣した。そして席を移すと、その夜、使者のため、連歌れんがの会を催して、しめやかに一夜を犒ねぎら

った——という風な人であつた。

そうした父の血液は、信長に濃く伝わっているにちがいない。いや、成人と共にだんだん似てくるとは、老臣たちもよくいうところである。——財政の困難など、常に、物とも思っていないらしいところなど殊にである。

ようやく、徳になずいて、領民はよく働き、よく税を納める。

だがそういう領民よりも、すこし おおどころ 大所の、ずるい富豪などから、お取り立てになつては——、と金奉行が献策した時も信長は、

「ム。釜の底は、追々」

と、いったのみだつた。

釜の底よりちよつと肚の底のほうが分らない殿である——と、

金奉行もその折いったことだった。

その分らない肚の底に、きようは城下奉行がぶつかつて、

「これは一応、柴田修理殿しばたしゆりか、森三左殿もりさんざへ、そつとお計り申し

てみよう。苦諫くかんを怖れるは忠臣の道でない。御政道に悪いことは、

悪いと申しあげた方が、御奉公の誠意だからな」

配下の者が、すべて好ましくない顔いろなので、奉行も急に考

えが変つた。

もりさんざえもんよしなり

森三左衛門可成は、山城守道三の息女が信長へ嫁かした折、内

室付として、斎藤家から来た臣で、織田家に仕えてから後も、度々、軍功のあつた重臣のひとりである。

で、勿論、奥向おくむきもいい。信長のあの性格へ、そう開き直りも

せず、やんわりと諫めるには、彼に限る——

「だが、居るか居ないか？」

と、役人のひとり、表方へ問い合わせてみると、折ふしちよ
うど登城していて、北の丸へ伺い、何か御内室へお眼通り中だと
ある。

で——退出を待ち構えているとやがて森可成よしなりは、まだ、六、
七歳にしかならない髻うないがみ髪わらべの童の手をひきながら、拝領のお菓
子を片手に持って、退さがつて来た。

城下奉行と、添そえやく役らは、呼びとめて、一室に迎え、

「実は」

と、憂いをこめて、祭布令まつりぶれの件を相談してみた。

「ぐもつともな意見」

可成も、同意を洩らした。

先頃、津島祭の折も、信長が微行しのびで、踊りに出かけたということを、堀田道空から後で聞き、

(滅相もないお振舞)

と、胆きもを冷ひやしたことであつたし——その後も祭々と日吉祭を待ちわびている口くちぶり吻むすも、よく信長から出るのので、同憂の君側は、わざとその度に苦にがりきつているところなのである。

御内室にも、信長の軽率な行状ぶりを、それとなく案じておられた。——実は、日吉祭のわずか三日の問題だが、味方の城下では、祭や踊りに浮かれていますと聞いたら、戦線の将兵はどう思お

う。敵国からも末期症状と見られるだろう。何よりはまた、民心をつけ上がらせ、平常の御国策も自然に行われなくなろう。

「由々しい問題じゃ。——よろしい。三左がお諫め申しあげてみよう」

「なにぶん」

奉行や添役は、頭を下げた。

可成は、側にいる愛くるしい少年の童髪を撫でて、

「父は、殿様へお眼通りしてすぐ戻って来る。大人しゅうしていいやい」

美童は、素直に頷いた。

男かしら？ ……と、見惚れていた奉行は、愛想に、

「ようお聞きわけじやの。お名は？」

と、訊ねた。

美童は、彫ほつて丹にを点じたような唇くちもと元で、

「蘭丸らんまる」

と、答えた。そして出て行く父の後ろ姿を、美きれい麗な眸めで見送つていた。

奈良人形のように、両手を膝に重ねたまま、蘭丸は、かなり長い時間、動きもせず待っていた。

やがて、可よしなり成さがは退つて来た。

どうか？ ——と案じていた人々が、すぐ君前の首尾を訊ねると、可成は先に首を振って見せた。

「お聞き入れはない——。御諫言ごかんげんに出たわしが、かえって御意

見を賜つて退つて来た」

「御不興でしたか」

「されば。——お前方の憂いは自国の民を知らぬものだと先ず仰つしやられた。祭日まつりびの取締りを寛大にしたら、遊惰の風に狎なれようなどという心配は、他国の民なら知らぬこと、信長の領民にはないとお怒りなされた」

「……………」

「今川領などの民は、上を見ならう下で、一年をだらだら暮しておるゆえ、年幾日かを、御奉公日とか、御加勢日とか称とえる例もあるそうなが、信長の持つ領民は、一年三百六十五日が、御奉公

日であり、御加勢日であるのだ。たまたまの祭日や盆正月のみが、彼らの慰楽で、平常は日々自肅、日々奉公、弛ゆるみもない民だ。——また信長も、今川風の政治は民にいたしておらぬ！ ……と、きつい御みけ気色しきで仰せられた」

祭の夜が来た。

信長の令もあつて、祭は例年以上、賑わっているらしい。清洲の城から万まん燈とうの灯の海を眺めても分るのであつた。

「勝三郎、勝三郎」

広庭の暗がりにたたずに佇んでいた信長が、後ろへ呼ぶと、池田勝三郎、信輝が、

「はッ。——何ぞ？」

と、側へ寄つた。

信長は、笑みを含んで、

「忍ぼうか」

と、こさや囁いた。

「お供いたしましょう」

「小姓ども」

信長は、太刀を取つて、腰に佩はきながら、

「知れるまでは、老臣どもへも、黙つておれよ」

勝三郎ひとり連れて、庭の木立から中門のほうへ立ち去つた。

すると、木蔭から、

「殿。抜け駆けはなりません。手前もお供を仕りませうぞ」

と、いう者があつた。

「誰だ？」

「藤吉郎です」

「お、猿か。来い」

三名して、中門を走り出してから——信長はまた足をとめた。

「勝三郎。奥へ戻つて、能衣裳のういしょうと仮面めんとをそつと盗んで来い」

「は」

「三名分ぞ」

「心得こころえました」

佇たえずんでいると、勝三郎は、間もなく一抱え抱えて来た。

城外へ出てから、濠端ほりばたで扮装にかかった。信長は天人仮面てんにんめんを

かぶつて、被衣かぎぎをかぶつた。

「猿。そちは素面すめんでよい。それをかぶれ」

「これは何です」

ほうしえぼし

「法師烏帽子」

ころも

「法衣も着ますかな」

「似合うた。——これは叡山えいざんの山法師にて候、というて歩け」

「畏まつて候」

「出来た出来た。勝三郎は太郎冠者たろうかじやよな」

「さん候」

「では、参ろうか」

きよすまつり

「清洲祭へ」——と歩み出しながら、主従、手拍子を交わしつ

つ低唱に、

「踊らばや……」

「謡うたわばや」

「月も出しお……」

「傾くまでは」

「束つかの間まながら……」

「武もの夫のふの、つゆの命も」

「つゆの命を、千々ちちとせ年と……」

「名を惜しみ、世を惜しみ」

「戦わば……」

「おくれはせじ」

「守りなば……」

「ゆずりはせじ」

「みとせ三年、ととせ十年……」

「おろか、ももとせ百年も」

「いくさ戦は常世、とこよ常世は戦……」

「たゆみはあらし」

「さらば、一夜は……」

「踊らばや」

「くにもり国守の地鎮めに……」

「足踏みならし」

「くにいくさ国軍、いやゆ弥征くのり禱に……」

「諸もろごえ声もろごえ、弥いやあ挙あげて」

「鎧よろ籠こ手てども……」

「草刈る手ども」

「ひとつ環わなりに……」

「月と共に」

「天あめつち地さちの幸さち、唱なえや」

「花とちる身も」

信長がそこで、調子高く、

「死いのうちは「定じよう……」

と、つけると、勝三郎も藤吉郎も、笑い出して、

「いけません。殿のお口癖が出ました」

と、止めてしまった。そしていつか三名は、祭の巷ちまたに立ち交まじっていた。

城下の市坊しぼうは、碁盤目ごばんめになっていた。須賀口すがぐちから五条川の通り

はわけて賑わって、幾組も踊りの輪が踊りながら歩いていった。

花笠をかぶった娘も、尖り笠とががさの若者も、夜露頭巾の武家も、素す

のままな老人も、童わらわも、百姓町人も、僧侶も、ひとつ輪になり、ひとつ手振りを揃えて、唄っていた。

思い出すとは

忘るるか

思い出さずよ

忘れねば

藻町^{もまち}の辻の空地の向うから、大きな月がさしのぼっていた。そこには一番多くの人々が群れていた。誰が音頭を取るのか、音頭取りの声も自慢そうであった。

思えど

思わぬ振りをして

しゃつとして

おりやるこそ

底は深けれ

踊り唄う人々は、すべてを措^おいて踊っていた。不平もなかった。生活苦もなかった。血なまぐさい乱世も忘れ、重税や困苦のつかれも忘れ、精いっぱい、愉楽の声をはり上げた。

日頃は拘束されている手を脚を、思うさま伸ばして踊った。

かつらぎ山に

咲く花の候よ

あれをよと

よそに思うた

旅駒たびこまの背に

大きな月は、真上になった。踊りの輪は、影法師と二重ふたえになった。そこへまた、須賀口すがぐちの踊手たちが来て一緒にになった。両方の音頭取りが、美音を競つてこもごもに澄んだ声をはりあげた。

えくぼの中へ

身を投げばやと

思えども

せんなや喃のう

よろい
鎧の捨てどころなき

「——あつ、この山伏め」

突然、誰かどなった。

「間まわしもの 諜だツ」

「敵国のやつツ」

「逃がすな」

踊りは崩れた。

群集の輪の一角で、不意に刃やいばの光を見たからだった。

だが、その山伏は、群集が発見するよりも早く、何者かに、後

ろからその刃の手をつかまえて、大地へ投げつけられていた。

勢いよく叩きつけられた山伏の手から、物騒な直刃すくはの戒刀かいとうが、

群集の足下へ斜はすかいに飛んだ。

「隠密おんみつツ」

「捕えろ」

常に、敵国のさぐりに対して、領民はよく訓練されていたので、驚きはしなかったが、逃げまわる山伏を追い争ったために、一時は旋風つむじのようになつた。

「——鎮しずまれ、鎮まれ。曲くせもの者はこれへ捕えた。立ち騒ぐでない」

踊りの中へ交まじつて、庶民と一緒に踊っていた信長と池田勝三郎と藤吉郎と、三名の姿がそこにあつた。

騒ぎを制しながら、あたりの人影を遠ざけていたのは、藤吉郎であり、組み敷いた山伏の体へ、馬のりに跨またがって、締めつけているのは、勝三郎信輝であつた。

「おのれ、誰に頼まれて、われわれの御主人を暗討やみうちしようとした。申せ。実じつを吐ぬかさねば縊しめ殺すぞ」

勝三郎信輝は、後の池田勝しょう入にゆうである。強力者だし、戦場往來の若者なので、もとより仮借かしゃくがない。組み敷かれた山伏は、彼の拳こぶしを一つ喰くらうと、

「ゆるせ。ゆるしてくれ」

と、忽ち悲鳴を揚げた。

「人違いじゃ。人違いして斬りつけたのでおぎる。——まったく、

夜目の眼違い。手前の意趣ある者と、余りようお姿が似て在すの
で」

「嘘を申せ。踊りの輪へ紛れまぎ入つて、一太刀にと斬りつけたから
には、われわれの御主人を、確かに、なにがし様と知つて致した
ことに相違ない」

「いや、まつたく。生来が眇目すがめの質たち。御無礼の罪は、どのよう
もお詫びいたしますゆえ、一命だけは」

「ぬけぬけと、やかましい。こう圧おさえ付けるこの方に対しても、
そちの手脚てしこのものがきには、どこか侍の手心てしこがある。——こやつ
！ この面構つらえを見てもそうじゃ。敵国の諜者てしこにちがいない。
何処から来た」

「め、滅相もない」

「いわぬかッ」

「くッ……か……」

「いえッ」

「く、くるしい」

「——美濃か。甲府か。三河か。伊勢か。いずれの隠密だ。口を割らねば、割るようにして訊くぞ」

信長は、踊りの仮装のまま、そこから少し離れて佇たたずんでいた。

藤吉郎に制されて遠く退いた領民たちは、まさかその人が信長とは思わなかったが、よしあるお方の微行しのびとは察している様子だった。

「猿……」

小声で、信長は、さしまね 靡なっていた。はつと、寄つて行くと、着ている被衣かすきを彼の顔へよせて、何やらささや囁ささやいていた。

藤吉郎は、黙礼して、

「では」

と、直ぐ、勝三郎の側へ足を移して来た。

勝三郎は、太刀の緒おを解いて、山伏を後ろ手に縛くし上げようとしていたが、そこへ藤吉郎が来て、

「待て、於おかつ勝殿。殿のおことばじゃ」

と、いうことには。——折角、こよいは年に一度の祭、和楽を謳歌おうかしているところ。微罪とがは咎とがめるな、罪人は作るな、祭中は無

礼講という高札もある。

恐らく、人違いと、その者のいうのは、ほんとであろう。放しゆるてやれ——というお慈悲である。放しておやりなされ。

と、藤吉郎も云い添えた。

「アア。ありがとう存じまする」

生命いのちびろいした山伏は、勝三郎の手から解かれると、雀躍こおどりしないばかりだった。

彼方あつちにいる信長の影へ向つて、大地から辞儀一つすると、真つ青になった顔を、月に俯うつむ向けたまま、直ぐ駈け去ろうとしかけた。

——と、信長は、

「待て。優婆塞うばそくどの」

軽く呼びとめた。

そしていうには、

「一命を助けてとらせた礼を残して行きやれ。儂たちも、節に合
わせて踊ろう程に、そちの故郷ふるさとの鄙ひなぶり一節ひとふし唄うておみせや
れ。盆唄ほんうたでも、麦搗唄むぎつきうたでも」

聞くと山伏は、ほつとした顔いろで、おやすいことと、手拍子
打って、月を仰ぎながら鄙唄ひなうた一つ謡うたった。

——それをきっかけに、踊りの輪はまた、旋めぐりだした。だが信
長主従は、もう輪の中にいなかっただ。

「猿」

と微行しのびの帰り途、信長は訊いた。

「そちは、諸国を流浪したことがあるそうじやが、山伏の謡うた盆唄は、何処の唄と、聞いたか」

「駿河するがと聞きました」

藤吉郎が、言下にいうと、信長はにことうなずいた。

わか
若き家康いえやす

駿河衆は、この地を駿府すんぶとは称よばない。府中ふちゆうと称よんでいる。

海道一の府をもつて任じているからであつた。上は義元から今川の一族門葉をはじめ、町人に至るまでが、

(ここは大国の都府)

という自尊を持っていた。

お城もお城といわず、お館やかた或いはただ館たちという。すべてが公卿くげ風ふうであり、下しもは京好みだった。

尾州きよすの清洲なごや、那古屋あたりとは、街の色や往来の風俗からしてまるで違っていた。道行く者の足の早さ、眼のつかいよう、言語の調子からして違うのである。府中は、おっとりしていた、衣服の華美の程度で階級が知れた、扇くちで唇くちをかくして気取って歩いた。音おんぎよく曲がが旺さかんだった。連歌師れんがしがたくさんいた。——どの顔もどの顔も、わが世の春おうかを謳歌した藤原氏のひと頃ころのように、長閑のどけく見えた。

晴れれば、富士山が見え、霞かすめば、清見寺の松原越しに、波静

かな海が見えた。

自然に恵まれていた。

兵馬は強大だった。

三河の松平氏も、こここの属国ぞっこくに等しかった。

「松平家の血をうけ継いだわしの身はここに。——亡びかけた城をどうにか支えてくれている臣下は岡崎に。……国はあれど主従は別に」

元康もとやすは、心のうちで、じつと、自分でつぶやきを噛みしめていた。

この気持——口に出さないこの思いは——明けても暮れても胸を往来していた。

「不愍ふびんな家臣ども……」と。

時にはまた、身を顧みて、

「よく生きて在あった」

と、思う。

とくがわくろうどもとやす

徳川蔵人元康——いうまでもなく後の徳川家康——は今年十八歳だった。

もう子どもがある。

義元の一族、関口親ちかなが永の娘を、義元の計らいで娶めとったのである。それが十五歳であつた。元服も同時にした。

子は、この春生れたので、まだ半年ほどにしかならない。

彼が机をおいている居室にまで、時折、泣く児の声が聞えて来

た。産後の肥立ひだちの悪い妻はまだ産室にいた。妻は児を産室から離さなかつた。嬰兒あかこの声は耳につきやすい、まして十八歳で父となつた彼には、初めて聞く骨肉の声でもあつた。

けれど元康もとやすは、めつたに奥へは立たなかつた。よく人のいう子の可愛さというような気持は、分らなかつた。自分の心のうちを探してみても、どうもそういう愛情は、今のところ、乏しいというよりも見当らなかつた。こうした自分が父であることは、子や妻へすまない気がした。

「……不愼ふびんな者ども」

と、思うたびに、惻々そくそくと胸のつまる心地がするのは、むしろ骨肉でなくて、岡崎の城に、年来、貧窮と屈辱に耐えている家臣

たちの身であつた。

強^しいて、子を思えば、

「あれも今に、わしののような困苦と、辛い人の世の旅をしだすのか」

と、傷^{いた}ましい考えの方が先立ってしまうのであつた。

竹千代^{たけちよ}とよばれた幼少に父とわかれ、六歳で敵国の質子^{ちし}となつてから、今日までの流転の艱難を振り返ると——生れ出たわが子へも、人生の悲雨^{さんぷう}惨風を、思い遣らずにいられなかつた。

——だが今は。

表面、人目には、彼の家庭も、府中に栄える今川衆の一家として、同様な身分と幸福らしい館^{たちづく}作りには囲まれていた。

「はて。何の物音？」

元康は、ふと、室を出て、縁に立った。

誰か、築土ついでじに絡からんでいる昼顔つるの蔓を、外から曳いたものであるう。

蔦つた、昼顔の蔓は、築土から庭木へまで伸びている。切れた蔓の反動で、梢が微かにゆれていた。

「誰だ？」

元康は、縁に立ったまま、もいちど云つてみた。

悪戯わるきなら、逃げもするだろう。だが、登音もしなかった。

草履ぞうりをはいて、彼は築土の裏口をあけて出た。——と、そこに、待ち設けていたように、笈おいと杖を置いて、一人の男が手をつかえ

ていた。

「甚じんしち七か」

「お久しゆうござります」

四年前。元康が、義元のゆるしをようやく得て、先祖の墓参にと、岡崎へ帰った時、その途中から姿を見せなくなつたきりの家来——鵜殿うどのじんしち甚七なのだ。

笈や杖や、変りはてた甚七の姿を見て、

「山伏となつてか」

と、元康の眼は、宥いたわるようであつた。

「はい、諸国を歩くには、かような身なりが、至極便宜でござりますゆえ」

「いつ戻ったか。——府中へは」

「たった今でござります。御門からと存じましたが、また直ぐ、他国へ立つ体、お身内たりとも、知れぬに越したことはないと思ひ存じまして」

「……はや、四年になるのう」

「はい」

「諸国から、その都度、細々こまごまとそちの見聞は書面で受け取っておるが、美濃路みのじへはいつてからは便りがないので——実は案じていた折じや」

「美濃の内乱に出会いましたので、関所固めや、駅伝の調べがひ頃ところやかましくて」

「あの折、美濃に居合わせておったか。よい時に美濃にいたの」

「そのまま、一年の余、稲葉山の城下に潜ひそんで、成行きを見てお

りましたが、御承知のように、道三山城は相果て、義龍よしたつが美濃

一円を治めて、一先ひとまず落着いた様子に、京へ上り、越前へ出、北

国路を一巡して、先頃、尾州まで立ち戻つて参りました」

「清洲へ足を入れたか」

「審つづさに……」

「聞きたい。さし当つて、美濃の将来は、府中におつても、見と

おしがつく。——が、容易に推測おしはかれぬのが、織田の現状じゃ」

「書面にでも致して、夜中にでもそツと、お届けいたしましょう

か」

「いや、書中では」

元康もとやすは、築土つじの裏口を振り向いたが、また何か、思い直して
いるふうであつた。

甚七は、彼の眼であり、また、天下を知る耳であつた。

六歳の頃から、織田家へ、また今川家へと、彼の少年時代は、
流浪と、敵国の中に送り、その体は、人質ひとじちとして、自由を許さ
れずに過ぎて来た。今日もまだ、その束縛は解かれていない。

眼も、耳も、知性も、人質はふさがれていた。彼自身が努めな
ければ、誰も、叱りも励ましもしなかつた。

——が、結果は反対に、彼が人いちばいさか旺んな志慾の持主とな
つたのは、幼少時から、余りにもその育ち盛りの眼や耳や行動や

知性を、他から抑制され過ぎたためでもあつた。

四年も前に、家人けにんの鵜殿うどの甚七じんしちを、追放のていにして、諸国へ放ち、居ながら諸州の動静を知ろうとしたなど——その大きな他日の慾望の芽を、もうそろそろ現わしていた一例ともいえよう。「さての。……ここでは人眼につくし、邸では家人どもが不審いぶかうし……。そうだ、甚七、あれへ参ろう」

元康は、指さして、先へ大股に歩きだした。

彼の今住んでいる質子ちしやしき邸は、府中のお館やかたを繞めぐる大路小路のうちでも、最も静かな少将しょうしょう之宮のみや町まちの一角にあつた。

その築土裏つじしから少し行くと、安倍河原あべがわらへ出る。

元康がまだ家来の背に負われて歩いた竹千代の幼少から、外へ

遊びにといえ、この河原へ来たものであつた。悠久と流れてい
る水のすがたにも変りはないし、眺めもいつも同じ河原だったが、
元康には、何かと思ひ出が深かつた。

「甚七。その小舟を解け」

元康は、指さして、汀なぎさからすぐそれへ乗つた。

釣舟か、築舟やなぶねであろう。甚七が棹さおで突くと、笹の葉のように、

小舟は瀬から流れへ出た。

「この辺でよい」

主従は、小舟の中で、初めて人眼から解かれたこゝちで、語ら
い合つた。

元康は、甚七が多年、諸国を經巡へめぐつて得た知識を、わずか一いっし

舟ゆうの席で半刻の間に得てしまった。

そして甚七が習得して来たものよりは、遙か、大きなものを、
胸きょう奥おうへ収蔵した。

「そうか。……ここ数年、織田家が信秀の代とちごうて、余り他
国へ侵攻して出ぬのは、専ら、内治を整えておつたためだの」

「二心ある者は、系類であると、譜代ふだいの臣であるとを問わず、思
いきつて、討つ者は討ち、追う者は追い、ほとんど清洲から清掃
されたようであります」

「その信長を、ひところ一頃は、稀なわがままものよ、阿呆あほうの殿よと、

今川家などにおいても、よう笑いなしに取沙汰があつたが」

「もつてのほかです。阿呆どころではありませぬ」

「ふむ。——わしも油断のならぬ噂とは思っていたが、いまなお、それが先に頭にあるので、お館やかたなどでも、織田といえば、おかしそうに、敵ではないときめておいでになる」

「数年前とは、尾張衆の士気がまるで違っております」

「よい家来には」

「平手ひらてなかつかさ中務は相果てましたが、柴田修理権六、林はやしきとみちかつ佐渡通勝、

池田勝三郎信輝、佐久間大学、森可よしなり成など、なお人物は尠なし

としません。わけて近頃、出しゅっしよく色の男に、木下藤吉郎ともうす

者……至つて小身者の由ですが、何かにつけ、城下の領民たちの口端くちはによう名の出る男などおりまする」

「領民は。——信長への、領民の気もちは」

「恐いのはそれです。何国の大将でも、治民には心を傾けておりますゆえ、領民が国主に服従し、国主を崇めておることは一様でありますなれど……尾張ではそこがちと違うように感じられました」

「どう違う」

鵜殿うどの甚七じんしちは、ちよつと、考えていたが、端的にそれを、云い現わせないように、

「かくべつ、どうと申して、変った治策も見えませんが、とにかく領民が、信長を中心に、明日を憂いておりません。あの君在ればと安心している様が見えます。尾張の弱小なことも、国主の貧乏な点も、よく弁えていながらです。他の大国の領民のように、

戦乱や明日の生活くらしに脅おびえておらぬのが、不思議に見えるくらいです」

「……ム、ム。なぜかな」

「信長自身が、そうした気性だからでしょう。曇らば曇れ、照る日もある。今はこうだが、未来はこうぞと、指さすまと的へ、人心を集めております。というて、陰気にいじている領民ではありません。例えば、祭の行事などにいたしても……」

と、云いかけて、何思い出したか、甚七は語らぬうちに、苦笑しだした。

「その祭については、実は、失しくじり敗ぢりばなしがありますので——」

と、甚七は、清洲城下の祭の夜、巷ちまたの中にゆくりなく信長主従

の微行しのびを見かけ、むらむらと奇功きこうに駆られたまま、信長を刺そう

として、かえつて捕えられて、憂き目に会ったことを、

「……どうもこれは、余り自慢にもならぬことですが」

と、話し終つて、頭を搔いた。

元康は、笑いもせず、

「そちらしくもないことをする」

と、軽率けいそつを誠いましめた。

「以後は」

と、甚七は、頭を下げながら、余事までしゃべりすぎたことを

後悔した。

そして、ひそかに胸のうちで、ことし二十六歳の信長と、十八

歳になる元康とを、較くらべる気もなく思い較べていた。

はるかに、元康のほうが、信長よりは大人おとなの感じだった。稚ち氣きというようなものは、元康には少しも見えなかった。

信長も幼少から、荊けいし荊しの中に育つて来た。元康も苦勞の中に人となつた。けれど、六歳から他人手ひとでに渡されて——それも敵国へ質ちし子として——人の世の冷たさ、酷むごさを、骨の中まで味わつて来た元康の苦勞と信長のそれとは、到底、較くらべものにはならなかった。

六歳で、国を離れ、織田家の擒人とりことなつて、八歳再び駿河の質子となり、ようやく十五歳になつて、今川義元からも人あつかいをうけ、彼が、

(祖先の墳墓をも払い、亡父の法事もしたければ——)

という願いが許されて、何年ぶりかで岡崎へ帰国した時に、こういう語り草さえ残っている。

彼が、祖先の地、岡崎へ帰ってみると、自分の城の本丸には、今川家の山田新右衛門などという被官ひかんが、城代として居すわっているのだった。

ほとんど、今川家の隸属れいぞくとして、辛くも息をつないでいる三河譜代の家臣たちも、何年ぶりかで帰国する若殿を迎え、うれしさやら口惜しさやらで、

(いかにとはいえ、本丸に今川家の家臣を置いて)

と、何とか退のいてもらおう交渉をしようとしたところ、それを聞

いた竹千代は、

(いや、わしは年若じやが、城代は御老人。諸事古老のおさしずもうけねばならぬ。本丸はそのままにおくように——)

といつて、滞留中、二の丸にいて、父の法事などもいと営となんですましたという。

このことは、義元も後で聞いて、

(年に似げなく、分別の篤あついことである)

と、すこし不愜ふびんそうにつぶやいたそうである。

だが、やはりその時のことで、も一つ、これは義元も知らないことがあつた。

竹千代の父ひろただ忠ただの代から仕えている者で、
鳥居伊賀守忠吉とりいがかみただよし

という老人がいた。年ももう八十を越えた三河武士であつたが、竹千代が岡崎 逗とうりゆう 留中あるよの一夜、そつと、梓あずさの腰を運んで目通りを乞い、そして幼君へ向つて沁しみ々しみというには。

(爺じいの身も、ここ十年の余、今川家の一役人に異ならず、賦税ふぜいの取り立てを役目として、牛馬のような勤めをいたしておりますが、年来、忍び忍び心がけて、お庫くらの内には、爺ごが御被官ごひかんの眼をぬすんで蓄えておいた糧ろうまい米や金銭がござりますぞ。いつこのお城かくに孤立してお籠こもりなされようと、弾たまぐすり薬やじりや鏃やじりも戦うほどは匿かくしてもありますぞ……ゆめ、お心おほぼそく思おぼし召めされな。大志をお失あいなされますなよ)

竹千代は、それを聞いて、爺じいよ、とばかり忠吉の手を取つて泣

き、忠吉もしばし泣き暮れたということであつた。

我慢。

三河武士の背ぼねは、我慢の鍛錬たんれんで組み上がっていた。君臣ともに、生涯を辛抱から出発していた。

三河武士の辛抱強い実証は、元康の初陣の折にもあらわれていた。

去年。

元康は十七歳で、初めて陣頭に立つた。

毎々、三河を脅やかしている鈴木日向守ひゆうがのかみの寺部てらべの城を攻めた時である。

勿論、今川義元のゆるしを得た上のことであるが、その時は、

義元から暇をもらつて、彼が三州へ帰国していた折なので、全軍の組織も、将兵の質も、すべて純粹な三河勢をもつて戦つたのであつた。

元康は、譜代の古老や家の子郎党をひきいて、初めて敵地へ進撃したのであるが、敵の寺部の城下まで攻め入ると、

(この度は、城下を焼き払つて、ひとまず退軍し、また機^{おり}をみて、軍^{いくさ}をすすめるであらう)

と、所々へ放火したのみで、にわかには三河へ退いてしまった。

初陣とあれば、誰しも、華々しい功名を心がけて、世上の聞えにも銜^{げんき}氣を抱くのが青年の常なのに——何となされたことかと、後に訊ねる者があつた。すると元康は、

（寺部は敵の幹である。多くの枝葉を持つておる。その本城まで難なく攻め入られたのは、敵に思慮があつたからである。よい氣になつて長陣していたら、敵は、退のきぐち口を断つて、所々の味方とつなぎを取り、われらを重圍に墮おとしてから、本相をあらわして戦い出したにちがいない。武器も兵糧も人数も微弱な三河勢では、長陣しては利なしと考へたので、今度は、城下へ放火して引き揚げたまでのことである）

と、説明した。

酒井雅樂助さかいうたのすけ、石川安芸いしかわあきなどの三河の古老どもも、それを聞い

て、

（たのもしき御方おんかたよ。行く末いかなる大将におなり遊ばすやら

ん)

と、いつて、先々の奉公をたのしみに思うと共に、各、老いの身をも養い、留守居の岡崎も大事に守つて、ひたすら時節の来るのを、待ちぬいていたのであつた。

——だが、時節といつても、そうした譜代衆の多くは老年なので、元康ほどな辛抱はしきれなくなつたか、元康が寺部攻めの初陣後、今川家へ向つて、改めて、

(主人元康儀も、はや御一人前とお成り遊ばしましたからには、何とぞ旧約の如く、岡崎の御被^{ごひかん}官方を引き揚げられて、城及び旧領など、元康君へお返し給わりますよう。然る上に、われわれ三河武士どもも、永く今川家を盟主と仰ぎ、一層の御加勢を励みた

いと存じますれば——)

という意味の、嘆願書をさし出した。

もつとも、嘆願は、今までにも、何度となく、機会を窺^{うかが}つては、三河から今川家へ迫っていたことであるが、今度も、今川義元は、(まず、もう一兩年は)

と、外^そらして、肯^きいてくれるふうもなかった。

元康が成人したら、必ず城地を返すと、元康を質^ち子^しとして今川家へよこした時の固い条約だったのである。

義元はもとより、返還する気はなかったろう。十数年の間に、何か三河側に落度があつたら取り上げて、完全に収めてしまう肚^{はら}だつたかと思われる。けれど長い年月、とうとうその口実となる

ような落度は、三河の臣にも、元康にもなかつた。三河の隱忍、自重、我慢の強さには、義元もほとほと感じ入るばかりだった。

で、義元としても、当初の条約のてまえ、そうそう無法はいえなくなっていたので、今年、嘆願に出向いて来た三河の古老たちへは、こういって、安心させて歸した。

（明年はいよいよ義元も、年来の宿志を展^のべて、中^{ちゆうげん}原へ旗を

すすめ、海道の軍勢をあげて上洛いたすつもりである。その節にはいずれ、尾張をも踏みつぶして押し通ることとなろうゆえ、三河の国境、地域など、義元が親しく正して繩取りして進ぜる。せめて明年の義元が上洛の折まで待つがよい）

三河の古老たちは、義元のこのことばを手形として、歸国した

のであつた。

これは、嘘ではあるまい。

義元上洛の計画は、今ではかくれもないことで、ただ時期の問題であつた。

強大な国富と軍備をもつて、それを秘密裡に目標としていた期間はずぎて、

(大挙はいつだ?)

だけが残っている。

今川家でそれを余りに堂々と広言しているのか、かえつて今川家が、^は覇を誇示する表情ではないかと観^みている向きもあるくらいである。

ただここで、新たに知れた一事は、三河の古老どもへ対して、
義元が、

(明年には)

と、時期を確言したことだった。義元の胸にはすでに、決行の
時期が熟して来たものと視^みられ、三河衆にとっては国への一つの
土産になった。

——さて。

前にもどつて。

安倍川の中ほどに、鵜殿甚七と元康とを乗せて、密談に時を移
していた小舟は、やがて話もすんだとみえ、棹^{さお}さして岸へ帰つて
来た。

「では、ここで」

と甚七はすぐに、笈おいを負い、杖を持ち直して、別れを述べた上、
「おことばの由、逐ちくいち一、鳥居様、酒井様などへ、お伝えいたし
ておきまする。——その他の儀はべつに？」

と、元康の顔を仰いだ。

元康は、岸へ立つと、すぐ人眼おそを惧れるもののように、

「舟のうちで、申した以外に、言ことづつて伝はない。はよう行け」
顎あごで促うながしてから、ふと、

「国もとの年よりもへは、元康は丈夫である、風邪かぜひとつひか
ぬと、伝えてくれよ」

と、いって、ひとり邸のほうへ、帰って行った。

さつきから築土ついでの外たたくに佇たたくんで、遠方おちこち近方こしもとを見ていた侍女は、

河原から帰つて来た元康のすがたを見ると、

「奥方様が、何やらお待ちかねでございます。お探し申して来やいと、幾度も、きつうお焦しれ遊ばして」

と、元康へは、云い難にくそうにくな顔をしながらも、当惑たごそうたごに告げた。

「あ。そうか」

元康はうなずいて、

「今すぐ参ると、そち達なだで、宥なだめておいておくりやれ」

と、自分の部屋へはいった。

座につくと、そこには家臣の榊原さかきばら平七へいしち忠正ただまさが来て、待つ

ていた。

「河原へでも、お散歩ひろいでございましたか」

「ム。徒然つれづれにな。——なんじゃ、何か用か」

「お使いでござりました」

「誰方どなたから」

平七は、答えずに、黙って書面をそれへさし出した。雪齋せつさい

和尚やうからである。

元康は、封を切る前に、押しいただいた。太原雪齋和尚たいげんは、

今川家にすれば、黒衣の軍師であり、元康にとっては、幼少からくんとう薰陶くんとうをうけた学問兵法の師であつた。

簡略な文面であつた。

こよい、お館やかたをかこみ、例のごとく談議つかまつ仕れば、乾門いぬいもんよりおいでを待つ——というのであつた。

文面はそれだけだが、「例のごとく」とあるのは、容易でない隠し語であつた。義元上洛の首脳部会議を意味するのである。

「使いは」

「立ち帰りました」

「そうか」

「また、夜陰の御伺候でござりますか」

「ムム。夕刻から」

と、元康は何か案じ込む。

榊原さかきばら

平七は、それが数度にわたる重大な軍議ということは、

かねて洩れ聞いているので、

「お館様やかた、御上洛の大布令おおふれが発せられますのも、はや間近のよう存ぜられますが」

と、元康の顔を窺うかがった。

「む、む……」

と、それにも元康は、余り気乗りのない返辞だった。

従来、今川家が認識するところの尾張の国力や、また、信長の評価と、きよう鶉殿うどのじんしち甚七が報じて来たところのそれとは、非常な相違がある。

駿遠すんえん三の大軍を動員して、義元が大挙、西上するに当って、

当然、捨身の抵抗を予想されるのは、尾張であった。

軍議の席でも、中には、

「何の、海道四万の大軍と、お館やかたの武威をもつて進めば、旗鼓きこの前に血ぬらずして、信長は降くだつて参りましょう」

などと皮相な見解をのべる者もあったが、義元も雪斎和尚以下の主将も、それ程には見くびっていないまでも、元康が考えているほどには、決して、尾張というものを重大視していなかった。

前にも、それについては、元康も意見を吐いたことはあるが、一笑に附されてしまった。何かにつけ、質子ちしの身であり、若年だし、帷幕いばくの錚々そうそうたる武将たちの間では、元康の存在など、余りに小さかった。

(——でも、押しても、いうたものか、いわぬものか)

元康は、雪齋の書状を前に、考えていた。——すると、北きたの方かたに側近く仕えている老女がまた見えて、奥方が何か最前からひどく御機嫌がわるいので、ちよつとお顔を見せて上げて下さるように——と、当惑顔にいつて元康の訪れを促うながすのであつた。

彼の夫人は、自分だけのことしか常に考えていない女性らしかつた。

国事とか、良人おっとの立場とかには、まったく無関心であつた。ただ自分の起居している奥と、良人の愛情の注意にしか、頭のつかえない人であつた。

老女も、それをよく酌くんでいたので、元康が、

「今参る」

と、答えたまま、なお、家臣と話し込んでいるのを見ると、重ねてはいえぬように、ただもじもじしていた。

するとまた、追いかけて、奥の侍女こしもとが、老女へ囁ささやきに來た。

老女は仕方なげに、

「あの……恐れいりますが、奥方さまが、頻りと、おむずかりなされていらつしやるそうでございますから」

おそるおそる、元康のうしろから、二度までも急を告げた。

元康は、奥の召使たちが、こんな場合には、誰よりも困ることを知っていたし、彼自身、至つて氣の練れている性たちなので、

「ほ。……そうか」

と、平七の顔を見て、

「では、支度を整えて、時刻が来たら、奥へ告げてくれるように」と、座を起つた。

奥仕えの女たちは、救われたように、先へ小走りに去つた。奥と表との住居は、^{すまい}夫人が彼の顔をしばしば見たがるのも無理でない程、遠く隔離されていた。

幾曲りもある中廊下や橋廊下を越えて、ようやく奥の錠^{じょうぐち}口へはいるのだった。そこは円い築山に北を囲まれて、秋草のゆたかな平庭を広々と南に抱いているので、表の者や、外部の人々は、夫人をさして、築山^{つきやま}様とよんでいた。

築山様は、元康が十五歳の時、今川一族の関口家から嫁いだのであるが、輿^{こしいれ}入の折は、義元の養女という資格であつたから、

貧しい三河者の質子である智殿とは、その支度の善美や、盛装の眩まばゆさは較くらべものにならなかつた。

三河者。

といえ、今川家では、侮蔑ぶべつの的まとであつたから、彼女の氣位きぐらいは、築山の一廓かくに住んでからも、三河者の家来をいやしみ、良人にはわがままと盲愛でのみ接していた。

それに年も、元康よりは上であつた。狭い夫婦生活の範圍だけで見る時、年上の築山様には、元康がただ柔順で、今川家に寄つてのみ生存してられる男としか見えなかつた。

殊に、この三月の産後から、彼女のわがままや良人への無理は、前よりも募つていた。——元康は彼女によつても、毎日、忍耐を

教えられた。

「おう……。きようは、起きておられたな。すこしは気分も快^ようおなりか」

元康は、夫人の姿を見ると、そういつて、南の障子を手ずから開きかけた。坪の秋草の美しさと、秋の空でも覗^{のぞ}かせたら、病妻の心も晴れるであろうと思つたのである。

築山様は病室を出て、寒々しい広間の中程にきちんと冷たい顔して坐っていたが、眉を顰^{ひそ}めて、

「開けないでおいて下さい」といった。

彼女は決して美人ではないが、さすがに深^{しん}窓^{そう}で愛^いしまれた肌^き

目ではあつた。それに初産の後のせいにか透き徹るような白い顔と指の先をしている。その手をひどく几帳面に膝へかさねて、

「殿。お坐りなさいませ。……すこしお訊きしたいことがあるのでございますから」

心には濃厚なる愛情を湛えながら、面には灰のような冷たい眼と唇をもつていった。

若い良人の通有性といったようなものは、元康には微塵も見られなかつた。夫人に対して気の練れている扱いは、老成人のようだった。或いは、彼には彼の女性観があつて、最も心の裡に置か
るべき者を、心の外に置いて視ているのかも知れなかつた。

「なんじやの」

夫人にいわれた通り、彼は夫人の前に坐った。

築山様は、良人が素直であればある程、何か、理由なく焦いら々いらして、

「すこし、伺いたいことがあります。あなた様は今し方、どこへお出ましになりましたか。家臣も召されずただお一人で……」

眼に涙をためてという言葉であつた。産後の瘦せのまだ回復して
いない容かん顔ばに、危険な感情の血がまざまざ逆上のぼつていたのであ
る。

元康は、その容態も性質も知っているので、子をあやすように
微笑んでいった。

「おう、今し方のことか。……書見していたが疲れたので、河原

までぶらりと独り出てみたのじゃ。お許もとも、稀れに侍女おんなどもを連れて、ちとそこらを徒歩ひろうてみたがよい。……秋草のさかり、昼の月にすだく虫の音、安倍川あべがわは今がよい季節」

築山様は皆まで聞いていないのである。白々しいと、良人を責めるように凝視ぎようしして、いよいよ常のわがままぶりもなく冷然かしこと畏まつて、

「おかしゆうございますこと。虫の音を聞いたり、秋草を見たりして、そぞろ歩きをなされに出たあなた様が、どうして河中へ、小舟など出して、永いこと人眼を避けてお在いで遊ばしたのでしよう」

「ほほ。知つていやつたか」

「わたくしは、こうして奥に籠こもっておりましても、あなた様のし
ていらつしやるくらいなことは、何でも存じ上げております」

「そうか」

元康は、苦笑したが、鶺鴒うどのじんしち殿甚七と会っていたことは、夫人に
も明らさまにいえなかった。なぜならば、この夫人は松平元康と
いう者に嫁いで来ても、決して元康の妻となり切つているとは、
彼に信じられなかったからである。

里親の家来筋や親戚が訪れてくれば、何でもそれに話してしま
うし、義元の奥向きの誰彼へも、始終、文使やいなど遣り取りとして
いるのである。

元康にとっては、質子ちし目付の眼よりも、この夫人の悪気のない

無分別のほうが、遙かに、警戒を要したのである。

「いや、何気なにげのう河原の小舟に乗りとうなつて、独りで水馴みなれ棹ざおを持ってみたが、舟と水とは相性のものと思うていたが、さて流れに出てみると、なかなかままに動かぬものじやな。はははは、子どものような、他愛もないこと。……どこでお許もとはそれを見ておられたか」

「嘘ばかり仰つしやいませ。あなた様お一人ではなかつたではございせんか」

「されば、わしの姿を見て、後から表の小者が追うて来たが」

「いえいえ、小者風情と、人目を避けて、舟の中で密談を遊ばすわけはございませぬ」

「誰じやいったい。左様なつまらぬ告げ口をする者は」

「奥にも、わたくしの身を思うてくれる、忠義者もおりまする。

——あなた様には近頃よそこに女子おなごをかくしてお在いで遊ばすのでございましょう。さもなければ、この身をお厭いといなされて、三河へ逃げてお帰りになろうと企たくんでいるのでござりましょう。岡崎には、わたくしの他ほかにも、夫人おくとお呼びなされている者があるのだという噂も聞いて知っております。……なぜそれをお隠いしなさいますか。今川家へのお氣遣いで、わたくしを厭いや々ながら妻としてお在いでなさるのでございましょうが」

彼女の病氣と邪推のさせるすすり泣きの声が、ようやく外にまで洩れて来た頃、彼方の錠じょうぐち口の端に、榊原平七さかきばらへいしちの姿が見

えて、そこから告げた。

「お馬の御用意ができました。——殿、殿、はやお時刻にござりますが」

「お出ましとな！」

元康の答えぬうちに、築山様はそばから口を容いれて、

「近頃は、夜中にようお留守がかさみませんが、今頃からいつたい、何処へお出いででござりますか」

「御館へじゃ」

元康は、取り合わずに、すぐ起ちかけたが、築山様は、それだけの説明では気がすまないのである。

お館へ伺候するのに、何で夕刻からでなければならぬのか。

また、いつぞやのように夜半よなかまでかかるのか。家臣は誰をつれて行くのか。——際限もなく訊なき詰じるのであった。

錠じょうぐち口くちにひかえて、元康の立坐を待っている榊原平七は、家来の身でも、余りなど、焦じり々じり思しつていたが、元康は根気よく、彼女の不審の解けるまで、宥なだめたり説せいたりして、やがてようやく、「では、行いつて来きるぞ」

と、奥を出た。

築山様は、元康が、またからだか冷ひやえると悪いと、止めるのもきかず、錠口まで送おくつて出て、

「おはやくお戻り遊あそばせ」

と、いった。

彼女の愛と貞節の最大な現われ方は、元康が外出する折にいうその言葉だった。

表の大玄関まで通る間、元康は家臣のどの顔を見ても、黙々と口もきかなかつた。——が、もう星の白い夕風の中へ、駒の鬣たてがみをそよがせて騎のり出すと、彼の気持は一掃され、彼にも青年らしい澆刺はつらつとした血液のながれている証拠が、その眉にも、言葉にも見えた。

「平七」

「はッ」

「ちと、遅うなつたな」

「いえ何、はつきりと、時刻のお示しはなかつた御書面、多少は

遅刻になりましたよとも」

「そうでない。雪齋せつさいぜんじ禅師のような御老体でも、いつもお時刻は誤たつた例ためしがないぞ。われら若年の身が、ましてや質子ちしの分で、重臣方や老師などのお揃いしてある席へ遅参申しては心ぐるしい。急いごうぞ」と、やや駒を早め出した。

口取の郎党に小者三名。それと榊原平七だけが供だった。

平七は、駒の足と、歩調を合わせて駈けて行くうちに、何とはなく眼がしらに熱いものが滲にじみわいてならなかった。

——可憐いじらしいお心根。

と、そう思うのであった。

築山夫人に対しての堪かん忍にんも、お館（義元をいう）に向つての

素直な御忠節も、今の境遇にあるうちは——と、ひそかに、忍耐の齒をかんでおられるのだ。自分ら臣下としては、一日もはやく、この君の枷かせを解き、質子ちしという隷属れいぞくてき的な存在から、小さくとも、三河一城の独立した主君に御復歸せしめなければならぬ。

それを、一日過しでいることは、一日の不忠である。平七は、そう思つて、

(今に。今に！)

と、唇くちをかみつつ、そして自分の誓いに、また、瞼まぶたを熱くしながら駈けていた。

二条の濠ほりが見えた。一ノ橋を越えると、もう町屋も平屋敷も、一軒もなかった。きれいな小松原の間に、折々、白壁や宏壮な門

の見えるのは皆、今川一族のなにがしの支度邸したくやしきか役所であつた。

「おお。三河殿ではないか。——元康殿、元康殿」

城地を繞るめぐ広い小松原は、戦時には武者揃いの広場となり、平時は縦横の道筋がそのまま馬場に用いられていた。手をあげて今、小松の陰かげの横道から彼を呼んだのは、臨濟寺りんざいじの雪齋せつさい和尚おしょうであつた。

太原雪齋たいげんせつさいは、

「お出向きか」

云いながら歩み寄つて来た。

元康は、あわてて馬を降り、いんぎんに礼をして、

「禅師にも、こよいは御苦勞に存じます」

「かいじょう会状、いつも急で、其そのもと許などこそ、大儀でおぎる」

「なんの」

雪斎は、供ひとり連れてはいない。巨おおきな体につりあう足を、うす汚い藁わらぞうり草履わらぞうりにのせて歩いているのだった。

元康も、共に歩み出したが、師礼を執とつて、肩は並べないように、また、ここまで騎のつて来た駒も、榊原平七に口輪を取らせて、騎のろうとはしなかつた。

「ことしもまた、秋とはなつたなあ」

師の呟きを、耳にしながら、元康はことばに現わせない感謝を、ふとその人へ抱いた。

幼少から他国の質ちし子として在る身を、ひともわれも、不遇とは

いうが、深く思えば、この太原雪斎の薰陶くんとうを得られただけでも、不幸はかえって大幸であつたかもしれない。

良師は得難しという。もし三河で無事にいたら、雪斎に師事する機縁には恵まれなかつたであろう。同時に、自分の身に持つた今の学問も軍学もあるまい。

いや智的な修業よりも、雪斎から絶えず与えられた精神的なものこそは尊い。それは禅だ。元康が雪斎から得た何よりも大きなものであつた。

禅家である雪斎が、どうして今川家の館やかたに自由に入出し、また軍師として帷幕いぼくにあるかを、深く知らぬ他国では怪しんで、ために雪斎を軍僧とよんだり、俗禅ぞくぜんといつたりする者もあつたが、

血をただすと、雪齋は今川一族の庵原左衛門尉いはらさえもんのじょうの子で、義元とは血縁のあいだであつた。

しかも義元は、駿遠三だけの義元であつたが、太原雪齋の道風は宇内うだいに振り、天下の太原雪齋であつた。

義元を人としたのも雪齋の訓育であつた。小田原の北条氏ほうじょう康と戦つて、今川方に敗戦の兆ちようが見えるや否、不利とならぬ間に和議の盟約をむすんで、駿府を救つたのもこの僧であつた。

また、北境の強国、武田信玄むすめの女を、北条氏政へ嫁がせて、義元むすめの女を、信玄の子義信に娶めあわせて——三国盟約を結ばせたなどの政治的手腕にも、巨腕を見せて来た僧である。

だから彼の姿は、決して一杖破笠じよはりゆうの孤高を行く清僧ではない。

純粹なる禪家ではない。政僧であり、軍僧であり、また怪僧といえ、ばいえる存在だった。——だが偉おおきな人物は、どう呼んでも、依然、偉おおきな存在であることに少しの変りもなかった。

(——洞窟にかくれたり、行雲流水に身一つを飄ひようひよう々と送つていたり、そんなのばかりが、高僧ではない。僧もその折々の時勢によつて使命がちがう。今のような世の中に、おのれ独り高く取り澄し、身一つの仏果のみ考えて、世俗を厭いとうかのようには、山野の無事を偷ぬすんでおるなどという生き方こそ、憎やこい野狐禅ではある。俗の中には、俗の眼でもわかる偽にせもの者しかおらぬが、君子聖人のうちには、らつきょうのように幾皮もかぶつておるのが多いでな

あ)

滅多にいわないが、そんなことを臨濟寺の縁でもらしたことな
ども、元康の耳にのこっていた。

「おお、はや参った」

その雪斎の踏み渡って行くのは、乾いぬいもん門からの唐橋であつた。

元康は一足おくれて榊原平七に何か云いおき、また、乗馬も小者の手にあずけて、老師の後から城内へ姿をかくした。

おはぐろしやうぐん
鉄漿將軍

ここが城壁の内とは思われなかつた。それほど華麗な館やかたであつた。足利將軍の奢侈しゃしと室町御所の規模をそのまま移したかのよう

である。

愛宕あたご、清水をすぐ下に望む大おお廂おびさしの彼方かなたに、夕富士の暮れる頃になると、百間廊下の龕がんには見わたす限りの燈あかしが連なり、御所の上じょうろう 藤とうかと紛まじう風俗の美女たちが、琴を抱いて通り、銚子ちょうしをささげて通つてゆく。

「誰たれじや、庭面にわもで——」

義元は、微醉びすいの面おもてに、銀杏扇いちようおうぎをかざして云つた。

虹にじのような朱あけの欄らんを架けた中庭ちゅうていの反橋そりばしを越えて来たのである。扈從こしゅうの家臣や小姓たちさえ、眩まばゆいばかりな衣裳や腰の物を着けていた。

「見て参りましょう」

小姓のひとり、橋廊下をもどつてすぐ庭へ駈け下りた。——
 誰か、夕闇の広庭で、悲鳴をあげた者があつたのだ。義元の耳に
 は女の声と聞えたので、不審に思つて足を止めたのである。

「どうしたのやら小姓めは……音沙汰もない。伊予、そちも見て
 来い」

「は」

河合伊予も、庭へ下りて彼方へ見に走つた。庭といつても、夕
 富士の裾野へ続いているかのように広がつた。

橋廊下と廻廊の角の柱にもたれかかつて、義元は、扇で手拍
 子しをとりながら京謡きょううたを低声こごえに口誦くちずきんでいた。女かと疑わ
 れるほど、色白に見えるのは、薄化粧をしているからであろう。

脂肪しぼうに富んだ皮膚は生地きじから色白な質だった。ことし四十一の男ざかりではあり、世の中のおもしろい、そして得意の絶頂にある義元だった。

髪は公卿風くげふうの総髪ひげに結ゆい、齒には鉄漿おはぐろを黒々と染め、鼻下に髭ひげを蓄えている。二年ほど前から肥り気味になって、胴の長い脚の短い生れつきの体が、よけい畸形きけいに見えて来ているが、黄金の太刀や、高貴な織物の小袖袴ぼかまは、お館の尊厳をつつんで褌つまさき先も余さなかつた。

ばたばたと、誰かやがて駈けて来た。——義元は、口誦くちずさみを止めて、

「伊予いよか」

と、いった。

人影は、立つたまま、

「いえ。氏真うじまねです」

「なんじゃ、和子わこか」

嫡子ちやくしの氏真を呼ぶにも、義元は和子とよんだ。この父の子ら

しい苦労知らずの青年だった。

「はや黄昏たそがれておるのに、庭面にわもへなど出て何をしておった」

「千鶴ちずめを、折檻せつかんしておりました。手討にしてくれんものと、

刀を抜きましたら、逃げまわって」

「千鶴……千鶴とはたれじゃ」

「氏真うじまねが、愛鳥の世話を申しつけておる、召使の女です」

「侍女か」

「はい」

「なんの落度で、女子など、手ずから成敗しやる？」

「憎いやつです。都の中納言家から、この氏真へと、遙けく贈り下された名禽めいきんを、疎漏そろうにも、餌をやるとて、鳥籠から取り逃がしてしもうたのではございませぬか」

氏真ことりは小禽ことりが好きだった。名鳥を求めて彼に贈れば、他愛なく欣ぶよろこことを知っているので、都の公卿くげからも、贅美ぜいびな鳥籠と名禽は、居ながらに、屋形のうちの彼の住居すまいの坪には集まった。

一羽の小禽ことりのため、ひとりの人間を手討にするという。むきになつて怒つていう。まるで国家の大事のように、氏真はそれを父

へも当然にいうのである。

「……何かと思えば」

子にあまい義元も、氏真の愚かな怒りに、暗然とつぶやいた。
臣下の前もある。

いかに自分の嫡ちやくなん男であろうと、こういう暗愚を見せられたら、家臣たちもおのずと氏真を軽んじるであろう。

義元は、そう考えると、大きな愛を示したつもりで、

「たわけ殿よ！」

と、烈しく叱った。

「氏真、そちは幾歳いくつになる。はや元服もとくにすんだ身ぞ。しかもこの今川家を継ぐ嫡男の身にてありながら、小禽ことりばかり飼ひ遊

んでいて何とする！　ちと、禪でもいたすか、軍書でも読め！」
めつたに子を叱らない父からいわれたので、氏真も顔いろを失
つて沈黙した。けれど、平常その父をさえ甘く見ているし、父の
行状にも、もう批判の眼の出来ている年頃の氏真なので、かえつ
て、反抗の唇をくちむすんで、膨れかえっていた。

義元もまた、そこに弱点を感じるのだった。暗愚なほど子は可
愛いのである。自身の行状も決して子によい教育を示していない
ことも知っていた。

「もうよい。以後は慎め。……よいか氏真」

「はい」

「何を不満な顔しておる」

「何も不満には存じません」

「然らば、立ち去れ。小禽など飼っている時世ではない」

「……で。では」

「何じゃと」

「京の唄姫と酒などのんで、昼から舞うたりつづみ鼓を打ったりして
おる時世だと、仰こゝろつしやいますのか」

「だまれ、小賢こゝろしゆう」

「でも、父君には」

「おのれッ」

義元は、持っていたせんす扇子を、氏真の顔へ投げつけて、

「父をあげつらうよりも、そちはそちの分を守れ。兵法軍学に心

を寄せるでなし、治民經世ちみんけいせいについて学問をするでなし、左様なことでは、義元の跡はつげぬぞ。父は、若年まで、禪寺にはいつて、つぶさに苦行も舐なめ、数度の合戦も践ふみ、たとえ今はかくあろうとも、なおなお、大志を抱いて中原を望んでおる。そちのよ
うな、小胆、小志の者が、どうして義元の子にできたか。義元の
今に何の不足もなければ、ただそちにのみは、憂いを覚える……」

いつのまにか義元の扈こじゅう従たちも皆、大廊下に指をついてうず
くまり、義元のことばに胸をうたれて、等ひとしく暗然とさし俯うつむ向い
ていた。

「……………」

さすがの氏真うじざねも、頭こうべを垂たれて、足下に落ちている父の扇を見

つめていた。

そこへ、表の侍が、

「禅師様にも、松平元康もとやすどのにも、またその他の方々も、はや

橘たちばなの坪におそろいで、お館のお出ましをお待ちかねでございます

が」

と、告げて来た。

橘たちばなの坪つぼというのは、柑橘かんきつの樹の多い南勾こうばい配ばいにある別殿で、

こよい義元はそこに、臨濟寺の禅師を始め、腹心の者を、表向き夜の茶に招くということ、呼んでいたのである。

「お、そうか。……皆みなそろうてか。儂みが主人役、遅れてはなるま

い」

父と子との、心を噛むような沈黙の今を——救われたように、義元は云つて大廊下を彼方へ歩み去つた。

元より茶事ちやじというのは表向きだけに過ぎない。義元の同朋どうぼう、伊丹権阿弥いたみごんあみという者が、中門まで手て燈あかりを持って出迎えに出ている様など、夜の茶会にふさわしく、灯影ほかげのゆらぎ、虫の音など、風流の気につつまれて見えたが、義元が通つて、そこが閉まると、一組七名ずつの素槍すやりを引っさげた兵が、絶え間なく、附近を巡つて、水も洩らさぬ警戒をしていた。

「お館様」

「——お出ましです」

橘の坪の静かな屋の内に、権阿弥ごんあみと他一名の同朋の声が、そう

警蹕けいひつするやうに奥へ伝えた。

床の低い二十畳ほどの寺院風の一室に、仄ほのかな明りがゆらいでいた。

座には――

臨濟寺の雪斎和尚をはじめ、老臣の庵原いはらし将監しょうげん、朝比奈あさひな主計かずえなどの顔。

右側には、一族の齋藤さいとう掃部助かもんのすけ、牟礼むれ主水もんのし正しょうなどの姿の見える端に、松平元康も坐っていた。

「……………」

黙然もくねんと、左右の流れは、正座に向つて少し頭を下げていた。衣きぬずれの音も耳立つその静かなあいだに、義元は着席していた。

小姓も近侍一名も、ここへは従えていない。

同朋衆二名だけが、遠く二間か三間へだてて、控えているきりらしいのである。

「遅参申した」

帷幕いぼくの人々の礼に対して、義元のあいさつだった。

そしてまた、雪斎へは、特に、

「長老にも、御老体を枉まげて」

と、労いたわった。

近頃は、師の姿を見るたびに、体のことについて労いたわったり訊ねたりするのが、義元の癖になっていた。事実、この五、六年来、雪斎は病みがちで、老いが著いちじるしく見えていた。

義元は、弱冠の頃から、この人に薫くんとう陶され、この人に鞭打べんだされ、またこの人に護られ、励まされ、すべて雪斎の経世と策謀と雄略によつて、今日の大を築いて来たことを知っていた。

だから雪斎の老いは、自分の老いのように感じられてならなかった。けれどそれも初めのうちだけで、雪斎に頼らなくても、ここ数年、今川家の勢力はびくともしないばかりか、いよいよ昇天の勢いで隆昌の一方にあることを見ると、いつのまにか、弱冠からの成功もすべて、自分の器量のように思いなされて、

(もはや義元も大人に成り申したれば、治国の政まつりについても、軍議の方策についても、構えてお案じ下さるまい。長老には、余生を充分に楽しまれて、専ら道風の御宣布に心をおそそぎあるがよ

い)

などと閑話の折など口に洩らして、かえつて近頃は、雪斎の介入を、敬遠するような風も見えないではなかった。

しかし、雪斎から見ると、

(困ったもの)

と、幼児を見るような憂いが、今になつても、去らないのであった。

ちようど、義元の眼から子の氏うじざね真を見るように——雪斎から義元をながめると、

(危かなうい哉)

と、思わずにいられないのであつたらしい。義元が、近頃は、

自分の多病に事よせて、自分を煙たく思っていると分つていながら、彼は努めて、政治向きにも軍議にも、老骨を運んで来た。

わけて、この春頃から、もう十度にもわたる橘たちばなの坪の会議には、病中でも、欠席したことがなかった。

ここの座で、

(やるか？ 未だか？)

の二つに一つが決定されることこそ、今川家の浮沈に関する重大事であるからだつた。

虫しぐれにつつまれて、いと密ひそやかな裡うちに、天下一変の大評議は、行われていた。

外の虫の音が、ぱたとやむ時は、警戒の素槍をさげた士の組が、

橘の坪の垣外を、ひたひたと通って行く時だった。

「主計かづえ。この前の評議の折、申しつけておいた調べ、整うたか」

義元の言に、

「ぎツと」

朝比奈主計あさひなかづえは、携えて来た書類ひろを展げて、評議に先立って、一

応の説明を加えた。

それは、織田家の領地と、藩財の調査や、またそれから算出した兵力、武器などの詳細な書きものであった。

「小藩とは申しながら、近年になりまして、著いちじるしく、織田家の財政も立ち直って来たかに見うけられますが……」

主計は云いながら、数字の表を義元に示し、

「尾張一国とは申しませんが、尾張の東部南部の——東春日井ひがしかすがいや知多郷ちたごうのうちには、御当家で切り取った岩倉城のごときもござりまするし、また、織田に属しておるとはいえ、二心を抱いておる者もあるやに存ぜられますので、先ず、今の情勢では、織田の領りようゆうようゆう 邑はおよそ尾張一国の半分以下——五分の二と見れば大差ないかと思いまする」

「ムムなるほど。聞き及ぶ通りの小藩だのう。——して兵数はどれほど出し得るか」

「尾州五分の二領と見れば、その領地額りょうちだかは、約十六、七万石に当りましようか。一万石について、養兵力をおよそ二百五十人と積ると、織田全体を挙げて、四千内外。——守兵をのぞけば、

三千内外の兵しか動かすことはできませんまい」

「は、は、は、は……」

突然、義元は笑った。

笑う時は、少し身を斜めにして、美しく染めた唇の鉄漿へ、
銀杏形いちようがたの扇子せんすを当てて笑うのが、彼のいつもする癖だった。

「三、四千とな。……ようまあ、それで一国を支えておるものじやのう。儂みが上洛の途に当って、心すべき敵は織田であると、長老も仰せらるるし、そちどもも織田織田としきりに申すゆえ、主計に仔細を書きあげさせてみたわけじやが……たんだ三、四千の兵が、義元の軍勢の前に何するものじや。鎧がいしゆう袖しよくの一触、蹴ちらして押し通るに何の造作があるう」

雪齋は沈黙していた。

むれもんどののしょう

牟礼主水正、庵原将監、齋藤掃部助なども、ひとし

く口を緘かんしていた。

義元のうごかない決意を知っているからである。

既に――

この計画は数年来のものであり、今川家の軍備も内政も、あらゆる施設の方向は、義元の上洛と天下制覇の目標にあつたのである。――機、今や熟し、義元の胸にも、その鬱勃うっぼつは、待つまでもなく、迫りきつているのだった。

それを、この春から、いざ決行となりながら、評議をかさね、今もって実現に至らないでいるのは、この中枢部の内にも、まだ

時機であるまいという——尚早論者があるからであつた。

それは、雪齋和尚であつた。

雪齋は尚早論というよりは、もつと消極的に、義元に内治の猷策のみすすめた。旗を中原にすすめて、天下統一の大業を義元がなし果そうとする大志に対しては、悪いとはいわないが、決して、賛同を表さなかつた。

そういう態度を持っている雪齋和尚の気もちの中には、苦しいものがあつた。なぜならば、義元に向つて弱冠から、

「今川家は当代の名族おで在おわするぞ。足利將軍の統、もしお世継よつぎのなき時は、三河の吉良きら氏が継ぎ、吉良氏に人のなき時は、御当家今川家から立つことになつておる。すべからく貴方も大志を抱

いて、天下の主たるほどの器量を今から養つておかねばならぬ」と、そういうような訓育をした者は、実に、雪斎自身であつたのである。

一城の主たるよりは、一国の君となれ、一国の君たるよりは、十州の太守たいしゅうとなれ、十州の太守たるよりは、天下の支配者となれ。

誰もおし訓えることである。当時の武人教育はそうであり、当時の武家の子弟は皆、風雲の世にそれを望んだ。

雪斎もまた、義元を教育するに、それを眼目とした。そして彼が義元の帷幕いばくに参じてから、今川家の国勢は急激に膨脹ぼうちようした。覇業の階梯かいていを徐々じよじよに踏んで来たのである。

——が、雪齋は近年に至つて、自分の教育と輔佐ほさの任に大きな矛盾を感じだした。それは義元がいよいよ自信をもつて計画を進めつつある天下統一の覇業に、何となく不安を覚え出したことであつた。

うっわ
(器でない。いかんせんお館はその器ではなかつた)

義元の行状だの、わけて近年、著しく思い上がつて来たふうのある彼をながめて、雪齋の考えは、急角度に、保守的になつた。(今が絶頂だ。彼の君の御器量いっぱいなところだ。思い止まらせねばならない)

そこに雪齋の苦しみが生じ出したのである。今を自分の世盛りと自負慢心している義元が、遽にわかに、中原進出の大挙を思いとま

るはずはなかつた。雪斎の諫言かんげんは、雪斎の老衰のせいであると嗤わらつて取りあわない。もう天下は半ば、わが掌てにあるものとしているのである。

(誰が、させたか)

義元の慢心を責めるまえに、雪斎は自分を責めた。器うつわでない者に、器以上の大望を抱かせたものは、誰でもない、自分ではなかつたかと。

(もはやお止めすべきであるまい)

雪斎はもう諫言かんげんしなかつた。その代りに、評議のたびに、大事に大事を取るべく主張した。

(駿遠すんえん三の大軍と義元の威勢をもって、京都まで上のぼるに、何ほ

どのことがあるう)

と、口ぐせにいう義元をたしなめては、沿道の諸州の実態を探らせ、能^{あた}うかぎりは戦わずに、未然の外交策と利をもって、無血の上洛を計ったりした。

けれど、京都までの沿道で、強国美濃^{みの}より近江^{おうみ}より何処よりも、すぐ避け得られない門出の一戦は、まず織田という敵だった。

この敵は、小粒だった。しかし外交でいけず、利で行かず、戦って実にうるさい敵なのだ。それもきょうやきのうの敵ではなく、^{さかのほ}遡れば四十余年も前から、一城を奪^とられれば一壘を取りかえし、一町を焼かれれば十村を焼きかえし、実に、信長の父の代、義元の祖父の代から、両藩の国境には、両家の白骨を埋め合って来た

宿しゆくえん 怨えん のあいだなのである。

織田では、疾とく、

(今川上洛)

という風評に、四十余年の臥がしん薪しん嘗しやう胆たんの酬むくわるる時節は来れり
りと、一大決戦を覚悟しているとのことだし、義元はまた義元で、
(手頃な、上洛陣の血祭り)

と、対織田策を練っている今であつた。

——いやもう今宵を最後とする軍議なのであつた。

雪斎和尚や元康らが、お館を退さがつて帰途についたのは、もう府
中の町には、灯一つ見えぬ深夜だつた。

「御運を天に禱いのるほかない。年老とると、禅骨も愚にかえる。寒い

のう」

寒いとも思えぬ夜なのに、銀河の空を仰いで、雪斎はつぶやいた。後で思えば、その頃から彼の老病はかなり篤あつかつたのである。その夜を最後に、雪斎はふたたび土を踏まなかつた。臨りんざい濟さい寺じ中秋寂寞、ひとりの高僧はひそと死んだ。

ぼうしよく
望 蜀

冬が近づいた。

まだ臨濟寺の菊は晩節において高く咲いていたが、府中の城下から仰ぐと、眉に迫るほど間近な富嶽ふがくは、真つ白な雪になつてい

た。

「降りろッ」

門前町の辻まで、向う見ずに飛ばして来た一騎の悍馬は、四つ辻の角を固めていた士さむらいの長槍で、いきなり脚を払われて、竿立さおだちになつて暴れまわつた。

「——あッ」

落馬はしなかつたが、鞍上の武士は、抛ほうり出されたように降りて、

「何を召さる」

辻を見まわして、そこらたむろに屯たむろしている今川家の士さむらいたちへ喰つてかかつた。

「止めたのだ。——断りなくどこへ参る」

警固の者は、当然のように云い払う。

「臨濟寺へ！」

一方も、昂然こうぜんと、云い返したが、辻固めの士たちは、

「ならぬ」

と、一蹴した。

「なぜ、ならぬのか」

「臨濟寺には、今日、お館様をはじめ、重臣方が、雪斎和尚の忌き日にちとして、御参詣遊ばされておる。——家中一統の参拝はもうすんで、皆帰られたが、まだお館様と主なる方々には、御休息中でいらせられる。それゆえ、御帰館までは、この先、往来止めと立札

の建つておるのが見えんか」

「見えたればこそ、急ぎ通るのだ。仔細しさいも糺たださず、騎馬の脚なぐを撲るとは無礼であろう」

「何、見えたればこそ……だと、高札は、法令であるぞ」

「わかつておる」

「申したな。縛からめ捕とれこの者をツ」

「待てツ」

「後で申せ」

「いや、おん身らの落度になつては気の毒だから先にいうて聞かすのだ。この方ほうのふところには、大高城の守将うどのなが鵜殿長照様より、お館様への火急な軍状を所持しておるのだぞ」

「や。急使か」

「軍状を所持する場合は、貴人に会つても、下馬に及ばず、大手唐橋の門内まで、乗りつけも御免に相成つておる」

「勿論」

「故に、臨濟寺の門前まで、騎馬のまま駈けようとしたが、なぜ悪い」

「軍状を持った急使とわかれば止めはせん。無断、駈け通るゆえ」
「断っている間などはない」

「では、お通りなさい」

「ただは通らん、謝れ」

「咎めるのも役目だ。謝るほどなら君命を待つて腹を切る。謝ら^{とが}

ん」

「その挨拶あいさつ氣に入つた。よし然らば、預けておくぞ」

云い捨てると、急使の武士は、駒の背へとび移つて、臨濟寺の門へと駈けつけて行つた。

禅刹ぜんさつは森しんとしていた。

わけてこの秋、雪斎長老の亡き後は、山門も堂宇も、森も、よけい寂じやくまく寞まくの感が深かつた。もずの啼く音も、何となく淋しく、肌さむい初冬だつた。

けれど、きようの雪斎四十九日の忌きに焼香した今川家の将士の中には、どことなく平和を欠いた騒さわめめきが漲みなぎつていた。辻固めの士にまで、殺氣に近い緊張が流れていた。——戦いくさがある。長老の

死は、お館の上洛の機を早め、隣国の敵は、氣勢を得て、虚を衝こうとするにちがいない。

(——だからいずれにしても、合戦は間近くなった)

今川家の人々は、そういう覚悟の中に、刻々と、国境の変を、この二、三日、耳にしていたところなのである。

誰と誰と誰とは残るようにといい指名で、その日、法会ほうえのすんだ後も、臨濟寺の奥書院には、義元を中心に、今川家の幕将二十名ほどが密ひそやかに、何事か評議していた。

巨星雪斎が逝ゆいてから、義元の帷幕いぼくには、義元の意見を制する者はいなくなつた。いつも黙つて末席もとやすにいる松平元康は、時勢観でも、今日の方策でも、亡師の雪斎と最も近い意見を抱いてい

だが、彼は外藩の質子ちしの身だし、余りに若年でもあるし、いうても取り上げられないことは知れすぎているので、一見、意見も何もないように、沈黙をまもり通していた。

おおだかおもて

「大高表から、ただ今、お飛脚でございます。……はいッ、早馬の御急使が、これなる御書状を、お館様へ即刻お取次あるように申されまして」

廊下仕切じきりの杉戸の外でする声であつた。

その取次の僧に対して、何かいつているのは、出入りを見張つていた側衆の人々であろう。

しんかん

森閑しんかんとした禅房の奥なので、芭蕉ばしやうにかくれている中庭の向

うの広書院まで、この声はよく届いて来るのだった。

「何、大高表から飛脚と……」

評議の座は、みな口を噤つぶんで、ひとしく聞き耳をたてた。――

折も折、心もとないと思つたらしく、義元は、

「元康。立つてみい」

と、頤あごを末席に向けた。

「……はッ」

静かに、席のすそから、元康は廊下へ出て行つた。

たとえ何者でも、どんな用事を帯びた者でも、評議中は、杉戸から一步もはいつてはならぬと厳命してあるので、元康がそこへゆくまで、取次の僧も見張番の近衆たちも、杉戸の外でまだ応答を繰り返しているだけだった。

「なにか」

元康の顔を見ると、

「はい、実はただ今、これなる御書面を携たずさえた急使が、大高表から夜を日について馳せつけたとの由で……」

近衆も、僧も、両手をつかえながら、飛脚状をさし出した。

軍状である。味方の大高城から、何か火急な飛脚といえ、容易ならぬこととは直ぐ知れている。

「使者は」

「御本堂に控えております」

「すぐ、お館様へ、御披露申しあげておると伝えて、しばらく休息させておかるるがよかろう」

元康は、それを持って、評議の席へもどつて来た。

何事の急報か？

と、案じるもののように、席の諸将も、義元自身も、その間、無言のまま、元康の取次を待ちぬいていた面持おももちだった。

「御前まで」

と、元康は、書状を、朝比奈主計あさひなかずえの前へおいて退さがった。

主計の手から義元の前へ、それは披露された。義元は、すぐ封を切つて、一見していたが、

「……猪口才ちよこさいな」

黒々と鉄漿かねを染めた歯が下唇を噛んでいた。すぐ側に居流れて
いる牟礼主水正むれもんのしょうや庵原将監いはらしやうげんのほうへ、書状は無造作に投げ

られていた。

義元の眸は、じつと、欄間を仰ぎ——順々に書面を一読して廻している幕將たちも、次々に、異様なかがやきを眼に湛たえたまま、しばし、沈黙を守り合っていた。

大高城は、尾張本国と知多半島との咽喉にあつた。

ちようど、胴と脚の附け根のような地形に、今川家の勢力は犬け牙んがのように深く蝕くい入つて、沓掛くつかけ、大高の二城をつなぎ、織田領の脚部をそこで切断した形になっていた。

前に。

織田方では、大高城の前衛、鳴海なるみを奪回していた。その後、織田方では、なお手をゆるめず、沓掛と大高の二城の間に、急ごし

らえの砦とりでを設け、大高城の孤立化を計っていたが、義元上洛のうわさがようやく具体的に進行して来たとなると、昨今急激に、大高城を包圍してしまい、孤城の運命は完全に迫っている——という書状の内容なのである。

勿論、書面は、大高城の守將うどのながてる鶴殿長照の直筆で、まちがいないものだった。

——援軍を頼む！

と、いうことは一言も書いてはなかった。けれど、以上の急迫を告げているほかに、孤立の城内には、兵ひょうろう糧りやうも乏しく、松杉の木の皮を餅にして喰べ、合戦の日だけは、米こめの汁しるを兵に飲ませているなどという窮状の一端したたなどが認めてあつた。

「……………」

順々に、書面のまわし読みがすむ間、沈黙を守りあっていた人々は、その間に、籠城者の悲惨な忍耐を、各胸にえがいていた。急使の齎もたらしたその書面は、やがて席を一巡して、松平元康の所へ来て終った。元康も一読をすまして、朝比奈主計かづえの手から義元の前へ返した。

「どうしたものか」

義元には、さし当って、よい対策もなかった。

いや義元のみでなく、今川家の参謀といわれる庵原将監いはらしやうげんに

も、名将の聞え高い牟礼主水正むれもんのしょうにも、すぐそれに答えられる考

えもない容子ようすなのである。

「……………」

元康もだまって控えていた。とつこうつ日頃の智慮ちりよをしぼっている面持おももちは誰にもあるが、依然、声もない刻々が重くるしくつづいていた。

わけて義元の眉には、身近い苦痛が刻まれていた。織田の抑えおさとして、大高城に入れてあるその主将鵜殿長照は、義元の妹むこ賀にあたる者なのである。私心の上からも見殺しにできないし、また、小藩の織田風情ふぜいに、大事な要地と妹賀の生命を略取されたと聞えては、上洛の大挙をひかえている威風のとまえとしても、四隣に対しておもしろくない。

「なんぞ、策はないか。……よい思案は。……抛ほうつておいたら大

高表の者ども、みすみす餓死ぬうえじであろうが」

重ねて、義元がいった。しかし義元のいつていることは、当然なことと困惑を、繰り返しているに過ぎないのである。

元々、大高城の地理的な位置が無理な所にあつた。侵略した敵地に深く、そこだけが突き出していた。で一朝、孤立したとなると、離れ島も同様な地点に置かれた。

その上にも。

ここ半年ほどの間に、織田家では計画的に、鷺津わしづ、丸根まるねの砦とりをはじめ、丹下、中島、善照寺などの各部落や高地に、砦石しを布くように砦を構築し、今日の行動を起すまえに、大高を地理的に遮断しているのである。

援軍をやる——といつても容易ではなく、大高へ兵糧を入れる——としてもなおさら難事であつた。

すると、一人、

「僭越ですが、私をおつかわし下されば、来年の御上洛まで、持ち支えるよう、大高表の儀、仕すまして参りますが」

と、云い出た者がある。

誰かと、末席のほうを見ると、質子ちしの松平まつだいらもとやす元康なのであつた。

松平元康という者は、若いのに似あわず引つ込み思案な男である。境遇は人を作るといふから、自然そうなつたものだろうが、武断な勇将うっわの器ではない——

常に、彼を見ている今川家の幕將たちは、そういう定評を是認していた。

その元康が、今、

「私が行きましよう」

至難中の至難と目めくされていいる大高城の救援に、進んで志願したので、

「え……?」

疑わぬばかりの眼が、いわゆる引つ込み思案な、彼の姿にあつまつた。

義元も意外な面おもてで、

「元康。参るといのか」

「はい」

「大高表へ兵糧を入れる工夫があると申すか」

「いささか……」

「ふむ。そちにな……」

義元は、考えていたが、独りで大きく領うなずいた。

元康の人間をわりあい知っていたのは、この中ではやはり義元であった。故雪斎和尚が常に彼へ云っていたからである。

(あの小冠こかんじや者を、いつまで籠かごの鳥の質子ちしと思うていると間違

まするぞ。今川家の廂ひさしに巢喰ねくうて満足しておる燕えん雀じゃくではおざ

らぬ。大鵬たいほうの雛ひなは、雛のうちから、大鵬になる心得こころえをもて扱あつ

ておかぬと、飼かい馴なれぬものでおざる)

そう聞いても義元は、年久しく信じきれなかったが、加冠かかんして以来、めつきり大人おとなに見られて来た元康の言行や、初陣ぶりなどを見るごとに、雪斎の言葉が思いあたるのであった。

「よかろう。然らば、大高救援の儀、きつと、つつがなく致すであらうな」

「身命を賭して、必ず御安心の相成るように仕ります。——多年御養育うけました御恩返しの一端にも」

と、元康はいった。

彼の身を、質子ちしとして、今川家に軟擒なんきんしておくことは、政略であつて、慈悲ではない。三河併呑へいどんの策謀ではあるが、同情や善意ではない。

——にも関かかわらず、元康は、それを養育かうを享けた恩とわらう。きょうばかりでなく、常に元康は、義元に対して、恩義を感じている容子ようすを何かにつけて表わした。

義元は、自分の肚の底に思い較べて、ふと、不愍ふびんを覚えた。——これほどまでに、この一質子ちしは、自分を頼り自分の与えている生に恩を感じているのかと思つて。

で、何気なくいった。

「大高の城は、敵地の中だ。まちごうたら全滅、決死の覚悟をもたねば参れぬぞ。——懸命にしてのけよ。もし見事、大高一城の者の生命を救い得た時は、その褒美として、多年、三河におるお許もとの老臣どもが宿望としておる——当主元康の本国帰城をゆるし

てつかわすであらうぞ」

「ありがとう存じまする」

「七歳の折から質子ちしとして他国に在る其許そこもと、お許もとも帰りましたかろうでの」

「さほどにも思いませぬ」

「お許もとはさほどに思わずとも、三河の老臣どもは、やはり主は主として身近に置きたいは山々じやろ。むりもない多年の願い、この度は、大高城において、見事手がらを立てられよ。それをもつて——歸してとらせる」

「はい」

元康は、謹んで命をうけた。そしてまた、義元の誓いにも心か

ら礼をのべ、さが退りかけた。

幕将たちは、多分な不安でさつきから眺めていたが、既に事が決まったので、このうえ充分に用意して行かれよと、大高附近の地理、織田軍の兵質、合戦の心得、小荷駄こにだのことなど、何くれとなく、先輩として事細かに教え合った。

「はい。……はい」

元康は、心得ぬいていることでも、素直に、神妙に、いちいち手をつかえて聞いていた。

ひょうろうじん
兵糧陣

例によつて、信長は、

——狩かり猟に参る。

という触れ出しで、供まわりも極めて小人数だし、支度も軽装のまま、早朝、清洲きよすから野外へ駈けたのであつた。

だが、いつもの狩場近くの山野へ出ても、鷹を放つ容ようす子もなく、弓弦ゆづるを掛けるふうもない。

「鳴海なるみじゃ。鳴海へ」

後方から駈けつづいてゆく者たちは、信長のそういう声を聞いたが、何で遽にわかに鳴海城へ行くのか、信長の気もちは察しられなかつた。

鳴海城で、休息、兼ねて昼の弁当を無造作に喰べ終ると、間も

なくまた、

「丹下たんげの砦とりでへ向え」

と、令を下し、鳴海から国境の砦とりで々々へ接続している軍用路を、駒足のかぎり駈け出した。

徒士かちや小者は、勿論、落伍してしまった。騎馬の家臣ばかりが信長の前後を約二十騎ほど包みながら、一陣の旋風つむじが移って行くように、丹下村へはいった。

「や。何か」

砦とりでの物見は、手をかざしていた。この附近一帯は、今川領と織田領とが、丘一つ河一つ隔てて対峙たいじしている最前線なのである。秋が来ても春が来ても、ここには無事という日はないのである。

「殿！」

楼台の階段から、真下の飯屋へ、物見の兵は、呶鳴った。

ここは戦いくさのない日も、戦時であつた。砦の守将水野みずの帯刀は、

飯屋の武者溜むしやだまりの一隅に、床几しょうぎを置いて、陣刀を立てたまま何か

黙想していたが、

「おう。何か」

右側の幕を揚げて、望楼のほうを見上げた。

「三郎助。何事だ」

「異な砂けむりが見えました」

「いずれの方から」

「鳴海街道なるみにあたる西の方より」

「では、味方であろうが」

「……それにしても？」

不審いぶかるひまに、帯刀たてわきはそこを起つて、もう望楼へ上つていた。

物見は、そこを一步も動かないのが、役目の原則なので、守将にも上から言葉をかけたが、帯刀が登つて来ると、ひざまず跪いて、片手をつかえた。

「……才。なるほど」

うすい黄塵が、見るまに、此方こなたへ近づいて来た。森にかくれ、

また畑の彼方に見え、丹下の部落の端はずれまでかかつて来ると、

「あッ。信長様だ」

帯刀たてわきは、仰天しながら、望楼から駈け下りた。

そして、砦の柵外まで、出迎えに出ると間もなく、一騎、先に飛んで来た。

丹下村の端れに屯たむろしている守備隊の一将だった。

「ただ今、お先触れもなく、清洲城より信長様が、御巡視になつて参られます。お報らせまでに」

あわただしく告げて、伝令はすぐ鞭むちを返して去つた。

それと、ほとんど入れちがいに、砦の山すそには、汗と埃ほこりにまみれた二十騎の主従が、馬を降りて、何やら高声に話していた。

帯刀は、柵門の内へ、

「整列ツ」

と、どなり捨てて、倉皇そうこうと山下まで、駈けて行つた。

その帯刀と、ぶつかりそうに、駒を捨てた信長は、徒歩で、すこし汗で上気した顔に、微笑を持ちながら登つて来た。

余りにも不意である。

この最前線へ、しかも軽装で、予告もなく何で遽かに信長が見えたのか——水野帯刀は尠なからず狼狽した。

ともあれ——

砦の中へ、信長を招じ、守将水野帯刀以下、山口海老丞えびのじょう、柘植玄蕃げげんぼなどの部将も列して、

「いつもながら、御健勝おわに在して——」

と、挨拶を施した。

が——信長の耳には、取つてつけたような通例の機嫌伺いなど

は、聞えもしない顔なのである。

床しょうぎ几を、展望のよい、頃合な所に置かせて、そこから味方の

善照寺の砦、中島の砦、鷺津、丸根の壘るいなどを、地形的に頻りと
按あんじ顔に、

「とんと頑強に見ゆるが、大高城の近況はどうじゃの」

「……はッ」

水野、山口、柘植つげの諸将は、さてはやはりそれがお気懸りで―

―と、信長の性急な日頃の気もちと思ひ合わせ、何かしら、鎧よろいの
下に、汗をおぼえた。

「されば、敵の城内にはもう疾とくに、糧食たくわの蓄えも尽きたはずで
はごさるが、さすがに、衰えた氣勢は見せず、かえって、たまた

ま小人数の奇兵をもって、鷲津、丸根の砦とりでなどへ、夜中、逆襲さかよせを仕掛けたりなどして参りまする」

「水の手は断たつたか」

「水は、城内に、よい井戸があるので、外部の水の手を遮断しても、遽にわかに効はございませぬ。——それに冬ともなれば、雪解ゆきげも蓄えられますゆえ」

「長びくのう」

「……………」

帯たてわき刀は、責められたように、無言で頭ずを下げた。

大高一城を、この附近四ツ五ツの砦とりでで包囲し、完全に糧食の運輸まで遮断しながら、容易に、敵を屈服せしめないでいるのが――

—無能な長陣のように、自責しているところなので——信長のつぶやきが直ぐ胸にこたえたのである。

「所詮しよせん、この分では、年内の落城は覚束おぼつかないかと存ぜられま
す。……で、われわれのみではなく、鷺津砦いとおおみのかみの飯尾近江守だいがくどの

にも、善照寺の佐久間左京さくまささきようどの、丸根の佐久間だいがく大学だいがくどの達も、

一挙に、大高へ攻めかかつて、踏み潰つぶすに何ほどのことがあるう

ぞと、度々、清洲表へ意見をさしあげて、御裁決を仰いでおりま
すが、いつも、わが主君きみのおゆるしがないために」

云い訳には似てるが——と、思いながらも帯刀たてわきがいうと、

「いやいや」

信長は皆まで聞かぬうち、各砦とりでの将士のあせり気味を察して、

「無理いたすな。長陣になるとて 斟酌しんしゃくには及ばぬ」と、いった。

怖ろしく短気に見える信長の一面に、こういう気長な寛度かんどがあるのが、帯刀たてわきには、ふしぎにさえ思われた。

「帯刀」

「はッ」

「佐久間大学、左京、飯尾近江などにも会うたら、そう伝えい。——大高城は、駿河の府中城ではないほどに、余り過ぎた武者ぶるいは、ここでは無用ぞと。よいか」

「はッ」

「そち達——いや砦とりでの一兵たりとも、信長にとっては、大事な生

命ぞ。^{のち}あだにな捨てそ。近く、駿河の田舎公方^{いなかくぼう}が、駿遠三の大軍を誇つて、上洛の企てあることも聞き及んでおろうが」

「かくれない儀——疾^とく承知しております」

「むざと、尾張の国土を、踏み通らせてなろうか。海道の弓取^{ゆみとり}は、義元のほか一名もなしと天下に嗤^{わら}わることとは、信長の生あるうちは忍べぬことぞ。……何の大高ごとき小城一つ」

信長は、遠くを見て、語尾を唇に噛んだ。

仮に。

今川の上洛軍が、西上を決行する場合、どのくらいな兵力をもつて来るか、信長は、もうあらかじめ、概算をつけていた。

彼の領有面積や、常備の兵数から、その留守居を引いても、お

そらく二万から二万五千は欠けまいと思われた。

そこで、自身は？

と、胸のうちで比較してみると、全領土を挙げて、四千内外——そのうち四隣の国境や、留守組をひくと、千五百から二千の兵しか動かせないことが分っていた。

(数ではない！)

信長は、信念している。

しかし、戦いはまた、絶対と行っていい程、寡は衆かしゆうに勝てないものでもある。

今川西上の場合、一たまりもあるまいと、四辺の国は、織田を視みている。——崩れたと見たら、一片の肉に餓狼がろうの寄るように、

分け前を争う敵が、今川と呼応してなだれこむにきまつていた。

「死にがいも、生れがいもある時の潮が眼に見えて来た。お汝らこと

も、生命を惜しめ。ならば散り甲斐のある場所で枕をならべよう」

繰り返すように信長はいつたが、ふと、詠えいたん嘆ここうぶんを口吻から切り

捨てて、

「昨夜おそく、清洲にはいった諜報によれば、三河の松平元康は、

大高の孤城へ兵ひょうろう糧ろうを送り入れよとの命をうけて、駿府表より

立つたとある。——あの三河の冠者は、まだ乳くさい頃より、織

田家にも質子ちしとしており、その後、今川家にも長年養われて、他ひ

人となか中の憂き艱難には鍛練された人間、若年あなどというても侮れぬぞ。

心しておれ。——断じて、大高の兵糧口を固めておろうぞ」

と、いった。

たてわき
帯刀も、柘植玄蕃も、

(何の抜かりが)

といわぬばかり、ただ、黙礼をもつて旨を畏かしこまつた。

信長は、それをいうために来たのであろうか。直ぐ床しょうぎ几を立

つて、砦とりでうち内の士気を一巡見てまわると、ふたたび近侍二十騎

と、次の砦へ駆けて行つた。

その夜は、善照寺の砦に泊つた。次の日は、鷲津、丸根の二カ所を視察し、同じように、将士を激励してまわつた。

わずか、二、三日でも、彼が清洲の本城を離れていることは、

かなりな冒険であつた。正面の敵の来襲は、今、海道の方面にあ

るものの、伊勢路、美濃路、甲州方面の国境たりとも、決して、安心ではないのである。

「よし」

鞭むちを返すと、信長は、四日目にはすでに、清洲にいた。清洲から四方をみ観ていた。

その一行が、帰城したのを見届けると、尾張平野の稲田を、一羽の離れ雁かりのように、東へ東へ急いで行く男があつた。

旅の薬売りのような姿をしていたが、三河領へはいると、どこさくの柵でも、宿場でも、彼の顔は、士分の者なら知っていた。

言葉もかけずに、目礼だけすると、往来の厳しい宿場の木戸でも、黙って通り抜けることが出来た。

鶉殿うどのじんしち甚七なのである。

かつては、山伏で往来していたが、近頃は薬売りとなつて出沒していた。いうまでもなく、三河方の諜報役が、彼の任務だった。甚七の足が、岡崎まで走らないうちに、彼は、或る一宿場にあふ溢れている千駄に近い小荷駄隊と、約二千ばかりの軍勢に行き会つた。

「甚七。どこへ参る」

小荷駄隊のあいだから、彼の姿を見かけて、こう呼びとめた者があつた。振り返つてみると、いしかわよしちろうかずまさ石川与七郎数正であつた。

「やあ、数正か」

甚七は、足をもどした。

石川与七郎数正は、何十頭かの小荷駄隊の一小隊の指揮官として働いているらしく、博^{ぼくろう}勞のように馬臭くなつて、人馬のあいだに何かどなつていたが、直ぐやつて来て、

「久しぶりよなあ、甚七」

「ムム。……誰ともだ」

「おもしろかろう」

「何が」

「おぬしの役目よ」

「ばかな」

鵜殿甚七は、しんから腹が立つように、

「咎^{とが}もないのに、御勘当^{てい}の態になつて、何年も故郷^{くに}の土をふまず、

大小差す身が、山伏になつたり、これこの通り、薬売りのまねしたり……何がおもしろい」

「しかし、諸国の情勢を視^み、危険を冒^{おか}して、敵地と自国を、出没して歩くなど、われわれにはない役^{やく}得^{とく}だ。馬の飼料^{かいば}を徴^{てい}発^{はつ}したり、馬のあいだに寝^ねたり、小荷駄隊も、華やかでないなあ」

「おたがい、陰^{かげ}で働く者があるから、華々しい太刀武者や鉄砲武者に、よい合戦をさせることが出来るというもの。——先ずわれわれは、味方のそれをながめて溜^{りゆう}飲^{いん}を下げるのだなあ」

「時に。織田の領内では、はや固めておろうな。大府^{おおぶ}、横根^{よこね}のあたりは、どんな様子か。清洲から人数を増して来たようかな」

「左様なことは、ここではいえん。——おいッ、気をつけろ、荷

駄馬が一頭、手綱を解いて往来へ外れたぞ」

甚七は、先を急いでいく。

歩いてても歩いてても、両側の並木から民家の廂まで、馬馬馬馬で埋まっていた。

宿端しゆくはす

れや問屋場の附近は、なおさらであつた。ここでは穀

類や乾菜かんさいや、塩、味噌、粉、干魚、

鰹かつおぶし

節などの俵と籠かごと袋

で幾つも山ができていた。

近郷から運輸してくるのは皆、農夫や人夫であつたが、荷駄に積みこんでいるのはみな兵であつた。具足よろいや鎧よろいや、顔までも、白い米の粉にまみれている隊將の姿などもあつた。わき眼もふらぬ將士が、そうしてがやがや労働している中で、馬は悠々ゆうゆうと、あ

ちこちで尿いばりをしていた。

御陣所

と、曲り道の畦あぜに、木札が立ててあつた。畦のつき当りに丘の寺が見えた。甚七が、不用意に、すぐ曲りかけると、

「ならん！」

稲むらの蔭から番兵の槍が二本も出て来た。――が、甚七の顔を見ると、

「あ。どうも」

槍を引いて、目礼した。甚七は畦あぜをかなり早い脚で渡つた。

寺は、本陣となつていた。小さな禅刹ぜんさつである。ここには、乾物や馬の尿いばりのにおいもしなかつた。許されて山門をはいると直ぐ、

松平元康のすがたが本堂に見えた。

本堂の四屏しへいを取り外はずして、元康は、床几しょうぎに倚より、家臣の群れに取りまかれていた。

凶面が一枚、大きく、拡げられてある。評議中とみえて、主なる三河衆の顔はたいがいその周まわりに見うけられた。

さかいよしろうまさちか
酒井与四郎正親。同、小五郎。

まつだいらさまのすけちかとし
松平左馬助親俊。

とりいさいごろう
鳥居才五郎。

ないとうまごじゆうろう
内藤孫十郎。

こうりきしんくろう
高力新九郎。

その他、天野、大久保、土屋、赤根などの人々、多くは若武者

だった。鳥居忠吉のような老臣の白髮鬢しらがびんは、一名も見えなかつた。

「甚七殿が立ち帰りました」

武者のひとりひとが伝えると、主従一かたまりの顔が、絵図面の上から齊ひとしく振り向いた。

「甚七か。待ちかねていた」

これへ——と、元康の軍扇ぐんせんは彼をさしまねいた。

主将の元康を中心に、酒井、松平、高力、大久保、天野などの譜代ふだいは、こもごもに、甚七に質問を発した。

以下——甚七の探ってきた敵状の答えと、誰彼の質問を一束に記録してみれば。

問 「陣地視察中ノ信長ハ、猶^{ナオ}前線ニ止マレルヤ否ヤ」

答 「清洲へ帰城セリ」

問 「出陣ノ様子ハ」

答 「見受ケラレズ」

問 「人数加勢ノ形勢ハ如何ニ」

答 「ナシ」

問 「兵糧入レノ松平軍ガ、近ヅキツツアルヲ、敵ハナオ知ラザルナランカ」

答 「然ラズ」

問 「^{シカ}而モ、加勢モナク、信長ノ出動モナキハ」

答 「彼等ニ、御味方遮断ノ自信アルト見ユルナリ」

問「最モ、手強キ敵墨ハ」

答「驚津ワシツ、丸根ノ二墨ト見ラレテ候」

問「味方、前進猪突チヨトツシテ、勝利ノ分アリヤ無シヤ」

答「断ジテコレ無シ」

——と、いったような応答が、かなり細微さいびにわたって交わされた。

何事にも、大事に大事をとつて、石橋を叩いて渡る主義の元康は、甚七のほかにも、石川左門いしかわさもん、杉浦勝次郎すぎうらかつじろう、同八郎五郎など、側物見そばものみ六名を、ゆうべから今朝にかけて放つておいた。

その物見組の者が、次々に、ここへ歸つて来た。

そして幾分かの観察の差はあるが、大部分は、同様な報告をも

たらしめた。

ただ、甚七を加えて、七名の物見が、完全に意見の相違を呈したのとは、

（前進して、松平軍に勝味があるか、否か）

という問題であつた。

七人のうち、六名までが、

（勝味なし）

と、味方の前進を危ぶんだ。

それは、地形から見ても、人数から見ても、あらゆる角度から見て、大高城へ近づくまでには、味方の全滅を覚悟しなければならぬ条件のみが備わっていた。いわゆる兵法という死地であつ

た。

もつとも、そのために、大高が孤立し、幾度の援軍も、兵ひょうろ糧りやう搬うはん入んにゆうも失敗して、元康が選ばれて来たわけであるから、今さら、ここで二の足を踏む理由はないわけだった。

要は、

(その死地を如何にして破るべきか。死地を生地にするか) にあつた。

「八郎五郎」

「はッ」

杉浦八郎五郎という物見は、元康からふいに呼ばれて、大きな眼を上げた。

「そち一名だの。このまま、前進して味方に利ありという意見を述べたのは」

「左様でございます」

「何をもつて、そう信じたか」

「ふかい理由もございませぬが。鷲津、丸根をはじめ、善照寺、中島、その他数カ所の敵の砦は、とりでそれを聯絡すれば、大きな敵ではあります、ひとつひとつ一箇一箇に見れば、元来、一箇一箇のものでしかございませぬ」

云い方がおかしいので、誰か苦笑をもらしたが、元康は、厳粛になつて聞いていた。

「うむ。一箇一箇。それにちがいない。——して？」

杉浦八郎五郎は、よく舌のまわらないような物云いする男だった。

物見役には、動作も鈍くて、すべてがのろい男だったが、元康は、側物見そばとして、大勢の隼はやぶさの中には、きつと一羽、この鈍どんな鴉からすを交まぜて使った。

「はい。……ですからその、敵のたくさんな砦を、一箇一箇に、力を分けさすように、御合戦を計れば、大丈夫、お味方に勝目があると存じましたので」

やっと、思うことを、そんなふうにいつて、八郎五郎は、額ひたいの汗をふいた。

彼の言葉は、十の考えを、二分しかいつてなかった。

元康はそれを、自分の器量に容れて、すぐ何十倍にもして聞いた。

刮然と、彼の前には、活路がひらけて来た。——死地を生地にするの道がついた。

「もうよい。休息せい。——一同も軍議をやめ、兵糧などつかえ」
元康は、本堂を出て、廻廊をいきつ戻りつ、足馴らししているように、巡つていた。

「首尾よう仕遂げたい」

元康は、合戦の勝敗以上、こんどは功を願った。初陣の時以上、今度は、頻りと、功に逸つた。

府中ふちゆうを立つ時、義元は約した。

（今度の事のみは、首尾よう仕果されよ。それを称^{うと}うて、三河へ
帰国の宿望、かなえて取らずであらう程に——）

元康も、早く三河に住みたいのだった。譜代の古老や、自分を
待つ臣下たちと、共に暮す日が待ち遠しいのである。

「新九郎、新九郎」

廻廊から、突然、元康は高く呼んだ。自然、声^{こわね}音が張っていた。
何事かと、高力新九郎は駈けて来た。どさと、草^{くさずり}摺の響きを
させて、板床へ、ひざまずいた。

「貝を吹け」

元康の眼は、夕焼の雲を山門の梢^{こずえ}ごしに見ていた。

群鴉^{ぐんあ}が、黒く飛んでいた。

「はッ。では」

「出軍の——用意を」

「は」

朱房しゅぶさの吹螺すいらを高く手にもち、高力新九郎は、息いっぱい、吹き鳴らした。

準備。——準備。

貝は、寺内の隅々から、畦あぜを隔てた宿場にまで流れて行つた。默然と、元康主従は、そのまま立っていた。夕焼雲の黒ずんでゆくのを見ながら、時を測はかっているのだつた。

——やがて。

二番貝が鳴ると、出動！そこはかたなく夕闇に揺るぎ出した。

あらゆる準備も心支度もすでに出来ているので、本陣五百余の兵馬が山門を出て行くにも、いと静かに、そして僅かな間に過ぎなかつた。

元康は、身近の十騎ばかりと、駒を宿場の街道まですすめた。黒い陣列は、街道を埋めていた。兵員よりも、荷駄馬の数のほうが多いぐらに見えた。

三番貝は、もう戦気をふくんで、かっかっ 夏々、千余頭の馬と二千の兵の足なみの流れるあいだに鳴りながら行つた。

今村、半田、今岡、横根の宿場宿場を、宵の闇から、まよなか 真夜半に見つつ前進して行つた。

大高城は、もう程近い山地にあつた。大高までの距離はわずか

三十町程しかない。

ここまでひと息に押しして来た以上は。——目ざす城はあれぞ、わき見すな、いかなる邪魔も踏みこえよ！ と、軍馬の前進へ拍車をかけて、号令するのが、兵法の常道であつた。

どう考えたのか、それを、元康は反対に、大高近し！——と、思われると、

「止めよ」

と、駒を抑え、前後の旗本たちを顧みて、

「ひと汗、拭ぬぐおうぞ」

と、いった。

「伝えますか」

石川数正かずまさが、元康の意を疑つて、念を押すと、

「伝えよ、全軍へ」

元康は、ためらいなくいう。

止れ。

止れ。

長蛇の列へ、合図は次々に、伝令されて行つた。大高の城が近づくと同時に、敵の丸根、鷺津とりでの砦も間近なので、二千の兵と、千余の荷駄は、火気を戒めいまし、声もひそめ、極力、密ひそかに進んで来たのであつた。

だが――

ここまで気負ひ抜いて来た将兵たちは、止れ、の命令に、かえ

つて気を挫かれたように、

「や。どうしたのか」

と、がっかりした。

将兵たちの頭に直ぐ思い出されたのは、元康の初陣ぶりを見て以来、定評に考えられている、御主君の石橋を叩いて渡る堅実主義が——またここでも大事をとって踏み止まったものだろうということだった。

慎重主義、堅実戦法もよいが、およそ兵を動かすには戦いの機微というものがある。機は寸間に過ぎるものだし、機を逸したら、すでに戦の勝目はまったくつかみ難いといつてもいい。

「なぜここで」

と、それを考える将兵は、動かぬ前方の本部をながめて、もどかしく思った。

「このまま遮る敵へぶつかって行き、大高へ荷駄隊を押し通してしまえばよいに、時移している間に、鷺津、丸根の敵方は、いよいよ備え立てして、必死に喰止めるにちがいないが」

誰の憂いもそこにあつた。

兵力から見ても、地形から見ても、いずれは無謀な血路を通つて、しかも、迅速の機をつかまない以上——到底、千余駄に積んだ脚の重い小荷駄軍を、大高の城門へ無事に入れることは、知れ過ぎていゝほど、至難な業であつた。

出るのか。

退くのか。

このまま、夜を明かすのか。

司令部の意志がはつきり分らないうちは、止ま^{とど}つていても、将兵たちの心は少しも休んではい^なかつた。

むしろ徒^{いたず}らな武者ぶるいに、

「ちえツ」

と、地だんだを踏む兵もあり、星にいななく悍^{かんば}馬もある。

が、その焦躁は、そう長い時間ではなかつた。前方の伝令は、密^{ひそ}やかにまた、電瞬^{はや}の迅^{はや}さで、合図を伝えて来た。

すすめ。真一文字に！

と、いう令である。

部隊部隊で、采さいを振る風が鳴った。真つ黒な長い人馬が、奔流のように動きだした。しかし、目ざす地点は、大高の城ではなかつた。ここよりは二里も奥の、国境の先の敵地、寺部てらべの城へ奇襲せよ、という意外な命令なのであつた。

「寺部へ、寺部へ！」

口々に云つて励まし合つたが、大将元康のいる部隊のほかは、誰にも、何でそんな敵の奥地へ深く襲よせて行くのか——まったくその夜の闇のように、元康の意中がわからなかつた。

夕立のように、馬も人も、足なみが迅くなつた。

二千の将兵の具足が、足音と共に、ぎツぎツぎツと鳴つた。

千余駄の馬の口輪や金具が、馬のいななきと一緒に、鏘そう々そうと

ひびいた。

それが黒々と縦隊になつて、街道を押しして行くのである。行くほどに間もなく、左手の山に、ゆんで味方の孤城、大高の白壁が見え、さくもん柵門が望まれた。

「オオ、火を振っている！ はざま狭間から たいまつ松明を振っている！」

「味方だ」

「がし餓死に頻している城の者だ」

駈けつけつつ、それを山に認めた松平勢は、誰も彼も、眼がしらが熱くなるのを覚えた。

ここに味方の——千余頭の小荷駄を積んだ兵糧は来たのだ。そして、二千の兵も加勢に。

もう半年以上も、あの孤塁に拠よつて、四面を敵の砦とりでにつつまれて、木の皮を喰っている城方の人々は、この夕べ、

(援軍、近し！)

と、知つて、どんなに歓喜したことか。暮るる空も待ち遠く、城の狭間から首をのばしていたことか。

誰にも分る。お互いは侍だ。しかもその孤塁のうちには、友もいる、骨肉もいる。

おおーい。

と、呼べば答えもしそうな距離なのであつた。だが、援軍松平勢の縦隊は、少しも足なみを緩ゆるめなかつた。

いや、部将も大将元康も、

「急げッ」

と、駒首を駆り立て、旗さし物も馬印も、低く伏せて、

「わき見すな！ 真っ直ぐに。——さえぎる敵は薙なぎ捨てに、突き伏せたら、踏みこえて通れ」

ここは西へ真っ直ぐに、もう四、五里とはない、熱田あつた街道だ。

道は知れているが、進めば進むほど、何で、救援に來た目的の孤城大高を、横に見すてて駈け過ぎてしまうのか、生命は馬前に捨てるものとして來た兵たちも、大将元康の本意を知るに苦しむのだった。

だ、だ、だッ——と、前列がふいに割れた。

「すわ」

と、槍の手は槍を、鉄砲組は鉄砲を、また、手綱を、太刀のつかを、ひしと握りしめたが、

「わき見すな！」

「衝つけ、衝ついて通れッ」

号令は、呶どごう号となつた。

まつ黒な人影が、まんじ卍まんじになつた。隊の後方の者は、通ろうとしたが、通れないのである。もう合戦は、始まっていたのだ。

西側の雑木林から、秩序のない弾たま音おとが、ぱちぱちと聞える。
ほたる赤い螢ほたるのように見えるのは、敵の散兵が、火縄を持って駆けまわる火であろう。

「撃てッ」

組頭くみがしらの声に、松平方の鉄砲もみな折敷おりしいた。

撃つてくる。

撃ち返す。弾木魂たまこだまに、一瞬いつとき、耳がガンとすると、もう兵の胆気たんきはすわっていた。——しかし、気がついてみると、その隊だけ、本隊から置き捨てられていた。

聯絡に、戻つて来た一騎が、

「なぜ撃つ！ わき見すなという令が聞えなかったか、はよう来いッ。進むのだッ」

唳鳴られて、

「まだ進むのか？」

と、隊伍を乱したまま追つて、辛からくも本隊に合することができ

た。敵は、鷲津、丸根の砦とりでを出て、絶えず突風のように奇襲をしかけてくる。それと戦い戦い駆け通るのだった。——そしてすでに、大高の城は、一里余も後に見られ、兵は、国境ふかく、敵地を踏んでいた。

それと共に、気づいてみると、千余の小荷駄と、元康の旗本隊約五百が、いつのまにか落伍していた。

「どうしたのか」

全軍の四分の一にあたる人数だし、大将のいる主隊を見失ったので、松平勢はやや動揺しかけたが、そのうちに、

「寺部を奪とれッ」

と、いう号令であつた。

卒は元より、小隊の組頭ぐらいなところでは、いつも戦は行き
当りばツたりだった。大局のことは何も分らないのである。ただ
采さいのうごくまま、号令によつて血をかぶり、号令によつて突きす
すむ。——もしくは退く——それだけの進退しかなかった。

敵の寺部城は、眼の前に在る。けれどこんな敵地の深くへはい
つて、しかも目的の大高の救援をよそに、何のため無謀な攻撃に
かかるのか。

惑まどいはするが、惑っている間まなどはない。味方の先鋒はもう木
戸へかかり、燃え草を積み、火を放ち、所々の民家をも焼き立て
ているのだ。

火光のなかに、血戦は始まった。寺部の兵が城内から斬つて出

て来たのである。これは織田のうちでも精鋭な佐久間大学の麾下きかのものだ。ここらの砦にいる織田軍の兵は、日頃の退屈を憎んで闘志に満ち満ちていたところでもある。松平勢はかなりの脚きやくそ速くで長途を殺到したばかりなので、

「ござんなれ」

と、ばかり出て来た城兵の戦闘力には、一たまりもなく押し返された。

「三河武士の名折れぞ」

と、乱軍のなかで、人間の声とも思えない声がわめく。

三河武士の名折れぞ。これは三河武士の口癖だった。いや戦国武士のひとしくいった口癖でもある。

戦いくさに敗れるということ以上、敵わかに啜わらわれることはもつと辛い恥
だった。無二無三な苦戦だった。わずかに諸方へ放った火によつ
て、猛烈な城兵の突撃を幾分かくいとめてはいたが、そのうちに、
「鷺津の兵が背後から来る」

「丸根の敵も」

と、いやがうえにも、松平勢は重囲のなかに、乱れ立った。

当然だ！

誰も思った。

大高城の抑おさえとして、大高と対峙たいじしている敵の幾とりつかの砦とりでを、
まるで無視して、奥地へ進んで来たのである。

その上に、寺部へ火を放かけたので、鷺津、丸根の敵は、

「さては、小人数の寺部を目がけて、松平勢は奇襲しかけると見えた」

と、思い、敢えてやり過しておいて、戦い酣たけなわと見るや、退路を断たつて、包囲をちぢめて来たものにちがいない。

「来たかッ。——鷺津、丸根の砦の兵が。——慥たしかにそれか」

石川数正、酒井与四郎、松平左馬助などの部将たちが、口々にあたりの兵にたずねた。駈ちがけ交い駈ちがけ交いながら、物見や足軽頭などが、声を嗶からして告げた。

「かなりの大軍です。鷺津、丸根の兵のみか、善照寺、中島などの砦の兵も、挙げてこちらへ襲よせて来たようでごさる」

聞くと。

石川、酒井などの部将たちは、初めて、合戦の目的を達したよ
うに、

「しめたッ」

「全軍、急速に退け^ひ」

と、槍を高く振って、炎々と焼けている部落の真ん中を駆け通
つて、敵の弾^{たまおと}音も、また、嗤^{わら}う声も背にして、潮のように退い
て行った。

大高城から二十町ほど距^{へだた}った街道の横に、密生した松山が幾つ
かある。

その松山の頂に、物見していた部将が、罅^{こだま}のような声を出し
て、山蔭の闇を見下ろしながら、いちいち報告していた。

——寺部の附近で、火の手があたりましたぞ。

火炎は七カ所程に。

ややしばらく、間を措おいてから。

「鷺津の敵が、寺部のほうへと、駈けつけて行きまする！ 二百！ 三百余り！ ——総勢で、四、五百の兵とみえまする」

山蔭の闇からは、何の答えもない。墨壺すみつぼのような暗さである。物見の声が、また響いた。

「おお！ 丸根の砦ふたとりの人数も。——鷺津、丸根の二一砦ふたとり、今は、兵を挙げて、寺部の大事と、駈け行きました」

そのことばが終ると同時に、山間に点々と燃えいぶりだした松た明いまつが、二十、三十、五十と増して、そこらの山肌を赤く染めだ

した。

「それツ」

兵機をつかんだ一軍団が、真つ黒にそこから駈け出した。それは、寺部へ寺部へと驀まっしぐらに前進するうちに、味方さえ知れぬほど迅速に、熱田街道から横道へ外それて、そこに潜ひそんでいた松平元康の旗下約四百の兵と、千余頭の背へ兵糧を積んでいる小荷駄隊の馬の列であつた。

元康の計つた兵機は、思うつぼに、大高城への道を開いたのである。

たとえ忠烈な二千の三河武士を血草のなかに捨てる気でも、敵の鷲津と丸根の要砦ようさいが、大高への道を抑えている以上、脚の重

い輜重馬しちようばを千余駄も曳いて通ることは、絶対にできない業わざであった。

その出来得ない難役へ、今川義元は、質子ちしを向けたが、元康はその難命よろこを欣よろこんでうけて、しかも見事に為果しはたした。

無数の松明たいまつが照らす道を、千駄の輜重馬は勇みに勇んで大高城へと通った。餓死にせまっていた城門の中へ、その烈々たる火の明りと、千駄の馬の蹄ひづめの音がながれ込んだ時、城内の将兵は、思わず歓呼をあげた。そして自分らのあげる声かぎりの歓呼に、涙をながしていない者は一兵もなかった。

てんき
天機ひとと人

この冬中、国境の小ぜりあいはやや小康を得たかに見えたが、それはかえって大きな動きを取る時の力の準備期であつた。

翌、永祿の三年。

肥沃な海道ひよくの麦は青々とのびてきた。花がちつて、新樹の若葉のにおいが蒸れ立むつて来た初夏である。義元は、上洛軍の出勤を、府中から発令した。

大国今川の大規模な軍備とその旺さかんな行装は、宇内うだいの眼をみはらせた。また、その宣言は、弱小国の胆きもをすくませるものだった。

——わが軍の行くをさえぎる者は伐うたん。

——わが軍の行くを迎えて礼する者は麾下きかに加えて遇ぐうせん。

兵員の実数は、約二万五、六千人と見られたが、称して、四万の大軍とわざと触れて行つた。

それより二日前。

前衛軍の先鋒は、十五日に池鯉鮒ちりふの宿にはいり、十七日には、鳴海方面に近づいて、織田領の諸村へ、放火していた。

天候は、毎日、暑いくらいな晴天つづきで、麦畑の畝うねも豆の花のさいている土も白っぽく乾いていた。

その青空へ。

あちこちの部落の焼ける黒けむりがのぼっていた。けれど、織田領のほうからは、鉄砲の音一つして来なかつた。百姓たちは、あらかじめ、織田家のほうから避難を命じられていたと見えて、

どの家にも、家財一つなかった。

「この分では、清洲も空城あきじろとなつておろう」

今川家の将士らは、むしろ坦々たんたんとした道の無聊ぶりように、武装の
気懶けだるさを思うくらいだった。

大将義元は、十六日、岡崎にはいったので、刈屋かりや地方その他に
は、守備隊と監視兵の配備を厳しくした。

岡崎の城には、松平元康をはじめ、元康の手飼の三河武士たち
は、ほとんどいなかった。——義元の本陣が通過するにあたって、
必ず猛襲して来るであろうと見られている敵の丸根の砦とりでを伐つべ
しと——疾とく前方へ出陣していたからである。

去年。

元康が、大高への兵糧入れに働いた折、義元は、その門出に、
（首尾よう仕果したら、この度こそは三河への帰国の宿望、かな
えて得さすであろう）

と、彼へ約したが、その後、義元はそのことを忘れてもしたよ
うな顔して、今日にいたるまで何の沙汰もなかったのである。

腹にすえかねた三河武士の硬骨な一部には、

（この機会に）

と、義元の上洛をしておに、かくさく画策する動きもないではなかった
が、元康はゆるさなかつた。そして、い唯々として命を奉じ、ふた
たび前線へ出て、まるねとりで丸根砦のてごわ手強い敵を攻撃していた。

静かであつた。清洲きよすの城は、今夜もひそまり返つた天地の中に、いつもの通り、無事な灯ともが点つていた。城下の領民は、

——ああ灯ともが点つている。

と、特にそれを見まもるのだつた。

けれどそれは、今にも襲わんとする暴風雨あらしの前の灯に見えた。

そよとも動かないお城の樹々は、むしろ無気味な颯たいふう風ふうの中心にかかつた時の「死風」の静寂しじまを思わせた。

城内からはまだ、何の布令ふれも領民には出ていない。避難せよとも、抗戦の準備をせよ、ともいわれてない代りに、

(安堵あんどせよ)

という布告もなかつた。

商家はいつも通り店をひらいていた。職人は常の如く仕事していた。百姓も耕作していた。

けれど、街道の旅人の往還は、数日前からぴたと止まってしまった。

それだけに、町はさびしい。何となく落着かないものが漂^{ただよ}っていた。

「西上して来る今川の大軍は、四万という大軍じゃそうな」

「どう防ぐおつもりやら。……織田様では」

「どうにも、こうにも、防ぎようはあるまい。何といても、今川勢に較べたら、十分の一ほどな御人数にも足らぬからの」

町では、不安な顔と顔とが、顔を合わせれば噂であった。

その中を。

きようは、佐々内蔵助成政が、春日井郡かすがいごおりの居城から、
 小人数で清洲の本城へ駆けつけてゆき、きのうは、愛知郡あいちごおり上かみや
しろ社の柴田権六が登城し、おとといは西春日井にしかすがいの下しも方左近かたさこんのしよ
うげん将監、丹羽郡にわごおりの織田与市、海東郡津島の服部小平太、羽栗
 郡栗田の久保彦兵衛くぼひこべえ、熱田神宮の千秋加賀守ちあきかがのかみと——次々におび
 ただしい織田方の将星が、通るのを見た。

退城して、領地の郡へ、引つ返してゆく将もあるが、すくな尠くも、
 何分の一かは、先頃から本城にふみ止まっている様子であつた。

(今が境目——)

と、漠然とではあるが、領主の浮沈を案じている領民は、そう

した将星の頻ひんぱん繁な往来を克明に記憶していて、

（今川家へ降伏なさるか、お家を賭して戦うか、御評議が長びいているのであろう）

と、察していた。

民衆のそういう感覚は、眼に見ない政せいびよう廟まうのことではあるが、

たいがい当らずといえども遠くないところを覚さとつていた。事実、

その紛議ふんぎは、幾日も城内で繰り返されていた。いつの場合でも、

硬軟ふたつの意見は対立するもので、「万全」と「お家大事」を

口にする者は、この際、一応でも、今川家の軍門に降くだることを、

上策として主張していた。

けれどそれは、長い紛議ふんぎにはならなかった。信長の肚はらが先に決

まっていたからである。老臣や一族をあつめて評議をひらいたのは、その肚はらがま構えを知らすためであつて、穩健なる保身の方法や、旧態以下の領土の保持策を訊くためではなかつた。

信長の肚を知ると、「心得て候う」と、ばかり勇躍して、持場へ歸つた将星も多かつた。

信長も、また、

「ここに用はない」

と、努めて彼らを即刻陣地へ追い返した。

従つて、清洲は、平常と変らないほど、静かでもあつたし、特に人数もふえていなかつた。しかし、さすがに信長は、ゆうべも夜半に、何度となく起きて、いくさびきやく軍飛脚もたらの齎して来た報告を披ひらい

たし、今夜も、極めて粗略な夕食をすますと直ぐ、大広間の陣務の席へ着いていた。

そこには、数日来、彼の前を去らずに詰めきっている諸将が、さすがに、沈痛な眉をならべ、織田家興つて以来の国難を、各がその面上にも湛^{たた}えていた。

寝不足でありながら皆、青白く冴えきつた面^{おもて}をしていた。

森^{よしなり}可成、柴田権六、加藤^{ずしよ}図書、池田勝三郎信輝——その他の帷幕^{いぼく}。

席をすこし下つて。

服部^{はっとりげんば}玄蕃、渡辺^{わたなべだいどう}大蔵、太田^{おおたぎこん}左近、早川^{はやかわだいぜん}大膳などの諸

士——物頭^{ものがしらかく}格の人々。

次の間、その次の間にも、勿論家中の重なる者が詰め合っていた。

藤吉郎の如きは、ここから遙か、幾部屋の端にいるのか知れなかった。

なべて息づまるような沈黙が、おとといも昨夜も今夜も占めていた。

不吉なので、この場合、噤おくびにも口になど出せないことだが、心ひそかに、

(通夜のような――)

と、その夜の白い燭しよくと並居る人々とを見まわした者もあつたらう。

「あ。……これは」

代読して、信長へいう前に、柴田権六すらも、顔のいろを変えていた。

「殿」

「何か」

「ただ今、丸根の佐久間盛重もりしげの砦とりでから、今暁より四度目の早打が到着いたしました」

「あ。左様か」

信長は、左の脇きょうそく息を、膝のまえへ置き直して、

「——して？」

「駿河の大軍は、あおみごおり碧海郡の宇頭うがしら、今村を経て、夕刻早くも、

沓掛くっかけに押し迫つて来る様子とござりますが」

「そうか」

信長は、いったきりであつた。眼は広間の大欄間へ行つてゐる。それは虚うつろともいえる眼だつた。

(——さすがに、当惑してお在いでとみえる)

人々は、いかに日頃の彼の剛愎ごうふくに信賴してみても、そう思わ
ずにはいられなかつた。

沓掛くっかけ、丸根といえ、もう織田家の領土だつた。その一線に
散在している数カ所の要砦ようさいが突破されたら、尾州平野は一瀉いっしゃ
千里せんりに清洲の城下まで、ほとんど何の支えもないといつていい。

「いかながなされますか」

堪^{たま}りかねたように、柴田修理権六はいった。

「今川勢は、四万の大軍と聞えます。お味方は、四千に足らぬ小勢。わけて、丸根の砦には、佐久間盛重の手飼が、たかだか七百ともおりませぬ。——今川の先鋒、松平元康の一手のみでも、二千五百とあれば、怒濤のまえの一舟」

「権六、権六」

「夜明けまで、丸根、鷺津が、防ぎ得ましようや否やも……」

「権六ッ。聞えぬか」

「はッ」

「何をいうぞ独^{ひと}り語^{こと}を。——知れたこと、繰り返しても、益はな

い」

「でも」

云いかけるところへまた、廊下走り忙しい取次のあしおと音だった。

わきべや脇部屋の口元で、直ぐその取次が、

「中島砦とりでのかじかわかずひで梶川一秀どの、ならびに、善照寺砦さくまのぶときの佐久間信辰

どのらも、唯今、相前後して、伝令のお使者、早馬でお着。――

御報告の急状二通、お手許まで御披露を仰ぎまする」

と、声も物々しい。

玉碎を覚悟している前線からの報告は、皆、悲壯を極めたものだったが、今届いた中島、善照寺の二陣地から来た飛状にも、

（おそらくこれが、御本城への、最後のつうちょう通牒と相成るでしよ

う）

と、してあつた。

防禦線の味方から本城への遺書にもひとしいその書状にはまた、敵の大軍の配置と明日の彼の攻勢とが予測してあつた。

「もういちど、敵の配置の所だけを読みあげてみい」

信長は、脇きょうそく息を抱いたまま、代読の柴田権六へいつた。

権六は、書状のうちの、箇条書かじようがきになつている部分だけを、信

長に限らず、居並ぶ一統の者へも聞かせるように再読した。

一……丸根砦とりでへの寄手

約二千五百余

主隊長松平元康

二……鷲津砦への寄手

約二千余

主隊長朝比奈主計あさひなかずえ

三……側面援隊三千

主隊長三浦備後守

四……清洲方面前進主力

大略六千余人

葛山くずやまのぶさだ信貞、その他各隊

五……駿河勢本軍

兵数約五千余

柴田権六は、それに云い足して、註釈を加えた。以上の数字に見えるほかに、敵の潜行的な小部隊が何ほどあるか、その点は不

明である。

また、先年来、頑強にもちこたえて来た今川方の大高城が、この際、俄然重要な存在となつて来た。何しろ大高は、御領土内へさんしよく蚕蝕して来た飛び地にあるので、その地の利がものいふとなると、味方の防禦線は、絶えず背後や側面を脅かおびやされなれないわけにはゆかない。

「……………」

「……………」

信長をはじめすべての者は、権六勝家のことばが聞えている間も、彼が黙つて書状を巻いて信長の前へ納めて後も、深沈しんちんとただ白い燭しよくを見まもつていた。

飽くまで戦う！

という方針は決しているのだ。もう評議の余地はないのである。だが、こう手をつかねてなすこともなくいることが一同は苦痛だった。

鷲津、丸根、善照寺などといつても、それは遠い国境ではない。馬腹へ一いちべん鞭すればすぐ届くところなのだ。四万と聞える今川勢の潮のような大軍が、もう眼に見えるここちがする。耳に聞えるここちがする。

「雄々しい、御決心もさることながら、玉砕をとるのみが、武門とも思われませぬ。もう一応、御分別あつてはいかがにござりましょうや。——たとえこの佐渡が、身に卑ひきょうもの怯者のそし誹りをうけま

しようとも、お家維持のためには、なお、御熟考の余地があるものと……押し申し上ぐる次第にござりますが」

沈みきつた座の一方から、憂いに溢れた老人の声が出た。この中では最古参の林佐渡であった。先に、信長を諫めて自刃した平ひららてなかつかさ

手 中務と共に、先代信秀から信長を頼むと遺言された三老臣のうちで、今生き残っている者はもはや佐渡一人であった。

佐渡のことばは、居ならぶ人々の同感と同情をあつめた。人々はひそかに、信長がこの古老の最後の忠言をうけ容れてくれるようにと祈った。

「……はや、何なんどき刻ときじや」

信長は、まるでべつなことを咄つぶやいて、それにうろたえる人々の

眸ひとみを見まわした。

「子ねの下刻げこくにござります」

誰か、答えた。

次の間のほうの声であつた。

それでまた、言葉はとぎれ、夜も更ふけたという気持と共に、一同の姿も沈みかけたが、

「あいや殿。殿。もう一応の御考慮ありますよう。御評議遊ばしますよう。強たつて、佐渡よりお願い申しあげます」

彼は遂に、自分の席をすこし動いて、白髪頭しらがあたまを、信長のほうへすりつけて云つた。

「夜も明けなば早や、お味方の兵も砦とりでも、今川勢の前に、一たま

りもなく潰つぶえて、取り返しをつかぬ大敗となりましょう。——そうなつての上の和議と、一瞬前に結ぶ和議とでは」

信長は、ちらと見て、

「佐渡か」

「はッ」

「老年の身で長座は大儀であろう。もはやここには、談議することは何もない。夜も更けた。退さがつて休め」

「……余りなおことば」

佐渡は、ぼろぼろと落涙した。お家も末と思われたからである。と同時に、役にも立たぬ老人とされたことも口惜しかつた。

「それまでの御決心とあれば、佐渡ももはや御戦意に対し、とや

こう申しあぐることはいたしませぬ」

「するな！」

「はいッ。……しかし、御軍議はなされませ。一昨夜も、昨夜、またきょうも宵から、ただこう大勢が、手をつかねて刻々迫る敵の大軍の報告ばかり聞いていて何といたしまししょう。——出でて戦うならば戦うように。また、籠城遊ばして敵を城下に引き寄せ、て悩ましてくれんとなさるなればそのように」

「そうだ」

「それには、加藤殿や柴田殿が最前披瀝ひれきされた御意見に、この老人も同意にござります。殿には、城を出て決戦すると、動かぬ御意のように存じますが」

「左様」

「四万の敵の大軍に対し、お味方にはその十分の一にも当らぬ小勢。平野に出て戦うことは、千に一つの利もござりませぬ」

「籠城に利があるか」

「まだまだ、城壁にたて籠つてのことならば、そこに何らかの策も講じられましょう」

「策とは」

「たとえば、半月一と月の間でも、今川勢をささえ止めて、その間に、美濃へ、或いは甲府へ、密使をつかわして、好条件の下に援軍を頼むなり、また戦法としても、寄手をなやます工夫となれば、御座辺にも、智謀の士はすくなしとしませぬ」

信長は、天井へ響くような哄こう笑しょうして、

「はははは。それは佐渡、常時の戦法というものじゃ。織田家にとつて、今は、常時か非常な場合か」

「お答えまでもございませぬ」

「十日二十日、わずかな命数を延ばしたところで、持てぬ城は持てぬ。……だが誰がいうた。運命の方向は、人間の眼に、もう最後と見える窮極から転機するものだ……」

「……………」

「按あんじるに信長には、今が逆境の谷底と見えた。おもしろや逆境。しかも相手は大きい。この大お濤なみこそ、運命が信長に与えてくれた生涯の天機いたずやも知れぬ。など徒いたずらに、小城の殻からにたて籠こもつて、

穢きたなき長らえを禱いのろうや。人間、死のうは一定じようじや。そち達の生命も、この度は信長に捧げよ。共に蒼天の下に出て、広々と、振舞つて死のうぞ」

云い断きつて、信長は、すぐその語氣から一転して、

「ちと、誰も彼も、寝不足の面持おももちよの」

微苦笑をもらし――

「佐渡もやすめ。その他の者も、はや眠りについたがよい。まさか、眠れもせぬ程な、小心者はこの中にはおるまい」

と、いった。

そういわれては、寝ないわけにゆかなかつた。実際、一昨夜から十分に寝ていた者は、この中では誰もなかつた。信長だけは例

外に夜も寝、昼寝も撰とつていたが、それも寝所に入らず、仮寝の態ていだった。

「では。明日は明日」

佐渡は、諦あきらめを咄つぶくように、主君へも一同へも会え釈しゃくして、先に退さがつた。

「御免を蒙こうむりまする」

次に。

また次に。

齒の抜けるように、席にいた者は順々に退座した。

やがて信長は、その広い席に、ただ独りになった。やつと、気が軽々となったような面持でもある。

振り向くと、彼のうしろには、二人の幼い少年が凭れ合つて居眠りしていた。小姓の者である。その一人は、さわきとうはちろう佐脇藤八郎といひ、ことし十四の少年で、信長の勘氣にふれて先年放逐ほうちくされた、前田犬千代の実弟だった。

「おとう於藤。……これ、於藤」

呼びさますと、

「はいッ」

藤八郎は、真つ直ぐになつて、口のはたを手の甲で拭ふいた。

「よう寝るやつ」

「御勘弁くださいまし」

「いやいや、叱るのではない。むしろ賞ほめてつかわしたいほどじ

や。ははは、信長もちと眠る——。何ぞ、枕になるものを貸せ」

「このまま」

「そうだ。夜も明けやすうなつたし、うたたね転寝には、よい季節よ。

……おう、彼方の千鳥棚にある手筈てぼこをかせ。枕に……」

云いながら、信長は、身を曲げて、おとう於藤がそれを持って来るま

でひじ肱で頭を支えながら、浮舟のようにからだうか軀をうか泛していた。

文筥ふぼこの蓋ふたには、室町蒔絵まきえの松竹梅の図が盛つてあつた。信長は、

頭を当てがいながら、

「よい夢枕……」

独りでニコと笑いながら眼をふさいだが、やがて、小姓の於藤が、数多くの燭を一つずつはしから消してゆくうちに、信長の微

笑も、雪の解けるように薄らいで、いつのまにやら深々と、いびき 鼾声
 の中の寝顔となっていた。

「殿さまには、御寝ぎよしんなされました……お静かに」

於藤は、侍たちの詰部屋へ、そつと、告げに行った。

「そうか」

と、そこにいる人々も、重苦しい——しかし悲壮な眼いろをも
 っうなずて、頷いた。

もう絶対なものが、誰の胸にも覚悟されていた。

絶対とは、勿論、死以外の何ものでもない。城内は、その夜、
 死を直前に見つめながら刻々夜半を過していた。

「——死ぬはいいが、いったいどう死ぬのだ？」

不安といえ、それだけだが、まだ誰の胸にも、決まっていなかつた。従つて肚のすわり切つていない者もあつた。

「お風邪かぜめしますな」

誰かそつと来て、信長のうえへ、小搔卷こかいまきを掛けて行つた。さいと呼ぶ侍女こしもとであつた。

それから——およそ一刻とき（二時間）ほども眠つたろうか。残燭の灯皿に、油も尽きて、じじじと泣くような音をたてた。

信長は、むくと、頭をもたげ、突然、呼ばわつた。

「さいよ！　さいよ！　……。誰ぞおらぬかッ」

しゅつじん
出陣

音もなく杉戸が開いた。

侍女のさいは、そこから手をつかえて、信長のほうを見、静かに後ろを閉めてまた、間近まで来て両手をつかえた。

「お目ざめにござりまするか」

「ウむ。さいか。……刻限は今、何刻頃？」

「丑うしの刻を、すこし下がった頃かと覚えまする」

「よい機しお」

「なんと御意なされましたか」

「いや、儂みの物の具を直ぐこれへ」

「お鎧よろいを」

「誰ぞに申しつけ、馬にも鞍の用意させよ。そなたは、その間、湯漬をととのえてこれへ持て」

「畏まりました」

さいは心の利きく女であつたので、信長の身近な用事は、平常いっもさいが心をくばっていた。

さいは、信長の心をよく知っていた。さてはと思つたのみで、仰ぎようぎよう々ぎようぎようしく立ち騒さわぎもしなかつた。脇部屋わきべに手枕のまま寝ていた小姓さわきの佐脇藤八郎をゆり起して、宿直とくいの者へ馬の用意を伝え、自分はその間に早くも湯漬の膳部を、信長の前へ運んで来る。

信長は、箸を取つて、

「明ければ、今日は五月の十九日であつたな」

「左様でござりまする」

「十九日の朝飯は、信長が天下第一に早く喰べたであろうな。美味^{うま}い。もう一碗」

「たくさんにお代え遊ばしませ」

「膳に添えた三^{さん}宝^{ほう}の上にあるは何じや」

「昆布^{こんぶ}。勝栗。……ほんの形ばかりに」

「おう。よう気がついた」

信長は、快^{こころよ}く湯漬^{ゆぢ}を喰べ終つてから、その勝栗を二つ三つ掌^てに移して、ぼりぼり喰べ、

「馳走であつた。……さい。あの小鼓^{こつづみ}をこれへよこせ」

鳴海^{なるみがた}湯とよぶ信長が秘蔵の小鼓であつた。さいの手からそれ

を取ると、信長はそれを肩に当てて、二つ三つ手馴しに打って見て、

「鳴るわ。四更のせいにか、常よりもいちだんと冴えて鳴る。……さい、儂のみが一さし舞おう程に、そなた、敦盛あつもりの一節をそれにて調べよ」

「はい」

素直に、さいは小鼓を、信長の手から押し戴いて、調べはじめた。

しなやかな白い掌てから、鼓の音は清洲城の広い間ごとへ、醒めよ醒めよとばかり高鳴った。

「……人間五十年、化転けてんのうちをくらぶれば」

信長は立った。

立つて、水の如く、静かな歩を運びながら、自身、小鼓の調べにあわせて朗吟した。

「……化^{けてん}転のうちを較ぶれば、夢まぼろしの如くなり、ひとたび、生^{しょう}をうけて、滅^{めつ}せぬもののあるべきか」

いつになく、彼の声は、朗々と高かった。今をこの世の声のかぎり——と、謡^{うた}うように。

「滅せぬもののあるべきか。是^{これ}を菩提^{ぼだい}の種と思いさだめざらんは、口惜しかりき次第ぞと、急ぎ、都に上りつつ、敦盛卿の御^み首^{しるし}を見れば——」

誰か。

ばたばたと、廊下を走って来た者がある。宿直とのいの内にあつた侍であろう。具足の音をさせて、板敷へひざまずき、

「御乗馬の用意、整いました。何時いつなど、お召しを」と、いった。

舞の手と足を、とんと同時に止めながら、信長は、声のほうへ振り向いた。

「岩室長門いわむろながとではないか」

「はッ。長門でござります」

物頭の岩室長門は、すでに具足を着、太刀を佩はき、直ぐにも、信長の馬前に立って、轡くつわを持つよう、身支度をして来た。

——が、見れば、信長自身はまだ鎧よろいも着けず、侍女のさいに鼓

を持たせて舞っている様子に、

(おや?)

と、云いたげな、不審の眼を、そこへみはった。

たった今、お表のほうへ、

(御出馬の用意を!)

と伝えて来たのは、取次が小姓の佐脇藤八郎だったし、皆寝不足で疲れているし、神経ばかり尖とがっている際なので、何かの間違いではないのか? ——と、咄とっさ嗟に長門は、自分の早支度と、信長の悠長なすがたとに、戸まどいを覚えた程だった。

いつもは、

(馬ッ)

と、信長がいったら、もう近習の支度が間にあわない間に、飛び出している信長なので、長門はなおさら、意外に思ったのであった。

「はいれ」

信長は、舞の手を、休めはしたが、舞のすがたは崩さずに云った。

「——長門。そちは果報者かほうものじゃ。信長がこの世の名残と舞う舞を、そちのみが見得るぞ。それにて見物候え」

(さてはやはり)

長門は、主君の心を悟ると、自分の抱いた疑いを恥じながら、広間の端へにじり入って、

「御譜代ごふだい、家の子も数ある中に、長門一名のみが、殿の御一世の舞を拝見いたすなどは、御家臣の端と生れて、身にあまる果報。願わくば、長門にも、この世の名残に、謡うたわせていただきとう存じまする」

「うむ。そちが謡うか。——よかろう。さい、初めから」

「……………」

さいは黙つて、鼓と一緒にすこし頭を下げた。長門は、信長が舞うといえ、いつもの敦盛と心得ているので、

人間五十年

化転けてんのうちを較くらぶれば

夢まぼろしの如くなり

ひと度、生しやうをうけて

滅めつせぬもののあるべきか

謡うたっている間に、長門は、信長の幼少の時のお姿から、自分が側近く仕えて来た長年のことなどが、胸のうちに、長い絵巻を繰るように思い出されて来た。

舞う人、謡う人の心と一つになって、鼓を打っていたさい女のじよ白い面おもてにも、涙のすじが燭に光って見えた。しかし、さい女の鼓の音は常よりも冴えて、何か烈しくさえあつた。

——花の袂たもとを墨すみぞめの

十市といちの里は墨衣

今着てみるぞ由もなき

信長は、扇を投げて、

「死のうは一定じよう！」

云いながら、手ばやく、鎧を着け、具足をまとい、

「さい。信長が討死と聞えたなれば、すぐこの城に火を放かけよ。

見穢みぎたのう焼け残すなよ」

「畏まりました」

さい女は、鼓つづみを置いて、両手をついたまま、面おもてを上げなかつた。

「長門。——貝ツ」

「はッ」

長門ながとは、先へ、大廊下を駈け出して行つた。

信長は、可憐いじらしい女童めわらべどもの住む奥へ向い、また、この城に

ある祖先の霊へ対い、心の底から、

「さらば」

と、いつて直ぐ、かぶと胃の緒をしめながら表方へ走った。ぼう――

と、まだ暗いぎょうてん暁天に、出陣の貝は鳴り出していた。

暁の闇は濃い。

雲の断れ間に、こぬかぼし小糠星の光が、まだ鮮やかであった。

「御出陣じゃぞ」

「えッ？」

「殿の御出陣とある」

「真か？」まこと

触れまわる表方の小者。

驚いて駈け出合う侍たち。

それも多くは、台所方の者とか納戸なんどの役人とか、戦場の役には立たぬ留守居の老武士が多かつた。

拳こぞつて、大手の土坡口とぼくちまで見送りに駈け出して来たのである。

それは清洲城内の男の全部といつてよい頭数であつたが、わずかに四、五十人足らずであつた。

いかに、城内も信長の身边も、この際は手薄だつたかが知れよう。

信長がこの日の馬は、月輪つぎのわとよぶ南部牧まきの駿馬しゅんめだつた。若

葉の風暗く、手燭の明りが明滅する大玄関の前から、信長は、螺ら鈿鞍でんぐらをおいた駒の背にとび乗り、八文字に開かれています中門か

ら大手の土坡口へ、鏘々そうそうと、鎧よろいの草摺くさずりや太刀の響きをさせて
駈け出して来た。

「おお」

「殿さま」

見送りにかたまっていた留守居ろうにやくの老若は、われを忘れて、
土下座から声をあげた。

信長も、

「さらばぞ」

と、右へ云い、また、

「さらば——」

と、左へ云つて、暗に、
今こんじょう生の別れを、多年召し使つて来

た老人どもへ云った。

城を失い、主を失った老人や、女童めわらべたちの身の末が、いかに惨みじめなものであるかを、信長は知っていた。——思わず、眼まなこがうるんで来るのであつた。

熱い眼がしらを、じつと、ふさいだ一瞬に、駿馬しゅんめ月輪つきのわは、もう城外へ駈けていた。疾風のように、暁闇を駈けていた。

「殿ツ」

「殿！」

「しばらく」

遅れじと、彼の後から駈け続いて来る人々といえは、物頭の岩い室むろ長門ながとをはじめ、山口飛驒守ひだのかみ、長谷川橋介はせがわき、それに小姓の

かとうやさぶろう
加藤弥三郎、最年少者の佐脇藤八郎。

あわせて、主従わずか六騎。

ともすれば、信長の駒脚に、捨てられもせんと、近習の面々は、
のめり蹠よろめくばかり駈けた。

信長は、後も見ない。

敵は、東に。

味方も前線にあり。

すでにその死処へ行きつく頃には、陽も高かろう。この国に
生れてこの国の土に帰す、実に何でもないことである。永劫えいごうの

時の流れから今日という一瞬を見れば。

信長は、駈けつつ思う。

「あいや！」

「わが君ッ」

突と、町の辻から、叫ぶ者がある。

「おう、森の人数か」

「さん候う」

「柴田権六にてあるか」

「御意！」

「早かったぞ」

賞めて、あぶみだち 鐙立ほに伸び上がりながら信長、

「して、人数は」

「森もりよしなり可成の手に百二十騎、柴田権六が手に八十騎、あわせて二

百余。お供仕ろうずと、控えておりました」

森可成の一手、弓之衆の中に、浅野又右衛門の顔が見え、また、足輕三十人の頭かしらとして、木下藤吉郎の顔も、まごまごして交まじつていた。

雑兵に少し毛の生えたぐらいな藤吉郎の存在ではあつたが、

(いるな。猿も)

ちらと、信長の眼に入った。

彼のその眼は、暁闇の中に気負い立つ二百余の兵を馬上から一眼に見、

(我にこの部下あり！)

と、かがや耀かがやきを加えていた。

敵四万の怒濤へ当るに、数としては、元より一片の小舟、一握りの砂にも足りない兵ではあるが、

(義元にこの部下ありや!)

彼は敢えて問いたい。

将として、人として、ひそかな誇りすら覚えるのだ。

敗るるも自分の兵は、あだには負けない。何ものかを久遠くおんの地上に描きのこして最期の枕を並べるであろうと思う。

「夜明けは近う覚ゆるぞ。——さらば行けッ、続けッ」

信長は、指さした。

そして真つ先に、彼の駒が、熱田街道を東へ駈け出すと、両側の民家の軒ばまで、低く立ちこめている朝霧をうごかして、二百

余の兵は、雲の如く、

「わあアツ」

と、声をあげてつづいた。

隊伍も陣列もない。

ほとんど、われがちなのだ。

およそ一国一城の大將の出陣とあれば、民家は一斉に業を休め
て軒ばを浄め、かりそめの忌み事にも気をつかつてその門出を見
送り、兵は旗幟馬印を護つて陣列を作り、將は威武を飾つて、
一鼓六足、国力のある限りな豪壯の美を押し、国境へ出て行く
のが常であつたが——信長は、恬として、そういう方式や虚飾に
かまっていなかつた。

隊伍すらも充分に整えない早駈けなのである。しかも、死ぬ戦いときまっている。来る者は来い——として彼は先頭を切つて駈けていた。

しかし、落伍する者はひとりもなかった。むしろ、進んで行く程、人数が殖ふえていった。召集が急なので、支度に間に合わなかった者が、飛び入りに横丁から加わったり、追いついて来て、参加するからである。

その鬨とぎの声と登音こえに、明け方の眠りをさまされて、「何か？」

と、路ばたの百姓家や商工の民家では戸を開けた。

そして、寝ぼけ眼で、

「おう、いくさ戦だツ」

とは叫んだが、まだ暗い朝霧の中を、眼をさえぎって駈け通つた先頭の人が、領主の織田かずさのすけ上総介信長であつたとは、後でこそ思い当つたが、誰もその時それとは見なかつた。

「ながと長門、長門」

信長は、鞍から振り向いたが、岩室長門は、騎馬でなかつたので、小半町も遅れている人数の中にいるらしい。

馬首を揃えて、続いて来るのは、柴田権六、森よしなり可成。——それに熱田の町の入口から人数へ加わつた加藤ずしよ図書などであつた。

「権六ツ」

呼び直して、

「宮の大鳥居が早や見ゆる。熱田神宮の大前にて兵を停とめい。信長も参拝して参ろうぞ」

いう間に、大鳥居の下へかかった。信長がひらりと飛び降りると、約二十名ほどの部下と共に、熱田の宮の祠官しかんでもあり、また神領の代官でもあるちあきかがのかみすえただ千秋加賀守季忠が待っていて、

「お早いお着ちやく」

と、すぐ駈け寄って、信長の駒を預った。

「お、季忠か」

「はッ」

「迎え大儀である。祈願な捧げ申したい」

「御案内仕ります」

季忠は、信長の先に立った。

杉木立の参道は、霧しづくに濡れていた。季忠は、御手洗の泉みたらし屋ずみやに立つて、

「お嗽すすぎを」

と、促うながす。

信長は、檜柄杓ひのきびしやくを把とつて、手を浄きよめ、口をすすいだ。

そして、滾こんこん々とあふれる神泉をもう一柄杓ひとびしやく掬くつて、それは

ぐツと飲みほした。

「見よ！ 吉兆ぞ」

信長は仰いでいった。後ろに続く旗本や大勢の兵へも聞えるよ
うにいつて、天そらを指さした。

夜はようやく明けていた。老杉の梢こずえあかねは茜いろの朝陽に染められ、
 暁あけがらす鳥の群れが高く啼いている。

「神鴉しんあだ！」

「神鴉かみだ」

信長に和して、周まわりの侍たちも仰向いた。

その間に。

千秋季すえただ忠よろいは、鎧のまま拜殿に上がって、信長に菅すがむしろ蕙むしろを与え、その前へ、神酒みきの三宝を捧げて来て、土器かわらけを取らせた。

そして、瓶子へいしを持って、信長へ神酒を注つぐようとすると、

「季忠、待て」

と、遮さへぎった者がある。

見ると、柴田権六であつた。

権六がいうには、

「千秋殿には、当熱田神宮の祠官職たるお役目上、神前のおつとめは当然なことながら、いかに御出陣の火急な際とはいえ、鎧具足のまま神酒みきを執つて、拝殿かみずに侍く作法やある。自身、具足を脱いで、衣冠いとまを着ける違いとまなくば、他に神官も居られように、なぜそれらの者にさせないか」

とが咎めると、千秋季忠は、にこと笑つて、

「今のおことばは柴田殿か。御注意はかたじけない。——しかし、鎧具足は神衣でござるぞ。わが神々も遠みよつ御世みよには、甲かちちゆう 冑ゆうを召まされて聖業の途に立たせられ給うた。不肖ふしょう季忠も、きよう御

合戦のおん供に従うからには、大御祖おおみおやたちが具足し給うた御心をもつて心を鎧よろい、私慾私心の功名のためには戦わぬ所存でござる。——武人の甲冑は、故に、神官の衣冠にもひとしい清浄と私
は信じますが」

権六は、黙った。

そして階下を繞めぐつて土下座する二百余騎の将兵の中に、彼も坐
った。

信長は、土器かわらけを干すほ。

拍手かしわでを高く打つて、願文を読んだ。

肅しゆくとして、将兵はみな、低く頭を下げ、各の心の鏡に、神を
映し取って、祈念の眼をふさいでいた。

その時、唐突に、神殿の奥で、甲冑の触れ合う響きがして、二度まで拜殿の梁うつばりが揺れた。信長は、物の怪ものけにでも憑つかれたように、屹きつと眼をつりあげて、

「おお、あれ聞け。信長の祈願をよみし給うて、きようの合戦に、神々はわが軍の上に御加勢ありと覚ゆるぞ。——私心我慾、小功の争いなど、穢きたないき戦いくさすな。勝たば、天あまが下したのため、捨しゃ身しん奉公、負くるも、天が下、恥なき武もの士のふの死に方せよや」

廻廊に出て、こう呼ばわるように演舌すると、士卒も大地から生はえ立って、わあと、信長より先へ、参道を争って駈け出した。

信長が熱田の宮を出た時には、所々から馳せ集まった兵数が、いつの間にか、千に近くなっていた。

信長は、熱田神宮の春しゅんこうもん敲門から南門を出て、再び、馬に乗った。

その日の乗馬つきのわ月輪は、栗毛の牝馬めうまであつたという。後に、信長は愛馬二匹の画を描かせて屏風びょうぶに作らせたが、その中にはこの一頭も描かれていた。

熱田の宮を出ると、それまで、疾風の如くであつた信長の態度は、どこか緩々かんかんたる余裕を示し、駒の背へ、横乗りよこ乗りに身をのせ掛けて、鞍まえわの前輪と後輪へ両手をかけながら揺られて行つた。

もう夜が明けてきたし、雪崩なだれ打つて先駈なだけを争つて行く兵馬の蹙音に、熱田の住民たちは、女子供まで、軒下や辻々へかたまつて、見物していた。

そして信長の姿を、信長と知ると皆、

「あれが今、いくさ軍しに行くお人か」

と、呆れ顔した。

「心もとなや」

「勝ち給うことは、万に一つも、おざるまいげな」

などと囁ささやいた。

清洲から熱田まで、鞍に踏みまたがったまま、一気に駈けて来たので、信長は鞍疲れを癒いやしているのだった。で、鞍の後輪へやや凭もたれぎみに横乗りして、

——死のうは——いちじょう定

忍び草には何としようぞ

いちじょうがた
一定語りをこす夜の

こうたい
小謡など口誦さんでいた。

「や、や」

「あの黒煙は」

町端れの辻まで来ると、兵馬は急に立ち淀んだ。

道を海辺にとつて、浅瀬を渡渉し、山崎、戸部の方面へ出て

行くか、陸地を迂回して知多の上野街道から井戸田、古鳴海へさ

して行くか、行軍の疑問が起つたのと——同時にはるか、鷺津、

丸根の方角と思しき彼方に、二カ所の黒煙が立ちのぼっているの
を見出したからであつた。

信長の眼も、それを見た。

さすがに、ちようぜん悵然と、悲壮ないろを眉にたたえて、

「鷲津、丸根も今、お陥ちたとみゆる……」

大息したが、直ぐ、

「海沿い道は、わた涉れまいぞ。今朝は折ふし満潮の時刻。せん詮なし詮なし。山の手を駈けこえて、たんげとりで丹下の砦まで急ごうず」

と、旗本を顧みて云った。それと共に、彼は馬から降りて、加藤ずしよ図書を名ざし、

「熱田の町人頭がしらがおろう。これへ呼べ」と、いった。

辻の人ごみへ向つて、呶鳴るのが聞えた。町人頭はありや、町人頭出いでよと、兵たちも叫んで廻った。

恐るおそる、二人の町人が、信長の前へすぐ引き出された。信長は、それに向つて云つた。

「そちども、信長を見るは、毎度で珍しゆうもあるまいが、今日は、駿河公方するがくぼうが鉄漿染かねそめた珍しい首をやがて見せて進すすむるぞ。さるほど、一代未聞のこと、信長が領下に生なれた冥みよう加がぞ。曠はれの合戦、高きへ上つて見物ないたせ。それもただではおもしろうない、町頭がしらより熱田中へ触ふれなまわして、五月の菖蒲しょうぶ幟のぼり、七夕たなばたの門竹かどたけ、その他、何にてもよい、敵の遠目に旗差物と見ゆるように仕構しえて、木々の梢も、丘の上も、紅白ぬのその他の布ぬのをもつて翻へんぽんと空を埋うめよ」

「はい」

「心得たるか」

「ささやかな御奉公。致しまするでござります」

「よしッ」

半里ほど軍馬を進めてふり向くと、熱田の町には、無数の旗や幟のぼりがひるがえっていた。——それは清洲の大軍が、熱田まで出動して、兵馬を休めてでもいるように見えた。

ひどい暑さだ。

陽ひが高くなると、ここ十日以上も雨のなかった大地は、ぼくぼくと馬の蹄ひづめに掘られて、その白い埃ほこりが皆、全軍の兵へかぶって行った。

後に古老の語り草にもいわれたが、この日、十九日の暑気とい

うものは、まだ夏浅い五月ではあつたが、十数年来なかつたほどな暑氣だつたという。

山崎を越え、井戸田村の野道までかかると、

「やッ、敵ッ！」

「物見かッ」

と、突然、陣列が騒いだ。

昼顔の花が白つぽく見える野藪のやぶの蔭から、ふいに一人の破具やれぐそ足くの男が飛び出したのである。男は、包圍されると直ぐ、槍を高く、直線にさし上げて、抵抗しない意志を示し、

「これは、甲州の名ある侍が成れ果てし浪人者で候。——織田殿に御意得とうて、わざと御馬前に参じまいった。敵方の者あやまと過り

下されな」

大音でいった。

信長は、旗本や兵の頭越しに、

「誰にてあるか」

「おお」

と、遠く見つけると、浪人は槍投げ伏せて、大地へひざまずいた。

「武田殿が御内みうちにて、原美濃守みののかみが三男、仔細そうろうな候て、鳴海の東落合に、年ごろ佗住居わびな仕る桑原くわばら甚内じんないともうす者でござる」

「ほ、原殿が子か」

信長は、小首をかしげた。

「して、これへの用事は」

「されば、父美濃守に申しつけられ、自分幼年中は、駿河の臨濟寺にあずけられ、かつじき 喝食の修業いたしておりましたれば、じぶのた 治部

ゆうよしもと 大輔義元殿がお顔はよう見覚えております。今日の御決戦、

いずれは乱軍、さそうら 左候えは、それがし御陣借ごじんがりな申して、必ず、

駿河の大輔殿が帷幕いばくに迫り、鉄漿首おはぐろくびを打ち取つて御覧に入れ奉

らんの所存。——願わくば、この槍一筋、あわれお拾い下されませぬか」

「拾おう！」

信長は、野人のように、無造作な大声でいって、

「甚内とやら、甲州武士の見とおしでは、きょうの合戦、信長勝

つと見るか、義元優まされりと見るか」

「お答えにも及び申さぬこと。御勝利、疑いもござりませぬ」

「理由は」

「駿河公方の年来の驕きょうまん慢」

「それだけか」

「四万とは号するものの、敵の布陣の拙せつ」

「ウム」

「また、義元殿が本陣は、昨宵、沓掛くつかけを出て、今朝からの暑氣

に、人馬の疲労はもとより、惰氣を生じおるべしと存ぜられます。

——何となれば、清洲の御人数は余りにも小、彼の驕慢は、すでに、戦わずして勝ったかの如く思いなしておるやと思われまされ

ば」

信長は、心のうちで、

(この男、使える)

と、思つたらしく、鞍つぽを叩いて、

「いみじくも申した。信長の見るところと合致する。即座に、旗本へ加わり候え」

「はッ、かたじけの忝う存じます」

甚内は、人数のうちへ、飛び込んだ。道はやや低く、だんだん畑を駒の頭かしらさ下がりさに駈けなだれた。

一条の河があつた。

水は浅く、踏み渡るのも惜しいほど澄んでいた。信長は、顧み

て、

「この河の名は？」

「たず訊ねると、汗ほこりと埃を寄せ合つて犇ひしめきつづく旗本の中から、毛も

利小平うりこへいた太が、

「おうぎがわ扇川にて候」

と、答えた。

信長は知っていたが、わざと答えさせたのである。さつと軍ぐんせ扇んをひらいて、後方へ振つて見せた。

「末広川か。さい先よし。かなめも間近ぞ。渉わたれ渉れ」

死地へ向つて、急いでいるとは知りながら、何か、華々しくさえあつて、後ろ髪を引かれるような暗い心地は少しもしないので

ある。

ふしぎなのは、信長という大将のそうした魅力であつた。彼に従つて行く千余の人間は、ひとりも生きて帰ろうとはしていないのに、なぜか、絶望的ではなかつた。

絶対の死と。

絶対の生と。

それは二つで一つだつた。信長は、誰もが最も迷いやすいその二つの手綱たづなを一つ手につかんで先へ駆けていた。兵の眼から信長の姿を見ると、それは勇敢な死の先駆者にも見え、また大きな生と希望の先達せんだつとも仰がれた。いずれにしても、この人の後に従つて行くからには、どういう結果になつても、不平はないという

固いものが一軍を貫つらぬいていた。

死のう。死のう。死のう！

藤吉郎すらも、それしか、頭の中になかった。

駈けまいとしても、前も後もみな駈けて行くので、怒濤につつまれたように、足も地に止めている間はなかった。また、かりそめにも彼は、部下三十人の足輕ひきを率ひきいている小隊長なので、いくら苦しくなっても、弱音はふけなかつた。

死のうぞ。死のうぞ。

平常、細こまごま々と女房子の口を糊のりするに足りるほどな小扶持こぶちをう

けている部下の足輕までが、皆、はッはッあえと喘はらぐ肚はらの底で、無言にそういつている血の音が、藤吉郎の肚にまで響いてくる。

こんなにも人間が皆、よろこ歡んで生命いのちを捨てに行こうということが、
いったい人間の世にあり得ることか。——あり得ないはずのこと
が、ここでは事実行われているではないか。

ふと、藤吉郎は、

(しまった！)

と思った。

おれは飛んでもない大将に仕えてしまった、と気がついたので
ある。自分の眼で「この君なれば」と、見込んで奉公したその眼
に狂いはなかったが、何ぞ計らん、それはかくも兵たる自分らを
して、歡び勇んで死地に飛び込ませる人であった。

(俺にはまだ、世の中に、やりたい事がたくさんある。中村には、

おふくろも残っている！)

正直、藤吉郎は、そんなこともちらちら考えた。しかし、それは一瞬の頭のなかの明滅である。一千の兵馬の足音と、炎天に焼けきつたよろいぐそく鎧具足の音は、ぎツ、ぎツ、ぎツ——と、鳴り揃って、それが皆、

死ねや。死ねや。

と、聞えるのだった。

陽に燃え、汗にぬれ、埃ほこりをかぶった藤吉郎の顔は——いや全軍の将兵の顔は皆、やつがしらみたいになっていた。どんな必死の場合でも、頭のすみに、何か余裕といったような、のんき暢気を残している質たちの藤吉郎も、きょうばかりはそうして何時いつの間にか、

戦う！

死ぬ。

それしか真つ向に考えてない鉄甲のような、ふしやくしんみょう不惜身命になりきつて進軍していた。

小山、また小山と、一つ一つ踏み越えて行くほどに、視野の彼方の戦雲の煙は、次第に濃く近く見えて来た。

「やつ、味方らしいが？」

丘道の上へ、軍の先頭が出た時である。血まみれな傷負が一人、よろ這ばいながら彼方より駆けて来て、何か、意味の聞きとれない絶叫をあげながら近づいて来た。

その兵は、丸根から落ちて来た佐久間大学の郎党であつた。

「主人佐久間殿も、敵の大軍と、四方から焼き立てられた炎の中で、勇ましい御最期をとげられ、同じ時刻に、わしづとりで鷺津砦の飯尾近江守殿にも、華々しゅう、乱軍の中に討死と聞えました」

信長の馬前へ、曳かれて来て、その郎党は、ておい傷負の苦しげな呼吸を、自分で励ましながら告げた。

「ひとり生きて、その場を去るのも、面目なしと存じましたが、主人大学のいいつけで、お味方へ、右の次第、お知らせまでに、落ちて参りました。——落ちて来るうしろに、天地も揺ゆるがすばかり、敵の勝かちどき鬨が聞えました。鷺津も丸根もあの辺り、すでに眼に見えるもの耳に聞えるものは、敵軍でないものはござりませぬ」

聞き終ると、信長は、

「於藤、於藤」
おとう

と、旗本の中へ云つた。

佐脇藤八郎は、年少なので、大勢の強つわもの者ものばらの中に、埋うずまっ
 ているように交まじつていたが、信長に呼ばれると、

「はいッ」

と、喜び勇んで、主君の鎧あぶみの側へかけ寄つてきた。

「お召しでございますか」

「於藤か。清洲を出る折、そちに預けおいた数珠じゆずをこれへ」

「お数珠ですか」

藤八郎は、主君のそれを、もし乱軍の中で、落しでもしてはな
 らないと、重責を感じて持つていたらしく、旗風呂敷にくるんで、

鎧の上から斜めに掛けて、固く背負いこんでいたが、その結び目を解いて取り出すとすぐ、

「御免」

と、馬上の信長へ捧げた。

信長は数珠をうけ取ると、自身の肩から斜めに胸へ掛けた。それは銀色の大数珠で、彼の着用している萌黄もえぎ緘おどしの死の晴着を、なおさら壮美に見せた。

「惜しや、近江も大学も。死出は共に今日の日ながら、信長が働きを、一眼見せもせぬ間に先へ死なしたるは！」

馬の鞍上に、信長は、居住いずまいを正して、そう云いながら、合掌した。

鷲津、丸根の黒煙は、火葬場やきばのようになお、彼方の空を焦がしていた。

「……………」

凝視の眼を、ややしばらくして、刮かつと後ろへ向けると、信長は、われも忘れたかのように、鞍つぼ打つて、

「きようは、永えい禄ろく三年、五月十九日にてあるぞよ。信長はじめ、

そち達の命日と覚ゆるなれ。平常微禄を与え、これとてよき日も見せぬまに、今日の武運にめぐり合うも、信長に隨身なしたる宿命とこそ思ひ候え。ここより一步先へ従い来る者は、信長に生命をも与えくれたる者と見ん。さはいえなお、今生に未練ある者は、はばか憚りなく立ち退くがよし。——如何にや、各」

高らかにいうと、

「なんとて！」

異口同音に、将兵は応じた。

「わが君をのみ、死なすべき。御無用なお訊ねごと」

「しからば、迂愚うぐなる信長に、全軍みな、生命いのちをもくるるか」

「仰せまでもない儀」

「——ならば！ 者どもツ」

大きく、馬腹へ一鞭くれて、

「来いッ。つづけッ。今川勢は早やすぐそこぞ」

先駆する信長の姿は、全軍の駈ける埃ほこりにつつまれて行った。そ

の埃も、朧おぼろな馬上の影も、何か、一瞬神々しくさえ見えた。

この一期いちご

道は山間やまあいへ。また、低い峠を越えて、いよいよ国境線へ近づくと共に、地形は複雑になつて来た。

「おツ、見えた」

「丹下たんげだ。丹下の砦とりでツ」

喘あえいで来た兵は、口々に云つた。鷺津わしづ、丸根の砦の二つまでが、すでに陥おちた後なので、その丹下もどうあろうかと、案じ来た眉がみな晴れた。

丹下はまだ支えていた。その味方は、健在だった。信長は着

くと直ぐ、守將の水野忠光みずのただみつへ云つた。

「もはや、守備は無用。かような小さい殻からは、敵へ投げ与えてもよし。信長の軍が望むところのものは、他にあるぞ」

その兵力も、すべて、前進軍のうちに加え、休息もとらず、さらに善照寺ぜんしやうじの砦へと急ぎに急いだ。

そこには、佐久間信辰のぶときの守兵がいる。信長の姿を迎えた刹那、砦の兵は、わツと声をあげた。歓呼ではない、半ば、泣いて揚げたような悲壮な動揺どよめきだった。

「おいでられた！」

「殿が」

「信長様が」

とかく信長とはいかなる大将か、自分らの主君でありながら、

まだ端の端までは分りきつていなかったのが事実である。この孤
 塁に討死と、覚悟をきめていたところへ、突とつとして、信長自身が、
 出馬して来たことが、意外の余り、兵をして感泣させたのだった。

「御馬前で死ぬものなら」

と、みな奮ふるい立った。

星崎方面へ突き出して働いていた佐々 隼さつさはやとのしよまさつぐ 人 正 政 次も、

三百余の手勢をまとめて、信長の旗本へ集まって来た。

信長は、砦の西の峰に、一応それらの兵をまとめて、人数を点
 呼した。

この暁あけがた方、清洲の城を出た時は、主従のわずか、六、七であ

ったものが、今ここで閲えつすれば、約三千に近い兵が数えられた。

号して、五千と称した。

信長は静かに思った。

これこそは、尾張半国のわが領土のほんとの全軍であると。留守も後詰ごづめもない、織田軍の全部はこれきりなのだ。

「本望！」

何かしら微笑された。

そしてもう指呼しこのうちに見える敵今川の四方の布陣と、その氣勢を見るべく、しばらくの間、旗幟きしをかくして、峰の一端から形勢を展望していた。

浅野又右衛門の弓隊は、その本陣からやや離れた山陰やまかげの腹

にかたまっていた。弓之衆ゆみのしゆうの一隊ではあるが、今日の合戦に、矢交ぜやまの戦いなどはないと見越して、みな槍を持っていた。

その中に、藤吉郎の率ひきいる三十人の足軽小隊も交じっていた。休息ツ——という声が、部将からかかると、藤吉郎も、自分の組の者へ、

「やすめ！」

と、号令した。

はツと、みんな大きな息をつくと、ほとんど誰もが一緒に、尻もちつくように山陰やまかげの草の中へ、腰を落した。藤吉郎は、湯気とうきの立つ顔を、雑巾ぞうきんのような手拭で、ぐるぐるこすっていた。

「おいツ、誰か、おれの槍を持っていてくれんか。この槍を」

彼がどなると、坐つたばかりの部下のひとりが、

「はッ」

と、起つてきて、彼の槍を預かつた。そして藤吉郎の歩いて行く方へ、後から尾ついて行くと、

「来んでもいい。来んでもいい」

「組頭、どこへお出いでになるんですか」

「供は無用。糞くそしに行くのじゃ、くさいぞ、帰れ帰れ」

笑いながら、崖がけみち道の灌かんぼく木の中へ、沈んで行つた。

彼の部下は、藤吉郎のことばを冗談と思つたのか、佇たたずんで彼の行方を見送つていた。

藤吉郎は、南向きの山の傾斜を少し降りて、山鳥が土を浴びる

場所でも探すように、頃合な所を見つけると、悠々、腹帯を解いてしやがみこんだ。

実をいうと今こんぎよう 暁の出陣は、実に急速だったので、身に具足を着ける時間がやつとあつたくらいで、雪せつちん隠にはいつて腹工合を整えるいとま違すらなかつたのだ。で、清洲から熱田、丹下と駈けて来るあいだも、どこかで軍馬を休めたら、まず何よりも毎日習慣の物をきれいに脱して心おきなく戦いたいものだと思つていたので、今その思いを果しつつ、息やすみながら青空を見ていると、何ともいえない爽快を覚えた。

しかし、戦場の慣いで、そうしている間も、油断はならなかつた。対陣の場合など、よく敵が陣地を離れて、野糞しているのを

見つけると、戯れ半分にも、

「あいつを射止めてやろう」

などという気が起るもので、そういう経験は藤吉郎も持つてい
るから、青空ばかり眺めて、恍惚ともしていられた。なかつた。

やますそ

山裾

から二、三町ほど、

先へ眼をやると、

黒末川くろすえがわの流れが

帯のように蜿うねつて、知多ちた半島の海へ注そそいでいる。

その河畔に、一群の兵が陣取つていた。旗印をよく見ると、

味方である。味方の

梶川かじかわかずひで一秀の陣だ。

そこから直ぐ海口の方へ寄つて鳴海なるみの城がある。これは一時は

織田で墜おとしたが、その後また、駿河勢力に蚕さんしよく蝕しよくされて、今で

は敵の岡部おかべもとのぶ元信が固めている。

また、黒末川の東岸から南へ一筋の街道が白く見える。鷺津は、その街道の北側の山地にあり、もう焼かれ尽したか、余燼よじんも力なく、いちめんいっめんに野路や海辺を煙らせて見える。

その附近の畑や、部落のまわりに、虫のような小さい人影や軍馬がたくさん見える。山の手のほうに拠よっているのが、今川方の將朝比奈主計あさひなかずえの軍勢であり、街道よりに陣しているのが、三河の松平元康もとやすの兵と見えた。

「たくさんいるなあ」

藤吉郎は、小国の兵馬の中にばかりいるせいか、敵の大規模な兵力を見ると、よくいう雲霞うんかの如く——という言葉がそのままに思い出された。

しかも、松平、朝比奈などの軍は、ほんの敵の一支隊であることとを考えると、

「なるほど、信長様の御決心も、これは当然だわい」

と、思った。

いや他人事ひとごとではない。

自分も、この世に糞をひるのも、今が最後のものと思った。

「人間て妙なものだなあ。これで明日はもうこの世にいないのか」
そんなことまで考えたりしていると、ふと誰やら下の沢のほうから、がさ、がさ、と、灌木をかき分けて上って来る者がある。

「ヤ、敵？」

戦場でのこの直感は、ほとんど本能的にすぐ頭を突きぬくもの

だった——敵の物見ものみが信長の居陣きよじんの背後を探りに来たものと、彼はすぐ考えたのである。

忙しげに腹帯締めて、起ち上がると、沢から攀よじ登って来た顔と、灌木の中からふいに起った彼の顔とが、云い合わせたように双方から見合った。

「やあ。木下」

「おっ？ 犬千代か」

「どうした」

「おぬしこそどうした」

「どうもしない。御勘気ごかんきをうけて以来、牢人ろうにんして遊んでいたが、

殿お討死を覚悟の御出陣と見て、お供に馳せ参じて来ただけのこ

と」

「そうか、よく来た」

藤吉郎は、眼を熱くしながら、相手の側へ寄つて手をのばした。それは旧友前田犬千代。握りあう手と手の裡に、二人は万感をこめていた。

平常かかる折もと、心がけていたのであろう。

犬千代の鎧よろいは華やかだった。小貫こぎねから緘おどしまで新しいので、燦さんと眼らんを射る。

そして肩には、梅鉢うめばちの紋打った旗さし物を翳かざしているのだつた。

「よい男振り——」

藤吉郎すら眺めた。

ふと、後に残して来た寧子ねねを想い、彼を考え、そして自分の身に帰って、

「以来、どこにお在いでたか」

「佐々殿さつきの舎弟、内蔵助くららのすけなりまさ成政どのの好意で、成政どのの乳人めのとの田

舎で、時節を待つておつた」

「御勘気をうけて、追放されても、他家へ随ずい身の心も抱かずに」

「もとより一一ふたごころ心はない。たとえ御追放はうけても、殿ごせつの御

折檻かん、この犬千代を真実、人間にして下さおほろう思めしし召めしと思えば

むしろありがとうて」

「むウ、むウ……」

涙もろい藤吉郎は、もう^{まぶた}瞼を熱くしているのだ。今日の合戦こそ、織田の玉砕であり、全軍一致の戦いと分つていながら、旧主を慕つてこれへ来た友の気もちが、彼には^{たま}堪らなくうれしいのであり、そしてともすれば瞼の熱くなるわけであつた。

「いや、よく分つた。それでこそ前田犬千代。殿は今、この上で今朝初めての御休息、今のうちだ、早く来い」

「待つてくれ、木下。——だが俺は、御前へは、出ないつもりだ」
「なぜ」

「この際だから、一兵でもと、御勘気をゆるして下さろうなどと
いうつもりではないが、そんなつもりで来たかと、^{そくしん}側臣に見られるのが嫌だ」

「何をばかな。皆死ぬのだ。おぬしも、御馬前で死ぬ気で来たのではないか」

「そうだ」

「しからば、何の斟しん酌しゃくもいるまい。人の思わく、世の口くちの端はなどは、生きている上のことだ」

「いや、黙って死ねばいいと思う。それで俺は本望だ。——殿がゆるして下さいるも下さらぬもない」

「それもそうか」

「木下」

「む」

「しばらく、おぬしの陣場へ、潜ひそましておいてくれ」

「かま関わぬが、俺の組は、足輕隊の中の三十人組。その武者振りでは目立つな」

「こうしていよう」

そこらに落ちていた馬の腹帯らしい古布を、犬千代は頭からかぶつて、足輕たちの木下隊へ這いこんでいた。

すこし身伸びをすれば、そこからでも信長の床しょうぎば几場がよく見

えた。信長の高い声すら風の加減では聞えてくる。今、彼の前に

は、佐々さつさはやとの隼人 正 政次が、何やら、命をうけているらしく

頭ずを下げていた。

「——そちが手勢を引つさげて、敵の鳴海なるみを横合から突き崩して見せると申すか」

信長の声である。

政次は、それに答えて、

「鳴海乱れたりと見えましましたれば、殿には、無二無三、黒末川に
そうてお取りかかりなされませ。そして、敵の朝比奈軍を突きや
ぶり、松平元康を葬れば、駿河殿の前衛は全からず、義元の本陣
へまでも、長驅、迫り得るかと存じまする」

「よしッ」

信長は、断を下して、行けッと言葉に力をこめて云った。そし
て佐々政次が、すぐ起ちかけると、

「おくれもあるまいが、隼人の手勢のみではちと不足。千秋千秋。
そちも行け」

旗本のうちから名指されたちあきかがのみすえただ千秋加賀守季忠が、黙礼したのみで、床几場から立ち去ると、政次の姿も、もうそこに見えなかつた。

いや、見えないといえ、藤吉郎の蔭にかがんでいた犬千代も、いつの間にか、見えなくなっていた。

「しばらく！　しばらく！　佐々殿しばらく。千秋殿しばらくお待ちをッ」

大声をあげながら軍馬の後を追いかけて来る者があつた。

今、信長の前を退さがつて。

そしてこれから短兵急に、敵の鳴海へ奇襲すべく、善照寺の峰下から間道へと、疾風はやてのように通りかけた佐々政次、千秋加賀守、

岩室いわむろしげよし重休などの三百余人の決死隊なのであった。

「止まれッ」

隼人正政次は、
はやとのしょう

「誰だ？」

馬上から振り返った。

千秋、岩室の二将も、

「何者か？」

怪しんで、辺りへ云った。

もう決死の崖ぶちに足をかけている兵である。いかに覚悟の前
といえ、眼はつり上がっている。心の平へいこう衡はとれていない。何
者かと問えば、何者か？ と、同じように動揺どよめき惑うばかりだ

つた。

「御免ツ、御免ツ」

列の中を、こう叫びながら、掻き分けるように前のほうへ、駆け抜けて来た者がある。

「やツ？」

誰の目にも、すぐとまったのは、その若い武者の翳かぎしている旗は差物たさしものの梅鉢うめばちの紋であった。

「おッ。於おいぬ犬ではないか」

佐々隼人はやとが、そういった声を目あてに、

「犬千代でござります」

と、その馬前へ来て、槍と共に大地へ伏し、

「お伴れください！」

犬千代は、叫んだ。

隼人は、彼が今日あることを、意外とはしなかった。弟の成政から、常々、それとなく噂も聞いていたからである。

(だが、御勘気の者を)

と、岩室、千秋のふたりにはばか憚られて、すぐ答えもし得なかった。すると、岩室重休が、

「さすがは！」

と、共鳴して、

「さしつかえもおざるまい。今日という今日においてはは」

「同意同意」

千秋加賀も、大きくうなずきながら、何のためらいもなく云つた。

「死出の友よ。一人でも多いは楽しい。於犬どのの心底、弓矢の神も照覧。佐々殿、彼のねがい、許しておやりなされ」

「かたじけない」

隼人は、犬千代にかわつて、思わず礼をいった。そして馬上から声にも眼にも思いをこめて、

「ゆるす、ゆるす。物の見事に働かれよ」

「ありがとうございます」

犬千代が起つと、同時に、三百人の縦隊は、再び悲壮な眉と唇くちに、一死を見つめながら、白昼を真っ黒に駈けていた。

やがて——

鳴海城の擲手からめての方角に、突貫とつかんのどよめきが揚あがった。

無理押しに、押し攻めたのだ。

無二無三、

わあッ。わあッ。

と、聞える声こえつなみ海嘯のうちに、前田犬千代の声も交じっていた

のである。

だが、程なく。

三百の決死隊が前進したばかりの間道を、たった、四、五名の兵が、火の玉のように血まみれとなって——そのうち一人は騎馬で、善照寺の方へすッ飛んで行った。

信長の陣へは、

(全軍、あらまし、全滅)

が伝えられた。

たった今、信長の前を去つて、まだ眼の底に姿も残っている佐

々 隼 人

さつさはやとのしやう

正 政次、

岩室

しげよし重休、

千秋加賀守らの将もみな、

枕をならべて戦死したことが、嘘のように、報告されたのであつた。

佐々、千秋などの率ひきいる奇襲隊が、鳴海城の搦手からめてを衝ついて、

その一角を破つたという合図を見たらすぐ、信長は正面から全力をもつて当り、一気に鳴海を落して、敵の側面勢力を崩し、一方味方の足場とする作戦であつたのである。

で、彼はもう、全軍をひきいて善照寺の山を降り、

「今にも」

と、戦機を待ちかまえていた出鼻であつた。

ところへ、

「——味方は総敗れ、佐々、千秋、岩室殿にも、前後して、討死なされました」

と、引つ返して来た^{ておい}傷負から聞いて、彼は、いまさらのように、「最早か」

と、思わずいった。

死の無造作。死の早さ。嘘か事実かを疑う^ま間もないくらいだつた。疾^とく、こうとは覚悟の前ながらその慌^{あわ}ただしさに、さすがに

彼も胸騒いだ。

「む、むウ！ そうかつ」

あぶみ
鐙に踏み立って、

「者どもツ」

眉は、まゆずみ黛で描いたように、濃く強く見えるほど、凄まじいその相好そうごうの皮膚は、冴えて、血の気も見えなかった。

「一刻ときまえには、佐久間大学、飯尾近江。今はまた、佐々、岩室、千秋なんど、信長の先駆けして、冥途よみの前触れに立つたるぞ。憎や、小賢こぎかしの敵めら、いで信長がふみ潰つぶして、先駆けの精しょうり靈りょうどもに手向たむけせん。——つづけッ、信長に！」

四顧しこして、大声にいうと、馬首を敵地へ向けて、駈け出そうと

した。

「あいやツ」

「殿ツ」

「逸^{はや}り給うな」

「しばし——しばしの程」

池田勝三郎、柴田権六、林佐渡、その他の旗本たちは、いちどに、^{よろい}鎧の扉を、どつと彼の馬前に作つて、

「これより先は、^{どろた}泥田の^{あぜ}畦や狭き^{やぶみち}藪道。一筋押しの御先駆は、
^{あたら}可惜、無駄にお^{いのち}生命をすてに逸^{はや}り遊ばすようなもの。——また、
 織田家中には、殿のほか、人もなきに似たり。おとどまり候え」

「まずまず……」

人々が信長の駒を抑えて、その蹄ひづめの足搔きを、無理に押し返しているところへ——一騎、実にただ一騎——それは意外な方角から、低く飛ぶ鳥影のように来る者があつた。

「何者？」

信長の眼が先に見つけた。

「……………」

見まもる全軍の瞳に、それは次第に近づいて来た。旗本の群れのうちから、やにわに躍り出した梁田弥やなだやじえもん二右衛門が、

「分りました。分りました。あれよ、この方ほうがかねて、海道の方へ放ち置いたる家の子の一名でござる」

と、眉に手をかざしながら、狂喜して呶鳴った。

梁田の郎党は、それへ来て、主人の名を呼び廻ったが、その主人弥二右衛門が、信長のすぐ側から声をかけたので、はッと、遠くへ手をつかえてしまった。

「何ぞ、しらせ謀報やある？」

信長は、弥二右衛門にくつわ轡をとらせながら、梁田の郎党の方へ、自身から駒をゆる緩く進めて行つた。

「ござりまする！　ござりまするッ！　……。今川勢の主力、義元とその旗本らの本陣は、つい今し方、にわ遽かに道を変えて、おけは桶狭間ざまのほうへ向いました」

「なに？」

らん爛とした眼で、

「では——大高へは向わずに、義元は、桶狭間へ道をかえたとか？」

信長のことばのうちに、

「才、また来る」

一騎二騎、ここへ鞭むちをあげて来る味方の物見に、人々は異様な眼で呼吸いきを鳴り鎮しずめて待っていた。

前の報告につづいて、早物見の者から、さらに、こういう諜報が信長の耳へはいった。

「今し方、桶狭間へと道をかえた今川の本軍は、同所の南、田でんが楽狭間くはざまの窪くぼから小高い場所へわたつて、本陣を移し、義元殿をまん中に、兵馬を憩いこわせておる様子に相見えする」

と、いうのであった。

「
信長は、その一瞬、刀の肌のような澄んだ眼をして黙りこんだ。
死。ただ一死と。」

一途いちぢずに、真まつ暗くらに、捨す身に、願ねがうらくは潔いさぎよく——とばかり、この暁あけから今、陽ひの中な天てんの頃ころまで、遮しや二無にむ二来にはしたが、ふとこ
こで、

「あわよくば！」

と、雲くもの断きれ間まから一いっすじの光ひかりを見たように、戦いくさいの勝かち目を、
思おもつてみたのである。

正直しんじき。それまでは、

(勝てる)

と、いう自信はなかった。

彼はただ武門の名において、勝とうとしたのみである。あわよくば、

(勝ち得もせん)

と、考えついたのは、この瞬間——実にこの瞬間、ふとひらめいた考えだった。

人間の脳裡には、生活の一瞬間いっとき一瞬を刻むがように、たえず泡つぶにも似た想念の断片が明滅している。死ぬる間際まで、人間は断れ断れな想念の連続から声を出し身を動かしている。

正しい想念。身を亡ぼす想念。種々な思慮のひらめきの取捨しゆしや

によつて、一日の生活が組立てられてゆき、生涯の人生が、織りなされてゆく。

平常の取捨は、熟慮のいとま違もあるが、生涯の大運は、突とつとして来る。

(右か？ 左か？)

は、多くは急場に迫つて来るものである。

信長は今、正しくその岐路にいた。そして無意識に、運命の籤くじを引いていた。人間の素質、あるいは平常の心がまえなどが、こういう際の直感を、迅速に助けて、その方向を誤あやまたしめないことは確かであつた。

「」

結んだまま容易あに開かぬ彼の唇くちが、何か、いおうとした時である。やなだ梁田弥二右衛門が、側から呶鳴うなつた。

「殿、よい折！ 思うにじぶのたゆうよしもと治部太輔義元には、鷺津、丸根を陥おとし
いれて、織田の手なみ、多寡たかは知れたり。上洛陣の門出、幸さいさき先
よしと、すでに慢心な致して、兵馬も誇り立ち、戦気も怠おつてあ
らうずと存ぞんぜられます。——天機は今、不意を衝ついて、義元の
幕中へ、攻め入らば、お味方の勝ちは必定」

信長は、彼の昂たかぶる声へ合わせて、

「それだ」

と、鞍つぼを叩き、

「弥二右衛門、いみじくもいうたり。信長の意中も、それよ。今

こそ義元の首に会わん。田樂狭間は、この道を真東よな」

柴田権六とか林佐渡とかいう重臣たちは、むしろ物見の報告を、非常な惑いと、危惧をもつて聞いたので、信長の直感と、その驀進ぶりを、たつて止めたが、信長は肯かず、

「卿ら、老朽の智者ども、この期になお、何を惑うぞ。ただ信長につづけ。信長火に入らば火の中へ。信長水の中に入らんには水のそこへ。——さもなくば、田の畦で、農が行方を見物せい」

一笑を冷やかに浴びせると、信長は静かに、駒首立てて、全軍の突角まで出て行つた。

でんがくはざま
田樂狭間

ちようど正午の頃である。

山中の静寂しじまにも、禽とりの声すらしなかつた。風もなく、焦いりつくような炎日なのだ。灌木の葉は皆、合歡ねむのように萎しぼんでいるか、乾煙草ほしたばこのように、からからになっていた。

「その辺、その辺」

一小隊の雑兵をつれて、山芝の多い原山の上へ駆け上がって来た武者がいった。

「おいッ。とぼり幕をよこせ」

「雑木きを伐れ」

今川勢の先駆兵と見えた。

担いで来た幕を抛り出す。

一方では、大鎌で草を刈る。長柄を振って邪魔な灌木を薙ぐ。その側から、兵は、幕を展げて、附近の松の木や合歡の木の幹へ張り繞らし、そののない所には、幕杭を打ち込んで、またたくうちに一囲いの幕屋を作った。

「うう、暑い」

「こんな日もめずらしいで」

一汗拭いて、

「見てくれ、俺の汗を。具足の革も金具も焼けて、火に触るようだ」

「具足を脱つて、一風入れたら、どんないい心地かと思うが、も

うやがて、御本陣のお移りも間があるまいし」

「まあ、とにかく、一息つくとしよう」

雑兵たちは、坐りこんだ。原山の芝地には木が少ない。大きな楠くすのきかげの日陰ひかげへみんなかたまり合つた。

日陰ひかげに憩いこうと、さすがに少し涼しい。それにこの田楽狭間でんがくはざまと呼ぶ原山は、四囲の山々のいづれより低く、盆地の中の丘といった地勢であつたから、時々、前方の低地を隔てた真正面の太子たいしヶ嶽たけあたりから、青葉時らしい冷たい風が、颯さつと、一山の木々の葉裏そよを白く戦そよがせて落ちて来た。

「……おやツ？」

一人の雑兵がいった。

眼を、空へ吊つて。

わらしじまめの足の指に、膏葉こうやくを貼っていたのが、

「なんだ？ おい」

「見ろ」

「何を」

「変な雲が出て来やがった」

「雲が。……む、なるほど」

「降るかな、夕方には」

「雨は欲しいが、俺たち、道普請みちぶしんや荷担にかつぎばかりして歩く組に

は、雨は敵が出るよりも禁物だ。桑原くわばら桑原、なるべく、あつさ

り通り雨で欲しいものだ」

今建てた彼方の幕屋にも、頻りに風がうごいて来た。その辺りを、見廻つていた組頭の武者は、

「さあ、起て」

と、部下を促して、

「こよいのお泊りは、大高の城だ。沓掛くつかけから大高へ真ツ直に前進と、敵には思わせて、わざと道をかえ、桶狭間からこの間道うかいへと迂回うかいなされたが、晩までには、そこへ御到着の予定。——道々の小橋や、崖や谷づたいの異状なきように、われわれは検あらためながら先へ進むのだ。——さあ出発するぞ」

その人声も、影も去つて、山は元の静寂しじまへ回かえつた。どこかで、

昼の蝻きりぎりす 蝻きりぎりすが啼ないでいた。

間もなく、盆地の山陰やまかげを、遙かのほうから軍馬の気はいがして来た。螺らも吹かず、鼓こも鳴らさず、山巒さんらんの間を縫つて、極めてしゆくしゆく肅々しゆくしゆくと来るのであつたが、五千余騎の兵馬の歩みは、いかに静かにと努めても、天地のあいだその塵烟じんえんと蹄ひづめの音とを潜ひそめきるわけにはいかなかつた。

憂かつかつ々々と、石を蹴り、木の根を踏む馬蹄の音が、はや耳を打つて来たかと思うと、馬印ばいん、旛ぼん、旗さし物など、治部大輔今川義元の本軍は、見るまに、田楽狭間でんがくはざまの芝山と低地を、兵と馬と旗と幕とぼりとで埋めてしまった。

義元は、人いちばい汗かきのほうだった。日頃はその汗をすらかくことのない生活に馴れているので、体は贅ぜいにく肉にくと脂肪しぼうに富み、

四十を過ぎてからは、目に立つて肥こえていた。

その治部大輔義元には、こんどの軍旅ぐんりよは、少なからぬ苦痛であつたに違いない。肥えたわりに背の低い胴長な体に、赤地錦の直垂ひたたれ、大鎧をつけ、胸白の具足に、八龍を打つた五枚鍔ましころかぶとの兜をかぶつた。

今川家重代じゅうだいという松倉郷まつくらごうの太刀、左文字の脇差、籠手脛こてすね ねあて 当あて、沓くつなどを加えれば、十貫目をも超えるだろうと思われる。武装であり、膚はだえへ風のはいる隙すきもない装よそおいだつた。

炎天を、騎行きこうして来たので、鎧かの革かわも小貫こぎも焦やけきつていた——
 大汗にまみれて彼は今、ようやくたどり着いた田楽狭間でんがくはざまの芝
 山で駒の背から降りた。

「ここは何という土地ぞ」

義元は、幕とぼりへかかれるとすぐ訊ねた。

彼が、右すれば右、左すれば左へと、近習、侍大将、参謀、旗本、典医てんい、同朋どうぼうの者などが、ぞろぞろと護つて歩いてきた。

「桶狭間より半里、有松と落合村のあいだ——田楽狭間と申す所でござりまする」

侍大将の落合長門ながとが答える。

義元は、うなずきつつ、近習沢田長門守かぶとに兜をあずけ、小姓頭しまださきよう島田左京に具足を解かせ、絞しばるような汗になった鎧下の真つ白な肌着を着かえていた。

ひと風入れて、

「爽やかになつた」

と、鎧の胴締めを締め直して、座所へ移ると、その山芝のうえには、豹の毛皮をしき、陣中の調度の物なども置かれて、飽くまで彼のいるところには豪華奢の光がつき纏つていた。

「……やツ？ ああの音は」

義元は、早くも同朋の者が沸かしてさし出した茶を一喫しながら、何か、石火矢でも撃つたような轟きに、眼をうごかした。

「はてな？」

侍臣たちも、耳を敬てた。

その中の一人、斎藤掃部助は、幕のすそを搔き上げて、外を見まわしていた。いつの間にか、中天へ伸びて崩れだした雲の峰

が、灼熱の太陽を弄もてあそんで、名状すべからざる渦流の彩光を描いているのが、人々の眼を、強く射た。

「遠雷です。ただ今のは、遠雷の音でござります」

かもんのすけ

掃部助が、そこからいうと、

「かみなりか」

義元は、苦笑した。絶えず左の手で腰を軽く叩いていた。侍側の家臣たちも、気にはしていたが、わざとその故ゆえを問わなかった。今朝、沓掛くつかけの城を出て発向はっこうする折、義元は、どうしたのか駒の背から振り落されて落馬した。その時、打った患部と思うが、その程度を訊ねるのも、何か主君に恥かしい思いを新たにさせる気がするからであった。

どよめきが聞えた。

突然、山裾からこの幕とぼりの外へかけて、騒がしい人馬の気はいいが感じられた。義元はすぐ旗本の一人へ、

「何か」

と、いった。

見て参れ——という命も待たず直ぐ二、三名は、幕へ風を残して外へ身を翻ひるがえした。こんどは雷鳴の音ではない。騒然たる馬蹄や兵の蹙音は、もうこの山の上のものだった。

それは約二百ほどの騎兵隊なのであった。今し方、先陣の鳴海なるみ附近で討ち取った夥おびただしい敵の首級を護って、

(戦況はかくの如し)

と、本陣の義元へ見参に入れ、幸先さいさきよき味方の勝利を祝ことほぐとて、これへ齎もたらして来たものだった。

「何、鳴海へ襲よせた敵の首級が届いたとか、わざわざ首を授けに来おった笑止な織田侍の死顔。どれ、並べてみい、視みてくれよう」
義元は、機嫌であつた。

「床几しょうぎを直せ」

と、座形ざぎょうを改め、扇子せんすを顔にかざしながら、次々に差し出す首を検分した。

首帳を誌つけている者は、七十余首と数えあげた。

その中には、織田軍の侍大将と、今川方にも知られている佐々さつさまさつぐ、政次まつぎ、岩室長門いわむろながと、千秋加賀守ちあきかがのかみの首もあつた。

見終ると、義元は、

「血ぐさい。血臭い」

と、顔を振つて、後ろの幕とばりを揚げさせた。

そして、鮮やかな真昼の空の乱雲を仰ぎ、

「やれやれ山やま間あいらしい涼風すずかぜが立ちそめて来た。もはや刻限は

ひる午ちひるこうないか」

「いえ、午うまの刻は、はや過ぎておりましょう」

侍臣が答えると、

「道理で空腹を催した。昼飯をしたためよう。兵馬にも糧食の休

みを与えよ」

「はッ」

と、旗^き下の人々が、令を伝えに出る。幕^{とばり}のうちは、同朋衆や小姓^{まかない}や賄^{かた}方の者たちの動きで和^{なご}んだ。折^{なご}ふしまた、近郷の社や寺々や庄屋などが、連れ立って、祝の酒と土地の産物などを肴^{さかな}に持ち、

(陣お見舞に)

と、称して、献納して行つた。

義元は、遠くから、その者たちに眼通りを与え、

「上洛の帰途には、追つて、何かの沙汰を下すであろう」

と、善政を約束した。

そして土民の代表者らが立ち帰ると、

「よい折じや。酒をひらけ」

と、命じ、再び獸皮の褥しとねにくつろいだ。

幕外の將たちも、こもごもに彼のまえへ来て、鷺津わしづ、丸根の勝か軍ちいくさにつづいて、鳴海方面の戦況が、刻々、有利に展開していることを祝した。

「これでは、お汝ことらも、ちと手応えに不足で、物足らなくあろう」
 義元は、戯れ顔に、そんなことをいつて、近習しこしうから伺候の人々にまで、残らず杯を与えて、いよいよ麗うるわしい機嫌であつた。

「お館やかたの御威勢によるところなれば、めでとうはござれど、仰せの如く、かように進むところ敵なしでは、日頃鍛きたえた腕もむなしゆう鳴るばかりで」

「待て待て。明日の夜は、清洲きよすの城へ乗り掛けん。いかに骨細の

織田といえ、清洲へかかられたら、少しは、手応えもみせよう。

——各、むさぼ貪つて軍功をあげい」

「されば、両三日は、いずれ彼処かしこに御滞陣。月も踊りも、清洲で御覧あられましょう」

いつか、陽は陰かげつていた。

酒に興じていて、誰も気づかぬまに、午うまの下刻げこく（一時）頃から、暗い真昼に天候が變つていたのである。

一陣の風が、幕とぼりのすそを高く吹きあげた。ポツ！ポツ！と、雨さえ交じつて来たのである。雷鳴がとぎれとぎれに耳を打った。しかし、義元以下、その将領たちは、なお哄笑雑談、明夜の清洲城一番乗りを、ことばの上で気負きおい合ったり、信長何者ぞと、

誇つたりしていたのである。

信長、何者ぞ。

義元の帷幕いばくで、旺さかんにそう嘲あざけり笑われていた時刻、その信長は、街道の小坂、相原村の中間から、太子たいしヶ嶽たけの道なき道しやを遮二無二越えて、もう義元の本陣へいくらもない地点まで来ていたのであった。

太子ヶ嶽はさして高い嶮けんしゆん峻けんな山ではない。櫛かし、くぬぎ、櫟けやき、もみ、はぜ、などにおおわれている雑木山であった。もとより樵き夫こりが通うくらいなもので、道とてはない所を、五千の人馬が遮二無二急ぐので、木は裂け、草は薙ながれ、崖は躍り、谷川は飛沫しぶきを

あげて駈わたけ渉わたるのだった。

「落馬したら駒も捨てよ。木枝からに絡からまれて旗差物を失わば、旗差物も打ち捨てて逃げ。要は、今川が本陣の核心へ、真つ向に突き入つて、治部大輔じぶのたゆうが首見ることぞ。身軽がよし、空身からみが利ぞ。——敵中にはいつて敵を突き伏すとも、いちいち首を揚げて手間取るまいぞ。斬り捨てに。突き捨てに。——次へ次へ今こんじよう生の限り敵にまみえよ。ゆめ、殊てがら勲を人に見せんと思うな。見よがしの殊てがら勲は、すでに殊勲にてはなきぞ。八幡照覧、信長の眼前、ただきようを一期いちごと無我無性むがむしように働く者ぞ真まことの織田武士なれ」

信長はいう。

叱咤してさけぶ。

それはまた、暴風雨の前駆が吠えて行くようにも聞えた。

午後空は一変して、墨を流したように晦い。風は、団々たるその雲間からも、谷からも、沢からも、木々の根からも吹き起つて、海の中を行くようだった。

「やおれ。田樂狭間は、はや間近ぞ。この沢こえて、彼方の山陰の向うの尾根ぞ。死に支度はよいか。駈けおくれて、末代末孫に、恥を遺物かたみにのこすなよ」

信長の声のする所を軍の主流として、二千の手兵は当然、後れおくるもあり、散開して進むのもあつて、隊形をなしてはいない。しかし、心は、また耳は、絶えず信長の声のするところへ集まつていた。

その信長の叱咤も、今は声も皺しやが暖ぬるれてしまつて、何を叫んでい
るのか、意味も聞き取れなくなつていた。けれど言葉の意味など
は、もう将士に不要になつていた。ただ味方の上に、信長あり！
と、分つてゐるだけでよかつた。

そのうちに。

槍の穂光りのような大粒な雨が横よこ撲なぐりに打つて来た。頬や鼻
にぶつかるゝ痛いのである。木の葉を捲はいた疾風はやてが伴つてゐるの
で、何が顔にあたつてゐるのか分らなかつた。また突然、山を裂
くような雷かみなり鳴なりだつた。一瞬、天地は一色になり、豪雨に白く煙
つた。雨が去ると、沢の底地や崖には、滝津たきつせ瀬とばかり流れる水
と、濁流つがに浸ひつてゐる足もととを見出した。

「あッ、あれだッ」

藤吉郎は、呶鳴った。

顔を雨に打たせて、鯉のように睫毛まつげの雫しずくをしばだたいしている部下の足軽たちを顧みて指さした。

今川の陣地が見えたのだ。雨に打たれて濡れはためいている幾十の敵の本陣の幕屋がそれ！

眼の下は沢。すぐ彼方かなたは、田楽狭間でんがくはざまの丘陵ひもと。一跳びの間である。

見ればもうそこへと、味方の甲かっちゆう冑ゆうの人影は殺到していた。

槍を、太刀を、長柄ながえを——思い思い引つ提げて、

(身軽が利ぞ)

と、信長からいわれたように、兜は背へ投げ、差物もささぎず、一筋の槍だけを横たえた者が多かつた。

木の間を縫い、芝地の崖を踏み^ふまり^{すべ}しながら、いちどに敵の幕屋へ攻めかかつてゆく人影の上へ、時折、青白い雷^{いなずま}光がひらめいて、白い雨、暗い風、まったく晦^か冥^いな天地とはなつた。

「そらッ、かかるのだッ」

藤吉郎は、そういうと、沢へ駈^{すべ}け下りて、向うの山へ取ツついた。彼の部下は、^{すべ}迂^{すべ}つても転んでも、藤吉郎の側にいた。進んで血戦の中へ駈^{すべ}けこんだというよりも、うろろうろしているまに、いつか戦^{いくさ}そのものが、藤吉郎の一小隊をも、戦場の中に巻きこんでいたというほうが真実に近かつた。

白雨・黒風
はくう こくふう

義元の帷幕いばくでは、雷鳴のしているうちは、むしろ爽快として笑
いどよめいていた。烈風が、ふき募つのつて来ても、四方の幕とばりのすそ
に重石おもしを置かせ、

「これで暑気も一掃した」

などと未だ杯をめぐらして飲んでいたのである。

が、陣中だし、夕方までに、なお大高まで前進する予定なので、
誰も、酒の量をすごして、軍旅の疲れを呼び出すことは、誠いましめな
がら飲んではいた。

そのうちに、

「飯いが炊かしげましたが」

と、兵へい站たん部ぶの雑兵が来ていう。そうだ、もはや殿へも御膳をさし上げると、幕将たちも杯を納め、運ばれて来た兵糧米の炊たきたたと、大きな汗しるな鍋なべとを席に見た頃、

ぽっ！ ぽっ！

ぽっ！ ……

と、鍋へも飯はん籠ごへも、また、薙むしろにも、各の鎧よろいにも、大きく音を立たてて落ちて来た雨の光に、

「やあ、これは」

と、険けわしい空の形相に気がついて、ようやく薙むしろの位置をかえ始

めたのだった。

その幕中に、幹の太さ三抱えもある楠くすの大木があつた。義元は、雨をも忌いとつて、梢こずえの下へ寄つた。

「ここならば——」

と、後から、人々は義元の敷物やら膳部を、あわててそこへ移して行つたが、楠の巨木は根土をゆるがして、烈風の中に吼ほえていた。病葉わくらばも若葉も、塵ごみのように舞つて、人々の鎧へ吹きつけて来るし、炊事している兵站部へいたんぶの、薪のけむりが風圧のために地を低く這つて、さなきだに息づまつている義元や幕将たちの眼や鼻をついて来るのだった。

「暫時、御辛抱くださいませ。今、雨あま覆おおいの幕とばりを懸けさせます

る」

幕將のひとりが、大声で、雑兵たちを呼びたてた。その返辞はなかなかない。真白な雨しぶきと、樹々のうなりに、こちらの声も宙へ攫さらわれてしまふし、彼方の声も届いては来ないのである。ただ、旺さかんに炊事の煙を吐いている兵站部の幕の蔭で、薪を割る音ばかりが高くしていた。

「足軽頭ツ。足軽頭ツ」

幕將のひとりが、雨を衝ついて、外陣のほうへ駈け出して行つたと思うと、異様な声が辺りに湧き上がった。

唸うめき声。大地の音。打物と打物との烈しい響きなどである。

しかし、暴風雨あらしは、皮膚の外のみでなく、義元の頭脳あたまのうちに

も荒れて混乱させていた。

「やツ、何じや？ 何かツ」

事態の正視がつかない眼いろだった。幕将たちも、惑うばかりで、

「裏切ではないか」

と、いつてみたり、

「また、雑兵どもの、喧嘩沙汰ではないか」

と、いつたりした。

しかし、何事に依れ、そこらにいた侍側の将士たちは、無意識にも、義元の身のまわりを桶のように囲んで、咄嗟とつさに、警備の形を作った。そして槍を、太刀の柄を、各が持ち構えて、

「何かッ、何事かある」

と、どなったが、時すでに、潮うしおの如く、幕中へなだれ込んで来た織田勢は、ついその幕とぼりの外にも、楠くすの後方にも、彼方の広い場所にも、雄たけびして、駈け歩いていた。

「敵だッ」

「織田勢だッ」

うろたえ呼ぶ味方の上に、槍が匆はね、燃えさしの薪が飛ぶ。

義元は、楠くすの大樹を後ろに、ものをいう口を忘失していた。その唇を、黒々と光る鉄漿かねの齒が噛みしめていた。眼の前の現実を、まだ信じられないもののように立っていた。

義元のまわりには、幕将庵いはらしうげん原将監けんがいた。その甥おいの同どうみよ

苗庄次郎がいた。侍大将落合長門がいた。近習頭沢田

長門守、齋藤掃部助、関口越中守などもいた。その他、

牟礼主水。

加藤甚五兵衛。

四宮右衛門佐。

富永伯耆守。

といった旗本の錚々も、硬ばった顔をひしと並べて、

「謀叛かッ」

「謀叛人かッ」

と、繰り返して呶鳴っていた。

それへ答えるのではないが、すでに營中の彼方此方で、敵だッ、

敵々ツ、と叫んでいるのが、耳には聞えているのに、なお、頭のどこかに、

(よもや?)

という気があるため、自分らの耳を疑っていたものである。

しかし、それとて、長い時間ではありえなかつた。明らかに織田武士の躍る影を見、身近く尾張訛りの聞きつけない怒号を聞き、二、三、こつちを眼がけて、

するが
「駿河殿よなツ」

おめ 喚きつつ、あしゆら 阿修羅のように、槍もろとも、泥水をは 刎ね上げて突

ツかけて来る人間を見ると、

「あツ、織田のツ」

驚愕あらたを革めて、

「織田の奇襲ぞ！」

と、ようやく事態を正しく知ったほどだった。

夜討を襲かけられた場合よりも、狼狽はむしろ甚だしかった。信長を見くびっていた点と、白昼であったことと、烈風のため敵を営中に見出すまで、敵の近づく登音すらも知らずにいたためだった。

いや、それよりも、本営の幕將たちを安心させきっていたものは、味方の前衛にあるともいえる。本陣付の部將松井宗信いいなと井伊直盛おもりの両將は、ここの丘を距さることわずか十町ほど先の地点たむろに屯して、主陣護衛の約束どおり千五百ばかりの兵で、きびしく固め

ていたはずなのである。

その外陣の衛星から、

(敵、来る)

とも、

(敵、近づく)

とも、何の合図もないまに、義元以下、営中の幕僚たちは、いきなり獅子奮迅ししふんじんの敵影を、眼のまえに見たのである。内乱か、謀む叛ほんか、と、疑ったのも無理な狼狽ではなかった。

信長はもとより、前衛部隊のいるような地点には出なかつた。

太子ヶ嶽を縦横して、いきなり田楽狭間でんがくはざまの直前へ駈けあらわれ、鬨ときの声をあげた時は、もう信長自身でさえ、槍をふるって、義元

の幕下の土と、戦っていた。

信長に槍をつけられた敵の士は、それが信長とは恐らく知らなかつたろう。

敵の二、三名を突き伏せて、信長はなおも、本陣の幕へ近く駆け寄っていた。

「楠くすのあたりぞツ」

信長は、味方の強つわもの者が、自分のそばを追い越して、驀まっしぐらに行く姿を見ると云った。

「駿河公方を逃すなツ。義元の床しょうぎ几こは、彼処かしこの楠の巨木めぐを繞めぐる幕とぼりのうちと覚ゆるぞツ」

地形から視て、彼は、何とはなくそう直感に云ったのである。

將の床几をすえる場所というものは、その山相を觀れば自然にわかるし、その場所は、一つ山に必ず一カ所しかないものだった。

「あッ、殿ッ」

乱軍の中の、ぶつかり合うばかりな出会い頭、誰か、彼の前に、血槍を伏せて、ひざまずいた味方がある。

「誰だッ」

「犬千代めにござります」

「おッ、於おいぬ犬か。働けッ！ 働けッ！」

夜のように、雨は暗く風は地を掃はいて、泥水を降らした。

楠の枝や、松の小枝がひつ裂かれては、大地へ叩きつけられて来る。ザ、ザ、ザ、ザ……と義元の兜かぶとの上へ、こぼしたような梢こずえ

の溜り水が落ちた。

「お館様やかたツ。彼処かしこの内へ。——彼処の蔭へ」

旗本の山田新右衛門、近習の島田左京、沢田長門ながとなど、四、五名は義元の身を、八方楯だてのように囲んで、幕とぼりから次の幕へと、急を避けた。

去つた瞬間、

「駿河殿やこれにあるツ」

と、残余の幕将へ目がけて、槍をつけて来た織田方の武士があつた。

「推参ツ」

と、斎藤掃部助かもんのすけが、槍をあわせた時、敵は、

「信長公の身内、前田犬千代ッ！」

と、喘あえぐ息で名乗ったので、

「今川家譜代ふだいの臣、斎藤掃部助ッ」

と、彼も応じ、

「かつッ」

と、くだ槍の先も突き折れよと、一いっきよ拳にお圧して行く。

「何をッ」

犬千代は、身をひらき、敵へ空を突かせて、よい機しおを見たが、長槍を持ち直しているいとま違がなかつたので、掃部助かもんのすけの頭をなぐ撲りつけた。

かんと、兜かぶとの鉢金が鳴った。掃部助かもんのすけは、雨の中へ、両手をつ

いて、四つン這いになった。ところへ、

「高井蔵人ツ」

たかいくろうど
しのみやうえもんのすけ

「四宮右衛門佐ツ」

などと名乗りかける敵の声が耳のそばでした。犬千代が、槍を向け直した時、敵か味方か仰向けに、ぶつたお仆れた者がある。その死骸につまずいて、犬千代もよろ蹠めいた。

「木下藤吉郎ツ」

どこかで、名乗っている声がある。犬千代は、にことした。その笑えくぼ靨へ、風が、雨が、びゅツと打ぶつけてくる。何を見ても、泥であつた。何処を見ても、血であつた。

すべ迂る、転ぶ。——と、思うと、もう側にいた敵も味方もいない。

死骸の上に、死骸が折り重なっている。雨がバチャバチャとその背で音を立てている。武者草鞋わらじは真つ赤だ。血の河を蹴つてすすむ。

庵原いはらし将監しょうげんと名乗つて来た者を突き伏せた。しかし、突き捨ててまたすぐ進む。——鉄漿おはぐろくほう公方はいずれにありや。駿河殿の首級しるしな申しうけん。雨も叫ぶ。風も叫ぶ。

父将監討死ときいて、義元の小姓庵原庄次郎、善戦して、織田武者の群れのなかに死骸となる。

関口越中守、富永伯耆ほうきのかみ守など、今川軍の名だたる猛将も、それぞれ恥かしくない死に方であった。

勿論、織田の将士で、傷つく者も多い。けれど、敵の十に対し

て一ほどな死者もなかつた。

どこで、どう組んで、敵に挽もぎとられてしまったのか、進軍の途上、信長の馬前にすがつて、陣借じんがりして参加した甲州牢人ろうにんの桑原くわばら甚内じんないなどは、腰から下の具足や草摺くさずりは着けていたが、上半身の鎧は失つて、半裸体のまま、血あぶらに染んだ槍を握りしめ、

「駿河殿に見参ッ。御大将義元には、いずれに在おわすや」

楠の後ろの辺りを中心に、十歩、二十歩、あなた此方、シャ嗚がれ声をしぼつて駈けまわっていたが、そのうちに、一カ所の陣幕のすそが、烈風にふき煽あおられてぱツと剥めくられた刹那、チラと、その中にいた赤地錦の鎧直垂よろいひたたれと八龍の兜との人影を、一閃いつせん

の雷いなずま光の下に見つけた。

その義元の声らしく、

「儂みにかまうなツ。急場ぞ、急場ぞツ。義元の身边に、人数は要らぬ！」

烈しい声で、辺りに躁さわぐ幕僚や旗本たちを罵ののつていた。

「——狼狽うろたえずと、敵を退け、みずから首を授けに來たりしこそ幸いなれ、信長めを、討つて取れツ。義元の身を護るよりは敵へ当れツ」

さすがに彼も三軍の総帥そうすいであつた。誰よりもはやく、形勢の全体を察知した。いたずらに右往左往したり、身近に従つきまどつて、無意味な呶号ばかりしている將士らを腑ふがいなしと怒つてい

るのだった。

それに鞭打むちうちたれて、

「あツ——」

と、彼の身边を離れた将士は、日頃の鍛錬たんれんと恥とを思い起して、各、戦いの中へ身を投じて行つた。

ばツばツと泥水をは匆ね上げて行く幾名かのその足元をやりすごしてから、物蔭ひそに潜んでいた桑原甚内は、確かに、大将義元と見たそこを窺うかがつて、槍の先で、濡れた陣幕のすそを払い上げた。

「……やツ？」

義元の姿はもうなかつた。

一人の武者もいないのだ。

とぼり
幕のうちには、大きな木鉢の飯が覆つて、雨水の中に飯つぶが
白くふやけているのと、四、五本の燃えさしの薪が**まき**いぶっている
だけだった。

「さては」

早くも義元は、二、三の侍臣だけを連れて落ちたな——と、甚
内は**さと**覚った。幕から幕を覗いて行つた。あらかたの幕は切り裂か
れて落ちて**い**るか、血に染んで踏みつけてあつた。

「**うまぞな**そうだツ、馬備え？」

徒歩では落ちまい。すると馬**うまつな**繋ぎへ駈けつけたに違いない。
だが、たくさん幕と乱軍の営内では、どこが敵の馬繋ぎ場か、
ちよつと見当もつかないのである。

それに、馬もじつとしてはいなかった。雨と、劍光と、血の中を、馬も狂つて、何十頭となく駈けまわっている。

「どこへ潜ひそんだか」

甚内は、槍を立てて、乾ひからびた喉へ、鼻ばしらから伝う雨水のしずくを飲み下していた。

すると直ぐ眼の前を、自分を敵とも気がつかずに、一頭の青毛の駒の狂うのを、懸命に曳いて行く武者がある。

金砂きんすなご子の覆ふくりん輪を取った螺鈿らでんぐら鞍に、燃ゆるような緋房ひぶさをかけ、銀色の轡くつわに紫白しはくの手綱。——甚内の眼は射られた。

まごうなき大将の乗用である。眼をつけていると、駒はすぐ先ひとむらの一叢の松の木蔭へ曳かれた。そこにも、幕が仆れている。ま

た、まだ懸けめぐらしてある幕が風雨に大きな波を打っている。

甚内は、一跳びに、

「ござんなれ」

と、ばかり近づいた。幕を払う。

義元はそこにいた。

今しも、義元は、身を潜めていたその少し先から、家臣の者が、駒を曳いて来たことを性急に告げ立てたので、幕の外へ、身を移そうとした折だった。

その背を目がけて、

「駿河殿と見うけたり。織田家の懸かかりゆうど人桑原甚内、御首みしるしをい

ただきに推参。お覚悟あれツ」

声と共に、槍の柄が、

かんツ——と、響いた。

義元の一閃いっせん。

松倉郷まつくらごうの太刀が、振り向きざまに、中断したのである。

「しまツた」

と、跳とび退のく甚内の手には、槍の柄の手元、四尺ばかりしか残つていかなかった。

槍の折れを、投げすてて、

「御卑怯おひせつツ。名乗る敵へ、背を見せ給うかツ」

甚内は、喚わめいて、腰の剛刀を払い、ふたたび義元の背へ、躍りかかろうとしたせつな、

「やッ、殿へ」

と、甚内の背後から、今川方の平山十之丞が組みつく。

でんと、雨溜りの地へ、十之丞が投げつけられた時、

「おのれッ」

と、同僚の島田左京が、甚内の横から斬りつけた。

身を反らしたが、十之丞に足首をつかまれていたため、かわし

きれずに、桑原甚内は、左京の刀下に、真二つになって仆れた。

「殿ッ、殿ッ。——一刻もはやくこの場をお落ちなされませッ。

乱れ立ったる味方、氣負いぬく敵、拾収しゅうしゅうはつきませぬ。無念

ながら一先ずここは」

喘あえいでいう島田左京の顔は、左京と見えないほど真つ赤だ。満

身、泥にまみれた平山十之丞も、は勿ね起きて、左京と共に、

「いざ、お早く」

と、せき立てた。

「あいや」

とつこつ突忽として、その前へ、

「治部大輔義元殿へ見参ッ。
じぶのたゆう

——織田殿の御内にて、
みうち服部小平

た太ともうす者」

声があつたかと思うまに、
くろおど黒緘しにくろがね黒鉄のはちかぶと鉢兜をま眉ぶ

かにかぶつた偉丈夫を見た。

——だツと、一足、義元のさが退る前へ、
あかえ朱柄の大槍はうなりを含

んで突いて来た。

「曲くせもの者ものツ」

と、身をもつて遮さえぎつた島田左京は、太刀をふりかぶるまに突き伏せられていた。平山十之丞、つづいて立ち塞ふさがったが、小平太の烈しい槍先にかけて、これまた、朱あけになつて、左京の死骸へ折り重なつた。

「待たれいッ。何処へ」

電撃の槍は、義元を趁おう。

義元は、大きな松の根方を、一めぐり駈け巡つたが、

「推参ッ」

振りかざした松倉郷の太刀の下から、はつたと、小平太を睨ねめつけたが、

「む、むツ」

突き出した槍は、義元の鎧の脇腹へはいつた。しかし、小貫のこぎね鍛きたえは良し、義元も剛氣、かつと開いた口が、

「下郎ツ」

と、いうと、槍の蛭ひるまき卷まきから、斬つて落していた。

小平太はあわてず、

「心得た」

と、すぐ柄えを投げすてて組まんとばかり、体当りにとびかかった。

義元、

「さはさせじ」

と、膝を折り敷き、八龍の兜を前かがみに、跳びついて来る小平太の膝首のあたりを、がつんと横に払う。

太刀はよし、必死。鎖くさり膝行袴たつつけから火を出した。小平太の膝がしらは、柘榴ざくろのように割れ、傷口から白い骨が出た。

「——あッ」

小平太は、尻もちついた。義元もまた、前へのめって、兜の前まえで地を打った。その顔を上げたかと思えた途端、

「毛利新助秀高！」
えだて
もうりしんすけひでたか

と、横あいから名乗った男が、義元の首へ組みついて、諸倒もろだおれに転がった。

義元の胴が、ために伸びると、先に突かれた槍の傷口から、嘔

き出すような血が迸ほとばしつた。

「ちツ、ちえツ」

下になった義元は、毛利新助の右手の人差指に噛みついていて、掻切られた首となつてからも、義元の紫いろの唇と鉄漿染おはぐろぞめの齒の中には、白い指がはいつていた。

虹

味方が勝つたのか。敵が勝っているのか。

いったいまた、自分らは、どう戦つたのか。

「おういッ、ここは何処だ」

藤吉郎は、息をついて、われかえに回ると、誰へともなく、辺りへ
呶鳴った。

「……？」

何処のどういう地点まで来ているのか、分っている者は一人も
いなかった。彼を、小隊の組頭と頼って、彼のまわりには、十七、
八名の足軽が生き残っていたが、どれも皆、うつつの血相である。
人間の顔いろではない。

「……はてな？」

藤吉郎は、耳をすました。

雨は、霽はれて来た。風も小やみだし、雲の断きれまから、また強
烈な陽がこぼれている。

夕立のあがり頃から、でんがくはぎま田楽狭間のあびきようかん阿鼻叫喚も、かみなり雷鳴の行方と一緒に、遠く消えて、その後を、実に何のこともなかつたように、せみひぐらし蝉や蝸が啼いている。

「整列ツ」

藤吉郎は、号令した。

足輕は横隊に並んだ。

頭かずを眼で読むと、三十名の組が十七名に減へっている。しかし、そのうちの四名は、組頭の藤吉郎も、見たことのない顔の足輕だった。

「おい、四番目の」

「はッ」

「そちは、何処の組の者だ」

「遠山甚太郎殿の手の者ですが、田楽狭間でんがくはざまの西の崖で戦っているうち、崖からすべり落ちて本隊を見失い、ちようどそこへ、敵を追いかけて来たこの組に交じって、そのままこれまで来てしまいました」

「そうか。七番目のは」

「はッ。てまえも、乱軍中に、自分の組で戦っているつもりでしたが、気がついてみると、木下殿の組にいました。——けれど何処の組で働こうと、御奉公は一つと思つて」

「そうだ。その通り」

藤吉郎は、そういつて、後の者は問わなかった。

恐らく、自分の組下で、戦死した者もあろうが、幾人かは、他の組へ紛れこんで、生きているであろうと思つた。

いや、箇々の兵が、乱軍で皆、その所属を見失つたばかりでなく、木下組の小隊そのものが、すでに本陣とも、主隊の浅野又右衛門の軍からも離れて、迷子になつていたのでつた。

「——ほぼ勝敗はついたらしいぞ」

藤吉郎は呟きながら、部下を率いて、元の道へ引つ返した。四方の山から沢へあつまつて来る濁水は、風雨が霽れてから水かさを増していた。その水に洗われている死骸や、崖の途中に重なつている死骸の夥しさに、藤吉郎らは、生きている身が、奇蹟のよくな気がした。

「お味方の勝利だぞ。——崩れ立ったは敵。見よ、この辺に死んでいるのは、みな今川の本陣付の侍ばかりだ」

藤吉郎は、指さして、部下へ語った。道々見る敵の死骸によつて、潰かいそう走して行つた敵の主脳部の径路が彼にはやや分つて来たからである。

だが、部下の兵らは、

「……はあ」

と、ばかりで、まだほんとのわれに回かえつていないし、凱歌をあげる気力もなかった。むしろ味方の主隊から迷子になつて、わずか十七、八名で、さまよつている心細さに囚とらわれていた。急に戦場の空気が静かになつたのは、一方で信長の本軍が全滅している

のではあるまいか。何しろいつ敵に包围されて、自分らも、そこらに転がっている死骸と同じ姿になろうやも知れない、そうも思う懸念けねんのほうが強かった。

すると、田楽狭間でんがくはざまの高地で、わあッ、わあッ、わあッ——と、天地もゆるがすような勝鬨かちどきが三度ほど聞えた。

勝鬨の声にも、武者押しの声にも、どこかお国風がある。声をあわせて、

「わあッ」

と、いうだけでも、駿河衆のそれと、織田武士のそれとは、自然気あいの違うものである。

「勝軍かちいくさだッ。戦いくさはお味方の勝利なるぞ。それ行けッ」

藤吉郎が先に駈けると、

「わあッ」

今まで、人心地もなかつた足軽たちも、突然、

——われ生きたり。

——われ勝てり。

と、武者ぶるいする身心地を取り回して、遅れじと、藤吉郎に

つづいて、勝鬨かちどぎの聞える丘のほうへのめッて行つた。

「おーいッ」

呼び止める声がした。一方の山の中腹の道からである。

藤吉郎は、小手をかざし、

「味方か」

訊ねると、先からも、

「そこへ見えたは、いずれの隊か。この方は、お使番つかいばん 中川金右衛門」

と、いった。

「浅野又右衛門の手の者。足軽三十人組の木下隊でござる」

口へ手をかざして、大きくいう。

すると、中川金右衛門は、崖の小道を駈け降りて来て、

「足軽の木下隊か。御本陣その他皆、この先の間米山まごめやまへ移つておられる。浅野殿もそれへ引き揚げられた筈。はやく、そこへ急

がれい」

かたじけな

「忝い。——して御合戦のもようは」

「もとよりお味方の大捷たいしやう。今の勝鬨かちどきをお聞きなかつたか」

「多分——とは存じたれど」

「すでに、駿河勢は、総くずれとなり、義元殿のお首級しるしも、味方の手にあがりたれば、この上の長追いは無用とのお下知げち。——全軍ひとまず間米山の御陣地もとの下へあつまれとの御命令である」

お使番の中川金右衛門は、そう伝えると、すぐ先へ急ぎかけたが、またふり返つて、

「これより西の山間やまあいには、まだ他に、迷はぐれた味方がおつたであろうか。——長追いして、帰らぬ味方を見なかつたか」

と、訊ねた。

藤吉郎が、遠方から、

「ない。ない」

首を振って見せると、金右衛門は方角をかえて、他の道へ、味方の迷子を探しに駆けて行つた。

間米山まごめやまは、田楽狭間でんがくはざまの少し先、大沢村のうちの小部落にあつた。

低い丸い丘である。

見れば、この丘から部落に至るまで、真つ黒に味方の人数で埋まつていた。華やかな色とは何一つなく、泥と血と雨にまみれた三千余の戦兵であつた。戦たたかい熄やんで、一かたまりになつた時、雨も熄やみ、陽も照り、濛もうもう々と、三千の武者いきれから白い湯気が立ちのぼっていた。

村民は、清水を汲んで、陣地へ担にないこんでいた。芋いもを煮ていた。餅もちをついていた。馬も、草や人にんじん参くわを啜くわえていた。

「浅野殿の隊は」

藤吉郎は、武者混むしやごみへ割わつて入りながら、帰属する自分の隊をたずね廻まわつた。彼は、血まみれな人々の甲かちゆう 胃いにふれると、何か、面目ない気がした。自分も恥はなき戦いくさいはしたつもりであるが、これという人目立てがらつ手功てがらは何もないせいであつた。

ようやく、本隊へ戻かへつて、彼も武者いきれの中に立ち、初めて心の底から、

「勝つたのだ」

と、むしろ敗れた敵の大軍が、その丘から眺めても、もう何

処にもいないのが、不思議のようにさえ思われた。

やがて。

丘の上なる信長の前へ、集められて来た敵の首級は、二千五百と数えられた。治部大輔じぶのたゆう義元の存在も、その中のただ一箇でしかなかった。

敵の首級二千余に対して、味方の死者も少なくはなかった。使番が四方に駈けまわって、引き揚げを令しても、帰らぬ将士が幾十人かあった。

しかし、敵の夥おびただしい死者の数から見れば、味方の犠牲は、何十分の一でしかない。

わけて、敵ながら悲壯を極めたのは、井伊直盛いいなおもりの隊であった。

直盛は、田樂狭間でんがくはざまの義元の本陣を約十町ほど離れて警備に就いていたが、暴風雨あらしのために、信長の軍が、前衛の警戒線を突破したことをまったく気づかなかつた。

それと騒いだ時は、すでに敵は本陣へ突き入り、義元は討たれていたのである。直盛の将士は、その自責から最も奮戦力闘した。直盛が乱軍の中で自刃すると、以下の将士も皆、斬り死するか、自害して、一人も生き残らなかつた。

その他、目ざましい最期を遂げて、敵とはいえ、眼に残つて消えない武士さむらいがたくさんあつた。戦い果てて、

(われ彼に勝つ)

と、知ると共に、武士の心には、そうした床ゆかしい敵の働きぶり

が、味方の得意な顔以上、眼に残った。いつまでも心に刻まれて、暗黙の中に、追慕されていた。

(惜しい敵だった)

(よい死に方だった)

口には出さないまでも、あすはわが身にもあることと思うのだつた。そして、今さらのように、

(よい御主君を持ち得たるものかな)

と、勝者の軍にいる自分の幸さちを思い、戴く人を心に仰ぎ直すのであつた。

おだかずさのすけのぶなが
織田上総介信長。

その信長も、血と泥土にまみれた姿のまま、間米山の中腹に見

えた。その床しょうぎ几こから数歩を距へだてた地上を今、数名の足軽たちが、鋤すきくわ鋤くわを持って、大坑おおあなを掘りにかかっていた。坑あなのまわりには高く土が盛り出されていた。

二千の首級は、一つ一つ検分された上、やがて、その坑へ投げこまれてゆく。信長は合掌して見ていた。周囲の将士も、肅然と口を結んだまま立ち並んでいた。

誰も念仏一ついわない。

しかし、武士が武士を埋葬する最高な礼式をもって、それは行われたのだ。坑あなに入る首は、これからも生きてまた戦ってゆく武士に、何ものかを訓おしえ残して行った。どんな小者の首一つでも、いけぞんざいには扱えなかった。森しんげん厳げんな気に打たれずにいられ

なかつた。幽ゆうげん玄な生死の境を足もとに見て人間を——武士の人生を、思わずにいられなかつた。

誰も皆、掌てはひとりでに、鎧の胸に合わさっていた。土がかぶせられ、塚に盛られ、気がつくと、雨後の大空には、美しい虹が懸かっていた。

そこへ、一隊の物見が帰つて来た。

これは田楽狭間を潰かいめつ滅させると直ぐ、大高方面へ偵察に向けられた隊である。大高には、三河の松平元康が、義元の先せんぼう鋒として働いていた。織田砦とりでの鷲津、丸根を攻め墜おとした手際から見て、信長は、最も油断のならぬ敵として、重視していたからである。

「義元戦死と聞え、大高の陣中も、一時は騒然とあわてた気配に

ござりましたが、数度、物見が出た様子で、程なく、事実と知ると、やがてひそまり返り、三河へ引き揚げの準備にかかりましたれば、無謀な戦意はなしと見届けました。三河勢の退去は、恐らく夜を待つて行われるかと存じます」

以上の報告を聞き、なお、鳴海に残っている敵の岡部元信の動静をも確かめた上、信長は、

「いで、帰らん」

と、凱旋がいせんを宣した。

まだ陽は落ちていかなかった。いちど薄れた虹がまた濃く立つ。彼の騎うまの鞍くら側わきには、首一つ、みやげに結ゆいつけられてあつた。

いうまでもなく、今川治部大輔しふのだゆう義元の首級である。

熱田の宮の社前へかかると、信長はひらりと下馬して、

「神前へ御報告つかまつな仕ろう」

と、宝前ほうぜんへすすんだ。

凱旋の将士もすべて、宮の中門まで詰めて、黒々と大地ぬかずに額ぬかずいた。

遠く、振鈴がひびいた。

宮の森は、篝火かがりで赤くいぶされた。霧とけむりの上に、宵月があつた。

信長は、一領の神馬しんめを、宮のお厩うまやに献上して、

「さらば、清洲へ」

と、ふたたび急いだ。

着ている武具は重かつたし、体は綿のようにつかれていたが、騎にまかせて月の道を帰る彼の気もちは、もう浴衣ゆかたがけの人のように気軽に見えた。

清洲の城下は、熱田の町以上にたいへんな騒ぎであつた。千戸に万燈まんどうをかけ連ねていた。辻には大おお箒かがりを焚き、家ごとの軒下には、老人としよりも子も若い娘も皆出て、凱旋将士を見ると、

「帰りませせ！」

「帰りませせ！」

と、熱狂した。

辻にも、黒い人の山が押し合っていた。肅々と、城門へ練つてゆく鉄甲の列のなかに、わが良人つまやあるときがし廻る眼。わが子

ありと、人へさけぶ老人。恋人の影を求める若い女。しかし、そのすべてが、やがて馬上の信長を夜空に見るや、

「オオ。オオ」

「国主」

「わが国主」

「信長様」

一瞬は、歓呼とどよめきの^{るっほ}垣であった。彼らにとって、信長こそ、わが子以上のものであり、わが良人^{つま}以上のものであり、恋人以上の恋人であった。

「——今川治部大輔が首見よや。信長がきょうのみやげはこれぞ。あすからは、そち達にも、国境の憂いはないぞよ。精出して働け

よ。働いてよう遊べよ」

馬上、庶民たちの歡呼へ、信長は、右へ向いては云い、左の群集へ向つてはまた答えて行つた。

城へはいると、

「さい、さい。何よりは一風呂あみたい。風呂と、湯漬ぞ」

信長はいつた。

風呂を出る間に、彼の胸には、きようの合戦で働いた約三千余の将士に対する賞罰もきまつていた。

すぐ林佐渡と、佐久間修理しゆりの二人へ、旨を達しておいた。

梁田やなだ弥二右衛門政綱まさつなに、沓掛城くつかけじょう 三千貫の采地さいちを与う――

という賞賜しょうしを筆頭に、服部小平太、毛利新助など、約百二十余

名への賞賜を、信長は、口頭でいって、それを佐渡と修理に記録させた。

小者の端の——誰も知らないようなことまで、信長の眼は、いつのまにか見ていた。

「於犬おいぬには、帰参をゆるしてとらす」
最後にいった。

それはすぐ、前田犬千代に、その夜のうちに伝えられた。なぜならば、全軍が城内へはいつても、彼一名は、城外に止まって、信長の沙汰を待っていたからである。

藤吉郎には、何の恩賞もなかった。勿論、藤吉郎も、恩賞の沙汰をうける覚えがなかった。けれど彼は、千貫の知行以上のもの

を、たったこの一日のうちに身に享けた。それは、生れて初めて、ほんとの生死の線を通つて来た尊い体験と、眼のあたり信長から身をもつて教えられた戦というものの機微、人心の把握など、総じて、将たる器の大度を見たことであつた。

「よい主を持った。信長様に次いで果報者は、この俺だぞ」

彼はそれ以来、信長を主君と仰ぐばかりでなく、信長の一弟子という心をもつて、信長の長所に学び、由来無学鈍才な自身を研くことに、一層心をひそめていた。

夕顔の門

たしかに、急激な速度で、世の中は変革しかけている。けれどどう眺めても、そう動いてもいないように見えるのが、世の中の表面でもあつた。

桶狭間おけはざまの一戦の大捷たいしやうは、さすがに十日余りも、清洲きよすの城

下を昂奮の坩堝るつぽと化して、盆も夏祭も一緒に来たような騒ぎだつ

たが、それも常態かえに回ると、鍛冶かじの家には鎚つちの音が聞え、桶屋の

軒には桶を叩く音が洩れ、厩うまやの裏には馬糧まぐさを刻む音が静かにして、

各がその職分に精出し始めると、炎天の城下町は、人通りさえ稀れで、からんと、往来の道ばかり白く乾いていた。

「木下様」

誰か、呼ぶ声に、

「おうい」

藤吉郎は、昼寝していたが、眼をあいて、
床ゆかむしろ 蕙むぎ から首だけ
擡もたげて云った。

「どなたかな？」

「志村しむらの家内でござります」

「やあ、お向いの御内儀か」

「ちとばかり、手作りのそう麵めんを冷やしましたので」

「また、戴き物でござるか。それは恐縮」

「筧ぎらはお貸し申しておきますゆえ、お勝手へ置いて参ります。後
でまいちど、清水で晒さらして、召し上がって下さいませ」

「ごんぞ、ごんぞ」

「お召使は、見えませぬ」

「ごんぞは見えませぬか。では下婢おんなは」

「針を持ったまま、勝手元の部屋で寝てござりまする」

「やれやれ、主人が眠ると、猫までが眠る。では、箆ざるは後からお返しに遣つかわします。御主人にも、よしなにお伝えを」

口愛想はよいが、物臭く、腹這いのまま、奥から呶鳴っているのであった。

城内ではとかく、白眼視されているが、この桐畑の組屋敷の近所かいわい界限では、彼の人気は至って良かった。それも主人よりは細君のほうに良く、細君よりは娘子供になお良かった。

しかし、きれいな娘を持つ家庭では、独り者の彼に対して、相

当周到な警戒をしていた。退屈で困っています。少し話しにいらつしやいませんか——などという誘いを、娘の親の前でも、平気で彼はいうからであつた。

退屈といえ、この五、六日、彼は体をもてあました。ちと遠国まで供を申しつける程に、旅支度いたしておれ。十日以内に出発の沙汰いたす。それまでの間、休養して、余り外出はすな。また、他言もならぬことは改めていうまでもない。

こう信長からいわれて、彼は、その出発を待機していた。支度といつても何も無い。留守は、ごんぞと下婢おんながいる。

「——供を申しつけると仰つしやつたが、御主君のお旅立ちとはおかしいな。何処へお出かけになるのだろ」

起き直つて、今もぼんやり考えていた。そしてふと、庭垣に、夕顔の花の蔓つるを見ると、彼は、寧子ねねのすがたを想い出した。

沙汰の下るまで、余り外出はすなと命じられていたが、夕風がふくと、彼は行水をひと浴あみして、寧子の家の前を通つてみた。

近頃はなぜか、訪れるのは、羞恥はにかましくて、それと寧子の両親に会うと、改まつて、用事でもない、こちらの肚みすかを見透されそうなので、ただ、彼女の家の門を、行きずりの人の如く装つて、行つたり来たりしてみるだけで、戻つて来るのであつた。

寧子の家の庭垣にも、夕顔が咲いていた。きのうの夕方は短たんけ檠いに灯ともしていた彼女の姿を、ちらと外から垣間見て、思いを果したように帰つて来たが、夕顔の花より白いその折の横顔を、

今ふと思ひ出したものであつた。

「お目ざめでございましたか」

若党のござが帰つて来た。

ござは直ぐ、井戸水を手桶に汲んで、藤吉郎が、独り坐つて
いる庭先へまわり、

「ちと、水でも打ちましよう。きよの暑さはかくべつ。地割れ
のするほど乾いておりますで」

百坪にも足らぬ狭い庭へ、手桶の水を、何杯か撒まいた。

「そうそう、ござ。勝手に、御近所から到来物のそう麵めんがあ
るぞ」

「はい。戻る途中で、お向いの御新造さまに出会い、左様に伺い

ました」

「そちは、どこへ出かけていたのか」

「職人町の辻で、捕物とりものがあるとかで、町の者が騒いでおりますゆえ、物見に出向きましたので」

「耳ざとく、よく町へ弥次馬に出かける奴じやな。捕物とは、盗ぬす人でも捕つかまったか。清洲の御城下に、盗人があつたとは珍しい」
 「いえいえ、それどころではござりません。職人町の銚かすがいよこち横
 丁ようという裏町をご存じてごござりませうが」

「うム」

「あの路地の角かどの酒屋、二軒目の渋紙屋しぶかみや、その並びの烏帽子折えぼしおり、
 塗師屋ぬしや、柄つかまき巻職人など住んでいた一と長屋が、一夜のうちに皆、

空家になりましたな」

「ふーム」

「夜明けと共に、近所で騒ぎ立ち、直ぐ訴え出ましたので、取調べたところ、あの銚横丁の一と長屋と職人が皆、稲葉山から廻された美濃の間者だと知れました。——で、なおも近所合壁の者どもを一人一人^{かこ}囲いへ入れて、今朝から厳しく調べておるうちに、二、三、怪しい者が現われたので、引つ縛ろうとすると、やにわに得物を把^{えもの}つて手むかい致し、近所の衆、役人方の五、六人も、殺傷された揚句^{あげく}、ようやく捕えましたが、一時はえらい騒動でござりました」

「美濃の諜^{ちようじや}者が一と長屋に住んでいたのか」

「知らぬも不覚なことでござりました。敵国の人間が、御城下に
一かたまりも巢を喰つて、悠々と、美濃へ通じているのをば」

「ははは。お互いごとじや。——ごんぞ、下婢おんなにいうて、行水の
湯を沸かさせておいてくれ」

「そしてまた、お出かけでございませうな」

「このところ、毎日閑役かんやく、一あるきして来ぬと、腹が減らぬ」

やがて薪まきの煙が、勝手から家の内を吹きながれた。湯浴ゆあみして、
帷子かたびらにかえた藤吉郎は、草履をはいて、庭木戸から外へ歩みか
けた。

そこへ、城のお使番の末の者が、訪れた。御用筥ごようぼこから召状を
出して手渡すと直ぐ帰って行った。藤吉郎は、あわてて屋内へ戻

り、急に衣服を改めて、林佐渡の私邸へ急いで行つた。

先頃から待機していた御沙汰なるものを、彼は、家老の私邸で、林佐渡から直接に申しつかつて戻つて来た。

(——明朝の卯うの頃までに、旅装を整ととのえ、御城下はず端れ、西の街道口、豪農道家清十郎宅まで参らるべし)

と、いう沙汰なのである。

それ以外は、

(行けば分る)

とだけで、何も聞かしてはくれなかつた。

遠国へ、信長が微行しのびで——その供のうちへ自分も——と、こう考へて来ると、多くを聞かなくても、彼にはほぼ主君の目的のあ

るところが分るような気がした。

「これは当分、帰れないらしいぞ」

同時に彼は、寧子ねねともしばしは別れと思つて、折ふしの夏の月に、ひと目でもと、途中から会いたさが胸に増して来た。

思いたつと、彼は、矢もたてもない性さがだった。煩惱の子であつた。

彼の心にも住む意馬心猿いばしんえんは、彼を、寧子の家のほうへ駆りたてていた。そして、世間によくある深窓の灯を窺うかがう不良児と、何ら変らない恰好かっこうして、藤吉郎も、その家の垣の外をうろついていた。

弓之衆の組長屋なので、この界限かいわいを通る者は、たいがい顔見

知りの人たちである。彼は、往來の聲あしおと音にも心をおき、家の中の寧子の両親や家族から覺さとられることもひどく懼おそれた。

その臆病な、小心な態ていは、笑うべきものであつた。もし藤吉郎自身でも、他人のそういう振舞いを見たら、輕蔑するにちがひなかつた。けれど今の彼には、男の面目も、万一の外聞も、反省している違いとまがなかつた。

「寧ね子ねは、どうしているか」

彼が求めているのは、つまるところそんな他愛ないことでしかなかった。垣根の隙間から、彼女の横顔と、この夕方の彼女の生なま活の端を、一目見れば、それで気はすむのであつた。

「もう、湯浴ゆあみをして、化粧けしょうしているかな。親たちと、膳ぜんをかこ

んで、御飯でもたべている折かな？」

三度ぐらい、その垣の外を、彼はさあらぬ顔して、行きつ戻りつした。宵なので、誰か一人や二人は往来があったのだった。垣根にすがって覗きこんでいるところを、

「木下殿」

などと知っている者に呼びかけられたら大いに赤面ものである。いやそれよりも、折角、犬千代が手をひき、親の又右衛門も、その後、考え直して来て、寧子ねねと自分との結婚の工作が、このところ好転しかけているものを、自分でぶち壊すこわような結果を招しょうら来いする惧おそれもある。

今は。

そつとしておくに限るのだ。寧子の母も、寧子も、心はきまつていよう。だが、父親の又右衛門がまだ、容易に、肚を決めかねているところだ。七分三分の考慮中で、娘と父、母親と父親とのあいだにも、なかなか易やすやす々とは一致をみないままに、ここはお互いが、心の推移を待っているといった按配あんばいに——一先ず寧子の縁談は、家庭のうちでは、打ち切られたすがたになつているのであろう。

そこへ。

この前のような短兵急に、厚顔あつかましい押しの一手で、
「寧子を給われ。婚礼の日どりを決めて欲しい」

などと自分でもちかけると、かえつて又右衛門の厳格な父性は

反撥するかも知れないし、寧子や寧子の母親が、せつかく寄せている好意をも、興さまして、ふと、考え直されでもしたら、取り返しはつかない。

先年までは、犬千代という強敵が居、消極的に、失恋を待つていたら、とても勝目はないので、あらゆる智慮と熱情をもつてそれと闘つたが、もう自分の恋を脅きょううい威する相手は、

(寧子をたのむ)

といつて国外に去り、その後、桶狭間の合戦の後、ふたたび御勘気をゆるされて、城内へ帰参してはいるが、もう以前のように、この家やへ近づいているふうも見えないのである。又右衛門が苦にしていた問題の「犬千代との結婚の口約こうやく」なるものも、自然解

消のままになつて、今日では何の憂いもない筈のものになつて
る。

「焦^{あせ}心る必要はもうない。今はソツとしておいて、又右衛門の気
もちが、もう一歩、好転するなり、よい口ききが、他から現われ
るのを待つのが上策」

藤吉郎は、その辺、心得ぬいていた。——しかし、寧^ね子^ねのこと
に限つては、彼のそうした賢い思慮と、彼の愚かな垣^{かき}覗^{のぞ}きの心
理とが、一箇の彼という中に、べつべつに働いていた。

蚊遣^{かやり}の煙がながれている。台所のほうでは瀬戸物の音が聞える。
まだ夕餉^{ゆうげ}も前らしい。

「才、働いてござるな」

藤吉郎は、やがて、わが宿の妻ときめている寧子の影を、ほの仄かな明りのさす台所の辺りに見出して、

「あれなら世帯も好う持とう」

などと人眼を忍ぶ急場にも、そんなことまで考えたりした。

彼女の母の呼ぶ声がする。彼女の返辞は、垣の外から覗いている藤吉郎の耳にもひびいた。藤吉郎は、歩き出した。往来を誰か人が通って行ったからである。

「よく働く、そして柔順だ。あの女なら、中村の母にも気にも入ろう。百姓していたしゅうとめ姑と、わしの母親を、粗末にするようなことはあるまい」

彼の恋は、煩惱のうちにも、遠大な考えまでした。

「貧乏に耐えよう。虚栄には囚われまい。良人は大事に、良人の陰かげで助ける女になれよう。おれの欠点も、ゆるすだろう」

何もかもよく考えられる。

第一眉目みめも麗うるわしい。

あの女性を措おいては、おれの妻はない。そうまで、思い込んだ。ひとりでに胸ふくが膨ふくらんでくる。大きな動悸ふくを打っているのだ。——ふウツと、星を仰いで大きな息をついた。気がついてみると、組長屋の一郭を一まわりして、またいつのまにか寧子ねねの家の前に出ているのだった。

ふと、垣の中に、寧子の声が出た。水桶を持って、井戸のほうへ行く姿が、夕顔の蔓つるのすき間から見える。こぼれそうな星明り

だし、夕顔の花明りに、その横顔も白々と見えた。

「下婢かひのする水仕事まで手伝つてするし、あの手で、箏ことも弾くし……」

藤吉郎は、中村の母親に、わたしの嫁はこういう女性であると、一日もはやく見せたい気がした。涎よだれをたらさないばかりな顔である。その顔を垣へ寄せたまま、彼自身、眺め飽くことを知らない態であつた。

井水いみずを汲み上げる音がする。だが寧子は、水桶を提さげずに、じつとこつちを振り向いていた。

「ア、気づいたかな？」

思う間に、彼女の姿は、井の側を離れて、裏の木戸のほうへ歩

いて来た。藤吉郎は、胸に火を当てているように、熱い鼓動を覚えた。

「……………」

彼女が、そのの木戸を、ソツと開けて、外を見まわした時、藤吉郎の影はもう、後も見ずに駈けていた。

遙かな、道の辻を、横へ曲る時、藤吉郎は振り向いて見た。白い顔が、怪訝けげんそうに、まだ木戸の外に立っていた。

「……………」

恨むような眼がこっちを見ているようにも思われた。けれど藤吉郎は、とたんに、明日の卯うの刻こくの旅立ちを考えていた。他言を禁じられている主君のお供である。寧ね子ねにもそれはいえないこと

であつた。

彼女の無事を知り、姿を見、ここまで離れて来ると、藤吉郎はもう常の彼に立ち回かえつていた。一目散に家に歸つた。そして眠ることになると実に屈託のない鼾いびき声であつた。

若党のごんぞは、いつもの朝より早く起きて、

「旦那さま、お支度なされませ。そろそろお時刻でございますぞ」
枕元に坐つて起した。

おうと匆はね起き、顔を洗う、飯を喰う、旅支度にかかる。

こういう起居の手ばやくて活潑なことは、信長仕込みというか、藤吉郎もおそろしく気短かであつた。

「行つて来るぞ」

何処へとも、召使にも云い残さない。命令の卯の刻すこし前に、彼も、城下外の西の街道口、豪農どうけせいじゆうろう道家清十郎の宅まで行き着いていた。

てつこくじゆんゆうき
敵国巡遊記

「やあ、猿どのか。おぬしもきょうのお供に見えたか」

豪農道家清十郎の門口に立っていたいなかぎむらい田舎侍が、彼を見ると

呼びかけた。

「や、おいぬ於犬」

これは意外といった顔つきの藤吉郎であつた。

その犬千代が来ていることはさして驚くに足らないが、服装がいつもとまるで違う。髪ゆの結ゆいようから大小、脚絆きやはんの拵こしらえまでが、どう眺めても草深い田舎から出た野侍のざむらいとしか見えないのである。

「これはまた、どうした仔細」

訊ねかけると、

「御一同もすでにぼつぼつ揃いうて在らせられる。はやく通れ」
もんえい
 門衛もんゑいのように犬千代はいう。

「お汝ことは」

「わしか、わしは暫時、門番を仰せつけられた。後で通る」

「然らば」

ごめんと通つて——藤吉郎は門内の前せんざい裁たたくに佇たずんだ。庭へ通う道と、入口へ向う道との、いずれへ通つたものか一思案という顔だった。

豪農道家清十郎の家は、藤吉郎の眼にもめずらしい旧家だった。吉野朝以前からの建物か、もつと古い時代の物か、想像もつかなかった。姉妹兄弟一族が、みな一囲いの中に生活していたという大家族制の頃の遺風さえ見えて、どつちを見ても長屋があり、棟むねがあり、門の中に門があり通路があつた。

「猿どの。此方こなたじゃ」

庭の方の門から、またひとり田舎侍さむらいがさしまねく。見ると、池田勝三郎である。

そこをはいると、同じように——といつても服色は雑多だが、田舎武士づくりの家中が二十名もいた。藤吉郎も、かねていわれていたことなので、田舎者に見えることにおいては、人後に落ちない支度では来た。

「……おや」

中庭のほうの縁には、約十七、八名の山伏が、休息していた。それも、家中の屈強な武士たちの変装した群れであった。

中庭の彼方の小座敷には、信長が見えておるらしい。もとより微行しのびであった。道家家どうけでも、主人とほんの家族しか近づいてはいないらしい。藤吉郎は、他の相役と、溜りたまを作つて休んでいた。

「何のお微行しのびである」

誰も訊く。誰も知らない。

ささや
囁き合つて、

「殿にも、きようのお支度は、まずちとばかり家来も持つ、郷土のせがれどの倅殿と見たらよいようなお装つくりなのだ。何かまた、ひょうげ飄氣おごそたお遊びでもあることと思つて来たら、そんなふうもなし、おごそ厳か、秘かに、ああして供人の揃うのを待つておいでなされる。やはり遠国へ向つて、ほんとに旅立ち遊ばすのやも知れぬ。——となる

と、その行き先だが、誰か、小耳にでも洩れ聞いておらぬかの」

「よう聞かぬが、先頃、林佐渡様のおやしきへ召し呼ばれた時、京のあたりへと伺つたが」

一人のことばに、

「え。京都へ」

人々は声をのんだ。

危険なということが第一と、京都へ上る以上は、信長の胸に、何の**大志**、何の**秘策**かがあつてのこと**にちがいない**がと、その目的の何か、かえつて大きな怪訝いぶかしみに囚とらわれたのである。

藤吉郎は、人知れず、

「さてこそ。さてこそ」

独りうなずいて、信長の立たち触ぶれが出るあいだ、邸内の菜園をぶらぶら歩いたり、屋根の子猫に手招きしたりしていた。

信長を囲む田舎武士の一群と、それを遠見に護つて歩く山伏の一群とは、やがて幾日かを経て、都へ出ていた。

これは東国の田舎武士にて候、年ごろの望みかのうて、この
 ほど叔父、甥おい、子ども打語うちかたらい、鳩におの湖うみこえ、花の都へ、
 見物に入りもうして候。

暢のんびりと、信長はじめ、人々はそういった態ていをつくらつた。

桶狭間おけはざまに見せたような険しい眼光は、誰もみなしまいこんで、

面おもても言語も、悠長に、そして何処かごつい、東国武士となりすま
 していた。

宿所は、道家清十郎から、疾とく手まわししておいた洛外はらの腹お

帯地蔵びじぞうの在家ざいか。山伏たちは、附近の農家や安旅籠やすはたごへ、ちらか
 つて泊つた。

「さて、どう遊ばすかな」

藤吉郎は、信長の行動に、多大な期待と、興味をもって見ていた。

「猿も、供に」

と、いわれる日もある。また、自身は連れて行かれず、他の者を従者として洛中へ出向く日もある。

いうまでもなく、いつも日除笠ひよけがさ眉深まぶかに、質素で野人そのまま

な身ごしらえであった。供はせいぜい四、五名。遠く離れて山伏姿の何名かが、それを見護っていたが、彼を彼と知って、近づこうとする刺客があれば、目的は易々いたるくらいな程度であった。

「きようは見物しよう」

と、まったく放心して、洛中の人中を、終日ひねもす、埃ほこりをあみて歩

いて帰る日もあつたが、また、時ならぬ時刻に、突然出て、公卿堂上の門を訪い、その奥で密談した上、すばやく帰つたりする夕べもあつた。

一切は、信長の胸三寸の行動で、若い侍臣たちには、何を目的として、乱国の危険な巷ちまたに、この冒険を彼が敢あえてしているのか、分らなかつた。

藤吉郎にも、もとより這般しやはんの消息は、知るよしもなかつた。けれど彼は彼で、その間、よい見学をしていた。

「京都みやこも変つたなあ」と、思う。

針を売つて、漂泊していた頃、彼は京針を仕入れにここへ出て

来たこともある。指折れば、六、七年前でしかないが、こうじょう皇城の地の世態せたいは、甚だしく変つていた。

室町幕府はあるが、十三代足利義輝あしかがの存在は、名ばかりの將軍家であつた。

かんりよう管領細川晴元はあるが、これもあるという名ばかりで、實権はない。

古い池のように、ここの人心も文化も、よど澱みきつていた。あらゆるものに末期まつきが感じられる。

實際の主権者にある代管領の三好長慶みよしながよしは、その老臣の松永まつなが弾正久秀だんじょうひさひでのために左右されていて、ここにも醜みにくい葛藤かつとうと、うごきのつかない無能や暴政ばかりあつた。民衆の眼にさえ、

「もう遅くはない」

と、自解のきざしを陰口かげぐちに囁かれてささやいる時流だった。

では、その時流は、どう向いてゆくか。といえればこれは誰にも暗澹あんたんであつた。徒らに華美で浮薄で夜の灯も盛りながら、一面には蔽おおい難い暗さが人々の心を占しめているのも、

「明日あしたは明日」

と、方向のない生活から湧く、どうしようもない濁流であつた。政庁の三好、松永が頼むに足りないとしたら、管領のほかにも、世に將軍家の御相伴衆ごしょうばんしゆうといわれている山名、一色、赤松、土岐、武田、京極きょうごく、細川、上杉、斯波しばなどという大名たちはどうしているのか。

それらもまた、各自の国々において、同じ時代の悩みにつき當つていた。京都は京都、將軍家は將軍家。より以上、自分たちの国境や内部において、その多端に奔命していた。大きく世を思い、他を顧みる違などはなかつた。

そうした京都へ来て、藤吉郎はまた、その眼に見、耳に聞いた。朝廷の御衰微ごすいびの想像以上だったことである。

畏れ多いが――

と、よく下々しもしもの噂にも聞かぬ沙汰ではなかつたが、御所の築つ土は破れ果て、御垣守みかきもりの影すら見えない。栗鼠りすや野良犬さえそこを越えているのだ。内侍所ないしどころに雨や月影が洩つて、冬ともなれば、御衣ぎよいの料しろにすら事を欠くと、勿体なげに沙汰する下々の憂い

も真まことであらう。

誰であつたか、その頃。

公卿くげの常盤井殿ときわいへ伺候して拜謁はいえつを願ひ出たら、折しも十二月の中旬ちゅうじんというのに、垢あせじみた衣冠いかんすらなく、夏のままな単衣ひとえに蚊帳やを上まとに纏まとうて会つたということである。

近衛殿このえあたりでさえも、年に一度の式日に、賓客まろうどが馳走を眺めて、口に入れられそうな物は、三宝さんぼうにのつている小豆餅あずきもちぐらいな物であつたといふ。

皇子の御在所も、親王家の宮居みやいも、ありやなしやの状態だつた。御料の地も、遠国の御田みなたはもとよりのこと、山科やましなとか岩倉あたりの近くの御田や御林まで、野武士や乱逆の郷士らに荒されて、

一粒の供御も上がっては来なかつた。弊を正す大名が国々にない。その罪を懲らし、大逆の行為を論してやる司法者もないのである。——まして庶民の中の弱者の田や畑は知るべきであつた。

信長は、実に、その折も折に、京都へ微行で出て来たのであつた。

どこの国の大名も考えつかないことだつた。

いや、上洛して、自己の三軍の覇を誇示し、綸旨を仰ぎ、将

軍や管領を強迫し、もつて八道へ君臨しようという野望家は、ひとり先にその途上で挫折した今川義元があるばかりでなく、宇内いたる所の国々に割拠する大名豪傑の輩が、みな理想としてい

ることではあつたが、单身、京都へ上つて、将来の計をなそうと

するような——そんな身軽な豪胆さは、信長以外に持ち合わせている者はなかつた。

彼が、そうして、三公九卿さんこうきゅうけいの門に、密ひそかに往来している間に、何らか、後日の政治的な基礎が、一つぶの胚子たねほどでも、蒔まかれていたことは間違いなからう。

彼はまた、幾たびか足を運んで三好長慶みよしながよしの執達を通して、三代の義輝よしてる將軍に会つた。

勿論、三好家の館たちまでは、いつものような東国侍の微行しのびすがたで、そこで式服に改め、室町の柳りゅうえい営へ出向いたので、まったく誰も知らぬ会見であつた。

室町の柳営は、絢爛けんらんな廢墟はいきよに似ていた。足利十三代の間

なし尽した將軍たちの逸^{いっちらく}楽と豪奢^{ごうしゃ}と、独善^{まっぴり}的な政の跡を物語る夢の古池でしかなかった。

義輝將軍は、信長を見て、

「お許^{もと}か、信秀どのの息子信長とは」

と、いった。

力のない声である。

型の如く、近習や作法張った儀式はあるが、精^{せい}彩^{さい}がなかった。將軍職の名はあっても、ここに實際の力がないことが、すぐ感じられた。

「信長です」

平伏して、お見知りおきください、と彼はいった。平伏してい

る彼の小さい姿のほうが、遙かに四辺あたを払い、上段の人を押し、声に力があつた。

「父信秀を、御存じでござりましたか」

義輝將軍は、

「存じおる」

と、うなずいて、信長の父信秀を知つた縁故について、記憶を語つた。

それは、かつて、皇居の荒廢のあまりの甚だしさに、諸国の豪族に對して、朝廷の御名をもつて、

だいらごしゅうりのりようけんじょうのゆたつ
内裏御修理之料献上之諭達

が発せられたことがあつた。

ところが、勅にこたえて、奉仕を申し出る大名はほとんど稀れであつた。諸国戦乱の絶えまもなく、各が自己の存立にきゆうき汲々としてゐる世情の常とはいつても、浅ましい限りであつた。

(これが、皇土皇天の国にあることか)

と、朝臣たちも、雨漏り風の防ぎもない内裏だいりの荒廢をながめて、ただ啣かこち嘆なげくばかりであつた。

それは、天文十二年の冬のことであつたから、信長の父信秀の立場なども、四隣に強敵をひかえ、微弱な領土と兵力を擁ようして、一方に勝てば一方において敗れるという有様で、わけても苦境のまつ最中であつた。

にも関かかわらず、勅をうけると、信秀は、すぐ使者を京都に上のぼせ、

御料四千貫文を献じ、また、他の有志らと計つて、御築土、四足門そくもん、唐門ことなどの御修理をもなしとげたのであつた。

「いや、お汝ことの父は、勤王家であるばかりでない、武人にはめずらしい、敬神家でもあつたよ」

ごきげんの麗うるわしい日であつたとみえ、義輝よしてる將軍は、初めて会あう信長に、よく話した。

「畏れ多いことじやが、伊勢神宮の内宮うちみやは、往古いにしえから二十一年ごとに、新しゆう改造する制であつたが、応仁おうにんの乱以後は、そのことも廢すたれて、ここも荒るるにまかせてあつたを、お汝ことの父信秀には、その御式の復古じんに、いたく力を尽されたそうな。――
いずれにせよ、ゆかしい仁じんであつた」

義輝は、そんなことで知つていゝ意味を、さりげない雑談にいつのであつたが、聞く信長には、亡き父に対して、新たな追慕と大愛が思い出され、しばしは、さしうつつ向いていたことであつた。

信長は、何人よりも、自己を信念することにつよい性質だけに、ともすれば、父と子との情愛を離れては、父をも、さしたる武人とは思わなかつたが、自身が實際の世につき進んでみると、何処にもここにも、父の遺^{のこ}して行つた子のための捨石が築かれてあつたことに気がついて来た。その遠謀と、愛の大きいことが、近ごろ分りかけて来たような気がするのであつた。

たとえば、亡き後の子の経営に、ひらてなかつかさ平手中務や、その他の良

い家臣らに目をかけておいて、遺のこして行つてくれたのも、今となれば、ひしと有難さを思う。

また先頃の桶狭間おけはざまの大捷たいしやうにしてもそうである。あれは自分の乾坤けんこん一擲いつてきが奏功したのだと一時は思ったが、よくよく後になつて考えてみれば、今川の上洛計画は、すでに父の生きていた頃からのことで、父信秀は、小豆坂あずきざかや、その他の戦場で、幾度かその今川の気鋒きほうを叩きに叩きつぶしていた。そして織田の将士に、強い敵愾心てきがいしんと多年の訓練とを、骨髓こつずいにまで、植えこんでおいてくれたものである。

その遺産があつたればこそ、田楽狭間でんがくはざまの一挙も、あの功を奏したのである。いかに、自己の死を決し、また兵に向つて、死ね

やとさけんでも、主君として立つてまだ徳の浅い、月日も短い、自身だけの手飼に過ぎない兵と、伝統のない織田家であつたら、どうして、あの^{たいしやう}大捷を博すことが出来得たろうか。

戦い終つて後。勝つての後。信長はひとり静かにそう思うことがしばしばであつたし、今また、義輝將軍から、計らずも父の遺徳をうわさされたので、こうして義輝が会つてくれたのも、その徳の一つと、^{しみじみ}沁々、今さら有難さを覚えたことであつた。

四方山のはなしの末に、

「こたびは、ほんの^{しのび}微行の上洛。それに尾張の田舎者、何ひとつ、都人のお目に珍しき国産とてもござりませぬが」

と、手土産の目録を献じ、やがて信長は、^{いとま}暇をつけて、^{さが}退りか

けた。

すると、義輝將軍は、

「待つがよい」

と、信長をひき止めて、程なく黄昏れともなろうから、食事を
してゆくがよいと云い、席を饗応の間へ移した。そして、酒を賜
うことになった。

ひがしやまよしまさき 東山義政すきの数奇と風雅をこらした苑にわがあつた。紫陽花色あじさいの

夕闇に、灯に濡れた苔こけの露が光っていた。どんな席に置かれても、
めうえ眼上の前でも、至つて窮屈こじつがらない質たちの信長は、眼八分に持つて
くる銚子にも、小笠原流の料理、故実こじつのやかましい膳部も、極め
てこだわりのない姿で、

「御ごいっこん一献」

と、注つがれば、

「は」

と、素直に受け、

「お箸を」

と、すすめられれば、

「頂戴申す」

と、辞儀して、みな喰べた。

客の食慾をめずらしがるように、義輝將軍はながめていた。

善美や儀式に飽いた將軍家は、信長の喰べるのを見て、年も若いし、田舎者には、都の物が、何を喰べても美味なのであろうと、

せめて、そう思うことで、ほこり矜を持していた。

「信長」

「は」

「どうじゃの、やかた館の庖丁は」

「結構でした」

「美味か」

「ただ、われら武骨の者には、どのお料理も、塩味がうすうて、かかる味ないお料理は、信長、めずらしく戴きました」

「ははは。むりもない。そちは茶はたしなまぬか」

「飲むすべは、湯の如く、幼きよりわきま弁えておりますが、大人のあ

そぶ茶とやらの道は、ぶたしな不躑みでござります」

「苑にわを見たか」

「拝見いたしました」

「どう思う」

「小さいと存じました」

「小さい？」

「きれいではありませんが、信長の田舎清洲きよすの丘の眺めから較べますと」

「そちには何もわからぬとみゆる。ははは、生なまもの知りより、あどけのうてかえってよい。したが、そちの躰たしなみとするは何ぞ」

「弓矢。それ以外に、何の弁わきまえもござりませぬ。そのかわり事しあれば、尾張より美濃おうみじ近江路の敵地もこえて、三日のうちには御

所の御垣みかきまでいつなと馳せ参ずるが信長の能事のうじにござります。――

――諸国乱麻らんま、王城の地とて、いつなん時の変あろうも測られませ

ぬ。信長あることを、お覚えおき下さればありがたいがどうぞんじます」

莞爾にっことしていった。

義輝よしてるは、見つけない人間と、聞きつけられない言葉とに接したよ

うにその笑靨えくぼを、見まもっていた。

本来ならば。

その乱世に乗じて、將軍家が前さきに地方の守護職に任命してある

斯波家しばけを亡ぼして、無断、その国主の位置にとって代っている信

長である。將軍家の権威として、

「豎子じゆし！ 何者」

と、これを問注所もんちゆうじよの白洲しろすへ蹴落しても、当然であつていいのである。

だが、寄りつく大名とて近頃はなく、孤帳こちよう寂寞せきぱくの感にたえなかつた將軍家は、むしろ信長の来訪に、無聊ぶりようをなぐさめられて、なおもはなしたい容子ようすであつた。

はなしのうちに、官職や位階でも欲しい意味をほの仄めかすのかと思えば、それもなく、信長はやがて爽やかに御館みやかたを退出した。

京都での滞留は、およそ三十日ばかりで、信長は、

「帰る」

と、触れ出した。

帰るとなると、それも急で、

「明日」

と、気がはやいのである。

山伏、田舎侍などに姿を変えて、分宿していた侍臣たちは、忙しく旅立ちの用意にかかったが、その夜、国元の尾張から使いが来ての書状に、

清洲御立の後、風説頻り^{おたち}と行われおり候、御帰国の方途^{ほうと}わけ

て御細心に、路上の変異くれぐれおん備^{そなえあそばさる}被遊^はべく候

御侍側^{ごしそく}

とあつた。

伊賀伊勢路へ出て帰るも、江州^{ごうしゅう}から美濃を越えて帰るにし

ても、敵国また敵国である。

伊勢には、宿年の敵、北畠家があり、美濃には、斎藤。そのほか、一尺いっせきの地でも、敵地を踏まずに帰れないことはいうまでもない。

「どう道を選んだが御無事であろうか。いつそ、船路の便ということも考えられるが」

信長の滞在している土豪の家に集まって、その夜家臣たちは、額ひたいをあつめて凝議ぎようぎしたが、なかなかはなしは纏まとまらなかつた。

すると、池田勝三郎。

信長の居間にあてられている奥のほうからずかずか出て来て、

「御一同、まだ寝ないのか」

と、そこを覗いた。

怪しからぬことを、といわんばかりな顔をして、一名がいった。
「大事なことを評議しておるのに、まだ寝ないのかとは、無礼なおことば」

「御評議中か、それは知らなかった。いったい何の御相談事か」
「殿のお側にありながら、暢気のんきなことをいわれるものかな。宵に着いた飛脚の書状、ご存じないか」

「伺った」

「帰途、万一の変でもあつては一大事。いずれの道からお帰国あつたがよいか、それについて、心を砕いておるところだ」

「はははは。いやそのご心配ならご無用。殿にはもう決めておられる」

「え、お決めになつておられると」

「上洛の折は、ちと人数が多すぎて、かえつて人目立つ心地がする。帰国の際は、ほんの四、五名がよい。家来どもは家来どもで、ちりぢりに、好きな道を選んで帰れと、そのおつもりでいらつしやる」

啞然^{あぜん}として、一同は、そのままにかく朝を待った。

朝もまだ仄^{ほの}ぐらいうち、信長はもう支度して洛外^{らくがい}を立つていた。池田勝三郎のことばに違^{たが}わず、山伏姿やその他の家臣二、三十名は後に残して、

「随意^{ずい}、帰国せよ」

と、いつて別れてしまった。

附き従う者は、わずかに四人であつた。勝三郎はもちろんその中にいたが、最も光栄に感じたのは、木下藤吉郎で、彼もその中に選ばれていた。

「余りのお身軽」

「よいかしら？」

なお、不安にたえない残りの家臣組は、大津あたりまで、見えかくれに信長の姿を守護して行つたが、そののちうまやじ駅路の馬を雇つて、信長たちは、さも気やすげに、瀬田せたの大橋を東へ去つた。

関所の木戸も、幾つかあつたが、難なく越えた。信長は、三みよし好長ながよし慶よしから乞こいうけた「管領カンリヨウケ家人、東国へ下ル者」とある往来手形を、木戸へかかるたび、所領の役人へ出して示した。

菊きく便だより

片田舎の草屋そうおくでも、近ごろは茶をたしなむ風がさかんであつた。

余りに動流の激しい、そして血なまぐさい世の中なので、その半面の「静」を求め、血ぐさい一瞬いつときを離れて、寂じやくの中に、息をつこうという人々の声なき求めといえるであらう。

元々これは、東山殿の贅美ぜいびと退屈の果てから生れた貴族趣味のものだったのが、いつのまにか、その東山殿の足利文化あしかがを、過去の殻からとして、次の生々いきいきと伸びかけている草民そうみんのうちへ、極

めて、平民的に、また生活に即して、日常に愛され行われるような傾向になりかけていた。

「動」の生活に対する「静」の一瞬として、この雅境がきようを最も愛し始めたのが、怖ろしく一面に破壊的な、また血なまぐさい日常を持つ武人であり、それを見、草屋ひさしの廂の下にまで、平民化して来たのは、近頃、専らそれを業わざとして、一流一派を称しだした茶ち宗やそうの流れを汲む各地の小茶人達であつた。

誰まなに習まなんだか、寧ね子ねも、その茶をひととおりはやる。

喫のむのは好きな父の又右衛門またえもんがあるので、独り稽古ごとのそら箏ごとを、垣の外ゆく人へいたすらずらに聴かすのとはちがつて、茶をたてるにも、張合おやこいはあるし、それに、朝のしずかな生活と、父娘おやこの和なごや

かなほほ笑みは、瀬戸黒の茶わんにたたえた緑の泡の湯加減から始まるといつてよいほど、これは遊戯ではなく、生活の中にはいつているものであつた。

「めつきり、庭草が露ぼくなつたのう。菊のつぼみは、まだ固いが」

ぬれ縁から、十坪ばかりの囲いをながめて、又右衛門は、つぶやいていた。

「……………」

返辞のないのは、炉ろの前に、寧子ねねの手が折ふし茶柄杓ちやびしやくにかかつていたからである。沸わきたぎる釜の湯から酌み出されたそれが、茶わんのうちへ、とうとうと、泉の口でも落したように、部屋の

寂寞しじまを快くやぶつて注そそがれると、彼女は、にこと横を向いて、

「いいえもう、表の坪の菊は、二、三輪ほど、よい香を放つてお
りまする」

「そうか、咲いたか。……今朝も箒ほうきを持って掃いたに、気がつか
なんだ。花も、武骨者の軒に咲いては、情じょうなしよと、無情つれなかろう
な」

「……………」

茶ちや筥せんのかるい迅はやい音おとが、寧子の指さきからササササと搔き立
てられている。——が、なぜなのか、又右衛門のことばと共に、
彼女の顔には、さつと紅い羞恥はじらいがさして見えた。

そんなことに、氣のつく又右衛門ではない。茶わんを寄せる。

押しいただく、飲む——。アアいい朝だといった顔つきである。

だが、ふと、

(娘を、他家へやったら、もうこの茶ものめぬ……)

冬来れば冬枯れる、庭面にわもの移りなど想いながら、ふとそんなことも考えたりしていた。

「ごめん遊ばせ。……」

こぶすま
小襖そとの外。

「こひか」

妻の顔を見ると、又右衛門は、寧子ねねへ、茶わんを戻して、

「母へも、一ぷく、たてて与えよ」

「いえ。お後で」

見ると、こひは、じょうばこ状笥を持っていた。今、玄関に使いが見えておりますというのである。状笥を膝へ取つて、蓋ふたを払うと、

「はてな」

又右衛門は、いぶかしい顔した。

「——殿のお従いとこ兄弟様。名古屋なごやいなほ因幡守様からのこれは御書面。何事やらん」

にわかすすに立つて、口を漱ぎ、手きよを浄めて来て、状を拝し直した。主君の御一族とあれば、手紙といえども、その人の前とにあるのと同じ礼儀を執るのであった。

その状を読み終ると、又右衛門は妻の顔を見て、

「お使いは、お待ちになつておられるのか」

「はい。けれど御返辞は、御口上でもおよろしいとのこと」

「いやいや、失礼にあたる。ちよつと、すずり硯を」

「はい」

料紙へ、一筆して、又右衛門はすぐ、使いへ戻した。

妻のこひは、手紙の内容が気にかかった。主君の信長の従いとこ兄弟にあたる名古屋因幡守から、この末臣の家へ、直じきじき々に状を持たせて使いをよこすなどは極めて稀れなことである。

「何の御用であらうな」

それは、又右衛門にも、解げせぬらしい。といつて、手紙の内容は、至つて悠閑のどかな消息に過ぎない。内密の用事とか、折入つてとかいう言葉は見えなかつた。

自分はきょうは一日、堀川ほりかわぞ添いの閑居へ来て終日読書している。自分の裁つくった菊がこの好日の下に清せいこう香を放っているが訪う人もないのを嘆じている。あなたの御都合はどうか。もしお暇さいもんだったら柴門を叩いてくれ。

——これだけの文字に過ぎないのである。けれどこれだけの用事であるはずはない。又右衛門が特に茶にたしなみが深いとか、殊勝な読書子であるとか、風雅とりえに取柄のある漢おとことかいうのなら知らぬこと、わが家の門に咲いた菊さえ気がつかない。弓の塵ちりならすぐ目にもつけるが、菊の花などは踏んで通つてしまひそうな人なのである。

「とにかく、参ってみよう。こひ、衣いしよう装を出せ」

又右衛門は、起つ。こひと、寧ね子ねは、又右衛門の左右から、衣え紋もんよ、袴腰はかまよと、手を添えた。

「行つてくるぞ」

明るい秋の陽ひの下に立つて、又右衛門はいちど我が家を振り向いた。寧子とこひが、揃つて、門まで出て、見送つていてくれる。彼の心は珍しく泰平を味わつた。乱世の中にもたまにこんな日がある。にこと笑う。寧子やこひも、にこと笑う。すたすたと彼はもう大股に背を見せて歩いてゆく。弓ゆみ之衆のしゆうの同僚の庭や窓から、やあと声をかける人がいる。やあと挨拶して通る。

相かわらず何処のやしきも貧乏と質素な景色である。しかし、織田の御家中はみなかくの如く息災だと、又右衛門はひとり祝福

して眺めてゆく。貧乏と質素につきものの子沢山は、弓之衆の組長屋にも沢山いて、屋敷屋敷の垣ごしには、襠褌むつきの干してあるのがひどく眼につく。又右衛門自身が実子を持たぬせいもあるろう。ひとりの姪めいを娘として育てて来たのが、ようやく妙みょう齡れいとなつたので、

「やがて、自分の家にも、あのような孫の襠褌が」

と、自然考えられて来る。——それは又右衛門にとって、余り感心したことではなかつた。やがて孫から、おじいちやまなどと呼ばれる日を想像するのは、楽しくなかつた。まだそうなるには心外なような自分を足腰に残しているつもりなのだ。つい先頃の田で楽狭間んがくはざまでも、人におくれはとらぬつもりで働いたが、

「この先とても」

と、戦場の馳駆ちくを、また、武功帳の筆頭ふでがしらにもなろうことを、決してあきらめてはいないのであつた。

「……お、いつのまにやら」

城下町の堀川添いに、彼は、これから訪れようとする人の閑雅べっそうな別業べつごうを見て立つた。それは以前、小さい寺であつたのを、信長の従兄弟いとこいなばのかみ因幡守が、別宅に造り直した家だつた。

玄関に備えてある撞木しゅもくをもつて訪鐘ほうしようをつく。取次があらわれる。誘いざなわれて通ると、名古屋因幡守は、又右衛門の早速の来訪に、斜めならぬ機げんである。よう来てくれた。ことしも戦乱の中だが、菊も栽つくつた。後で、菊畑へ出て見てもらおう——など

と隔意かくいもないもてなしである。

だが、主筋の人なので、

「はい。はい」

と、又右衛門は、席を遠くにし、辞を低くしないわけにはゆかない。

それと、何の御用か？ が、胸のどこかで、気がかりを持つている。

「又右。もそツと、寛くつろいだがよい。敷物も取るがよい」

「はい」

「ここからも菊が眺められよう。菊を見るは、花を見るのでなく、丹精をながめるのじゃ。人に見せるは、人に誇るにあらで、歡び

を分つて、人の歡びを歡ぼうとするのじや。こういう好日の下に、菊の香を嗅ぐかのも、君恩の一つであるな」

まこと
「寔に」

「よい御主君を持ったことを、われわれはこの頃、痛切に思うようになった。桶狭間おけはざまの折に仰いだ信長様のおすがたは、終生、われらの眼底から消えまいと思う」

「畏れながら、あの日のおん姿ばかりは、お人とは思われませなんだ。武神ごんげの権化かと思われました」

「しかし、お身らわしらも、共にようやったな。そちは弓之衆じやが、いずれもあの日は、槍隊となつたな」

「御意にござります」

「今川が本陣へかかったか」

「すんでに、彼の丘^かへ、なだれ打って寄りました折は、敵とも味方ともわからぬ乱れの中で、首取ツた、駿河殿打ツたと、わめき声が聞かれました。後で伺えば、毛利新助どので在^{おわ}したそうな」

「そちの組のうちに、木下藤吉郎という者がおつたか」

「おりました」

「前田犬千代は」

「御勘気をうけていた身、御陣借^{ごじんがり}をゆるされて、勝手働きした由でございますが、戦場でも戻つてからも、まだ見かけませぬが、御帰参はかないましたか」

「かのうた。——そちはまだ知るまいが、つい先頃、殿のお供し

て、京都へ上洛^{のぼ}り、無事帰城して、御城内に勤めている」

「京都へ。殿もお上洛^{のぼ}りとはいかがなわけでございますか」

「今となつては、申してもさしつかえないが、わずか三、四十の者をお供に召され、御自身も東国侍の何げない熊野詣^{くまのもうで}と装われて、およそ四十日余りも、お留守であつたのじや。——家中にもすべてその間は御在城のていにしておいたが」

「ははあ」

又右衛門は、驚いた顔した。こういう驚きを、後で知つた家中は皆、同じように喫^{きつ}し合つたことであつた。

「起たぬか。自身、菊畑へ案内してつかわそう」

^{うなが}促して、^{いなばのかみ}因幡守は、縁へすすんだ。^{くつぬぎ}沓石に新しい草履を見

た。又右衛門は侍かしずくが如く因幡守の後について庭へ出た。菊の栽つくり方について、因幡守はいろいろな苦心を話した。嫩葉ふたばから花を見るまでにするには、風雨の朝夕、子を育てるような細心の注意と愛がなければ、などともいつて、

「そちにも、寧子ねねとやらしい愛まなむすめ娘があるそうじゃが、子どもは一人か」

と、訊ねた。

そして、縁へ歩みを移し、また席へ戻つてから、時に嫁につかわず気はあるかないか。ひとり娘とすれば、他家へはやれまいが、聲むこをとるつもりかなどと、だいぶ話は立ち入つて来た。

ははあ、さては用談の内意は、寧子ねねの縁談についてのことであ

つたかと、又右衛門は察して来たが、それにしても主筋のお方からお声があるうとは、思いもうけないことでもあるし、冥みようが加かにすぎた面目とも思うのだった。

「おたずねの娘寧子は、実は自分たち夫婦の生なした子ではございませぬ。養女なのでござります。生みの親は播ばんしゅう州たつの龍野から御

当領の愛知朝日あいちあさひむら村に移り住んでおりまする木下七郎兵衛家利いえとし

が娘で、一男二女の三人の子の、うちの一女をもらいうけて育てあげたのでござります。木下七郎兵衛が祖先は、平相国へいしやうこくの孫

維これもり盛すぎより出で、杉原伯耆守すぎはらほうきのかみが十代の末孫、血すじも正しい

者これもりにござります」

親ごころは、つつんでもつつみきれない歓びをすぐ現わして、

縷述るじゆつするのであつた。

因幡守いなばのかみは、うなずいて、

「血すじもさることながら、何よりは心ばえのよい娘じゃそうな。よく噂を聞く」

「おそれいりまする」

「——では、どうしても家名はつがせねばならぬの」

「御意むいにござりまする」

「その聳むしを、因幡が世話いたそうと思うが、どうじゃな」

「……は」

又右衛門は、身を折るように、額ひたいをつけた。何か、ためらいがあつた。この問題にさし迫ると、今なお、考え出されたり処置に

迷うものがあつたからである。

いなばのかみ
因幡守は、そのためらいも眼にないように、独りのみこみ顔していった。

「よい聳がひとりある。わしにまかせい。悪いようには取り計らわぬが」

「勿体ない。冥みようが加なおことば添え、帰宅のうえ篤とくと家内どもにも、ありがたい御意をつたえまして」

「相談するがよい。儂みが世話しようという聳どのは、ふしぎや寧子が生家とも同どうみよう苗の木下藤吉郎。そちもよう見知ってる男じやが」

「えツ……」

又右衛門は、思わずそういつてしまった。ぶしつけなど、直ぐ自分の驚き声をたしなめたが、意外とせざるを得なかった。

「返辞を待つぞ」

「はい。いずれ……」

と、だけで、又右衛門はその日は暇いとまをつけて出た。——どうしてとか、どういうわけでとか、問いたさは山々だったが、主筋の人だけに、根ほり葉ほりもできなかつた。

帰ってくると、彼の妻は、待ちわびていた。又右衛門からはなしを聞くと、妻のこひは、又右衛門が即答せずに帰って来たのを、むしろ難じるように、

「おうけなされませ。よいおはなしかと私もぞんじます。縁事

には総じて時というものがありますし、こうまでに、藤吉郎どののおはなしが重なるのは、よくよく宿世すくせからの縁も浅からぬことと思われまします。主筋のお声がかかりゆえ、よんどころなく遣つかわさねばなどとお考えあそばさずに、その主筋のお方すら、仲に立つて口をおきき遊ばす程、藤吉郎どのには、どこか見所みどころがあるのでございます。……あしたにもどうぞご返辞を先様へなされますように」

「だが、寧子ねねの胸も、一応訊いてみねばなるまいが」

「それはいつか彼娘あれが申したではございませんか」

「ム。……じやがああ折のとおりな気もちで、今もいるのか」

「あまり口はきかぬ寧子でございますが、こうと思ひさだめたこ

とは、なかなか変える娘ではございません」

「……………」

又右衛門の父性的な取りこし苦勞は、ひとりですもうを取って、ひとりで投げすてられたような手もち無沙汰をおぼえた。

ここのところ、とんと顔も見せないの、先も忘れぎみかと思つていた藤吉郎のすがたが、ふたたび家庭の中に、又右衛門夫婦や寧子の胸に、眼の前の人として、大きくうかび出して来た。

翌る日、又右衛門はさつそくに、名古屋いなばのかみ因幡守のほうへ、返辞に出向いたらしかつた。

帰ってくる早々、

「いや、わからぬもの、案外なおはなしの筋じやつた」

と、妻にいう。妻は、良人の顔いろで、すぐ外そとのことを知った。都合よくなしが運び、良人の胸も解けて、寧子ねねの問題に、明るい光がさして来たことを、共に笑顔へあらわした。

「きょうはの、思いきって、どうして因幡守いなばのかみ様が、寧子の聳まことばなしになど、お口添えあそばすか、そこを、お主筋のお方で、寔まことに伺い難にくかったが、——お糺ただし申してみたところ、何と、前田犬千代から頼みがあつて、では、口をきいて遣つかわそうということになつたのじゃそうな」

「え。犬千代どのから、因幡守様へ——。寧子と藤吉郎どのとを媒めあわせてと、お頼みなされたというのでござりますか」

「何でも先頃、殿様がお微行しのびで京へ上られた道中で、はなしのあ

つたことらしい。——で、信長様のお耳にも、ちらと、入ったのではあるまいかと思う」

「ま。……勿体ない」

「まこと寔に、畏れ多いことだ。旅の徒つれづれ然などのひまに、犬千代、藤

吉郎などが、君前において、あけすけに寧子のことどもをお物語いたしたらしい。その果てに、然らば、因幡が仲立ちして、藤吉郎が望みをかなえてとらせよ、とお声があつたものと察しられる」

「では、犬千代どのも、ご承知のうえで」

「その犬千代が、その後も、因幡守様の許もとへみえて、ぜひお骨折りをと頼んだということゆえ、もうその方の憂いはさらさらない」

「それでは、きようは因幡守様に、はっきりお答えしておいでら

れましたか」

「む。何分、おねがい申しますると、いうてもどつた」

又右衛門は、これで内々の心配が、からりと霽はれたように、胸をそらした。妻のこひも、

「ご安心でございましょうが」

と、良人の歡びを共によるこんだ。

すこし離れた板屋の小間では、寧子がきょうも針を運んでいた。祖母の代からあるという小袖なども引き出して、古糸を抜いて鞣まりに溜ため、布は一きれ一きれ張り物にかけて、ふだんの台所着に縫い直しなどしているのだつた。

時折には、独り閉じて、箏ことをかき鳴らしていることもあつた。

その古箏も絃いとも久しいので、

「買ってやらねば」

と、又右衛門は、音を聞きたびに呟つぶやいたが、まだまだもう一ひとつ戦くさして、名だたる敵の首でも挙げなければ、新しい箏も娘に求めてはやれない家計だった。

しかし、聲が来る。又右衛門も、こひも、そうきまると、何となく心せわしい。

もつとも貧しいながらも、その用意はしているけれど、いったいどんなことにしたもののか。

年はこえて、永禄えいろく四年。

戦雲のけわしきは依然たる中である。この一家庭のために、世

の中は停止していない。

はなしは途中でまたおくれて、夏となり秋八月となった。

すっかりきまると、聶の君は、私たちの道を切ったように、絶えて姿も見せなかつたが、いよいよ八月の三日という吉日、浅野家の長屋に、華燭かしよくの典は挙げられることになった。

聶むこの君きみ

「はて。せわしない」

藤吉郎はつぶやいてみた。悪い忙せわしきでないからである。

そのくせ忙しいのは、若党のござや下婢かひや手伝いに来ている

人々であつて、彼自身は漫然と今朝から家の内や外をぶらぶらしているに過ぎないのである。

「きようは八月三日だな」

分りきつたことを何度も胸の中でただしてみろ。時々、押入を開けてみたり、褥しとねに落着いてみたりするが、どうも落着かないし、何も手につかないのであつた。

「寧ね子と婚礼する。おれが聳入りする。いよいよ今夜のことになつたが、何だか、急にまがわるいぞ」

祝しゅうげん言のことが知れてから、彼にも似あわず、家の召使たちにも、ひどくこの頃はれていた藤吉郎であつた。聞き伝えて、

近所の細君や同役の誰彼が祝い物など持って来ての応対などにも、

「いや、もうその……ほんの内輪の祝言でござって。……まだまだ家内など持つのも、ちと早いと存じてはいたが、どうも、先もいそぐので、止むやをえず」

などと顔を赤らめながら、いうことは自分の沽券こけんのいいようなことをいつていた。

前田犬千代に譲らせたり、その犬千代から主筋の名古屋いなばの因幡かみ守かみをうごかしたり、躍起となって、遂に思いを実現させたことなどは、誰も知らないので、

「聞けば、因幡守様のお声がかりだそうな。それにあの浅野又右衛門どのが、聳にとゆるすからには、やはりあの猿どには、どこか見どころがあるものとみえる」

と、同役はじめ上下の評判は、この婚礼についても、藤吉郎に箔はくをつけたものにこそなれ、悪い声は生まなかつた。

だが藤吉郎は、そんな衆しゅうこう口くちのよしあしなどはどうでもよい。

彼としてはまず第一に中村の母へこの由を報じてやった。自分で飛んで行って云々しかじかとつもる話と共に嫁の素す姓じやうや人がらなどについてひともくわしく告げたかつたが、一かどの者となるまでは、母も中村で過そう、そなたも母に心をとられず、お主大事に仕えよといわれているので、

「まだ、まだ」

と、逸はやる会いたさを抑えて、こんどのことも手紙でばかり消息しやうししていた。

母からもしばしば使いが来た。いつの手紙でも使いのはなしでも、その欣よろこびようといつてはない容ようす子が会わなくてもよく分るのであつた。わけて藤吉郎の心をやや慰めたものは、追々と藤吉郎の出仕しゅっしぶりが村にも知れ、またこんどは然しかるべき武家の娘と結婚し、しかもそのお媒なこうど人が信長様のお従いとこ兄弟にあたる人と聞えたので、村中の者の見る眼が、藤吉郎の母や姉に対してもすつかり變つて来たという事實であつた。側にいて母に孝養もできない彼には、せめてもの安心であり、またいささか無言のうちに郷里へ示す誇りをも覚えたことであつた。

「旦那さま。お髪ぐしを上げておきましよう」

ござは、櫛くし篋ばこを持ち出して、彼のうしろに坐つた。

「や。髪も結うのか」

「こよいは、智の君。そのお髪ではなりませんまい」

「ざつとでいい」

かがみぶた
鏡蓋

をあげて立てる。

藤吉郎は、鏡に向つて、真面目な顔していた。なかなかざつとでいいこともないらしい。自分でも笄を持ち、しきりと鬢をなでたり、根を上げよとか下げよとかやかましい。

髪がすむと、庭へ出た。厨では近所の細君と下婢たちが、行水の湯をわかしている。門のほうにはまた、祝いの辞をのべに来る客の声に、ごんぞが慌てて駈け出してゆく。

「ああ、日暮もまぢかい」

白い夕星がもう桐畑の梢こずえに見えはじめている。聳こぞの君も、この夕は、多感であつた。

今の彼は、大きな歡びの中にあつた。大きな歡びに会うたびに、彼は中村の母が思い出された。そして、その歡びを共にすることのできない今を寂さびしく思つた。

「慾をいえば限りがない。世には母の亡い人すらあるに」

独り彼はなぐさめた。別れてこそいるが、母はまだ石となつて
いる人ではない。また、こうして別れているのも、母の心は自分
をして御奉公に専念させ、自分の考えも後日の大を誓っているか
らである。お互いに、

——もうこれなら。

という日を待つて迎えましょう、母も息子の許へ来よう、という楽しい希望のためにであつた。

「俺は倅せ者だ」

しみじみ

沁々、今も思う。幼い時からどんな逆境に泣かされた日でも、自分は不倅せだという考えは持つた例のない藤吉郎であるが、きようはわけても深くそれを思つた。よく世間の不遇な人々の中に聞くのは、なぜ人間に生れたらうとか、こんな厭わしい世はないとか、自分ほど不倅せな生れつきはないとか——何でも人間は皆、自分ほど不運で不幸な者はないと思つているものらしいが、藤吉郎は、まだかつて、世の中を、また人生を、そう観て嘆いたおぼえがない。

逆境の日も楽しかった。それを乗りこえて、逆境を後に見返した時はなお愉快だった。

彼はまだ二十六である。自分でも、前途の多難は覚悟しているが、これから先とても、ぶつけて来る困難にベソをかく日があるうとは思わない。どんな濤なみでものりこえて見せようという覚悟が、強しいて覚悟と意識しないでも肚にすわっている。そこに洋々たる楽しさが前途に眺められた。波瀾があればあるほど、この世はもしかろく観じられるのであった。

けれど彼は、

(われこそ天下の何にならん)

とか、

(武士と生れたからには百世に名をのこし、生ける間には一國一城の主とも)

などと、よく城内の若人^{わこうど}たちが寄るとさわると、衣の袖をたぐしあげて傲語^{ごうご}するような大言壮語はしたことがなかった。実際にまた考えてもいなかった。

彼のねがいは、人並に人たろうとすることであつた。彼の誓いはいつも現在の職分に忠実に、草履取となれば草履取になりきり、お台所方に勤めればお台所用人になり切り、お厩^{うまやぎむらい}士となればお厩者になり切つて、その職責を全うするほか他意のないことであつた。

その代り彼は、何を勤めても、なくてならない人間になつてい

た。ずいぶん誹謗ひぼうもされ、あぶない奸計にもかかりやすい彼であったが、いよいよとなるやはり、

(なくてならない彼)

であるその根を、今は清洲の重臣でも、容易たやすく抜き捨てることのできなかつた。それにまた信長が、近頃は彼の才幹を認めだして来ているので、彼の位置は、何といつても相変らず低いものだったが、そういう方の憂いはまずなく、安心して御奉公に尽し得られるという今日の礎いしずえはできていた。

——だからこの折に、寧子ねねとの結婚を機しおに、中村の里から母を迎えてもよいのであるが、浅野家のほうでは、嫁にはやれぬ娘とのことで、その結果、入いりむこ婿こというので話はできているのである。

その点からも、今はまだ母を呼び迎える時期ではなかった。

それに、祖先はとにかく、母は百姓である。その母をしていじらしい気がね遠慮や恥はかかせたくない。藤吉郎は、そんなことも思ったりして、

「もう一、二年のうちには」

と、ひとり呟つぶやきながら、行水の湯盥ゆだらに浸ひたつて、こよいは特別丹念に、黒い襟えりくび首くびなど洗っていた。

行水を浴あび、浴衣ゆかたになつて家の内へもどつてみると、もう家じゆうは人でいっぱいの混雑である。自分の家か他人の家かわからない。何を忙せわしがっているのか、あれよこれよと、座敷も台所もひとつに眼を廻している。藤吉郎はしばし部屋の隅で蚊を追いな

がら、他人事ひとごとのように傍観していた。

「躰さまの、懐紙かいしや持物は、みなお衣裳のうえに添えて置きなされや」

「添えておきました。お扇子せんすも、印籠いんろうも」

かん高い声でいいつける。合点する。駈けまわる。

どこの女房か。

どこのお内儀か。

どこの主人か。

そう深い縁者でもないのが、みな親類以上、親身になって働いてくれる。お躰さま、お躰さまの声で、家うちも外も、持ちきつているのである。

「あ……お城普請しろぶしんの折の大工棟梁あばたも手伝いに見えておるな。左官の女房もやって来ておる。……炭薪奉行すみまきの頃から親しい、山の者も村の者も。……何ぞといえば忘れずに皆」

隅でぼつねんと蚊を追っていた聶の君は、そうした人々の顔を見て出し、心のそこから欣しく思っていた。

聶入り、嫁娶りよめとこじつの故実こじつにやかましい老人も中にはいて、

「聶どのの草履がすり切れておるではないか。古草履ではならぬ。新しい草履を召されて、嫁どのの家に着くと、先様の仕女つかいめが、すぐそれを取って奥へ持つてゆく。そしてこよいは、嫁方の舅しゅう御とごどのが、その草履の片方ずつを抱いてお寝やるのが古からの仕きたりじや。聶どのの足をこうして留めますという足留めの

式でな」

また、ひとりの老婆としよりは、

「松たいまつ明のほかに、脂燭ししよくの用意もしてありましような。裸火に

しては持ち歩けぬゆえ、消えぬよう、明りに紙覆おいをかけて、嫁君のお家まで持ってゆく。そして、あちらにも脂燭ししよくの御用意がし

てあるはずゆえ、御挨拶といつしよに、その灯あかりを、あちらの物に

移し、三日三晩は、消えぬよう、神棚にあかあかとぼしておくのでござりますぞ——おわかりかの。誰かよう、聳つどのに従ついて行く衆が覚えておいて下さらぬとなりませぬが」

と、わが子を聳つにでもやるように親切である。気をもんでくれる。ただ世話ずきとのみは片づけられない。藤吉郎は、母こそ側

にいなかったが、母が側にいてくれる程、何もかも任せていられた。

そのうちに、表のほうで、

「お使いじや。嫁御から聳どのへ、お式日の文ふみはじ初めのお使いじや」

と、鄭重のうちにもどやどやして、やがて蒔絵まきえの文ふばこ管ふばこの房長ふばこなのを恐こわ々わ持もつた近所の内儀うちぎが、

「おや、そういえば、聳どのは一体どこにお在いでなされてじや。まだ行水をつこうておいでかの」

藤吉郎は、縁の端から、

「これにあります。これにあります」

「ま。そんな所に」

と、ふぼこうやうや文筥を恭しく出して、

「嫁御様からの、ふみはじ文初めでござります。お武家のことゆえ、古
いお式も、堅く遊ばすものとみえます。聶君からも、何ぞ一筆、
書いてお返しなさるのが、お作法でござりますゆえ、一筆、したたお認
めなされませ」

「何と書くのでござりますか」

「ほ、ほ、ほ」

内儀は、笑うのみで、教えてもくれない。そしてただ料紙と硯す
ずりぼこ筥とを藤吉郎の前へ持って来た。

ふみがよ文通いとか文初めとかいう式は、古い平安頃からの聶取りの

慣わしらしいが、近頃は戦乱多事な世でもあり、もしまた、聶君が悪筆なために、当惑させてはなるまいという例もしばしばあつて、今はめつたに行われぬ儀式なのである。

だが、あしかがよしみつ足利義満將軍の頃に、武家の婚礼儀式はかなり作法やかましく定められたことがあつて、それが風習となつて今でも家柄の古い武人は、どことなく真似事まねごとでもしなければ気のすまない風がある。

聶どののほうは、何もそういうことは頓着ないほうであるし、
（体さえ持つてゆけば）

と、簡単に考えていたが、先の浅野又右衛門夫婦は、それではすまないであろう、型のごとく文初めの使いをよこしたわけで

ある。

「さ。なんと書いて遣ろう」

藤吉郎は筆を持って当惑した。

文事に深く身を入れたということもないが、村の寺小僧にやられていゝうち、また、茶わん屋に奉公中にも手習いだけは人並にしているの、そう人前に出せない悪筆とも自身卑下ひげはしていゝ。

ただ文もん言ごんに困つたのである。

そこで彼はこゝろ書いた。

よろしき夜にて候

聳すげどのも、ほどなくまいり語らうべく

先はかしく

書いて、それを持って、

「お内儀、お内儀」

すずりばこ 硯 筥 を取ってくれた近所の細君へ示してたずねた。

「これでいいんでしょうか」

細君はおかしがって、

「いいでしょ。多分」

「あなただつて、今の御主人からもらったことがあるんですよ。覚えていませんか、その時の文句を」

「わすれましたね」

「はははは。当人が忘れるようじゃあ、大したことはありませんな」

文使いが帰る。餅が搗つけたという。立ち振舞に、餅をたべる者と酒を酌む者とが、一つ座にあつまつて、ことほ賀どのを祝はやぎ囃はやしたりする。

荷駄にだうま馬に、青い布や赤い布を飾つて、その背に、当夜の餅を載せて、手紙と共に、中村の母へ持たせてやると、

「さ。お支度を」

と、賀どのは、これから婚家へ着てゆく晴れの麻袴がみしもだの袴だの、扇子だのを突きつけられた。

「はい、はい」

何事も、手伝いの女まかせに着せてもらう。

それを着終る頃。

空に新秋八月の宵月がちらとさし、軒ばには、門立ちの松明
 があかあかといぶされていた。

曳馬ひきうま一頭、槍二本。その後から、聳どのは、新しい草履で、
 てくてく歩いた。

先には、二、三人が松明たいまつを持ってあるいてゆくのである。貝
 桶びょうぶだの、屏風箱びょうぶだの、唐櫃からびつだのという華やかな祝言の荷は何
 もないが、鎧櫃よろいびつ一つに衣裳箱ひとつは担になわせている。足軽三
 十人持ちの当時の侍が聳立ちとして、何の負目ひけめもないものであつ
 た。

負目ひけめどころか、藤吉郎自身はひそかな誇りをすら抱いていたであらう。こうしてこよい世話してくれる者や供についてくれた者
はみな、縁者でもなければ頼んでつれて来た者でもない。すすんで自分のことのように、こよいの婚礼を歓んだり案じてくれる人々であった。

婚家の座敷に積んでみせる贅沢な荷もつはないが、彼の身はこ
ういう人望を負って行った。

弓之衆の長屋はこよい門ごとにあかあか明りがうごいていた。
浅野又右衛門の家一軒の祝い事のために皆、門をひらいているの
である。門辺かどべにかがりを焚たいている家もあるし、紙燭ししよくを持って
わざわざやがて通るであらう賀どのの到着を、婚家と共に、待ち

久しげに佇たたずんでいる人々もある。

子を抱いたり、手をひいたり、近所の顔が、近所の火明りに、なんとなく華やいでいた。

そのうちに、彼方の辻から、童わらわたちが駈けて来て、

「来たよ、来たよ」

「お智さまが見えたよ」

童たちの母親は、子の名を呼んで、静かに、とたしなめて側へ寄せていた。宵月の光が淡く往来に濡れていた。童たちの先触れが露払いとなつて、それから誰も往来をよぎらないことにしていと静粛にひそまり返っていた。

辻が赤く染まつた。

二本の松たいまつ明が曲つて来る。

その後から、賀殿は歩いて来た。曳馬ひきうまの飾りには、鈴がついているとみえ、松虫の啼く音のようにりんりと揺れてくる。具ぐ足櫃そくびつ、二本の槍、誰彼と、四、五名の供も来る。このお長屋としてそう見苦しい程でもない。

わけて賀の君の藤吉郎は、至極神妙のていに見えた。小兵こひょうではあるが着飾らない程に身なりも整っておるし、一部でひどく悪口ぶきりよういいうほど不縹ふきりよう緻でもないし、才氣を鼻にかける男とも見えな

い。
その夜、長屋垣や門辺たたずに佇んで、眼の前ただに通るのを見た人たちに、賀殿の人物をどう見たかを正直に問い糺ただしてみたとすれば、

一様にみなこういったらうと思われる。

「あたり前なお人や。あれなら寧ね子ねさんの聳ぞうどどのとしたところで、そうおかしいほどでもないがの」

女房たちの評も、その辺が代表的なものであつたし、近所住いの侍仲間でも、

「当りまえな人物」

と、いうに一致していた。要するに、男ぶりも見ツともない程ではないが、優すぐれて立派でもないし、人物としても将来そう破格な出世もしまいが、弓之衆の家へ来る聳ぞうどどのとして不足をいう程でもない——と、いうところが衆評であつた。

「お着きなされました」

「聳どののお入り」

「めでどうお迎え申しまする」

又右衛門の家の門辺には、待ちもうけていた縁者や家族たちが、藤吉郎のすがたを迎えて、一ひとしき頻り揺れる明りに華やいだ。聳どのの家から大事に消えぬように持つて来た脂しよく燭ともしの灯を、すぐ婚家の婢ひが、その家の脂燭に移し灯ともして、奥へかけこんでゆく。

供と供のあいだに、門かど挨拶が交わされる。聳の君は、何もいわず、玄関へかかつて上がる。沓取人くつとりの下婢かひが、その草履をすぐ取つて、これも婚家の奥へ大事そうに運んで行った。

「どうぞ」と、聳どのはただ一人、べつの一室に案内された。ここでしばらく待つているものらしい。藤吉郎はぽつねんと坐つて

いた。狭い家である。六間か七間であつた。ふすまのすぐ隣で手
 伝い人たちのがやがやが手に取るように聞える。狭い中庭のすぐ
 向うが台所の水屋みずやなので、そこにも茶わんを洗う音や煮もののに
 おいが間近だつた。

お媒なこうど人たる名古屋なごやいなばのかみ因幡守は主筋たいしんであり大身に過ぎるので、
 こちらから辞退して、御家臣なにがしの某が夫妻で、今夜は手伝いがてら
 見えているらしい。藤吉郎は、往来を通つて来るうちは左程でも
 なかつたが、ここへ坐ると急に自分の動悸が耳について、しきり
 と口ばかりかわ渴いてきた。

聳の君は置き忘れられたように、いつまでもその一間にぽつ
 ねんと坐つていた。しかし彼は、行儀をくずすわけにもゆかない

ので、誰が見ていなくても、威儀端然と正していた。

「……………」

幸いなことに、藤吉郎はむかしから退屈ということを知らない質^{たち}だった。もとよりこれから華燭^{かしよく}の下に、花嫁とまみえる身の聳殿として、退屈など覚えるわけもないが、それにしても彼は、いつのまにやら、その聳の身であることは忘れて、あらぬ空想に、その久しい間を、独りなぐさめていた。

彼の空想は今、途方もないところへ飛んでいた。それは三州岡崎城であった。岡崎城の向背^{こうはい}がどう傾くか？　これがこの頃の彼の頭脳^{あたま}にあるいちばんの興味であった。それを考えると、こよいの花嫁が、あしたの朝、自分にどういいう言葉をいうか、どんな

姿で自分に朝のあいさつするだろうか？——などと空想するよりも、もっと大きく心をとら囚われてしまうのだった。その岡崎城は今、

（今川へ向くかな？）

とも思われ、

（御当家に傾いて来るかな？）

とも考えられ、岐路きろの運命にあるものだった。

去年、桶狭間おけはざまの役えきに、今川家が大敗した後、三州岡崎の松平

家というものは、

——従来どおり今川家に加担かたんで通すか。

——今川家にも織田家にも属せず、この際敢然かんぜん、孤立を表明

するか。

——織田家と和協の道をとるか。

の三つの方策に当面して、遅かれ早かれ、そのひとつを選ばなければならぬ立場に置かれているのであった。

年久しく、松平家は、今川家という大樹によ拠つて存立して来た寄生木やどりぎであつた。その根幹は桶狭間で仆れたのである。自立するにはまだ力が足りないし、今川義元の亡き後の今川家そのものも、遺子の氏うじ真まも恃たのむに足りないものだった。

岡崎城は悩んでいる。

ちまた巷のうわさや、上層部の政策を、ほのかに洩れ聞く程度の知識

ではあつたが、藤吉郎は、非常な関心と興味をもって、

(——ここぞ松平元康もとやすの器量のわかるところ)

と、眺めているのである。なぜか彼は、その岡崎の城主松平元康という人に、人いちばい関心をもっていた。それは彼が諸国を漂泊中に、つぶさに岡崎城の士風だの、よく多年の艱苦かんく欠乏や隸れいぞくてきぶべつ属的な侮蔑に忍耐して来た上下しょうかの実状を目撃しているせいにもよるが、もつと深い原因は、松平元康の通つて来た今日までの経歴にあつた。

(一国一城の主あるじと生れても、自分以上に艱苦もし、不運な人も世にはいる)

と、その元康の境遇を人のはなしに聞いてから、深く心をひかれていたのだつた。

しかもその人は、ことしまだ二十歳はたちの若さと聞いている。桶狭間の合戦の折、義元の先手を承さきてうけたまわつて、味方の鷲津わしづ、丸根の砦とりでを墜おとしたあの手際てぎわもよかつた。

義元討たれぬ——と、知つて、夜のうちに、さつと三河へ退ひいて行つた退軍の態度もよかつた。

織田の陣中でも、その後の清洲でも、元康の評はよいほうである。従つてよく話題にのぼる人物だ。——藤吉郎もまた、その元康の岡崎城が、やがてどういう方向をとるかなどと、独りそんな空想くわいに耽かつていた。

「智ふすまどの。これにおいでか」

襖ふすまがあいた。藤吉郎はわれに返つた。いや智ふすまどのの自身に返つ

て、

「お。これは」

と、そのまま、えしやく会釈した。名古屋いなばのかみ因幡守の臣で、こよいのみようだいなこうど名代にわひようぞう媒人、丹羽兵蔵夫婦がはいつて来たのであつた。

「不つつか者ですが、主人なこうどやく因幡守様の名みようだい代として、てまえ丹羽兵蔵夫婦が、お媒人役つとめます。何なと御用仰せ下さるなこうどように」

なこうど媒人夫婦の挨拶である。

藤吉郎も、ひと通り、

「ご苦労にぞんずる」

と、会釈を返して、勢い聳どのらしく取り澄ました。

媒なこうど人夫婦はすぐ、

「縁者どものうち、やむなき用事のため、遅参の者がござって、
 賀殿にいかいお待たせ申しあげてござるが、さらば早速、これに
 て、ところあらわしの式仕つかまつれば、暫時、それにてお控え下されま
 せ」

と、いう。

藤吉郎はまごついて、

「ところあらわし、とは一体なんでござるか」

「嫁方のしゅうとしゅうとめご舅 姑 御 をはじめ、お身内の縁者どもと、賀どの

との、初の御対面を取り行う古式でござる。——と、いうても、
 時節がら、また御質素の御家風ゆえ、ほんの顔あわせのみで、さ

したる式作法いたすわけでもおざらぬ」

と、いう間に、媒人女房は、

「おざりませ」

と、襖ふすまをあけて、次の間にひかえた人々を招く。

いちばん先に、挨拶にすすんで来たのは、舅姑の浅野又右衛門夫婦で、

「よろしゅう」

と、これは知り過ぎている顔であるが、式なので型のごとく挨拶する。

見馴れている二人を見ると、藤吉郎はもつとくだけで、頭でも掻きたいように手がうずいた。

「は。何分」

真面目すぎるほどの聳振りであつた。舅姑たちが済むと、

「わたくしは、寧子ねねの妹、おや屋やでござります」

十六、七の愛くるしい娘が、羞恥はにかましそうに三つ指をつかえた。

——おや？

危なくそう云いそうな藤吉郎の眼であつた。寧子ねねよりも美人な

くらいきれいな娘であつた。それよりも寧子にこんな妹があつた

ことを彼は今まで知らなかつた。深窓の佳人という言葉があるが、

どこにどんな帳ちやうり裡の名花があるか、武家の家というものは、幾

ら手狭てざまでも奥行の知れないものだと思つた。

「これはどうも。……私が御縁あつて参つた木下藤吉郎です。よ

ろしくどうぞ」

これから義兄あにとよぶ姉上の智君がこの人かと、おや屋は少女らしい眼で彼の顔をのぞきあげたが、すぐ後からまた縁者の一組が、「これは、寧子、おや屋の里方の叔父にあたる者。つまり当家の又右衛門どのの家内こひ女の兄、木下孫兵衛家いえさだ定さだでござる。初めての御見ぎよけん、この後はわけても御昵懇ごじつこんに」

すぐまた、

「てまえは、こひ殿の姉にあたる者の良人おつと、医師の三雪さんせつと申すもの」

と、べつな一組があらわれていう。藤吉郎は、誰が誰の伯父やら姪めいやら従兄弟いとこやら、覚えきれないほどの縁者に一度に会った。

(多いなあ、親類が)

ひそかにこの後のうるささも思われた。けれどまた、にわかにか
きれいな妹だの、話せそうな伯父だの、叔母だのが殖ふえたことも、
彼の気もちを賑にぎわした。身寄りのすくない、寡婦かふの母の手には育
てられたが、彼の性格としては、大勢がすきだった。大勢で賑にぎや
かによく働きよく笑える家庭が理想だった。

「聳殿。しからは、あちらの祝言のお席へ」

なこうど

媒人夫婦は、こう促うながして、やがて聳とみなどのを伴ともなって、こよいの

曠はれの席へ——といつてもすぐ二間越しのそこもそう広からぬ一間

であったが、設けの席へ誘いざなって、聳殿の坐るところへ聳殿を坐ら
せた。

みずかけいわ
水掛祝い

秋とはいえ屋おくの内は、まだ蒸し暑い気もする八月の夜なのであ
る。

窓すだれも軒すだれも、まだ夏のまま懸け残されてあつた。そ
こへ洩れてくる虫の音と夜風に、短たんけい檠の灯は灰ほのかにたえずうご
いている。そして塵ちり一つない婚礼の席は、華かしよく燭という文字には
当あてはま嵌らないほど灰ほのぐら暗かつた。

室は八坪ばかりの広さで、何の飾りけもないのがかえつて清すがす
々がと見えた。床には、簀すがきわら搔藁を展のべ、そのうえに薄うすべり縁が布し

いてある。うしろの床には、伊弉諾尊、伊弉册尊の二神を祀つて、そこにも一穗の神灯と、一瓶の神櫛と、三宝には餅や神酒が供えられてあつた。

「……………」

藤吉郎は身が緊つてきた。そこに坐つてから、ひしと考えさせられたことである。

これへ坐るまでも、決して苟め事や戯れ交じりでないことは勿論だが、その真面目をいつそう真面目に、

「今宵からは」

と、良人となる身の責任やら、変つてくる生活やら、またそれに附随する身寄り縁者の運命までが、みな自分とのつながりを持

つてくる、不思議なる儀式の中に自分を見直していたのであった。
わけても。

寧子ねねは好きでならない女性なのである。とくに、他へ嫁ぐとつところをも或る程度の人力で、彼女の運命を自分へ向け直して、こよいの祝言とまでしてしまった女性であつた。

(不幸にさせてはならぬ)

聳の座にすわると共に、最初に彼の思つたことはそれだつた。

男の力でうごかせば動かすにも足りる運命の弱い女——不愍ふびんな女——可憐かれんなるものを——と、思い遣やるのだつた。

ここでは。

そう長からぬ間に、やがて式事は運ばれた。実にといい

程、すべてが質素にである。

まず。

聳どのが着座すると程なく、花嫁の寧子は、物吉ものよしの女と称いう世話女じょうろう、藤ふじに導かれて、聳どしやうどのの隣へ音もなく坐る。その粧よそおいはとみれば、髪には垂さげ鬢かつらをつけて紅白くすの葛くずの根がけを用い、打掛うちかけは、白無垢しろむくの丸生絹まるすずしに幸菱さいわいびしの浮織うきおり——それを諸肩もろかたからぬいで帯のあたりに腰袴こしはかまのように巻いていた。下の小袖こそでも同じような白すぎぬの生絹なまぬである。もう一重その下に、紅梅べにばいの練絹ねりぎぬをかさねて袖口そでぐちにのぞかせている。

また、襟元えりもとから胸むねの守りというものを掛けて、それを懐ふところに抱いだいていた。他には、金釵きんさい銀簪ぎんしんのかざりもないし、濃い臙脂えんじや粉ふ

黛んたいもこらしていなかた。茅葺かやぶき屋根に簀搔すがきむしろ蕙この家の家
づくり造のとおりに、生地きじそのままであつた。この中に人の心をひく
 美があれば、それこそまったく粧よそおつた裝飾の美ではなく、飾らな
 いありのままな生地きじの美であつた。

ただ飾へいしられているのは、そこに把とる手を待つてゐる女め蝶お男お蝶の
 一対の瓶子へいしだつた。

「お久しゆう、めでどう、百千秋ももちあきまでも、お添いとげなされま
 せ」

嫁君、聳君、一対ついでに端坐へんざしてゐる前へすすんで、物吉ものきちの女が、
 こういいながら、銚子ちやうしを把とる。

媒なこうど人こうど夫婦も、縁者一同も、この席にはいない。みな襖ふすまどなり

に控えているのであつた。

「……………」

藤吉郎は杯を持った。

酌しやくにん人は、寧子へ取り次ぐ。

「……………」

寧子ちぎも契りをのむ。

藤吉郎の顔はさすが上気して胸も動悸を覚えたが、寧子は思いのほか落着いていた。

これからの生涯、どんなことに出会おうとも、自ら求めたものとして、親をも神をも恨まじとちかうような決意が、杯のふちへそツと触れる唇に、可憐とも悲壯とも云いようなく見えていた。

聾の君と花嫁との杯事がすむと、陰かげの間にひかえていた媒人なこうど
 役やくの丹羽兵蔵にわひょうぞうが、

音ずれは

松にこと問う

浦風の落葉衣の袖そえて

木蔭ちりの塵ちりを搔かこうよ

所たかさごは高砂たかさごの――

祝いわいうた謡うたの一ふしを戦場鍛えのさびた喉のどで、精せいいっばい謡うたいだ
 した。

尾上おのえの松も年古ふりて

老おいの波もよりくるや

木の下蔭の落葉かく

なるまで命ながらえて

なおいつまでか生の松いき

それも久しき……

ここまで丹羽兵蔵が謡つてくると、何者か、夕顔の花のまばらに白い籬まがきの外の暗がりで、不意に、

「——名所かな。——それも久しき名所かな」

と、謡い取つて、唱和した男があつた。

兵蔵の祝いわ謡うたに、家の内も近所もしいんとしていた。それだ

けに、突然、ぶしつけに垣の外で謡い取つた男の声も目立つた。

「……?」

兵藏は、愕おどろいて、ちよつと絶句してしまった。身寄り縁者の人々も驚き顔を見合わせた。聶ねつどのの藤吉郎も、思わず、庭ごしに横を見た。

召使の者であろう。

「誰だツ」

と、その悪戯いたずらもの者を、家の横から叱つていた。

すると、垣の外の人影は、なおも猿楽能さるがくのうたいの謡口調で、

「——抑おさ 《そもそも》、これは、九州肥後の国、阿蘇あその宮の神かみ主ぬし友成ともなりとはわが事なり。われまだ都を見ず候ほごほどに、このたび思おもいたちて上のぼり候。またよきついでなれば播州ばんしゅう高砂たかさごの浦をも一目見ばやとぞんじ候」

朗々と、そう云いながら、男は厚顔あつかましくも庭木戸をあけて、中へはいつて来るのであつた。

つかつかと、藤吉郎は、われも忘れて、花髻の座を離れ、縁先まで歩いて行つた。

「おツ。犬千代どのではないか」

「髻どのか」

顔をつつんでいた麻の頭巾ずきんを払つて、前田犬千代は、

「水掛祝みずかけいわいに来た。さつそくの水掛祝いじや。通つてもよいか」

藤吉郎は、手を打つて、

「よくぞ来てくれた。上がつてくれ、上がつてくれ」

「友達も大勢従えて参つたが、よろしいかの」

「よいとも。何の仔細があらうぞ。杯は今すんだ。こよいから某それがしは当家の躰でござれば」

「よい躰取つたな。又右衛門どのからも一献こんもらおう」

犬千代は、垣の外を振りかえつて、暗がりへ手招きした。

「おーい、方々かたがた、この家の躰へ水掛祝いしてくれよう。はいりなされ、はいりなされ」

すると、声に応じて、

「水掛祝いしよう。水掛祝いしよう」

と、異口同音にいいながら、庭いっぱい押し込んで来た顔を見ると、池田勝三郎がいる、佐脇さわき藤八郎がいる、加藤弥三郎がいる、また、旧友がなんまくが見える、あばたの棟梁もいる。そのほかお

厩方うまやや台所方の近年までの同僚など、犬千代に従ついて、もう簀すがき搔むしろ蕙むしろのうえへどやどや上がりこんで坐まっていた。

水掛祝いというのは、聳入りした家へ、聳の日ごろ親しい友達が押しかけて祝う習慣である。婚家はこの際できる限りこれを歓待する義務があり、押しかけ祝いの客たちは、ぞんぶん振舞いに甘えて騒いだあげく、花聳を庭上へひき出して、水を掛けて帰るといふのが例であった。いつの時代から流行はやりだした風習か、花嫁の「さうどう打ち」などという慣わしと共に、室町から戦国頃の婚礼には、きまつて行われたことの一つであった。

——だが、今夜の水掛祝いは、すこし気が早い。

ふつう世間であるのは、聳入りしてから半年目とか一年目とか

に押しかけるのが例なのに、まだ、杯事の式が今すんだばかりのところへ、

「水掛祝いに参つた」

と、犬千代が、しかも大勢で、婚儀の席へちんにゆう 闖入してきたので、

「——これは狼ろうぜき藉せきな」

と、又右衛門一家はもとより、名代みようだい媒ない人の丹羽兵蔵も驚あきき呆あきれるばかりだった。

けれど花賀の藤吉郎は、むしろ非常な歓びらしく、

「よく来た」

と、席をすすめ、

「やあ、貴公もか」

と、めずらしい顔へは愛想などいい、そして、たった今、杯を
 交わしたばかりの白装束しろしようぞくの花嫁をつかまえて、もう、

「寧子ねね、とりあえず、何なりと肴さかなを持て。そしてな、酒だ、酒を
 たくさんにこれへ」

と、いいつける。

「はい」

寧子も、さすがに、この不意打にはさつきから眼をみはつてい
 た。しかし、かかることに驚くようでは、この良人の妻として生
 涯添うてはゆけないものと、はやくも分つた容子ようすでもあつた。

「——かしこまりました」

すぐ次の間で、花嫁は花嫁の雪せつぱく白な打掛を解いた。そして白小袖のうえに、平常ふだんの濃袴こしきを腰にまとい、襷たすきもかけて、立ち働きはじめた。

「かような婚儀があろうか」

一間では、憤然と、怒っている縁者の声もする。

「な、なんじゃ！ あの態ていは。——まるで祝言を荒しに来たようなもの。聳さかどのも聳さかどのではないか。寧ね子ね、寧ね子。花嫁がなんたること。止やめんか。止やめい」

無理もない憤りではある。親類のなかには、こういう立腹屋が必ず一人や二人はいるものでもあった。けれどそれを宥なだめる身寄りもあり、女たちもいて、口を極めて抑えている。

「まあ、まあ」

そこを覗のぞいて、こうなだめたりまた、大勢のどよめきに、うろ
うろしたりしているのは又右衛門夫婦であつた。

又右衛門としては、犬千代と聞いた時、実はどきツとしたくら
いであつたのが、聾の藤吉郎とも、傍眼はためで見ても清すがすが々しい程、
仲よく、打ち興じて、語り合っている様子に、ほツと胸をなでお
ろしていた。

戦国そだちの、これからの時代はもつと、どうこの世がもんど
り打つて変るか知れない時勢に臨んでゆく若者輩わかものばらだ——。これ
くらいなことはなんでもない。いやこれくらい骨太でなければ、
むしろ頼もしくないというものだ。——又右衛門はあわてている

中で、そんなふうに思つてみたりした。そしてもう聳ときまつた藤吉郎へ、無意識に身びいきの眼がかかつていた。

「寧子よ。寧子よ」

彼も呼びたてた。

「酒が足りねば、酒店へ走らせての、ぞんぶんにこれへ、酒を運べよ。こひ、こひ」

と、また、自分の妻をよび、

「何をうろろうろしているのじゃ。酒ばかり来て、皆様に杯が来ておらぬではないか。どうせ馳走はなくても、生味噌なまみそ、生ねぎなまし、生なま生姜しょうが、何など、あるがままのもの持つて来い。——やあれ嬉し

や、犬千代どの、御一同、ようぞお越し召された。老人もうれし

ゆうおざる」

「やあ。又右衛門どのよな。お久しいのう。犬千代じゃ。一いっこん献、お祝いのおながれ戴こう」

「うむ。参らする」

又右衛門は、慥しかと、杯を持ち直して犬千代へ酌さした。無量な感慨が犬千代のほうにもある。最初のうちはしゅうと聶舅となる者は、こう二人のはずであつた。縁がなかつたのだ。ふしぎといえばふしぎ、飽くまで縁である。このうえはお互いに清すがすが々々ときれいに、ただ侍同志のつきあいでありたい。犬千代も祈つた。又右衛門もそう謝しながら杯を酌さした。万感という程なものが胸にあつても、心のうちに止めて、仄ほのかにしか色にも言葉にも出さないのが、おた

がい侍同志であつた。

「いや又右衛門どの、犬千代もうれしゆう存ずる。よい智とり召された。心からお祝い申す」

と、杯を向けて、

「寧子どのも倅せ、木下も倅せ者よ。大いに飲まざばなるまいと、ここにおる大勢どもを語ろうて押しかけて来た。かまうまいか」

「かまわぬ。かまわぬ」

又右衛門も弾はずんで、

「夜もすがらでも」

と、受けて飲む。

「はははは。夜もすがら、飲のうで謡うたい明かしたら、嫁君に怒られ

まいか」

すると、藤吉郎がいった。

「なんの、宅の女房に、そういう躰しつけ方はせぬ。至つて貞女ていじよもの者でもござれば」

犬千代は、膝を詰めよせて、戯たわむれかかり、

「これ、もうそのような、厚かましいことをいわるるか」

「いや、謝る。過言過言」

「ただはゆるさぬ。この大杯で——」

「大杯はごめん。小さいほうで頂戴する」

「なんのこの躰しつめが、意気地のない」

「いや、ごめん」

子らの遊び事のように戯れ合うのだった。だが、そんな酒の中でも、藤吉郎は、こん夜のみに限らず、常に暴酒はのんだ例ためがない。幼少の頃の苦い記憶があつて、癖の悪い酒のみや、無理強じいされる大杯を見ると、その酒に身持のわるい養父の筑阿弥ちくあみの顔が映つて見えてくるのであつた。その悪酒によく泣かされた母の顔がすぐ思いうか泛ぶからだった。

それと彼は、自分の健康の度をよく知っていた。育ちざかりを貧窮の中に伸びて来た体である。人すぐれた骨ぐみでは決してなかつた。青年に似あわず人知れず体をいとうことを知っていた。「大杯は無体じゃ。小さいのにしてくれい。そのかわりに、謡うたなとうたおう」

「何。うたうか」

返辞のかわりに、藤吉郎はもう膝を鼓つづみに打ちたたいて、謡い出しているのである。

——人間五十年

化けてん転のうちをくらぶれば

ゆめ幻のごとくなり

ひとたび生しょうを得て

滅せぬもののあるべきか

「やい、待て」

犬千代は、謡いかけた藤吉郎の口を抑えて、

「それはお汝ことが謡ではない筈だぞ。わが君が何ぞというところよくお

得意に謡い遊ばず敦あつもり盛の謡じや」

「されば、清洲の町人友閑ゆうかんをお招きなされて、常々、舞と小謡こうちたを遊ばしておられるのをいつのまにか、この方も見様聞き真似みようきまねで覚えてしもうたのだ。べつにお止とめうた謡というわけではないし、謡うて悪いこともあるまい」

「いや、悪い悪い」

「なぜ、わるいか」

「めでたい婚礼の席に、ふさわしゆうない謡を、何も謡うことはない」

「桶狭間おけはざまへ御出陣あしたの晨、わが君が舞ってお立ちなされたという小謡こうちた。これから貧しきわれらの若夫婦が、世の中へ出る門立ち

にも、満ざらふさわしくないこともなからうが」

「そうでない。戦場に立つ覚悟は覚悟、新嫁を迎えた祝事は祝事。友白髪しらがまでも、尉じょうと姥うばのようにまで、長寿ながいきもしようと心がけるのが、かえつて真まことの武士というものぞ」

「それよ」

藤吉郎は、膝を叩いて、

「実をいえば、この方の望みといえはそこにある。戦いくさとなればぜひないが、仇あだには死なじ、五十年はおろか、百歳までも、寧ね子ねと仲よう添い遂げたい」

「またいうたな。さあ舞え、さあ舞え」

犬千代のせめたてる後について、他の大勢も、舞え舞えと、囃はや

したてた。

「ま、待ってくれ。今に舞うから。今に舞う」

はや
囃す友人たちを、一時のがれにそう宥^{なだ}めておいて、藤吉郎は、

「寧^ね子、酒がないぞ。——この銚子も、この銚子も。ほ、これにもない」

手を叩きながら厨^{くりや}のほうへ振り向いて呼ぶ。

「はい」

と、寧子の返辞だった。

銚子を持って、いそいそとそれに見え、藤吉郎にいわれるまま、素直に酌もする、客たちへも悪びれない。一座のていを、ただ呆れ顔に眺めているのは、縁者どもや、寧子をいつまで子どもとし

か見ていなかった親どもだけで、寧子の心はもう良人と一つになりきっているし、藤吉郎もその新妻へ、もう何の氣づまりも体裁もなかった。

犬千代は、さすがに、寧子と面おもてと面を合わせると、持前の多感な血が、酒の氣と共に、顔へ出てくるのをどうしようもなく、

「これは寧子どので在おわしたか。——いや今宵からは木下殿の御内室。改めて御祝儀な申そう」

と、杯台を、彼女の前へ送って云った。

「誰も彼も、友だちどもは、隠れものう知っておることよ。今さら、面伏おもふせに、云い籠ごもっておるよりは、さらりと、胸のうちを申してしまおう。……のう、木下どの」

「何か」

「しばし、お内儀を拝借もうすが」

「はははは。さあどうぞ」

「よろしいか。さて然らば、寧子^{ねね}どの、聞いていただきたい。――

――一時は、世間の口の端にもいわる程、犬千代は、貴女^{あなた}が好きであつた。今とても変りはない、寧子どののは、犬千代が好きな女性のおひとりでござる」

「……………」

急に犬千代のことばの節^{ふし}は、真面目になつていたのである。さなきだに、寧子の胸にも、人妻となつたばかりの感傷がいつぱいであつた。今宵で過ぎる娘時代のうちの一人の男性として、犬千

代のことはこの先とも思い出の中から除ききれるはずはなかった。

「寧子どの。……おとめぐころ 処女心とよく人は危うげに申すが、貴女はよ

くもこの藤吉郎どのを見立てなされた。——恋というも愚かなほど、好きで好きでならなかつたおん身を、この犬千代が木下殿へ譲つたのも、実は貴女以上に、わし自身、木下どのの人間に惚れたからでおざるよ。されば、男が男に恋の引出物として、貴女にのし熨斗をつけて彼に与え申した。……というては品物のようにするようじゃが、男とは、そんなものよ。ははははは。——いや、そうじゃないか木下」

「うむ、おおかた、そんなお心根かと、遠慮のうもろ娶うたのだ」

「そうとも、こんなよい妻、遠慮などしたら、見損うた男と、犬

千代はかえつて蔑さげすむぞよ。お汝ことには、過ぎた女房ぞ」

「ばかを申せ」

「あはははは。何せい欣うれしい。のう木下、おぬしとわしとが生涯つきあおうが、かかるめでたい夜はあるまいぞ」

「む。あるまいな」

「お媒なこうど人の名代殿には、いずれへ退散してしまわれたか。寧子どの、そこらに、小鼓はないか」

「ござりまする」

「犬千代が小鼓をいたせば、誰ぞ立つて、幸若舞こうわかまいなど、田楽でんがく舞まいなど、一さし舞わしやれ。木下どのは話せぬ男で、まだ舞は

よう舞わぬそうな」

「……では、お座興に、わたくしがふつつかな舞を一さしお眼に入れましょう」

起つたのは花嫁の寧子なのであつた。犬千代や池田勝三郎や、そのほかの豪の者も、これにはあつと眼をみはつた。

舞をまうということは、その時代にあつては、さして物改まつてすることではなかつた。

日常生活の一つとさえいえる程、折にふれ事にふれ、舞を舞つた。武家の子女ならたしなみの一つとすらいえる程だつた。わけ
て田楽舞とか幸若舞などは、武家の間に好まれた。天てんたくおし沢くおし和尚しょう
が、武田信玄から、

（信長の好みは何か）

と、訊かれた折、

(信長どのの数寄すきは舞と小謡こうたいなそうでおざる)

と、答えたというはなしもある。

その信長は、清洲の町人で友閑ゆうかんという者を、時折城内へ召して、舞を見たり自身舞ったりした。

また、もつと後のことであるが、安土あづちの総見寺そうけんじで家康に大饗応をした時も、幸若こうわかや梅若うめわかに舞をまわせ、梅若が出来でなかったというので、信長から楽屋へ、

(舞い直せ)

と、叱りにやつたなどという例もある。

生きるにつけ、死ぬにつけ、武人が舞を舞つた例ためしは、その頃の

はなしにも数えきれないほどある。

家康が高天神たかてんじんの城をかこんだ時に、城将の粟田刑部あわだぎょうぶが、

(今生の思い出に、一さし舞いたい)

と、乞うと、

(やさしき心よ)

と、許して、刑部の舞う幸若舞の高館たかだてを、敵も味方も見たな

どということもあつた。

てんしょう

天 正十年、秀吉が中国の高松城を水攻めにした折も、孤城

五千の部下の生命いのちに代つて、濁水だくすいの湖心いっしゅうに一舟うかを泛べ、両

軍の見まもる中で切腹した清水長左衛門宗治むねはるも、敵の秀吉から

贈られた一樽ひとつたるの酒を酌んで、

(見よかし人々)

と、武士もののふの死出を笑つて、誓願寺せいがんじの曲をひと一さし舞い、舞い終るとすぐ舟のうちで屠腹とぶくしたと、後の世までの語りぐさに伝わっている。

それとは違う歓びの溢れあふからであつたが、寧子は、犬千代の小鼓うながに促されて、一扇いっせんをひらいて起つと、素直に、幸若のうちの源氏物をひと一ふし舞つた。

「出来た、出来た」

と、自分が舞つたように手をたたいたのは、聶殿むこどのの藤吉郎であつた。

だいぶ酒のまわつたせいもあるう。興に浮いた人々の勢いは熄や

まない。誰がいい出したか須賀口へ押し襲せようではないかという。須賀口とは清洲の宿駅でいちばん明るい紅燈の巷である。否というような理性家は一人もいそうもない。こよいの聳どのたる藤吉郎からして、

「よし、参ろう」

と、真つ先に腰を上げたものである。呆れる縁者たちを無視して、水掛祝いに来た連中は、それも忘れて聳どのの首にかじりついたり、腰を押ししたり、手を振ったり、踰めいたり、暴風の去るように婚礼の席からどやどや出て行つた。

「いとしや嫁御寮」

縁者たちは、取り残された寧子の心を思いやって、彼女のすが

たを探したが、今舞っていた新妻はもう見えなかつた。門の妻戸を押し、外へ出ていたのである。そして酔い興じた群れに囲まれてゆく友達の中の良人を追つて、

「行つていらつしやいまし」

藤吉郎の懐ふところに、彼女がさし入れた金入れかねいの巾きんちやく着やくが残つていた。それも分らないほど酔つてゐる智ちどのでもない。しかし、それではツとしたりするほど初心うぶな智ちどのでもない。流れる水のまに押しされてゆくように、藤吉郎の振る手も首も、大勢の友につつまれて、紅い夜霧の彼方かなたへ薄れて行つた。

いつも、城内の若殿わかとのぼら輩ばいが押しかけては、酒陣をかこむ布川ぬのかわという茶屋がある。この須賀口の古駅に織田家や斯波家しばなどの領

主よりも以前から住んでいる酒さかあきな商やがまいの老舗しにせから転化して、茶屋になつたものというから、その屋構やがまえの旧ふるさも間の抜けたほどの大まかさも知るべきであるが、清洲の若殿輩にはそれが気に入つて、何かといえ、

「ぬぬのかわの川へ参ろう」

「ぬの川へ」

が、酔うとすぐ嚙うわごと言ことのように、誰の口からとも出て来るのであつた。

もとより藤吉郎も再三ならず布川に馴染なじんでいる。いやこいう所に集まる時などは、彼の顔が見えないと、茶屋の者も友達も、一本の歯が足りないような物淋しさを覚えるのが常で、何かの行

合わせで、彼を誘わずに来ても、とどのつまりは、

「木下へ伝えてやれ」

「使いを走らせろ」

と、仲間のなかに、彼の姿を見なければ、何となく納まらないくらいなものであった。

その藤吉郎が、こよいは花髻となったことである。平常の酒戦場でも、杯を挙げて披露に及ばずばなるまいと——これは酒のまわっている頭脳あたまで思う常識で——わいわいとその家の門かどのれんまで押し揉もんで来たのである。そして、池田勝三郎やら前田犬千代やら知れないことだが、門のれんから大土間の内へ、

「やいやい。布ぬの川かわの女どもも、男どもも、ばばどもも、みなこ

れへ出て出迎えぬかやい。三国一の智殿な引つ連れて参りつるぞ。花婿な誰と思う。木下藤吉郎となんいう男じゃげな。花嫁な誰と思う。清洲の小町といわるる弓長屋の寧子どのじゃげな。——さあ祝え祝え。水掛祝いじゃ」

足もとの危ないのが危ないのへ絡みつく。藤吉郎はその中に揉まれたまま、土間のうちへ踰めき込む。

呆つ氣にとられた茶屋の者も、やがて事の次第が分つて笑いどよめいた。祝言の杯を酌んでいる席から智盗みをして攫つて来たのだと聞いて驚きもした。水掛祝いという慣わしはあるが、それでは智攫いじゃと腹を抱えて智殿を珍しげに眺め合う。藤吉郎は、逃げるように座敷へ駈けこむ。暁までも智を擒人にして帰す

など、悪戯いたずら好みの友たちは円坐を作つて、酒々と性急せつちに呼び立てたりする。

そうしてどれほど飲んだらう。また、何を歌つたり舞つたりしたとかか、弁わきまえている者はほとんど幾人もなかつたらう。やがての果ては型の如く、手枕、大の字、思い思いの寝相ねぞうして、その広間に酔いつぶれていた。

夜も更ければしんと秋の味がしてくる。八月の庭面にわもはもう秋草だった。酔っぱらいたちが静かになると、虫の音がすだき始める。草の根にまで白い夜露が降りていた。

「……おやツ？」

犬千代が、がばと、突然顔を上げて見まわした。見ると、藤吉

郎も首を上げてゐる。池田勝三郎も眼をあいてゐる。

「……………」

眼を見あわせながら、お互いの耳をとがらしていた。庭面にわもを越えた往来に聞えるのである。戛かつかつ々と、深夜のしじまを破つて通くつわる轡の響きで眼をさましたのであった。

「はてな？」

「何である」

「だいぶな人数だが……………」

犬千代は、何か思い当つたように、はたと小膝を打つて云つた。

「そうだ。先頃、三河の松平元康の許へ、使者として渡られた滝たきがわかずます

川一益殿が、ちようどもう帰らるる頃。——それではないか

な」

「そうだ、織田家につくか、今川家に拠よるか、三河の向背こうはいも、お使者は胸にたたんで帰られた筈……」

後から後からと、みな眼をさました様子だが、それも待たず、三名は布ぬの川かわをとび出した。そして先へ行く轡くつわの音と、一群の馬の影を追つて、城門のほうへと駈けて行つた。

背はい和前わぜん戦せん

滝たき川がわ左さ近こん将しょう監げん一かず益ますが三河へ使いに立つたのは、去年お桶お狭間けはざまの戦いの後、これで幾度か知れないほどであつた。

その任務は、三河の松平元康まつだいらもとやすを説いて、

「織田家と提携ていけいしないか」

という外交的な重大使命を帯びてであることは、もう隠れもないこととして、清洲には一般に知れ渡っていた。

もとより三河は、きのうまで、今川家に隷属れいぞくしていた弱国である。尾張は小なりといえども、強大今川に致命的な一撃を与えて、天下の群雄に、

(現代に信長という者あり)

と強く記憶させた、新興の藩力と勝戦かちいくさの意気を持った領土である。

提結する聯盟するといっても、おのずから織田家はその優位の

うえにおいて、松平家を傘下へ誘おうとするのであって、そこにむずかしい外交の呼吸もある。だが、尾張にその懸引があれば三河にもまた、図るところがあるのは当然だ。弱小なれば弱小であるほど、毅然たる態度も必要とする。

(与しやすし)

とみられたら、何の提携の使者など立てて手間暇かけている隣国であろう。一挙、武力の併呑があるばかりである。

しかも実状は、義元の死後、三河一国は今や死活のわかれ目に立っていた。

氏真に拠つて、今川加担をつづけてゆくか。

この際、それと絶縁するか。

そして織田家とは？

宿年の国境にふたたび争奪の戦いをくりかえして「孤立三河」から現在の苦境を打開したほうがよいか。それとも、織田家がしきりと提ていめい盟を誘うてくるこの機会をつかんで、後こうと図を計るべきだろうか。

岡崎城では、

(この儀如何に)

と、幾たびの評議、幾たびの使者の交換、議論、献策などが、行われて来たかしれなかつた。

その間にも、今川氏うしじやね真と三河与党との小合戦。織田家の出城と、三河方との出先の小競り合あいなどは、勿論、熄やむまもなかつ

たし、それがいつ大きな発火点となつて、両国の運命を賭すものとなるか、決して予測はできなかつた。

(始まらないかな?)

と、待つてゐる国々が織田、松平のほかにな数にある。美濃の齋藤、伊勢いせの北畠、甲州の武田、駿河するがの今川氏真。

不利である。

松平元康は、戦う気はない。織田信長も、大勝の気負きおいにまかせて、三河と今戦うことの愚をよく知つてゐる。

とはいえ、

(戦いたくない)

顔は示すべきでない。こちらの足もとを見せたら図にのるのだ。

一戦も辞せず、としての外交でなければならなかった。その外交も、彼の容れやすいようにしてやる必要があつた。三河武士の硬骨と我慢づよい性質を知っているのです、その体面を充分に考えてやるのが大事であると信長は思った。

みずのしもつけのかみのぶもと

水野下野守信元は、知多郡の緒川を領していて、これは

織田幕下だが、血縁からいえば三河の松平元康の伯父にあたる者である。

信長は、その水野信元へ、

「そちからも説け」

と、いつてある。

信元は、意をふくんで、岡崎を訪れて、元康にも会い、三河譜ふ

代の石川、本多、天野、高力こうりきなどの諸臣にも会つて、側面から誘引ゆういんに努めた。

正面側面のあらゆる外交的誠意が、ようやく三河一藩をうごかしたとみえて、先頃、松平元康からその儀について明確な返答のある由が伝えられて来たので、滝川一益は、その盟約が調ととのうか不調に終るか、最後の返答を受け取るために三河へ使いして——そして今宵、帰り着くと、夜中ながらすぐその足で清洲城へはいつたものであつた。

一益の通称は、彦右衛門ひこえもんといつた。織田方では一方の部隊長であり、鉄砲に詳しく、射撃の上手だつた。

が——信長は、彼の射術よりも彼の才智をずっと上に認めてい

た。

雄弁家ではないが、彼の諄じゆんじゆん々とと物いう弁才は、非常に尤ももつとらしく聞えるのが特長であつた。真面目で、常識に富んでいて、それでなかなか眼はしもきくのである。以て、外交の衝しやうに当らせるには適材であると、信長は見ている。

「待つていたぞ」

深夜であつたが、信長はもう出座していた。

「ただ今、戻りました」

一益は、旅装もそのまま、平伏していた。

こういう折に、

(汚れ果てた旅装のまま、君前に出ては、御無礼にあたる)

などと思ひ過して、衣服や髪を整えたり、汗のにおいなど洗ひ消してから、さてと、御前へ出たりすると、

（花見の使いに行つたか）

などと、頭から不機嫌な叱りをうける例を、まま同僚に見ているので、馬臭いみなり身装のまま、

（ただ今）

と、喘あえぎも止まらぬうちに両手をつかえたがよいのであつた。

その代りに、信長もまた、使臣を長く待たせておいて、悠々と出座するなどという例ためしはめつたにない。

「どうであつた？」

待ち構えていていふのである。

この答えにもこつがある。

よく使いに遣やられた者が、戻つて来てその任務の返辞をするのに、あれこれと、途中のことやら枝葉しやうの問題ばかり長々といつて、かんじんな使命の結果は、調ととのつたとも調わないとも、容易にいわない癖の家来がある。

信長はひどくそれが嫌いで、わき道のはなしばかり答えている使臣には、傍眼はためにもわかるほど眉に焦いら々いらといやな気色をただよわせる。それでも気づかずに無駄をいつていると、

「用事は。用事は」

と、注意する。

或る時、信長は、侍臣たちへそのことについて、こう語つたこ

とがある。

「使いを立てた出先の用事が、首尾よいか、不首尾か、待つ身は案じておるものじゃ。要いらぬ枝葉のはなしは、後にて足せ。主人の前へ復命に帰りなば、口を開く第一に、お使いのこと、調といましてござりますとか、お使いの儀、残念ながら不調に終わりましたとか、肝腎の結果を先に申し告げて、それよりゆるゆると、かくかくの仔細とか、先方のはなしとか、何なりと余談いたすがよいものぞ」

彦右衛門 一益かずますも、それは伝え聞いていたし、こんどの重大な

外交に選ばれて使いたした程の者であるから、信長の姿を仰いで、一礼すると、すぐ先にいった。

「——殿。およろこび下さいまし。三河殿と和協わきようの議、遂に、調いました。しかもほぼ御当家のお望みに近い約やく定じようの下に」

「できたか」

「はい。——決いっけついたしました」

「そうか」

信長は、当り前な顔をしていたが、言葉の裏で、彼の心は、息づいていた。

「なお、細目にわたる箇条は、他日、鳴海城なるみを会見の場所として、てまえと、松平家の石川数正かずまさ殿とで出会い、談合を遂げんと約して立ち帰りました」

「然らば、三河殿始め家臣一統にも早、当家との和盟に異存なく、

将来の聯携れんけいを約されたというか」

「御意にございます」

「大儀だった」

ここまで聞いてから信長ははじめて、彼の勞に一言の犒ねぎらいをい
つた。

君臣のあいだに、審つぶさな報告から余談などが交わされたのは、
それからのことであつたらしい。

滝川一益が、御前さがを退つて、下城して行つたのは、もう夜明け
近くであつた。

その夜明けの微光が、詰所つめしよ、武者溜りむしやだま、狭間廊下はざまろうか、厩うまやの隅
々にまでこぼれ渡つた頃にはもう、

「御当家と三河殿との和盟が成立したそうだ」

という噂が、明るい朝の顔と顔との間に、呼び交^かわされていた。

近くまた、両家の代表が、鳴海城で会見を遂げ、正式に調印の

うえで、明年——永^{えい}禄^{ろく}五年正月には、岡崎の松平元^{もと}康^{やす}が、こ

の清洲城へ初の訪問をして、信長様と対面あるだろうなどという

内々の儀も、密^{ひそ}やかながら逸早く家中には知れ渡った。

夜来、須^{すが}賀^が口の遊^{あそ}びの出先から、帰城の使者を認めてそれを追

いかけ、城中の一室に来てじつと坐り詰めたまま、主君信長の気

もちと一つに、三河との和戦はいずれにきまつたかを、固^{かた}唾^たをの

んで待つていた——前田犬千代、池田勝三郎、佐脇藤八郎、その

ほかの若侍の面々の中に、ゆうべの賀^む殿^{どの}の藤吉郎も、勿論交じ

つていた。

「よろこ欣び召され」

佐脇藤八郎は、小姓組なので、君側でのはなしを、逸早く誰かに聞いて来て、

「……しかじか云々じゃ」

と、一同へ告げた。

「きまつたか」

およそはこうと予期されていたことではあつたが、決定と分ると、誰の眉にも、一層な明るさと、前途への意気がみ盈ちて見えた。

「……これで戦える！」

誰かつぶやいた。

家中の気もちは、戦いが遁れられるという意味で、三河との同盟を礼讃しているのではなかった。べつな敵へ、全力を向けて戦うことができるために、背後の一國、三河との提結ていけつを、心から受け入れたのであった。

「よかつたなあ」

「御武運のよさ」

「三河のためにもだ」

「まず、めでたい」

刻々と、方向のうごいてゆく時勢に対して、敏感に喜憂きゆうを先にするのは、何といつても、こうした若い人々の仲間だった。

「そうと、お使者の結果を知ったら、何かこう、急に眠とうなっ

てしまった。……考えてみると、ゆうべから寝ていない」

祝福しあう声の中で、ひとりがいうと、藤吉郎が大きな声で、

「わしは違う。それとはあべこべだ。ゆうべもめでたし、けさもめでたし、こう欣びが重なっては、もいちど須賀口へ立ち戻って、新しく飲み直しようになった」

すると、池田勝三郎が、

「嘘をもうせ。帰りたいのは、寧子ねねどのの許へであろう。やれやれ、初夜の嫁君は、いかに夜を明かしつろう」

からかう尾について、

「はははは。木下殿よ、いらざる我慢なむだに候ぞ。きよう一日、お役のお暇いとまを乞うて、帰ってはとうじや。待つ人もあるに」

「ばかな」

藤吉郎は、わざと力^{りき}む。友だちどもが笑うのを承知のうえである。どつと朝ぼらけの哄笑が廊下へ流れ出た。とうとうとお城の上では太鼓が鳴っていた。各、役目に従つて、その働くところへ急いで別れ去つたのであつた。

「ただ今、戻つた」

広くもない浅野又右衛門の家の玄関であるが、藤吉郎が立つと大きく見える。声が高いし、容子^{ようす}が明るいからである。

「——あら」

式台で鞠^{まり}をついていた寧子^{ねね}の妹のおや屋は、眼をまろくして彼を見あげた。客かと驚いたのであるが、それがゆうべの聳^こどので、

姉の新郎様とわかると、クツクツと笑って、奥へ駈けこんでしま
う。

「は、は、は、は」

藤吉郎もわけなく笑った。妙におかしい心地なのである。

祝言しゅうげんの席から友達と飲みに出てしまつて、そのままお城勤

めをすまして今帰つてみると、またゆうべの祝言の時刻に近い黄た
そがれ昏なのである。

もう今夜は門に燎火にわびは焚たかないが、三日のあいだは何のかのと
内輪の式事や客往来の慣わしがあり、こよいも奥は訪客の声に満
ち、玄関には履物はきものの数が多く見える。

「——今戻つたッ」

快活に聳どのはもう一ぺん奥へ呶鳴った。厨くりやも客間まぎも紛れてい
るため、誰も出迎えに出ないからであつた。

藤吉郎は思うのである。もう昨夜から自分はここの聳である。

舅しゅうとこ 御ごをのぞいては主人たる者だ。出迎えの揃そろわぬうちは上あが
るまい。

「寧ね子ねツ。今帰つたぞ」

袖垣の彼方の台所らしい方で、びつくりしたように、

「はいッ——」

と、優しい返辞が遠くした。それと共に、むしろ何事かと疑う
ように、又右衛門夫婦やおや屋や、縁者の者や召使の小侍などが、
ぞろぞろと出て来て、彼のすがたにちよつと呆つ氣にとられた顔

をした。

寧子ねねはそれへ来ると、水仕業みずしわざしていた腰袴こしばかまを急いで取り

はずし、端へ坐つて、

「——お帰りあそばしませ」

と、指をつかえて出迎えた。それを見て、他の者もあわてて、

「お戻りなされませ」

と、一度に揃つて頭を下げたが、勿論、又右衛門夫婦だけはべつである。この場を眺めに出たようなものだった。

「うむ」

寧子へ向つて、また一同の頭に対して、藤吉郎は一つうなずいた。そして箱段はこだんを上がつてずつとはいると、こんどは自身から

舅姑しゆうとの前へ慇懃いんぎんに辞儀をして、

「ただ今戻りました。——今日はお城にも何事もなく、御主君にも終日、ごきげんよくわたらせられました」

といった。

実は舅しゆうとの又右衛門、夜来から苦りきつていたところなのだった。

縁者えんしやのてまえ、また、寧子の身にもなつて見よ、と云い放ちたいくらいな心中だった。のめのめと戻つて来たら、客には不体裁ふていさいでも、頭から一喝かつは恠こらえきれまいと、自分でも覚悟していた程だったが、帰つて来た顔を見ると、何の屈託もない明るさで、しかも自分までを玄関へ出迎えさせた。

(腹も立たない)

と、呆れ顔から吐息をもらしていると、まず第一の挨拶が、きよう一日のお城の無事と、主君の消息を告げることであったので、律儀りちぎな又右衛門は、それに対して、

「おお」

と、思わず坐り直し、

「今、お退城さがりか。お勤め大儀でおぎった」

と、肚の虫がいたいこととはあべこべに、そういつて、彼を犒ねぎらいなどしてしまった。

その夜もおそくまで賀殿は酒の席をとりもっていた。一通りの祝い客は帰つても、縁者の中には住居が遠いために泊りとなる幾組もできる。

新妻の寧子ねねも、召使のつかれ顔に、奥や台所の用事から離れることも出来ず、藤吉郎はやつと家に戻つても、ふたりきりである間はおろか、笑顔を交かわすひまもなかつた。

夜もようよう更け沈み、酒席の物も勝手に下げて、あしたの炊かしぎを指図したり、酔いしれて眠つた客の縁者たちの枕まくら辺べをも細かに気配りして、ほつと、襷たすきをはずしてわが身に回かえると、

「どう遊ばしたのである？」

と、初めて自身の良人となつた人をそつと探した。

ふたりのために語らうべくあつた一室に、縁者の白髪頭しらがだの、連れ子などが三組も寝ていた。酒もりしていた部屋にはまだ彼女の父母と近親の者が、囁ささやきを洩やらしている。

「……何処に？」

濡縁をさまよっていると、傍らの明りもない小者部屋の中から、

「寧子か」

と、呼ぶ。

良人の声である。寧子は声がつまってしまつたが返辞はしたつもりである。胸が動悸するのどつきだつた。婚礼の杯をするまでは、そんな心地は覚えぬ人であつたのに、ゆうべからは藤吉郎の顔へ眸も向けられなかつた。

「……おはいり」

藤吉郎はいう。

寧子の耳には、まだ起きて話している両親の声が聞える。立ち

迷っている間にふと縁先の蚊遣りの燃え残っているのが眼についた。彼女は蚊遣りの器うつわを持って、

「そんな所にお休みでございましたか。蚊がおりましように」

と、恟々こわごわはいった。

床ゆかむしろ 蕙へじかに寝ていたのであった。藤吉郎はむつくり起きて、

「アア蚊か。なるほどいる」

「おつかれになりましたろう」

「そなたこそ」

宥いたわって——

「縁者どもはしきりと辞退しぬいていたが、まさか、眼上の年老としと

つたお方達を下部屋しもべやへ寝かせて、そなたとわしが金屏きんびようのうちにもやすめまい。無理に子連れの小母おぼや御老人などをあれへお寝かし申したのだ」

「……でも、夜の具ものも召さずに、そんな所でお横になっていらつしやると」

「大丈夫」

立ちかける寧子を止めて、

「わしの体は地へも寝たし、板床にも、貧しいには鍛えられてい
る——」

と、すこし膝を正して坐り直した。

「寧子、もすこし前へ」

「……は。……はい」

「いうておこう。まだふたりはこうして、厳肅だ。この厳かなきれいな気もちも、夫婦の礼儀も、時経つと、失なくなってしまふ」

「どうぞ、ふつつかな所、何なりとお叱りくださいませ」

「女房は新しい飯櫃めしびつのような物——と誰やらいった。使いこま

ぬうちは木臭きぐそうて役には立たぬし、古くなればタガはずが外れたがる。

だが良人も良人だ。時折、反省いたそう」

「……………」

「長い生涯、お互いが人間、お互いが短所だらけで、友白髪ともしらがま

でも添いとげようというのだから、これは容易な業わざではない。そ

こで、今のようないきもちのうちに、誓いおうておきたいと思うが、

そなたの胸はどうかかな？」

「はい。どのような誓いでありましょうとも、必ず守つて参りま
する」

明晰めいせきに、寧子ねねは答えた。

坐り直した藤吉郎も真面目そのものであつた。少し怖い顔です
らあつた。だが寧子は、こういう謹厳な顔を初めて見たことが、
かえつて欣しかつた。

「まず良人として、妻へ望んでおくことからいおう」

「はい」

「わしの母だ。——祝言の席にはお迎え申さなかつたが、わしが
妻を娶めとつたことを、天地の間で、誰よりも、誰よりも、蔭ながら

よろこ
欣んでいて下されているに違いない中村の母者人だ……」

「はい」

「やがては、ひとつ家庭に、其女も共に住むことになるが——良人の世話は第二でよろしい。母上の孝養を、母上のおよろこびを、第一として侍かしずいてもらいたい」

「……はい」

「わしの母は、侍の家には生れたものの、わしの生れる前からずつと中村の水呑み百姓。わしを頭かしらにたくさんの子を貧窮の中にお育てなされ、子を育てることと、貧苦を切り抜けることのほかに、冬の綿子ぬのこ、夏の小袖一枚、自分の身にする楽しみやお生活くらしは、何一つなく過して来られたお人じゃ。……だから世間の知識にも

おうとく、言葉も鄙ひなび、礼儀作法とか交際つきあい事にもとんとお晦くらいが——そうした母にも、そなたは嫁女として、心から侍かしずいてくれるか。いや、敬うやまうてお添そいでできるか」

「できますする。お母あ様のおよろこびは、あなた様のおよろこび。自然しぜんできることとぞんじまする」

「——が、其女そなたにも、健在な両親がある。わしにとつても、同様に、大事なお舅しゅうと姑がた方だ。わしはおまえに負けないで孝行を尽してあげる」

「うれしゅうございます」

「総じて、一家を持つたらば、良人の気を歡ばせようために、良人の身まわりばかりに気を取られるな。軽くしておくくらいでも

愛情は自然に通う。人目にはそれで程よいもの。——良人の母とか、姉とか、召使とかには、努めてもなお足らぬものだ。——殊にわしは、家に母上の笑顔えがおがあり、家族どもがみな嬉々ききとして生く活らしていてくれれば、何よりも自分も楽しいことと思う」

「至りませぬが、精出して、そういう家庭を創つくりまする」

「それから……もひとつ、わしへのことだが」

「はい」

「さだめし其女そなたは嫁ぐ日までの教養として、貞婦ていふの鑑かがみとなるよう、お舅しゅうとどのからも、厳やかしい庭訓ていきんを数々おし訓えこまれておろうが、この良人は、そう気難しゆうはない。——其女そなたに頼んでおくことはただ一つだ」

「……それは」

「それはだな……良人の御奉公、良人の仕事、すべて日常のわしの働きを、妻たるおまえも共々よろこんでくれればいい。それだけだ」

「……？」

「やさしいことだろう。しかし、やさしくない。年月長く狎なれ過ぎた夫婦を見い。良人が何を働いているか知らぬ妻。良人がいかに欣ばせようと苦しんでも欣べない女房どもが、輕輩にはないが、たいしん大身方の奥ほど多い。そうなると良人は、ひとつの張合いを失う。天下国家のために働こうという男も、家にあつては、小さい者、あわれな者、弱い者。わけてわが妻によるこぼれるのが張合

いだ。欣んでさえくれれば、男はまた、あしたの戦場へ、勇気づいて出て行こう。まあ、内助ないじよとでもいうことかな」

「かしこまりました」

「ところで、今度は、其女そなたからわしへの希望のぞみを聞こう。いうてみい。わしも誓う」

そう訊かれても、寧子ねねは何もいえなかった。黙っていた。

「妻が良人に欲するもの。そなたに望みがいえぬなら、わしが代つていつてやろうか」

藤吉郎のことばに、寧子はにこと領うなずいてみせた。そしてすぐまた、さし俯向うつむいてしまふ。

「良人の愛ではないか」

「……………」

「ちがうか」

「……いいえ」

「変らぬ愛だろう」

「ええ」

「よい子を生んでくれ」

寧子は、おののいていた。燭しよくがあつたら、その顔は丹たんのように燃えていたろう。

三日の内祝がすんだ次の日である。縁者廻りの第一に彼と新妻は正装して、この度の婚儀に、媒なこうど人の声こゑがかりを賜たまわつた主君のお従いとこ兄弟なごやいなばのかみ、名古屋因幡守を堀川の邸に訪ねて、

「これがその妻の寧子で。お眼にかけに参りました」

と、挨拶をのべた。

見くらべて、

「似合い者じゃ」

と、因幡守は世辞をいった。若木の新しい世立ちをながめるのはよいものであった。因幡守も大いに満足して、酒など与えてもてなしながら、

「恋女房ぞ。喧嘩すな」

などといった。

すこし酔うて、

「また、参りまする」

藤吉郎夫婦は退さがつた。

それから二、三軒廻つた。きようの清洲の町は、自分たち夫婦に眼をあつめている気がした。寧子の麗うるわしい姿に振り向く往来人に、若い良人はむしろ好意を持った。

「そうだ、叔父さんの家へもちよつと立ち寄つてゆこう」

足軽町の横へはいった。足軽の子は足軽の子らしく、この辺わいわいと童戯どうぎや、童歌に満ちて道を邪さまたげている。

「叔父さんいますか」

破やれ木戸きどを押すと、非番とみえて、糸瓜棚へちまだなの下で手造りの竹笠うさしに漆を塗つていた乙若が、

「おう、猿……」

云いかけたが、あわてて自分の口をたしなめ、

「藤吉郎か」

「妻をつれて来ました。眼をかけていただきませうよ」

「何をいう。こちこそじや。弓之衆の浅野様の御息女。これ、藤吉郎、われは果報者だぞ。お舅様しゅうとがたにも、飽かれぬようにせねばならぬぞ」

乙若は眞実そう思つて云いきかせているのである。わずか七年前だ。ここの縁側へよろ這い寄つて、針売りすがたの木綿布子もめんぬのこ一枚、それも旅垢たびあかに臭いほど汚れたのを着て幾日も飯を喰べないような空腹すきばらをかかえ、飯を与えとがつがつと箸はしを鳴らして喰べながら、何か夢みたいなことを訴えていた。

どこへ奉公にやられても腰の落着かない困り者と、聞いていたので素気なく追い返したが——その甥が、この猿が、どうしてまあ今日のような身になったか。

乙若は、眼のまえに置いて見えていても、信じられない気がする程であつた。

だから今度の婚禮でも、

「果報のほどが怖ろしい」

とさえ、真実、親身なればこそ、藤吉郎のために、口を酢くすていうのだつた。

「まあ、ともあれ、穢い家じやが、上がつてくれい」

あわてて奥の女房にも告げ、自身、案内に立ちかけた時であつ

た。

垣の外で、誰か、

「陣触れ。陣触れでござるぞ。御用意あつて、すぐお駈けつけあれ」

と、呶鳴つて、その声は、隣から隣へと駈け伝えて行つた。

「あ……？ 召集のお布令じゃ。出布令の貝が、寄場のほうで鳴っている」

甥の新郎と新婦を導いて、家の内へはいりかけた主の乙若は、そのまま土間口に立ちすくんでしまつている。

その後、藤吉郎も佇んだまま、遠くで鳴り出した貝の音や、近所の物声に、しばし、耳をすましたが、

「叔父御」

と、急に呼んで、

「召集布令めしづれでしよう。すぐお支度して、寄場へ駈けつけないければ
なりますまい」

「む！ また遽にわかに、戦いくさへ狩り出されるらしい」

「らしいなどと、悠長なお布令ではありません。すぐお出かけな
さい。てまえもこれで失礼いたします」

「折角、新妻たずさを携たずえて見えられたものをな」

「なんの、御斟酌ごしんしゃくには」

「すまんが、それではまた」

「こうした世の中。いずれ戦いくさからお帰りにでもなったら、日を改

めて伺います」

「生きて会えるかどうか」

「はははは、縁起でもない……門出にそんな気の弱いことを仰つしやるから、叔母御がうしろで泣いているではありませんか。それより大将首でも取っておいでなさい」

「一度でもよいから、そんな軍功をわしが立てさえすれば、かかあ 嚙あや子にも、もすこし人並な暮しもさせてやれようものを。万年足輕の万年貧乏。それに、わしももう年とし齡が年じやし」

やがき 破れ垣の外でまた、

「乙若どの。聞いたか。急な出布令だぞ。早支度して寄場へござれよ」

同じ足輕組の近所の人々である。陣笠、槍の先など、垣越しに見せて誘い合わせながら、もうわらわらと駈けて行くのだった。

「寧子^{ねね}」

「はい」

「持ち合わせがあるか」

「あるかとは」

「金^{かね}じゃ。何分なと」

「ゆうべあなたの」

「おお、あの革^{かわ}巾着^{ぎんちやく}にあつたか」

と、腰をさぐって寧子の手にあずけ、

「これをな、ここの叔母御にやるがよい。叔母御がうろろう泣く

ので、子ども達までベソを掻いている。いずれは貧乏、それにこんな滅入りこんだ家族どもを置いて出ては、乙若どのも、よい働きのできよう理はない。——其女は後に残つて、皆を励まし、賑わしてな、元気に出してやってくれ、叔父どのを」

「畏まりました。……そして、あなたさまには」

「わしか。わしへも、お召集が来ておろうと思う。ひと足先に、急いで戻る」

「桐畑のお邸のほうへ」

「いいや、聳入りと共に、わしの鎧櫃も、お許の部屋に納められてある。鎧櫃のすえてある所がいつでも帰り場所じや。……では、後から来い」

藤吉郎は云い残すと、もう足輕町の裏から駈け出していた。

今朝までは何の気はいもなかったし、因幡守いなばのかみと会った時も、

至極無事な容子ようすであつたのに、いったい何処へ出陣するのか。

藤吉郎にも、常の勤が働かなかつた。いつも合戦といえ、どの方面へと、たいがい彼の直感は的中していたが、やはりここ数日は花聾の頭は幾分時局から遠のいていたものとみえる。

物の具ひつ担かついで、侍屋敷の横から駈けて出て来るのに、何人かぶつかった。凡ただならぬ迅はやさで五騎、七騎、お城のほうから駈けて来るのにも出会う。何かしらぬが戦場は遠くだなという予感だけがした。

「木下。木下ッ」

弓長屋の近くまで来ると、誰か、呼ぶ者があつた。

振り向いて見ると前田犬千代。

馬上だった。物の具に身をかため、桶狭間おけはざまの日にも見た梅鉢うめば紋ちもんの旗さし物を背から覗かせていた。

「今、立ち寄つて、又右衛門どのへ声をかけて来たところじゃ。

身支度して、馬揃いの馬場まですぐ集まれ」

「出陣か」

藤吉郎が、足を戻して、鞍わきまで寄ると、犬千代はとび降りて、

「どうだ、その後は」

会釈の代りに、にやと笑う。

「どうだとは」

「いわずもがな。琴瑟きんしつ相和あいわしておるかどうかと問うのじや」

「お訊ねまでもないことを」

「これはかなわぬ。アハハハハ。しかしよい気味、出陣だぞ。出足が遅いと、折も折ゆえ、馬揃いで、大笑いに笑われるぞ」

「笑われても大事ない。さだめし寧子ねねが辛かろうで」

「もうよせ」

「失礼」

「軽騎二千ほどで木曾川まで急に攻め寄せるのじや。黄昏たそがれ立ちと布令ふれには見ゆる。まだ少々間はあるが」

「では、美濃みの入りか」

「稲葉山の齋藤義龍よしたつどの、にわかになんで死んだという密報がはいったのだ。そこで嘘まことか実か、小当りに一当ひとあて襲よせてみよというので、にわかな出陣なのだ」

「はてな？ この五月の中旬頃には、義龍どの御病死と聞えて、動揺どよめいたことがあつたが」

「こんどは、どうやら真実らしい。いずれにいたせ、御当家にとつては、君公の舅しゅうとうぎみ君にあたる道三山城守様をば、前に討ち殺した義龍どのだ。人倫の上からも、俱ともに天を戴かざる舅君の仇かたきではあるし、中ちゅうげん原へ展のびんとするには、どうしても足場とせねばならぬ美濃だ。展のびまいとしてもそこへ展のびずにいない尾張との宿命だ」

「近いなあ、その日も」

「近いどころか、はやくも今宵からは、木曾川へ向つて発つのだ」

「いや、まだまだ。君公には御出陣なさるまい」

「柴田どのの監軍、佐久間どの御指揮の下とあれば、信長様には御出馬ないとみえる」

「たとえ義龍どのの亡く、その嫡子龍興どのも暗愚とはいえ、美

濃の三人衆といわるる安藤伊賀守、稲葉伊予守、氏家常陸介

らがあり、また、主家を去つて今は栗原山の閑居に隠れおるとは

申せ、竹中半兵衛重治のごとき人物もおるうちは、そう易々と

と参るまい」

「半兵衛重治？」

犬千代は、小首かしげた。

「三人衆の名は疾く隣国へもひびいているが、竹中半兵衛とやら、そんなに人物か」

「いや、人は知らず、わしだけは密かに心服しておるのだ」

「どうしておぬしはそのようなことまで存じておるのか」

「美濃には長くいたことがござるゆえ——」

藤吉郎はただそういうだけに止めていた。針売りの行商をして、^{さまよ}彷徨い歩いていたことや、蜂須賀村の小六たちの徒党に飼われて、^{すきうかが}稲葉山の隙を窺っていたりしていた少年の日のことなどは、おくびにも口に出さなかつた。

「才。思わず余談を」

犬千代は、鞍上にもどつて、

「では、馬揃いで」

「おう、後刻」

ふたりは、そこの町辻を、裏と表へ駈けわかれた。どっちも若い青雲の夢を抱いて。

「今、戻つたツ」

玄関声とでもいうのか、いつ帰つても上がりしなに先ず大声をとどろかせる。そらむこ賀様のお帰りと、納屋働きの下男しもべから勝手の隅にまで分るのであつた。

藤吉郎は今日に限つて出迎えも待たず、もう奥へ通つたが、出

会いがしらに寧^ね子が姿を現わしたので、

「おやツ？」

びっくりした顔をした。

「お帰りあそばしませ」

寧子はいつもと変りなく、すぐ彼の棒立ちになった足もとへ手をつかえる。

さすがに藤吉郎も、すこし胆^{きも}を挫^{ひし}がれた。どうして自分より先に寧子が家に帰っていたらうか。後に残って乙若の家内を励ましたり、子供らへ志の物を与えて後刻に帰れ、といいつけて自分が一足先に出たのにな？

「……寧子。いつ戻った」

「先ほど戻りました」

「先ほど？」

「はい。後に残って、おいつけの事もいたしまして」

「ふうむ……」

「あなた様のお志の物をさしあげたところ、叔母さまにも叔父御さまにも、涙をうかべておよろこびなさいました。足軽風情は戦ふせいに立つ身より、後に残す大勢の子や老としより人の生活が気がかり。これくらしで安心して立たれると仰っしゃって」

「そして其女そなたは、どうしてわしより先に、家に帰り着いておるのか」

「あなた様にも御出陣、お門立かどだちに遅れてはならじと思えますゆえ、

叔母さまにお願いして、御近所の駒を拝借し、近道を急いで帰つておりました」

「何、馬でか」

なるほど、それでは早かつたはずと合点はついたが、さらに、部屋へはいつて見てから、藤吉郎はもう一度、感に打たれた。

床ゆかに清浄むしろな蕙のが展べてあつた。具ぐそく足櫃びつがそこに出されてある。

籠手こて、脛すね当あて、胴、腹卷などの物具はいうもおろか、金創薬きんそうやく、

燧打ひうち、弾薬入れ、すべて身に纏まとうばかりに揃えてあるのだつた。

「お支度を」

「うむ。よくぞ、よくぞ！」

思わず賞ほめそやした。けれど賞めながらふと彼の思うらく。――

—この女房ばかりは、おれも少し目鑑めきぎ違ちがひしたらしい。娶むらう前に観みていた以上どうしても人間が出来ている。浅野家の庭訓ていきんや環境のよさにもよろうが、当人の素質そのものが、もとより恋の対象だけにしかならないお人形ではなかつたのだ。へたをするとこの女房に慥あわれまれる良人になり終る懼おそれすらある。いや宜しい。こういう女房が後詰ごづつめにあれば、良人は前面に全力を出すことができる。大いに生涯可愛がつてやろう。

具足を着け終ると、

「では、お心おきなく」

寧ね子ねは、神酒みきの土杯かわらけと、勝栗勝こんぶとを乗せた三宝をそろえて出した。

「留守、たのむぞ」

「はい」

しゅうとご

「舅 御にも、ご挨拶の暇ひまもない、よしなに其女そなたから」

「母はおや屋を連れて津島つしまへ詣もつで、まだ戻りませぬ。父はお城の

留守詰を仰せつかり、こよいから夜も帰宅せぬと先刻言伝ことづてがご

ざりました」

「さびしゅうないか」

「い……い、いえ」

さし俯向うつむいた。——しかも泣いてはいない。良人の兜かぶとを膝に持

つて、ただ重ねな花のすこし風を耐えるに似ていた。

「よこせ」

兜かぶとを取つて、無造作に藤吉郎は頭かしらにいただいて緒おを結んだが、その時、馥郁ふくいくたる伽羅きやらのにおいが全身に沁しみとおつた。彼は二
こと寧子の顔を見ながら、伽羅の香をかたく結んだ。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年5月11日第1刷発行

2004（平成16）年1月9日第18刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

2015年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第二分冊

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>